

平成 22 年度
山口大学の FD 活動

山口大学大学教育機構
山口大学教学委員会

はじめに

平成 23 年 4 月より、大学設置基準が一部改正され「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」の一条が加えられた。

この改正に呼応して、山口大学では全学にポートフォリオを導入し、学生の学士課程を通じたキャリア意識を高めることを 23 年度計画に記載している。「職業的自立を図るために必要な能力」とは、学生一人ひとりそれぞれ異なった個別的なものである。すなわち、新しい大学設置基準においては、大学は組織として学生一人ひとりに個別的なサポートを行うことが求められていると解釈できる。

キャリア意識を高めながら大学生活を送るためには、学生一人ひとりが学士課程教育の意味づけを行うことから始めなければならない。自己の将来を見つめながら、今、何をどのように学習するのかを位置づける必要がある。そのための前提条件として、大学は学士課程の目標を明示するとともに、その全体像をわかりやすく提示しておかなければならない。

平成 22 年度の FD 活動は、このような背景に基づき、学士課程の目標（グラデュエーションポリシー）再確認とカリキュラムマップの整備を進めながら、学士課程全体の流れを図示したカリキュラム・フローチャートの作成を進めた。年度末までにはほとんどの学部学科で暫定版が完成され、新入生のオリエンテーション等でも活用された。また、ポートフォリオ導入の準備としては、全学 FD 講演会において九州工業大学の「学修成果自己評価シート」を先進事例として学んだ。

このように環境整備は進んで来ているが、主役である学生が舞台に登場してくるのを今や遅しと待つ段階になっているであろうか。重要なのはもちろん主役の意識変革である。しかしその前に、脇役である教職員の意識改革ができていなければならない。共通教育と学部教育を一つにまとめたフローチャートの作成などを通じて「学士課程教育」が文字通り見えるようになり、教員のカリキュラムに対する意識も変わってきている。このように、設置基準に明記された「大学内の組織間の有機的な連携」や「適切な体制」については次第に整いつつあり、主役の登場まであと一歩であろうか。

山口大学大学教育機構・副機構長
大学教育センター・センター長 岩部 浩三

第1部	全学FD活動	1
第1章	大学教育機構主催のFD活動	2
第1節	大学教育機構主催の講演会及び研修会一覧	2
第2節	大学教育機構主催の講演会及び研修会概要・報告	8
第2章	共通教育授業科目別分科会のFD活動	36
第3章	学生授業評価及び教員授業自己評価	39
第1節	実施方法・実施状況	39
第2節	授業評価の結果について（全学）	46
第3節	学生授業評価の結果について（共通教育）	61
第2部	学部・研究科のFD活動	80
第4章	人文学部のFD活動	81
第1節	授業公開	81
第2節	学部・研究科主催FD研修会	81
第3節	教育改善に関する活動	81
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	81
第5節	FD実施経費報告書	82
第6節	来年度の課題	82
第5章	教育学部のFD活動	106
第1節	授業公開	106
第2節	学部主催FD研修会	106
第3節	教育改善に関する活動	110
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	112
第5節	FD実施経費報告書	115
第6節	来年度の課題	115
第6章	経済学部のFD活動	116
第1節	授業公開	116
第2節	学部・研究科主催FD研修会	124
第3節	教育改善に関する活動	125
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	130
第5節	FD実施経費報告	130
第6節	来年度の課題	131
第7章	理学部のFD活動	132
第1節	授業公開	132
第2節	学部・研究科主催FD研修会	139
第3節	教育改善に関する活動	142
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	145
第5節	FD実施経費報告	146
第6節	来年度の課題	146
第8章	医学部のFD活動	147
1.	医学科	147
2.	保健学科	148
	FD実施経費報告書	160
第9章	工学部のFD活動	161
第1節	授業公開	161
第2節	学部・研究科主催FD研修会	173

第 3 節	教育改善に関する活動	175
第 4 節	学生授業評価・教員授業自己評価	177
第 5 節	F D 実施経費報告書	178
第 6 節	来年度の課題	178
第 10 章	農学部 of F D 活動	179
第 1 節	授業公開	179
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	180
第 3 節	教育改善に関する活動	181
第 11 章	人文科学研究科 of F D 活動	192
第 12 章	教育学研究科 of F D 活動	193
第 1 節	授業公開	193
第 2 節	研究科主催 F D 研修会	193
第 3 節	教育改善に関する活動	193
第 4 節	学生授業評価・教員授業自己評価	193
第 5 節	F D 実施経費報告書	197
第 6 節	来年度の課題	197
第 13 章	経済学研究科 of F D 活動	198
第 1 節	授業公開	198
第 2 節	研究科主催 of F D 研修会	198
第 3 節	教育改善に関する活動	199
第 4 節	学生授業評価・教員自己評価	199
第 5 節	F D 実施経費報告書	199
第 6 節	来年度の課題	200
第 14 章	医学系研究科 of F D 活動	201
第 15 章	理工学研究科 of F D 活動	202
理学系		
第 1 節	授業公開	202
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	202
第 3 節	教育改善に関する活動	202
第 4 節	学生授業評価・教員授業自己評価	202
第 5 節	F D 実施経費報告	203
第 6 節	来年度の課題	204
工学系		
第 1 節	授業公開	204
第 2 節	教育改善に関する活動	205
第 16 章	農学研究科 of F D 活動	206
第 1 節	はじめに	206
第 2 節	セミナー（農学部公開講演会と共催）	207
第 3 節	教員授業自己評価	207
第 4 節	学生授業評価	207
第 5 節	全学 F D 研修会	208
第 6 節	まとめ	208
第 17 章	東アジア研究科 of F D 活動	209
第 1 節	平成 22 年度東アジア研究科 F D 計画	209
第 2 節	東アジア研究科 F D 研修会	209

第 18 章	大学院技術経営研究科の F D 活動	219
第 1 節	授業公開	219
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	220
第 3 節	教育改善に関する活動	226
第 4 節	学生授業評価・教員授業自己評価	229
第 5 節	F D 実施経費報告書	234
第 6 節	来年度の課題	234
第 19 章	連合獣医学研究科の F D 活動	235
第 1 節	235
第 2 節	共通ゼミナール	235
第 3 節	各大学における特別講義	239
第 4 節	242
第 5 節	F D 実施経費報告	242
平成 22 年度	山口大学 教学委員会 名簿	244
平成 22 年度	山口大学 学部・研究科 F D 担当者 名簿	245
平成 22 年度	山口大学 大学教育センター 名簿	246

第 1 部 全学 FD 活動

第1章 大学教育機構主催のFD活動

山口大学のFD活動は全学レベルと学部・研究科レベルで実施されている。本章では、全学レベルのFD活動として大学教育機構および事務局が主催するFD活動の報告を行う（一部にSD・TAD活動を含む※）。

※FD(Faculty Development、大学教員の職能開発)、SD(Staff Development、大学職員の職能開発)、TAD(Teaching Assistant Development、大学院生が行うTAの職能開発)。

第1節 大学教育機構主催の講演会及び研修会一覧

以下の表は平成22年度の大学教育機構主催FD講演会・研修会の一覧である。講演会は夏に1回行われ、参加者は55名であった。また研修会は14種類・計15回開催され、参加者は計415名であった。また、各学部・研究科と大学教育機構が共同で実施する「教育改善研修会」への参加者は合計180名であった。延べ648名が本年度はFD活動を行った計算となる。多くの教職員は自主的に、また職務上の必要性から参加し、積極的にFD活動を実施した。

I 講演会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	目標達成型大学教育改善プログラムと山口大学の教育改革 第1部:基調講演「九州工業大学における学生の達成度評価手法と学修自己評価の取組」 第2部:「目標達成型教育改善の成果と課題」	平成22年8月10日(火)	13:30～16:30	吉田地区	共通教育メディア講義室(旧SCS教室)	第1部:堀江知義(九州工業大学大学院情報工学研究院教授) 第2部:岩部浩三(大学教育センター長)	本学教育職員ほか及び県内他大学関係者	第1部:「学修成果自己評価シート」を用いた学生自身による学修・教育目標の達成度評価の手法について説明していただくとともに、学生にどのような意識の変化が起こってきたのか、この評価システムを稼働させるまでの経緯と実際の状況および課題について講演。 第2部:「質の高い大学教育改革プログラム(教育GP)」に本学の大学教育センターが申請した「目標達成型大学教育改善プログラム」が採択された。約2年間にわたる本取組の概要と成果および課題について発表するとともに、会場参加者とともに、本取組に対する評価と課題についての質疑応答を交えた討論を行う。	教職員55名
									参加者計55名

II 研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	TA研修会	平成22年4月8日(木)	13:00～15:15	吉田地区	共通教育メディア講義室(旧SCS教室)	岩部 浩三(大学教育センター長)、小川 勤(大学教育センター教授)、吉田香奈(大学教育センター准教授)、森本宏志(保健管理センター講師)、神田誠司(共通教育係長)、小柏香穂理(メディア基盤センター)	共通教育において前期にTAに採用された大学院生及びTAを採用する教員	TAの役割や責任、また、各分科会に分かれて、それぞれの授業におけるTAの仕事の確認と留意点などについて理解を深める。	教職員19名 学生100名
2	各学部FD推進者のための研修会	平成22年5月10日(月)	18:00～19:00	吉田地区	共通教育メディア講義室(旧SCS教室)、工学部E21講義室、医学部第3講義室	岩部 浩三(大学教育センター長)、小川 勤(大学教育センター教授)	各学部・研究科のFD担当者	各学部・研究科のFD担当者が集まり、FD研修会・教育改善研修会、FD予算措置及び配分等について協議するとともに、今後の本学のFD活動のあり方について討議を行なう。	教職員64名
3	共通教育「情報セキュリティ・モラル」におけるeラーニング教材の利用方法についての研修	平成22年5月20日(木)	18:00～19:00	吉田地区	共通教育メディア教育棟演習室2、工学部D棟4F情報処理演習室	王躍(メディア基盤センター准教授)、赤井光治(メディア基盤センター准教授)	希望者	授業等において、DVD教材やe-learning環境の活用に興味・関心のある方を対象とする。	教員13名
4	大学生のメンタルヘルスと関わりのヒント	平成22年7月21日(水)	13:30～14:10	吉田地区	農学部2F会議室	今井佳子(学生相談所カウンセラー)	希望者	学生対応が難しいと言われるなかで、カウンセラーが考える「学生との関わりのヒント」や最近増えてきた保護者の方々への対応についてもお伝えしたいと思います。	教員45名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
5	新規採用教育職員研修会	平成22年8月2日(月)	14:50～17:00	小串地区	医学部霜仁会館会議室	小川 勤(大学教育センター教授)、吉田 香奈(大学教育センター准教授)、木下 真(大学教育センター准教授)	平成21年8月以降に新規採用された助教以上の教育職員	GP、カリキュラムマップ、20年度に教育GPIに採択された「目標達成型大学教育改善プログラム」、修学支援システム、観点別シラバスの作成方法、webシラバスの入力法、学生授業評価システム、教員授業自己評価システムの内容について説明する。	教員33名
6	多人数授業でのアクティブラーニング(能動学習)の取り組み	平成22年8月27日(金)	13:30～15:30	吉田地区	共通教育棟2階 会議室	林 徳治(立命館大学教授)	希望者	多人数授業における教員と学生とのコミュニケーション(回答、意見など)を活性化するための授業技術について実践事例を交えて紹介し、グループワークを行う。	教員10名
7	社会人基礎力の養成と大学教育改革	平成22年8月30日(月)	13:30～15:30	宇部地区	工学部D23教室	小川 勤(大学教育センター教授)	希望者	大学改革の中でなぜ今大学に社会人が求められるようになったのかその背景と具体的な取組事例を紹介する。	教員2名
8	高大連携の現状と課題を考える	平成22年9月9日(木)	13:30～15:00	吉田地区	共通教育棟2階 会議室	兼石俊明(教育コーディネーター)	希望者	ユニバーサル化を迎えた大学教育における高大連携の現状と在り方について講演を行なうとともに参加者とのディスカッションを行う。	教員11名
9	DocuWorksの使い方	平成22年9月24日(金)	14:30～16:00	吉田地区	メディア基盤センター2階情報処理演習室2	富士ゼロックス社 松吉 勉氏、宮崎 陽子氏	希望者	DocuWorks の機能説明と具体的な使用方法について、演習を交えて初心者を対象に研修を実施する。	教職員11名
10	DVD教材及びe-learningの授業での活用ー共通教育「情報セキュリティ・モラル」での実践を事例にー	平成22年9月29日(水)	14:30～16:30	吉田地区	メディア基盤センター2階情報処理演習室2	市川 哲彦(メディア基盤センター教授)、永井好和(メディア基盤センター准教授)、王 躍(メディア基盤センター准教授)	希望者	授業等において、DVD教材やe-learning環境の活用に興味・関心のある方を対象とする。	教員11名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
11	障害学生に対する修学支援の方法	平成22年10月12日(水)	15:30～17:00	吉田地区	人文学部・理学部第1小会議室	平野均(保健管理センター所長)、今井佳子(学生相談所カウンセラー)、木谷秀勝(教育学部付属教育実践総合センター准教授)、小川 勤(大学教育センター教授)、理学部学生委員	理学部教員、受講科目担当教員(共通教育・専門教員)、大学教育センター、担当事務	発達障害のある学生への修学支援の方法。授業中・授業外における支援方法を学ぶ。	教員6名
12	Less is more -効果的なパワーポイント・プレゼンテーションの再考-	平成22年10月14日(木)	14:30～16:00	吉田地区	共通教育棟2階 会議室	マルク・レール(経済学部教授)	希望者	パワーポイント・プレゼンテーションに求められる機能を再確認し、メディアのデザイン・レイアウト理論に基づいて、社会科学分野における効果的なプレゼンテーションの作成と実施を考える。	教員20名
13	山口大学中堅職員研修会	平成22年12月15日(水)	13:00～14:20	吉田地区	共通教育棟2階 会議室	小川 勤(大学教育センター教授)	(1)平成22年4月1日において、採用後3年を超える経験を有する一般職俸給表適用職員(主任以上の職にある者は除く。) (2)徳山工業高等専門学校、宇部工業高等専門学校、大島商船高等専門学校、国立山口徳地青少年自然の家 の職員で、(1)の者に相当する者の中から所属長の推薦があった者。	中堅職員に対し、その職務の遂行に必要な知識、情報を学習させると共に、組織・業務の基幹的職員の一人として組織活動能力を養わせることにより、大学運営の中核となりうる資質の向上を図ることを目的とする。	職員18名
14	社会人基礎力の養成と大学教育改革	平成23年2月15日(火)	15:00～16:30	小串地区	総合研究棟3F S3講義室	小川 勤(大学教育センター教授)	希望者	大学改革の中でなぜ今大学に社会人力が求められるようになったのかその背景と具体的な取組事例を紹介する。	教員35名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
15	学生の心を探る～バズセッションを通して～	平成23年3月29日(火)	13:30～15:30	宇部地区	工学部D23教室	今井佳子(学生相談所カウンセラー)	希望者	学生対応で実際に困っていることを共有し、その問題解決のための語り合いをしながら学生の心を探っていく。過去にうまくいった対応や学内の人的資源なども情報交換し、今後の学生への関わりに活かす。	教員15名
									参加者計413名

Ⅲ 教育改善研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	大学教育センターと農学部、農学研究科、連合獣医研究科、医学系研究科(農学系)との教育改善FD研修会	平成22年9月1日(水)	13:30～15:30	吉田地区	農学部会議室	兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤、吉田香奈、木下真、岡田浩一(大学教育センター専任教員)	学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を進めている方	各学部・学科と大学教育センターとが共同で、GP、カリキュラムマップ、webシラバスを再点検し、カリキュラム改善を実施するために開催する。	教員18名
2	大学教育センターと工学部、理工学研究科(工学系)、医学系研究科(工学系)との教育改善FD研修会	平成22年9月13日(月)	10:00～12:00	常盤地区	工学部D23教室	兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤、吉田香奈、木下真、岡田浩一(大学教育センター専任教員)	学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を進めている方	各学部・学科と大学教育センターとが共同で、GP、カリキュラムマップ、webシラバスを再点検し、カリキュラム改善を実施するために開催する。	教員15名
3	大学教育センターと人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科(人文系)との教育改善FD研修会	平成22年10月6日(水)	14:30～16:30	吉田地区	人文学部大会議室	兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤、吉田香奈、木下真、岡田浩一(大学教育センター専任教員)	学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を進めている方	各学部・学科と大学教育センターとが共同で、GP、カリキュラムマップ、webシラバスを再点検し、カリキュラム改善を実施するために開催する。	教員24名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
4	大学教育センターと教育学部・教育学研究科・東アジア研究科(教育系)との教育改善FD研修会	平成22年11月10日(水)	16:10～17:40	吉田地区	教育学部23番教室	兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤、吉田香奈、木下真、岡田浩一(大学教育センター専任教員)	学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を推進している方	各学部・学科と大学教育センターとが共同で、GP、カリキュラムマップ、webシラバスを再点検し、カリキュラム改善を実施するために開催する。	教員32名
5	大学教育センターと経済学部・経済学研究科・東アジア研究科(経済系)との教育改善FD研修会	平成22年11月17日(水)	16:00～17:30	吉田地区	経済学部会議室	兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤、吉田香奈、木下真、岡田浩一(大学教育センター専任教員)	学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を推進している方	各学部・学科と大学教育センターとが共同で、GP、カリキュラムマップ、webシラバスを再点検し、カリキュラム改善を実施するために開催する。	教員47名
6	大学教育センターと理学部、理工学研究科(理学系)・医学系研究科(医学系)との教育改善FD研修会	平成22年12月1日(水)	14:30～16:10	吉田地区	理学部11番講義室	兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤、吉田香奈、木下真、岡田浩一(大学教育センター専任教員)	学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を推進している方	各学部・学科と大学教育センターとが共同で、GP、カリキュラムマップ、webシラバスを再点検し、カリキュラム改善を実施するために開催する。	教員16名
7	大学教育センターと医学部保健学科・医学系研究科との教育改善FD研修会	平成22年12月9日(水)	14:30～16:00	小串地区	医学部保健学科研究棟1F会議室	兼石俊明(教育コーディネーター)、岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤、吉田香奈、木下真、岡田浩一(大学教育センター専任教員)	学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を推進している方	各学部・学科と大学教育センターとが共同で、GP、カリキュラムマップ、webシラバスを再点検し、カリキュラム改善を実施するために開催する。	教員13名
8	大学教育センターと医学部医学科・医学系研究科(医学)との教育改善FD研修会	平成23年3月3日(木)	16:00～16:45	小串地区	医学部本館6F会議室2	佐々木功典(医学部長)、岩部浩三(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター専任教員)	学部および研究科においてカリキュラム開発やFD活動を推進している方	各学部・学科と大学教育センターとが共同で、GP、カリキュラムマップ、webシラバスを再点検し、カリキュラム改善を実施するために開催する。	教員15名
									参加者計180名

第2節 大学教育機構主催の講演会及び研修会概要・報告

1. 講演会

(1) 目標達成型大学教育改善プログラムと山口大学の教育改革

日時：平成22年8月10日（火）13:30～16:30

会場：メディア棟 情報メディア講義室（旧SCS教室）

参加者：32名



基調講演（堀知義江九州工業大学副学長）

教育GP報告（岩部大学教育センター長）

内容

共通教育メディア講義室において「目標達成型大学教育改善プログラムと山口大学の教育改革」をテーマにFD講演会および教育GPの実績報告が行われた。

基調講演会では九州工業大学副学長（情報工学研究院教授）堀知義先生より「九州工業大学における学生の達成度評価手法と学修自己評価の取組」というテーマで、平成19年度から九工大が行っている学生の自己管理能力と学修意識を高める取組について、その概要と教育効果について講演をしていただいた。「学修成果自己評価シート」を用いて学生自身による学修・教育目標の達成度評価の手法や、その導入によって学生にどのような意識の変化が起こってきたのかを詳細に説明していただいた。

講演会に参加した先生方からは、「九工大の堀江先生のお話の中で「学生自身の達成度評価・・・」のシステムの導入により進級率が75%から90%へ上がったという効果に驚いた。」「大学教育の目指す方向についてよく検討されていると感じた。」「学生が主体的に学修を管理できる工夫と、その実際の運営について知ることができ、今後の学生支援に役立てられると思う。」というような意見が多く、好評であった。今回の講演会には、「コンソーシアムやまぐち」の一貫として、近隣の山口県立大学の先生方が多数参加された。県立大学の先生方からは、「本当に有意義な研修会で、

講演会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	6	18.8%
良かった	19	59.4%
どちらとも言えない	4	12.5%
あまり良くなかった	2	6.3%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	3.1%
合計	32	100.0%

私どもの大学が発展途上にあることも再認識できました。学生のために、この夏から取り組みます。」「大学教育センターの活動がようやく分かった。他の大学の先生の出席がよい刺激になっていた。」という意見があり、県内のFD研修の連携を推進する上で今回の講演会は参考になることが多かった。

後半は、教育GP成果報告ということで、「目標達成型教育改善の成果と課題」というテーマで、岩部大学教育センター長から、ここ2年半の取組内容と、本年3月に東京で開催した当該取組に対するフォーラムの様子、さらにフォーラム当日の午前中に開催された評価委員会の各委員から当該教育GPの取組に対する評価結果も併せて報告があった。

2. 研修会

(1) 共通教育ティーチング・アシスタント(TA)研修会

主催 山口大学 大学教育機構

日時 平成22年4月8日(木) 13:00-15:15

場所 全体研修：共通教育メディア講義室(旧SCS教室)、工学部E21番教室、医学部第3講義室

個別研修：共通教育棟(分科会ごと)

対象 共通教育において前期にTAに採用された大学院生及びTAを採用する教員

内容 TAによる授業の補助は、きめ細かな指導の実現のために必要不可欠です。また、TAの経験は学生自身にとってもコミュニケーション力、行動力、計画力、責任感、状況把握力など、社会人として望まれる基本的な資質を身につける絶好のトレーニングの場となっています。経済的支援を得られることもメリットです。そこで、本研修会ではTAの役割や責任、知っておきたい基本的知識について学んでいきます。

スケジュール

(1) 第1部 全体研修 13:00～14:40

<場所> 共通教育メディア講義室(旧SCS教室)、工学部E21番教室、医学部第3講義室

13:00--13:02 挨拶(大学教育センター長 岩部 浩三)

13:02--13:25 共通教育におけるTAの役割(大学教育センター 吉田 香奈)

13:25--13:40 出席確認システムの使い方(大学教育センター 小川 勤)

13:40--14:00 eラーニングシステムMoodleの使い方

(メディア基盤センター：赤井 光治, 王 躍, 小柏 香穂理)

14:00--14:35 大学の授業における安全衛生・AEDの使い方

(全学労働安全衛生管理室主任・保健管理センター 森本 宏志)

14:35～14:40 TAの諸手続について(教育支援課共通教育係)

(2) 第2部 個別研修 14:45～15:15 ※小串・常盤地区での開催はありません

各会場に移動し、グループ別に研修を実施。TA経験者による体験談の紹介、機器使用方法など。

分科会名	場所	授業科目 別分科会 名	講師名	講師所属	研修内容
情報処理基礎	21番教室	情報処理	小川 勤	大学教育センター	情報関係の授業におけるTAとしての仕事内容の確認や情報機器の事前準備や後片付けの仕方等について説明を行う
理系基礎・実験(化学)	生物・化学実験室(4F)	化学	青島均, 村上良子, 谷誠治	理学部	化学実験の進め方について
理系基礎・実験(生物学)	生物・化学実験室(4F)	生物学	渡辺 雅夫	理学部	視覚機器、生物顕微鏡の取扱いその他について研修を行う。
理系基礎・講義(数学Ⅰ・Ⅱ)	12番教室	数学	渡邊 正	教育学部	仕事に関する注意事項、その他
多人数・講義系授業科目	メディア講義室	教育学	吉田香奈	大学教育センター	出席確認システムの実演、教室でのAV機器操作の練習、共通教育係・印刷室等の案内など
※以下の授業科目については個別研修はありません。別途、それぞれの授業担当教員が個別に研修を行います。日程等については各教員までお問い合わせください。					
理系基礎・講義(化学Ⅰ・Ⅱ)		化学	各講義担当者		別途、それぞれの講義担当教員が個別に行う。
理系基礎・講義(地球科学Ⅰ、総説)		地球科学	各講義担当者		別途、それぞれの講義担当教員が個別に行う。
理系基礎・実験(地球科学)		地球科学	各講義担当者		別途、それぞれの実験担当教員が個別に行う。
理系基礎・講義(物理学Ⅰ・Ⅱ)		物理学	各講義担当者		別途、それぞれの実験担当教員が個別に行う。
理系基礎・実験(物理学)		物理学	各講義担当者		1回目の実験日に別途、実験担当教員が個別に行う。
スポーツ運動実習		運動健康科学	宮田 浩文	農学部	4月13日(火)10時より体育館にて行う。

報 告

共通教育の授業の補助を行うティーチング・アシスタント(TA)のための研修会が4月8日13:00より吉田・常盤・小串地区で同時開催された。本学ではTA研修会は年1回行われており、今年で4年目となる。参加者数は全体で119名、詳細は以下のとおりであった。〈吉田地区〉大学院生82名、教員16名、計98名。〈常盤地区〉大学院生15名、教員1名、計16名、〈小串地区〉大学院生4名、教員1名、計5名。参加者総数は昨年度より20名以上増加した。

今年度は第1部の全体研修を充実し、第2部は時間を30分に短縮した。まず、第1部では大学教育センターの岩部センター長による開会の挨拶の後、大学教育センターの吉田教員より共通教育のしくみ、TAの心得、職務内容、学生からの質問や意見に対する適切な対応方法等について説明があった。次に、大学教育センターの小川教員より出席確認システムの使い方について説明が行われた。出席確認システムは山口大学が昨年10月から導入したものであり、まだ使い方が浸透していないため詳しい説明が行われた。

続いてメディア基盤センターの赤井・小柏教員よりeラーニングシステムMoodleの使い方について説明があった。Moodleはメディア基盤センターがこの4月から正式にサポートすることになったため、Moodle上での小テストの作り方や様々な機能の活用方法について説明が行われた。

続いて保健管理センターの森本教員より、全学労働安全衛生管理室主任の立場から授業における安全衛生について説明があった。まずAEDの使い方についてビデオ視聴・開設があり、次に授業の安全衛生について説明があった。特に実験系の授業のTAは労働安全衛生管理室が発行している「安全衛生・健康の手引き」を熟読し、危機対応を行ってほしい旨要請があった。最後に共通教育係の神田係長よりTAの任用手続等について説明があった。

第2部の個別研修では、共通教育棟の各教室に分かれてグループ別にTAの心得や機器

の使用方法等について研修が実施された。ただし、グループ別研修に適さない科目については授業担当者が個別に事前研修を行うこととした。各グループの講師は共通教育授業科目別分科会にお願いしたが、多人数・講義系授業科目については多数の分科会に関係するため大学教育センターが担当した。各グループでは、TAの心構え、留意事項、TA経験者による事例紹介、共通教育係・印刷室等の案内、AV機器操作実演、演習・実験補助の方法などについて研修が行われた。

参加した大学院生・教員からの事後評価では6割以上から肯定的な回答が寄せられた。自由記述では「TAなるにあたって、分からない箇所の理解ができた」「TAの詳しい業務について学ぶことができた」「詳しく説明してもらい助かった」「出席確認システムは使ったことがなかったので、説明を聞くことができて安心した」「eラーニングシステムが役に立ちそうだと思った」「AEDの操作方法の説明が良かった」といった意見が寄せられた。一方、「AEDの使い方や安全力については、日頃の危機管理として重要だと思うが、TA研修会は初年度だけで十分だと思う」「スライドが見えにくかった」「Moodleの使い方はよく分からなかった」「AED講習よりもメンタルヘルスについての講習の方が重要ではないか」「提供された情報が雑然としている」「TAとして気になる「こんなときどうする？TA事例集」が省略されたのは少し残念だった。それらの点についてのTA経験者の話を聞いてみたかった」といった意見も寄せられた。なお、今後受けてみたい研修内容については「TAやパソコン関係のスキルアップ」「教材作成、著作権」「講義に関係ある研修」「具体的な心肺蘇生法（実習も含めて）」「危険物の研修」「ケガ等の応急対応の実習」「就職関連やボランティア関連」「AV機器の操作」「Moodleの使い方の研修」など多岐にわたった。

来年度は、第1部の全体研修の内容を精査することが課題である。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	3	3.8%
あまり良くなかった	5	6.4%
どちらとも言えない	20	25.6%
良かった	43	55.1%
非常に良かった	6	7.7%
無回答	1	1.3%
合計	78	100.0%

(2) FD推進者のための研修会

日程 平成22年5月10日(月) 18:00~19:00
 場所 吉田地区・共通教育メディア講義室(旧SCS教室)
 小串地区・医学部第3講義室
 常盤地区・工学部E21講義室
 講師 大学教育センター長 岩部 浩三
 大学教育センター講師 岡田 耕一



(進行：大学教育センター 小川 勤 教授)

参加者 参加者数：64名

内訳 (吉田地区：47名、常盤地区：13名、小串地区：4名)

内容 学科等の改組、授業科目や到達目標の変更等により、現行のカリキュラムマップ(CUM)の内容が古くなっているため、昨年度から教育GP事業の一貫として「教育改善研修会」が開催され、その中でCUMの改訂について話し合いが行なわれてきた。しかし、昨年度はセンターの準備の遅れや学部とともに教育機構の体制が大幅に変更されたために、新しい体制の下で改めて研修会を開始することが、岩部センター長より説明があった。また、今後、各部局に取り組んでいただきたい作業内容について詳細な説明があった。今年度はまずCUMを最新のものに改訂する作業を優先し、6月末までにこの作業を終了すること。その後、大学教育センターが提出された内容をチェックした後に、各部局を巡回してCUMについて部局との間で意見交換を行うというスケジュールが説明された。さらに、大学教育センターの岡田講師より作業を進めるうえでの注意事項について説明が行なわれた。最後に質疑応答が行われたが、参加者は概ね今後やらなければならない内容が理解できたようであった。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	3	20.0%
あまり良くなかった	4	26.7%
どちらとも言えない	4	26.7%
良かった	4	26.7%
非常に良かった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	15	100.0%

(3) 共通教育「情報セキュリティ・モラル」におけるeラーニング

教材の利用方法についての研修

日程 平成22年5月20日(木) 18:00～19:00

場所 吉田地区：メディア教育棟演習室2

常盤地区：D棟4F情報処理演習室

(遠隔講義システムを利用して研修実施)

講師 メディア基盤センター准教授 王 躍

メディア基盤センター准教授 赤井 光治

(進行：メディア基盤センター 市川哲彦教授)

参加者 参加者数：13名

内訳 (事前申込者 9名(吉田:4名、常盤:5名)、当日参加者 4名(吉田:3名、常盤:1名))

内容 共通教育「情報セキュリティ・モラル」に関してはこれまで、本分科会内にワーキンググループ(「情報セキュリティ&モラル教材及び教授方法検討WG」)を設置し、共通教材(通常版及びDVD活用版)を作成・配布してきたが、今回、新たe-learning版も作成した

ので、この教材の使用方法を中心に研修会を開催した。

学習管理システムは moodle 用に作られており、教材には、配布用の資料、確認用の小テストなどを組み込まれている。そのため、まず、eラーニングへの登録の仕方を研修した後に、情報セキュリティ・モラルの教材を eラーニング化したものと小テストの作成機能や実施方法などについて手順書（利用マニュアル）を参考にしながら研修を行った。

当日、情報セキュリティ・モラルの授業を担当される予定の先生以外に、eラーニングを利用した授業改善に興味がある先生方も参加されたため、moodle の扱い方に慣れていない先生方にとっては「もっと時間をかけて、じっくりと研修する機会があると良いと思った。今のままでは使い切れない。」、「説明のスピードが、やや速過ぎた感あり。」、「moodle に関する前提知識レベルを事前にアナウンスした方が良い」などの意見が出た。しかし、eラーニングに興味関心を持ってくれたため、「Moodle に関して、継続的に行っていたら更に良いと思う。」、「具体的な操作の指導があり良かったが、もっと詳しい内容があると良い。」といったようにこの種の研修をさらに継続して開講して欲しいという要望もあった。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	1	10.0%
どちらとも言えない	1	10.0%
良かった	6	60.0%
非常に良かった	1	10.0%
無回答	1	10.0%
合計	10	100.0%

(4) 大学生のメンタルヘルスと関わりのヒント

日程 平成 22 年 7 月 21 日(水) 13:30～14:10
場所 農学部 2 F 会議室
講師 今井 佳子 (本学学生相談所 カウンセラー)
参加者 31 名

内容

大学教育センターが講師を派遣し、学部が計画する研修会として農学部の拡大教授会開催前の時間を利用して実施した。

講師の今井先生からは日頃、学生相談所に相談に来る学生等を通して感じる最近の学生の実態について最初に報告があった後に、最近、新入生の中に増加しているという発達障害を持った学生の実態と障害の特徴、これらの学生に対する教員としての対応方法などについて、



さまざまな具体的な事例を挙げて説明があった。

参加した農学部の先生方の反応としては、「発達障害の学生が入学してきている可能性が高く、それらへの理解を深めることが重要であると感じた。」「現状を理解できた。」「発達障害を知ることはできた。」「発達障害の学生が大学に存在していること自体に驚いた。」「今後は意識してみたい。」という発達障害学生に対する認識を深めることができたという意見が多くあった。その一方で、発達障害学生に対する対応方法については、「発達障害の学生が意外に多いことに驚いた。共通教育の大人数クラスでは対応が困難ではないかと思う。」「対応方法が難しい」、「具体性に欠け、分かりづらい。対処法についての説明不足。」といったような対処方法に困難性を感じる教員の意見も多くあった。

また、講演会終了後の意見交換では、「教員個人で対応するのは難しい。発達障害学生に対する対応方法についてはもっと全学組織で取り組むべきではないか」、「そのための組織は現状でどうなっているのか？」といった質問があったため、大学教育センターから参加した教員から、入学前・入学後に本人及び保護者から申し出が合った場合には、当該学生が履修を希望する講座担当の先生方に対しては大学教育センターが障害の特徴と授業における対応方法についてのFD研修を実施していることを説明した。

発達障害学生の授業や研究室での対応方法についての研修会をもっと積極的に実施して欲しいという要望が多かったため、今後大学教育センターとして検討したい。また、委員組織で障害学生の対応を行っているが、今後障害を持った入学者が増えてくる傾向にあるので、全学的な対応組織作りが必要であることを感じた。

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	7	22.6%
良かった	21	67.7%
どちらとも言えない	2	6.5%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	1	3.2%
無回答	0	0.0%
合計	31	100.0%

(5) 平成22年度「新任教員研修会」(人事課と共催)

日時：平成22年8月2日(月) 14:50～17:00

会場：医学部霜仁会館(医学部構内)

参加者：33名

内容

例年どおり大学教育センターから、「山口大学のGPとカリキュラムマップについて(講師：小川)」、「シラバスの閲覧と入力の方法について(講師：木下)」、「学生授業評価と教員授業自己評価について(講師：吉田)」という3つのテーマについて、それぞれの講師が新任先生方に説明を行った。

参加した先生方からの意見としては、「教育については重複している部分もあったが、それだけ重要な観点であることを理解した」、「山口大学の教育に関する取組みの概要が理解できた。」という当該研修会に対する好意的な意見がある一方で、「4月に受講できれば、なお良かったと思う。シラ

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	6.5%
良かった	17	54.8%
どちらとも言えない	9	29.0%
あまり良くなかった	2	6.5%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	3.2%
合計	31	100.0%

バスに関する操作方法は研修会で特別に演題とする必要はないし、資料配付のみで十分と感じる。」「教員の評価システムがあるのかが気になった（授業評価以外）。あるのであれば説明してほしい。」などの厳しい意見もあった。

過去3年ほど人事係と共同開催という形で当該研修会を開催してきた。その前は大学教育センターが独自で開催したが、自由参加ということで参加者が少ないということで現在のような研修形態になった。しかし、参加者からの意見にも多くあるように、「開催時期」や「研修内容」について再検討が必要であると感じている。すなわち、開催時期を4月または5月からスタートとして、1年間を通して、「本学の教育方針や目標達成型教育改善」、「多人数授業の教授法」、「アクティブラーニングの手法」、「ICTの活用法」などの初任者に必要と思われる研修内容をテーマにした研修会を開催すべきであると感じている。他大学ではいくつかの大学が連携して取り組んでいる事例を最近よく目にするようになってきている。大学教育の質保証と学生の授業に対する満足度を高めるためにも、新任教員の研修はどうあるべきかについて、教学審議会や教学委員会などの全学的な組織で検討する時期にさしかかっているように感じる。

（6）多人数授業でのアクティブラーニング（能動学習）の取り組み

日程 平成22年8月27日(金) [吉田地区] 13:30～15:30

場所 共通教育棟 2F 会議室

講師 林 徳治（立命館大学教授）

参加者 10名

内容

共通教育など多人数(>100)における講義では、知識・技能の既習度、意欲関心の有無などに格差があり、なかなかシラバスどおりの授業が展開できないのが現状である。とりわけ学生への質問・意見を取り入れることは難しい。そこで、本研修会では、一般教室において教員と学生間でのコミュニケーション(回答、意見など)を活性化するための授業技術について紙媒体(カード、ノート)や携帯電話を使った実践例の紹介とグループワークが行われた。



林教授によればアクティブラーニングとは「学生の自らの思考を促す能動的な学習」を意味する。授業では学生の学習に関する表現・発信行動（書く、読む、意見を述べる、質問する、話し合う）を充実していくことが非常に重要になる。これまで、多人数授業ではアクティブラーニングは難しいと考えられてきたが、ICTの活用はその一つの解決方法として挙げられる。

ICTの問題点としては1)学習用タブレットなど特別な備品環境が必要である、2)少人数での試行が多く、多人数での実施事例が少ない、3)教員の負担(技術操作・教材準備)が増す、といった点があるが、今回は、特別な備品を必要とせず教員にも特別な操作技術を求めない方法として「携帯電話を利用したアクティブラーニング」の方法が紹介された。これは授業中に教員が出す課題について携帯電話から回答を送信するものであり、回答内容は授業中に教員のパソコンからプロジェクターを通じて映し出され、出席者全員で共有で

きる。今回のワークショップでは実際に携帯電話を使って林教授が用意した Web 画面にアクセスし、回答を送信する体験を行った。クリッカーのような特別な機材がなくても実施できるため、非常に簡単であった。

参加者からは「実際に使えそうなアイデアを得ることができた」「様々な改善方法のヒントが得られた」「授業改善に役立てられそう」「双方向の講習だった」といった意見が多く寄せられた。

今後は、大学教育センター等が中心となって今回のシステムを学内に導入してほしいという要望が参加者から寄せられた。

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	42.9%
良かった	4	57.1%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	7	100.0%

(7) 社会人基礎力の養成と大学教育改革

日程 平成 22 年 8 月 30 日(月) 13:30～15:30

場所 [常磐地区] 工学部 D23 教室

講師 小川 勤 (大学教育センター教授)

参加者 2 名

内 容

研修会は、経済産業省が示した「社会人基礎力」を大学教育の現場でどのように養成すべきかをテーマに説明と他大学の事例紹介が行われた。最初になぜ最近、企業等の社会から大学に対して「社会人基礎力の育成」が求められるようになったのかその背景について説明が行なわれた。さらに、他大学でどのような社会人基礎力を養成するためにプログラム（授業）が設置されているのかについては、同志社大学や法政大学など 5 つの大学の事例が紹介された。そして最後に研修会に参加した先生方に、自分の立場から社会人基礎力をどのように育成していくべきかについてそれぞれ意見交換が行われた。

具体的な研修内容は以下の通りである。

最近の学生の意欲の変化の分析とともに、なぜ今、大学教育の中で「社会人基礎力」の養成が求められるようになってきたのか、その背景と企業内部で起こっている働く人の意識変化を結び付けながら、参加者と随時議論を交えながら研修が展開された。また、後半では他大学で実施されている「社会人基礎力」の育成を目指した取組事例の紹介が行われた。また、国際学力調査（PISA や TIMSS の国際学力到達度調査）の結果からみた日本の若者の学力の現状についても討論が行なわれた。日本の学生は現在肯定志向が強いが、海外の学生たちは未来志向である。その原因と日本の学生の持っている意識の特徴について説明があった。教育学者たちはこのような日本の現代の若者の意識の変化についてどのように分析しているのかについても説明が行なわれた。学力に関してはマスコミ等で報道されるほどには海外の子どもたちに比べて日本の子どもたちは学力が劣っていないことや、学力格差の広がりや親の所得格差が子どもの学力格差に結び付いているという教育社会学者の意見も紹介された。

参加者からは、「社会人基礎力に関する基本的な考え方が明確になった。」、「出席者の考え、他教員の実施例等も参考になった。」という意見が寄せられた。その一方で、「教員個

人でできる種々の研修の充実」や「同じテーマでいいのだが、解決案が示されるような内容が良いと思う。」といった「社会人基礎力」の育成を目指した具体的な取り組みを行う際のサポート体制の充実などについて言及する意見が多かった。

今回研修に参加された先生は、民間会社を経験されて来た方であったので、講師の話の内容をよく理解できているようだった。また、大学教育の中で「社会人基礎力」の養成については、日頃から他の教員よりその必要性を感じている先生方であったため、講師と参加者との熱心なディスカッションが展開されていた。

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	2	100.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	2	100.0%

(8) 高大連携の現状と課題を考える

日時 平成 22 年 9 月 9 日(木) 13:30～15:00
場所 [吉田地区] 共通教育本館棟 2F 会議室
講師 兼石 俊明 (大学教育センター コーディネーター)
参加者 11 名

内容 高大連携の現状を踏まえ、今後の高大連携の在り方を考える。

研修会では、まず講師より高大連携の問題点が指摘された。現在、高大連携に取り組んでいる高等学校および大学は少なくないが、高校と中学校、中学校と小学校、小学校と幼稚園と同様に大学と高等学校の接続にも問題がある。学校系統図によると、海外では義務教育であっても落第させる国もあるが、わが国では学力が不十分であっても進級させる現状にあり、これが各教育機関間の接続に問題をきたす一因となっている。



また、大学入試科目の減少が、高等学校教育に大きな影響を与えていることも否めない。すなわち、高等学校は大学への進学実績を教育実績としてとらえる傾向があり、入試科目から外された科目の教育には積極的には注力せず、その結果として本来大学入学までに高校生が身につけるべき知識が不足する状況にある。しかしながら、その一方で、少子化と大学進学率の上昇に伴い、大学側としては入学定員の確保のために入試科目を増やせない現状もあり、大学と高等学校の双方ともにジレンマを抱えている。また、大学が輩出する人材と社会が求める人材とには大きな違いがあるが、これは大学だけに原因があるのではなく、大学への進学実績に偏重した姿勢をとる高校側にも問題があると指摘された。

次に、講師による問題提起に引き続き、参加者を含めた議論が行われた。参加した教員からは「山口大学の学生の大半は真面目である。しかし、多くの学生は、敷設されたルールの上を走ることしかできない。つまり、自ら積極的に勉強する力に欠けており、行き詰まりがみられる。とはいえ、大学は本来何を学ぶかについて自主性を尊重

する場であり、この点を変えるべきではない。初等中等教育の在り方（ルールの上を走らせる教育）にこそ、大きな問題があるのではないか。」「高校の教員は、進学先だけでなく、大学卒業後の就職先まで追跡すべきである。そうしなければ、有益な進路指導はできないと思う。就職先まで調査することによって、教員の高等学校教育に対する問題意識も培われるのではないか。」といった意見が出された。

研修後に回収したアンケートには、「集中して考える機会となった。また少し深く考えてみたい」、「高大連携に対する高校側の内実が具体的に聞いたことは参考になった」というコメントがあった一方で、「具体的な例を聞いたかった」というコメントも寄せられた。これらのコメントから、今回の研修会は高大連携について考える上で有意義であったと考えられる。今後は寄せられたコメントにもあるように、更に具体的な例を元にしたディスカッションが行われる研修が望まれている。

今後はどのような研修会へ参加したいかという設問には、「高等学校の先生方の授業計画・授業技術に関すること」、「日常疎遠なテーマ」、「EUの諸大学におけるボローニャプロセス（特に単位について）」、「非英語圏（ドイツやフランスなど）における授業の英語化」、「クリティカルな内容であれば、テーマは特に問わない」といったコメントが寄せられた。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	6	85.7%
どちらとも言えない	1	14.3%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	7	100.0%

(9) DocuWorks の使い方

日程 平成 22 年 09 月 24 日(金) [吉田地区] 14:30
～16:00

場所 メディア基盤センター2F 演習室

講師 松吉 勉 (富士ゼロックス山口株式会社)
宮崎陽子(富士ゼロックス山口株式会社)

参加者 申込み 4 名、参加実績 11 名(欠席 0 名、追加 7 名)

内容 DocuWorks と学内のゼロックスの複合機の効率的な利用方法を知る。

電子ドキュメントには様々なファイル形式があるため内容を閲覧するために複数のアプリケーションの切り替えが必要であったり、ファイルをひとつにまとめにくいなど操作に手間がかかる場合が少なくない。また、紙媒体のドキュメントを電子化する場合、スキャナの有無や性能によって作業効率が大きく左右される。このような問題点を解決するひとつの手段として、DocuWorks の利用が考えられる。

DocuWorks を利用すると、異なるファイル形式の電子ドキュメントを簡単な操作でひと



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	88.9%
良かった	0	0.0%
どちらとも言えない	1	11.1%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	9	100.0%

つのドキュメントにまとめることが可能であり、ひとつにまとめたドキュメントは DocuWorks だけで内容の閲覧が可能となる。また、学内設置のゼロックスの複合機を用いて紙ドキュメントをスキャンして各研究室のパソコンに取り込むこともできる。更に、取り込んだ画像データに含まれるノイズを除去したり、OCR 機能でテキストデータを付加すればキーワード検索も可能になる。

本研修会では、前半の基本操作編および後半の発展編を通じて、DocuWorks の利用方法および DocuWorks と連携したゼロックスの複合機の使い方についての説明および実際の操作を各自で体験する講習会が行われた。

研修後に回収したアンケートには、「説明が丁寧で良かった」、「説明が分かりやすかった」、「DocuWorks の使い方がよく理解できた」、「資料を作成する時に役立ちそう」、「日常業務で活用出来そうで参考になった。いつも複合機を使っていて、利用してみたいと思っていたところの講習で参加し、役立った」、「XP での操作だったので、新しい OS でどう出るのかこれから確かめていきたい」という感想が寄せられた。

今後はどのような研修会へ参加したいかという設問には、「映像教材の作成法」、「プレゼンテーションに有効な手法」、「講義資料の作成・配付・学生への Web での提供」、「実務的なもの」といった意見が寄せられた。なお、実施する時間帯として「午後は眠たくなるので、午前スタートが良いと思う。」というコメントも寄せられた。

(10) DVD 教材及び e-learning の授業での活用ー共通教育「情報セキュリティ・モラル」での実践を事例にー

日時： 平成 22 年 09 月 29 日(水)14:30~16:30

場所： メディア基盤センター2F 情報処理演習室 2

講師： 市川 哲彦(メディア基盤センター教授)、永井 好和(メディア基盤センター准教授)、赤井王 躍(メディア基盤センター准教授)

参加者： 11 名

研修内容：

共通教育科目の「情報セキュリティ・モラル」における授業改善の取り組みについて紹介していただいた。この科目は 1 年生向けの必修科目であり今年で 3 年目となる。技術的にやや難しい内容や聞きなれない言葉も多く使われていることから初年度に準備した共通教材では理解し辛いという声も多くあった。そこで昨年度より DVD による映像教材を導入した他、本年度は moodle による e-learning 教材も導入した。

まず、市川先生より学生授業評価のアンケート結果についての分析結果として、DVD 教材の利用により割りとポジティブな結果が出ていることが示された。これに対して、実際に授業をされている先生



方の感触として学生の理解度が上がったと感じられたかどうかという質問があった。これ

に対して、毎回の回答を見る限りでは DVD 教材使っていない頃よりは反応が良くなっている。また、授業は成立しやすくなった。私語が多かったのが割りと聞いてくれているという意見があった。

続いて、永井先生より従来の教材、DVD 教材、moodle 教材と授業の進め方について紹介が行われた。会場からは DVD 教材が増えたことで時間配分的に無理がないか、もう少し内容絞ったほうが良くないかという質問があり、それに対して、ビデオクリップ入れた基準は重要だけど理解し難いポイントを選んだ。スライドでは一般的な内容、ビデオでは学生生活に近い内容という 2 段階で深い理解してもらいたい狙いがあるとの説明があった。

次に赤井先生より、moodle 教材の作成方法についてレクチャーが行われ、最後に王先生から、moodle 教材の導入方法についてチュートリアルが行われた。

その後もセンターに対して教材整備の予算化をお願いしたいという意見も挙がるなど、全体的に分科会の活動として活発に授業改善が行われている事例だと感じられる内容だった。

研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	33.3%
良かった	4	66.7%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	6	100.0%

(11) Less is more – 効果的なパワーポイント・プレゼンテーション

ヨンの再考ー

日程 平成 22 年 10 月 14 日(木) [吉田地区] 14:30 ~ 16:00

場所 共通教育棟 2F 会議室

講師 MARC LOHR (経済学部教授、大学教育センター主事)

参加者 20 名

内容 どのようなプレゼンテーションが効果的であるのかを確認し、パワーポイントの利用方法を再考する。



パワーポイントには文字や写真以外に、アニメーションや音声などのマルチメディアデータをプレゼンテーションに用いる機能が満載されている。そのためパワーポイントの普及に伴って、限られた時間内にアニメーションや音声を多用するなど大量の情報を満載したプレゼンテーションを目にすることがある。しかし、このようなプレゼンテーションは聴衆の疲労による集中力の低下や情報オーバーフローを引き起こして、かえって内容の理解を妨げてしまう場合も少なくない。

本来、プレゼンテーションは『送信者が伝達したいメッセージをもっと有効的(効果的)に受信者に伝達するためのコミュニケーション手段』である。しかし、具体的にどのようなポイントに配慮すれば効果的なプレゼンテーションができるのかについては意外にも知られていない。本研修会では、パワーポイントの機能そのものの解説ではなく、効果的なプレゼンテーションを行うために押さえるべき重要なポイント(「1スライド、1メッセー

ジ」、「可読性への配慮（コントラストと色使いへの配慮）」、「図表を正確に伝えるための注意点（意味のない 3D グラフを使わない）」「新聞から学ぶべきデザイン」「プレゼンテーションの構成方法」、「話し方」など）について解説が行われた。

研修後に回収したアンケートには、「役立つ情報がいくつかあって助かった」、「大変参考になった」、「共感するところ、学ぶところが多かった」、「自分の授業でのプレゼンに非常に参考になった」、「プレゼンでも、各自の授業で使用しているプレゼンを持ち合って話し合うような、ワークショップ形式のFDも考えていただきたい」、「原稿を用意する重要性を理解した。iPadを見ながらの話にはやや違和感があった」等の感想が得られた。これらの感想から、本研修は効果的なプレゼンテーションを再考する良い機会になったと思われる。

今後はどのような研修会へ参加したかという設問には、「実務的なもの」、「プレゼンテーションに関する内容」、「パワーポイントの機能の使い方」、「類似のPPの使用に関するもの」、「PBL型の授業展開方法」、「さらなるプレゼンテーションに関する研修」、「WEB教材」、「ハンズオン eラーニング教材作成」といった意見が寄せられた。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	71.4%
良かった	2	28.6%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	7	100.0%

(12) 山口大学中堅職員研修会

日程 平成 22 年 12 月 15 日(水) [吉田地区] 13:00～14:20
 場所 共通教育棟 2 階会議室
 講師 小川 勤 (大学教育センター教授)
 参加者 中堅職員 15 名
 内容 本学の教育改善とスタッフ (職員) の役割
 —現代の学生実態を踏まえて—

FDとSDが一体になった研修会の実施という教育GPの中で取り組むべき重点プロジェクトとして位置付けられた研修会を実施した。本学の事務・企画・財務などの管理や運営の中核的な役割を担っている中堅職員を対象に、3部構成で話を行った。第1部では7年前から本学が取り組んでいる目標達成型教育改善のしくみについて、グラフィケーション・ポリシー (GP) やカリキュラム・マップ (CUM) などの機能を説明しながら教育改善のPDCAサイクルを利用した教育の内部質保証の方法を職員にも分かりやすく説明した。



実は2年前の当該研修会で本学の教育改善の方向性を説明した際に、職員がこの内容を事前に知っているか聞いたところ、知っていると答えた者がごく少数であったため、職員にも本学の教育改革の方向性を共通理解する必要があると考えたからである。今回受講生の反応をみているとかなり理解は進んで

きたように感じた。第 2 部は各調査からみた最近の学生像について、進路、生活意識、人生目標、職業選択などの項目について、日本、韓国、中国、米国の 4 カ国の比較をおこなった調査結果をもとに現代の日本の学生の「現在志向」の高まりと日本以外の国々の学生の「未来志向」的発想の相違について説明した。また、山口大学の学生の自習時間実態や生活や学習に対する悩みについても分析した結果を説明した。さらに、最近 OECD が実施した国際学力到達度調査 (PISA) の結果やそこから見えてきた日本の学生の学力の特徴などについても解説をおこなった。

第 3 部では第 1 部、第 2 部を受けて、職員として大学改善にコミットメントしていったらよいのかについて私なりの意見を述べた。特に「大学のプロフェッショナルになれ」、「職員改革なくして大学改革なし」といった言葉を使って、従来のルーティンワークだけをこなす職員から大学全体のことを把握し、それぞれに対して意見が言えるような職員になって欲しいことを強調した。

研修後に回収したアンケートには、「説明が丁寧で良かった」、「説明が分かりやすかった」、「自分達職員が現在、また将来、取り組んでいかなければならないことが分かってきた」という感想が寄せられた。

今後は必要に応じて職員研修と教員研修とを一体化する必要性や全学的な研修マップの作成に必要性などに対するコメントも寄せられた。

(13) 社会人基礎力の養成と大学教育改革

日程 平成 23 年 2 月 15 日(火) [小串地区] 15:00～16:30

場所 総合研究棟 3 F S 3 講義室

講師 小川 勤 (大学教育センター教授)

参加者 27 名

内容

学科 F D 研修会として当該研修会が開催された。研修内容は最初に最近の大学を取り巻く環境変化と大学改革について、統計資料を使って示された。その後に経済産業省が示した「社会人基礎力」を大学教育の現場でどのように養成すべきかをテーマに説明と他大学の事例紹介が行われた。最初になぜ最近、企業等の社会から大学に対して「社会人基礎力の育成」が求められるようになったのかその背景について説明が行われた。さらに、他大学でどのような社会人基礎力を養成するためにプログラム (授業) が設置されているのかについては、札幌市立大学看護学部の事例が紹介された。そして最後に研修会に参加した先生方に、自分の立場から社会人基礎力をどのように育成していくべきかについてそれぞれ意見交換が行われた。

具体的な研修内容は以下のとおりである。

大学教育改革とキャリア教育 (社会人基礎力の養成) との関係性を中教審答申や大学設置基準改訂などを踏まえて説明が行われた。その後、山口大学の教育改革の仕組みと本学が今後取り組もうとしている改革の方向性について説明があった。最後に、本学が大学教育の中でどのようなキャリア教育を推進していこうとしているかについて説明があった。今回の大学設置基準改訂に対応するためには、これらの教育改善作業に加えて、キャリア・ポリシーの早急な確立と実施が必要であることがまず説明された。そこで本学では学生支援センターの就職支援室を中心に、各学部教育組織単位 (教室、学科) で、キャリア・ポ

リシーの策定を急ぎ、これを実効あるものとするために、平成 23 年度入学生からを対象とする学生による目標作成と自己評価（ポートフォリオ）の導入によるキャリア教育を進める予定であることの説明があった。

参加者からは、「現状の把握と今後の展望がわかった。」「G P と C F C の理解が深まった。」という意見が寄せられた。その一方で、「他大学の事例より本学の事例を示して欲しかった」や「同じテーマでいいのだが、解決案が示されるような内容が良いと思う。」といった「社会人基礎力」の育成を目指した具体的な取り組みを行う際のサポート体制の充実などについて言及する意見が多かった。

今回学科研修会という形で開催されたが、内容的にはC F C の作成が教育機構から各学科に対して依頼が来ている段階であったので、キャリア教育を絡めて大学の教育改革を説明してもらったことは教員の意識を高めるためにはタイムリーであった。

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	6	22.2%
良かった	18	66.7%
どちらとも言えない	1	3.7%
あまり良くなかった	2	7.4%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	27	100.0%

(14) 学生の心を探る ～バズセッションを通して～

日程 平成 23 年 03 月 29 日(火)[宇部地区] 13:30～15:30

場所 宇部地区(工学部 D23 教室)

対象 希望者

講師 今井 佳子(学生相談所 カウンセラー)

内容 「学生が何を考えているのか分からない」「ゼミの学生が休みがちで困っている」「ゼミの学生どうしの関係がぎくしゃくしているようだ」など、学生対応で悩まれていますか。そこで、研修会にお集まりいただいた先生方とバズセッションを通して学生理解をより深める場を持ちたいと思っております。バズセッションでは学生対応で実際に困っていることを共有し、その問題解決のための語り合いをしながら学生の心を探っていきたいと思います。過去にうまくいった対応や学内の人的資源なども情報交換し、今後の学生への関わりにかかしていただきたいと考えています。

報告 学生相談所の今井佳子先生を講師にお迎えし、工学部 D23 番教室で 2 時間にわたる研修会が開催された。今井先生は平成 15 年 4 月に設置された山口大学学生相談所に勤務され、これまで新規相談者約 1,200 名の学生に対して継続的にカウンセリングを行ってこられた方である。出席者は事前申込者 9 名、当日参加者 6 名、合計 15 名であった。

研修会は前半部分が講義、後半部分がバズセッションの形式で行われた。講義では今日の学生を取り巻く環境、相談所を訪れる



学生の悩みについて解説が行われた。次に、4グループに分かれてバズセッションが行われた。まずグループごとに「学生対応で困っていること」についてチェックリスト(明治大学作成)に基づいて議論が行われた。次に、各グループから報告が行われ、それを踏まえて全体で解決方法が話し合われた。各グループから寄せられた問題点は次のとおりである。

<生活態度について>【私語】一部の授業では注意しても私語がやまないことがある。一度注意してもまた繰り返す。以前のように教員が教壇に立つと私語がやむということはなくなった。【携帯電話】携帯電話があると教室から出て行ってしまう学生がいる。理由は分からないがだまって教室を出て行く学生がいる。

<学習について>【ゼミ運営】ゼミで自分の意見を語れない学生がいる。人前で自分の意見を言えない学生がいる。他人と深い関わりを避ける傾向にある。【学力】学力にばらつきがあり議論についていけない学生がいる。学力の高い学生が他の学生を引っ張っていくことがなくなった。学力不足で授業についていけない学生がいる。

<人間関係について>【ゼミ人間関係】ゼミ員同士の人間関係トラブルでゼミ運営に苦慮することがある。大学院生と学部生を組ませて実験をさせることが多いがうまく行かないケースもある。【コミュニケーション】突然、音信不通になる学生がいる。自分で考えないで他人にすぐ聞く学生と何も聞けない学生の両方がある。精神的に不安定な学生は保護者との関係が上手くいっていないケースも多い。発達障害の学生とのコミュニケーションの課題。

<精神衛生について>【こころの病気】学期開始時にこころの病気を理由に配慮を求めてきた学生がいる。

研修会に参加した感想は以下の表のとおりである。また、自由記述欄には「最近の学生の傾向について参考になることがあった」「学生の心に関して、知識および教育も受けていないのでとても良かった」「これから相談を受ける機会が増えたので良かった」「様々な事例について具体的な話が聞くことができ、情報を共有することができて有意義だった」「学生の生の声を聞いた気がした」「意見交換できたこと、明治大学のように他大学の事例が分かったことが良かった」「講義後半の具体的な話が参考になった」などの意見が寄せられた。また、「今日のテーマは1回2時間では不足であると思うが仕方がないかとも思う」という意見もあった。今後参加してみたい研修会としては「学生と年代が違うので、学生が何を思っているのか分からない所がある。今の学生の気質が分かるような研修があればよい」「学生の性格や態度に応じた指導法など」「学生が多様化している中、対応も個別にならざるを得ない。その時、色々な事例があると参考になると思われる」といった意見が寄せられた。

今後は学生支援の方法についてさらにFD研修会を展開していく必要があると思われる。

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	53.3%
良かった	7	46.7%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	15	100.0%

3. 教育改善研修会

(1) 農学部・農学研究科・連合獣医研究科・医学系研究科（農学系）

日 時：平成 22 年 9 月 1 日(水) 13:30～15:30

場 所：農学部会議室

参加者：18 名（内訳）：副学部長、学務委員長、学科長、学務委員（教学委員を含む）など合計 12 名、岩部大学教育センター長、兼石教育コーディネーター、大学教育センター専任教員（小川勤、吉田加奈、木下真、岡田耕一）合計 6 名

研修内容：

本年度 1 回目の教育改善研修会を農学部の教学委員、FD 委員長、FD 委員、学務委員等を対象に実施した。最初に、岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨が説明された。平成 23 年 4 月の大学設置基準改定に伴い、第 42 条には新しい項目として「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が付加されている。また、日本学術会議による「大学教育の分野別質保証の在り方について」では、専門教育の在り方について今後対応すべき内容が記されており、3 年後に主要 30 分野で掲げられる予定である



「教育課程編成上の参照基準」を作成するための手引きも添付されている。これらから今後大学に求められるカリキュラム改善の方向性を予測できることが説明された。そして、大学設置基準改定に合わせて、これまで整備してきた学部・学科・コースの GP に「社会的及び職業的自立を図るための必要な能力」をどのように取り入れるかをカリキュラムマップ（以下、CUM）を用いて確認・検討するとともに、個別学生の GP 達成度を確認する学習ポートフォリオの検討、学生や外部の人にもカリキュラムを分かりやすく示すためのカリキュラム・フローチャート（以下、CFC）の作成の依頼がなされた。

次に、兼石教育コーディネーターより、山口大学における出口管理のグランドデザインの必要性が説明された。ここでは、大学の GP は学部の GP を包含し、学部の GP は学科の GP を包含し、更には学科の GP はコース等の GP を包含する関係にあるべきであり、カリキュラムマップはコース等の最小単位の GP と授業科目との対応関係を示すべきであるとの説明がなされた。これに続いて、期待される GP の機能および GP が機能するまでの過程が示され、作業によって生じる問題点が指摘された。また、昨年度に改定された農学部の CUM について、GP の記述に関する問題点（主語が学生になっていない等）について指摘がなされた。

次に、大学教育センター・小川教授から CFC についての説明と作成依頼がなされた。CFC の説明では、学科・課程、コース等の特性によっては資料に示した手順による作成が困難な場合も考えられるため、その際は学問的な特性に応じて CFC の作成・表示方法を適宜変更してもかまわないと説明された。また、CFC の例として、本学工学部機械工学科、愛媛大学環境工学コース、愛媛大学地域環境工学の例が示された。CFC の提出期限については、今後行われる他学部の教育改善 FD 研修会で出される意見も参考にして後日通知したいと説明された。

次に、農学部の教員との質疑応答が行われた。農学部の教員からは、「農学部には工学部ほど必修科目は多くない。したがって、工学部のような CFC としては描けないと思われ

る。また、これと関連して、分野によっては専門の内容が細分化され互いに異なるため、学科によっては工学部ほど具体的な GP を設定できていない。まず GP から設定しなおさなければならぬのか。」との質問があった。これに対して、大学教育センターは「理系であればある程度の履修の順序性はあるだろうが、工学部のような CFC として描くのは困難な場合も想定される。もし困難であれば、愛媛大学の例のように専門グループと学年といった書き方でも良い。GP については全面的な改定を待って足踏みせずに、GP の改定も検討しながら、それと対応して CUM と CFC の改定も随時進めてほしい。このような継続的な改善の過程を通じて GP、CUM、CFC についての議論を深め、本質的な教育改善に繋げていただきたい。」と回答した。

今回の研修会では、「大学設置基準の改定」および「大学教育の分野別質保証の在り方について」からみえてくる今後の大学に求められるカリキュラム改善の方向性を確認し、これらに対応するために GP、CUM、CFC をどのように整備すれば良いのかについて議論を行った。今回の研修会は、農学部における組織的な F D 活動を継続する上で大変有意義であったと考えられる。

(2) 工学部・理工学研究科(工学系)・医学系研究科(工学系)

日時:平成 22 年 09 月 13 日(月) 10:00~12:00

場所:工学部 D23 教室

参加者:工学部 9 名、大学教育センター 6 名、合計 15 名

研修内容:

本年度 2 回目の教育改善 FD 研修会を工学部で実施。開催の挨拶に続いて、大学教育センター長の岩部が研修会の開催趣旨について説明を行った。

まず、本年度は従来教養教育と専門教育で別々だったカリキュラムマップ(以後 CUM)について、専門教育のグラデュエーションポリシー(以下 GP)を教養教育で満たしている部分、教養教育の GP を学部教育で満たしている部分がないかを確認頂いた。その図式を頭に入れて頂き CUM の中で自分の授業を位置づけてシラバスを書くことが重要であると指摘。



次に各学部の教育改善活動の方針についての配布資料により次の 4 点について説明した。

1 点目として、平成 23 年度から大学設置基準が改正される。大学の役割として「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力」を、学科・コースの GP の中に来年 4 月までに組み込む必要があると思う。平成 22 年 7 月 22 日に日本学術会議から「回答 大学教育の分野別質保証の在り方について」が出たことについて、中教審の答申も読むが、流石、学術会議と共感・納得させられる内容。分野別専門教育について 3 年後には主要 30 分野について参照基準が策定される予定。参照基準作成の手引きには知識理解について「~について説明できる」、当該分野の学びを通じて獲得すべき能力について「~を行うことができる」と記述せよとあり、我々がやってきた GP を立て各授業科目の到達目標を設定する方法が間違いでなかったと確信した。各教員に一度は読んで頂きたい。今後教養教育は何かと考えるときの出発点になる。

2点目として、組織改編について、まだ明確に出てきてない状況だが学長からは新学部や責任部局という考え方を示され、それぞれの部会で検討されている。共通教育もかなり影響を受けて変わると思う。特に授業科目を削減しないといけなくなった場合、どうしても必要な科目を精査しておく必要がある。

3点目として、大教センターで準備中のシステムについて。まず学生の学習ポートフォリオ。これはまだ構想段階だが中期目標期間には作り上げたい。もう1つは、教員間で授業の成績分布を共有するシステム。こちらはほぼ完成。教学委員の先生に確認してもらい修正の後、教職員限定で学内公開したい。他の先生がどういう成績出しているか自分の授



業考える上で大切。同名の授業なのに成績の付け方が全然違うと学生から苦情出ている科目もある。それぞれの授業設計し到達目標明確にするためには必要だろうと考えていたシステム。今年度後期には公開するので役立ててもらいたい。

4点目として、各授業の順序を外部の人にもわかり

やすいカリキュラムフローチャート(以後 CFC)の形でまずは学生から公開する。

続いて、教育コーディネーターの兼石(元宇部高校長)により現在の GP、CUM に対する気付きが述べられ、それに関する意見交換を行った。

最後に、大教センターの小川が CFC 作成のお願いを行い、それに関して意見交換を行った。工学部出席者からは「CFC を作ることに本当に意味があるのか。少なくとも学生が見て意味あるわけではない。積み上げ表あれば問題ない。」という意見が上がった。兼石からは「GP は学位授与方針。目線変えないといけない時代になっているのではないか？」という疑問も投げかけられた。

(3) 人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科(人文系)

日時:平成22年10月6日(水) 14:30~16:30

場所:人文学部大会議室

参加者:24名(内訳):学務委員長、学科長、学務委員(教学委員を含む)FD委員など
合計19名、岩部大学教育センター長、兼石教育コーディネーター、大学教育センター
専任教員(小川勤、木下真、岡田耕一)合計5名

研修内容:

本年度3回目の教育改善研修会を人文学部の教学委員、FD委員長、FD委員、学務委員等を対象に実施した。最初に、岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨が説明された。平成23年4月の大学設置基準改定に伴い、第42条には新しい項目として「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が付加されている。また、日本学術会議による「大学教育の分野別質保証の在り方について」についても説明があり、専門教育の在り方について今後対応すべき内容が記されており、3年後に主要30分野で掲げられる予定である「教育課程編成上の参照基準」が公表されることなどの大学教育の質

保証についての説明があった。また、大学設置基準改定に合わせて、これまで整備してきた学部・学科・コースの GP に「社会的及び職業的自立を図るための必要な能力」をどのように取り入れるかをカリキュラムマップ（以下、CUM）やシラバスを用いて今後、検討して欲しい旨、人文学部に対して依頼があった。

次に、兼石教育コーディネーターより、山口大学における出口管理のグランドデザインの必要性が説明された。

ここでは、大学の GP は学部の GP を包含し、学部の GP は学科の GP を包含し、更には学科の GP はコース等の GP を包含する関係にあるべきであり、CUM はコース等の最小単位の GP と授業科目との対応関係を示すべきであるとの説明がなされた。これに続いて、人文学部の CUM をチェックした感想や必要な改善点が説明があった。

次に、大学教育センターの小川教授よりカリキュラム・フローチャート（以下 CFC）についての説明と作成依頼がなされた。CFC の説明では、学科・課程、コース等の特性によっては資料に示した手順による作成が困難な場合も考えられるため、その際は学問的な特性に応じて CFC の作成・表示方法を適宜変更してもかまわないと説明された。また、CFC の例として、本学工学部機械工学科、愛媛大学人文学部の各専攻・コースが作成した例が示された。CFC の提出期限については、今後行われる他学部の教育改善 FD 研修会で出される意見を参考にして後日センターから各学部に作業依頼の通知を正式に行いたい旨、説明があった。

次に、人文学部の教員との意見交換や質疑応答が行われた。人文学部の教員からは、今後人文学部として当面取り組まなければならない教育改善について明確にして欲しいという要望があった。また、CFC の作成については趣旨は理解できるが、科目間の関連性や順序性については愛媛大学のような形であれば、CFC は作成可能であるが、GP を意識した CFC の作成は工夫が必要であるという意見があった。

今回の研修会では、「大学設置基準の改定」および「大学教育の分野別質保証の在り方について」からみえてくる今後の大学に求められるカリキュラム改善の方向性を確認し、これらに対応するために GP、CUM、CFC をどのように整備すればよいのかについて議論を行った。また、昨年度すでに CFC 作成に関する意見交換がある程度行われていたため、CFC の作成意義などについてはある程度理解が得られていたため、当日の意見交換は比較的スムーズに進めることができた。

また、今回の研修会には、昨年度に比べてより参加者が多かったため、組織的な FD 活動を推進する上で有意義な研修会であったと考えられる。



（４）教育学部・教育学研究科・東アジア研究科（教育系）

日時：平成 22 年 11 月 10 日(水) 16:10～17:40

場所：教育学部 23 番教室

参加者：32 名（内訳）：学務委員（教学委員を含む）FD 委員、教育学部課程・コース委員、教育学部教務係など合計 27 名、岩部大学教育センター長、兼石教育コーディネーター、大学教育センター専任教員（小川勤、吉田香奈、岡田耕一）合計 5 名

研修内容：

本年度 4 回目の教育改善研修会を教育学部の教学委員、FD 委員、学務委員、各課程・コース委員等を対象に実施した。最初に、岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨が説明された。平成 23 年 4 月の大学設置基準改定に伴い、第四十二条には新しい項目として「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が付加されていることが述べられた。さらに、日本学術会議による「大学教育の分野別質保証の在り方について」についても説明があり、専門教育の在り方について



今後対応すべき内容が記されており、3 年後に主要 30 分野で掲げられる予定である「教育課程編成上の参照基準」が公表されることなどの大学教育の質保証についての説明があった。また、大学設置基準改定に合わせて、これまで整備してきた学部・学科・コースの GP に「社会的及び職業的自立を図るための必要な能力」をどのように取り入れるかをカリキュラムマップ（以下、CUM）やシラバスを用いて今後、検討して欲しい旨、人文学部に対して依頼があった。最後に学士課程教育の再構築に関する話があり、今後は各学部・学科・課程・コースが自分の専門教育分野だけの教育だけでなく、共通教育として教育学部としてどのような科目が必要なのかを議論し 4 年間一貫した学士課程教育を学部として考えていく必要があることが明らかにされた。

次に、兼石教育コーディネーターより、山口大学における出口管理のグランドデザインの必要性が説明された。

大学の GP は学部 GP を包含し、学部 GP は学科 GP を包含し、さらに学科 GP は課程・コース GP を包含するといった関係から再考すべきであるという見解が示された。また、CUM はコース等の最小単位の GP と授業科目との対応関係を示すべきであるとの説明がなされた。教育学部の CUM をチェックした感想については、GP の立て方が少ない学科が一部存在することや非常に多くの科目があり、○付けが一部行われていない科目があることが明らかにされた。科目の多い点については意見交換で担当者が同じでも科目名が異なる科目があり、それらが統合されないまま今回提示したという実情が教育学部の教務委員から示された。今後はこれらを統合する必要があることが明らかになった。

次に、大学教育センターの小川教授よりカリキュラム・フローチャート（以下 CFC）についての説明と作成依頼がなされた。CFC の説明では、学科・課程、コース等の特性によっては資料に示した手順による作成が困難な場合も考えられるため、その際は学問的な特性に応じて CFC の作成・表示方法を適宜変更してもかまわないと説明があり、愛媛大学の教育学部のカリキュラム・マップ（本学の CFC に該当）の事例が示された。なお、CFC の作成については、各学部の教育改善 FD 研修会で出される意見を参考にして後日大学教育センターから各学部へ作業依頼の通知を正式に行いたい旨、説明があった。

次に、教育学部の教員との意見交換や質疑応答が行われた。教育学部の教員からは、現在の共通教育の全員出動体制と学士課程教育の再構築の関係や CFC の作成に関して GP との関係について質問があった。

今回の研修会では、「大学設置基準の改定」および「大学教育の分野別質保証の在り方に

ついて」からみえてくる今後の大学に求められるカリキュラム改善の方向性について教員間で共通理解することができた。また、これらに対応するために GP、CUM、CFC をどのように再整備すればよいのか、また共通教育を含めた学士課程教育を今後どのように再構築していけばよいのかを考えるきっかけにもなった。研究会参加者も今回多かったため、組織的な F D 活動を推進する上で有意義な研修会であった。

(5) 経済学部・経済学研究科・東アジア研究科（経済学系）

日時：平成 22 年 11 月 17 日(水) 16:00～17:30

場所：経済学部会議室

参加者：47 名（内訳）：教学委員、F D 委員、課程・コース委員など合計 43 名、岩部大学教育センター長、兼石教育コーディネーター、大学教育センター専任教員（小川勤、岡田耕一）合計 4 名

研修内容：

本年度 5 回目の教育改善研修会を経済学部の教学委員、FD 委員、学務委員、各課程・コース委員等を対象に実施した。当日は教授会の後で開催されたため昨年比べて多くの教員が参加した。最初に、岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨が説明された。平成 23 年 4 月の大学設置基準改定に伴い、第四十二条には新しい項目として「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が付加されていることが述べられた。さらに、日本学術会議による「大学教育の分野別質保証の在り方



について」についても説明があり、専門教育の在り方について今後対応すべき内容が記されており、3 年後に主要 30 分野で掲げられる予定であり、「教育課程編成上の参照基準」が公表されることなどの大学教育の質保証についても説明があった。今後はそれらに注意を払い、経済学部・学科の GP を再検討して欲しいことや、大学設置基準改定に合わせて、これまで整備してきた学部・学科の GP に「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力」をどのように取り入れるかをカリキュラムマップ（以下、CUM）やシラバスを用いて今後、検討して欲しいという要望があった。最後に学士課程教育の再構築に関する話があり、今後は各学部・学科が自分の専門教育分野だけでなく、共通教育を含めた学士課程教育を経済学部としてどのようにするのかを考えていく必要があることが明らかにされた。

次に、兼石教育コーディネーターより、山口大学における出口管理のグランドデザインの必要性が説明された。

大学の GP は学部 GP を包含し、学部 GP は学科 GP を包含し、さらに学科 GP は課程・コース GP を包含するといった関係から再考すべきであるという見解が示された。また、CUM は学科等の最小単位の GP と授業科目との対応関係を示すべきであるとの説明がなされた。経済学部の CUM をチェックした感想については、学科における GP の数が少ないことが明らかにされた。これに対して経済学部の教員からは学生になるべく幅広い科目を履修させているため、学科の人材育成の特性が明確でありつつある。このため、どの学科でも GP の数が必然的に少なくなるという見解が示された。この点について、大学教育センターは十分理解していなかったため大変参考になった。

次に、大学教育センターの小川教授よりカリキュラム・フローチャート（以下 CFC）についての説明と作成依頼がなされた。CFC の説明では、学科の特性によっては資料に示した手順による作成が困難な場合も考えられるため、その際は学問的な特性に応じて CFC の作成・表示方法を適宜変更してもかまわないと説明があり、愛媛大学の人文学部総合政策学科のカリキュラム・マップ（本学の CFC に該当）の事例などが示された。なお、CFC の作成については、各学部の教育改善 FD 研修会で出される意見を参考にして後日大学教育センターから各学部に作業依頼の通知を正式に行いたい旨、説明があった。CFC の作成については、上記で述べたように現在、経済学部の各学科としての特性が表しにくい状況にあるため、学科ごとに大学教育センターから示されたような CFC を作成することは難しいという見解が示された。しかし、国立大学として、保護者や学生だけでなく、納税者である国民に対して経済学部の教育内容と GP との関係をなんらかの形で明らかにする必要はあるため、今後、学部で CFC の作成に向け、可能な形で前向きに検討して欲しいと要望が示された。

今回の研修会では、経済学部との意見交換を通じて経済学部の教育内容の特徴や人材育成に対する考え方が明らかになったことは、今後、CFC の作成や CUM の改訂などの作業に向けて参考になることが多かった。また、大学教育センターと学部教員が相互にそれぞれの立場から意見を出しあったことは、今後、組織的な教育改善を全学的規模で推進する上で有意義な研修会であったと考えられる。

（6）理学部・理工学研究科（理学系）・医学系研究科（理学系）

日時：平成 22 年 12 月 1 日(水) 14:30～16:10

場所：理学部 11 番講義室

参加者：16 名（内訳）：教学委員、FD 委員、課程・コース委員など合計 12 名、岩部大学教育センター長、兼石教育コーディネーター、大学教育センター専任教員（小川勤、岡田耕一）合計 4 名

研修内容：

本年度 6 回目の教育改善研修会を理学部の教学委員、FD 委員、学務委員、各コース委員等を対象に実施した。最初に兼石教育コーディネーターから GP の立て方について、大学の GP は学部 GP を包含し、学部 GP は学科 GP を包含し、さらに学科 GP はコース GP を包含するといった関係から再考すべきであるという見解が示された。また、カリキュラムマップ（以下「CUM」）は学科等の最小単位の GP と授業科目との対応関係を示すべきであるとの説明がなされた。理学部の GP については、山口大学の理学部であるとはっきり分かる特徴が示されていないこと、CUM については丸付けがされていない科目の存在や学科により GP の数がかなり異なる点などが明らかにされた。理学部の教員からは地球圏システム科学科の CUM の分析結果がない旨の指摘があり、これは理学部と大学教育センターの間のファイル授受ミスが原因であることが後に判明したため、改めて分析を行い理学部に資料を提示することとした。



次に、岩部大学教育センター長から本研修会の開催趣旨が説明された。平成 23 年 4 月の大学設置基準改定に伴い、第 42 条に新たに「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が付加されていることが述べられた。さらに、日本学術会議による「大学教育の分野別質保証の在り方について」についても説明があり、専門教育の在り方について今後対応すべき内容が記されており、3 年後に主要 30 分野で掲げられる予定であり、「教育課程編成上の参照基準」が公表されることなどの大学教育の質保証についても説明があった。今後はそれらに注意を払い、理学部・学科・コースの GP を再検討して欲しいことや、大学設置基準改定に合わせて、これまで整備してきた学部・学科の GP に「社会的及び職業的自立を図るための必要な能力」をどのように取り入れるかを CUM やシラバスを用いて今後検討して欲しいとの要望があった。最後に学士課程教育の再構築に関する話があり、今後は各学部・学科が自分の専門教育分野だけでなく、共通教育を含めた学士課程教育を理学部としてどのようにするのかを考えていく必要があることが明らかにされた。

次に、大学教育センターの小川教授からカリキュラム・フローチャート（以下「CFC」）についての説明と作成依頼がなされた。CFC の説明では、まず作成手順について説明があった後、学科の特性によっては資料に示した手順による作成が困難な場合も考えられるため、その際は学問的な特性に応じて作成・表示方法を適宜変更してもかまわないと説明があり、愛媛大学の理学部のカリキュラム・マップ（本学の CFC に該当）の事例などが示された。説明後、理学部の教員から、この作業は何のために行うのか明確でないという意見が出された。学生に科目の履修順序や科目間の関係については、すでに理学部では履修手引きの中に示されている。また、GP の達成を中心に科目間の関連性や順序性を記述するといっても、これは単なる認証評価などのために実施するだけで意味がないのではないかという疑問が示された。大学教育センターとしては、他大学でも同様な意見が出ているために、各学部からの意見を参考にして、後日、各学部にどのような CFC を作成してもらうかを検討の上、作業依頼の通知を正式に行いたい旨、説明があった。

今回の研修会では、理学部との意見交換を通じて理学部の教育内容の特徴や CFC や CUM を作成する上での課題が改めて明らかになったので、今後、CFC の作成や CUM の改訂作業に向けて参考になることが多かった。

また、大学教育センターと学部教員が相互にそれぞれの立場から教育改善を巡って意見交換が行われたことは、組織的な教育改善を全学的規模で推進する上で有意義な研修会であったと考えられる。

（7）医学部保健学科・医学系研究科

日時：平成 22 年 12 月 9 日(水) 14:30～16:00

場所：医学部保健学科研究棟 1F 会議室

参加者：13 名（内訳）：FD 委員など合計 7 名、岩部大学教育センター長、兼石教育コーディネーター、大学教育センター専任教員（小川勤、吉田加奈、木下真、岡田耕一）合計 6 名

研修内容：医学部保健学科（以下、保健学科）の FD 委員等を対象に、本年度 7 回目の教育改善 FD 研修会を実施した。まず岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨が説明さ



れた。平成 23 年 4 月の大学設置基準の改定に伴い、第四十二条には新しい項目として「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が付加されている。また、日本学術会議による「大学教育の分野別質保証の在り方について」（以下、分野別質保証）では、専門教育の在り方について今後対応すべき内容が記されており、これには 3 年後に主要 30 分野で掲げられる予定である「教育課程編成上の参照基準」の作成の手引きも添付されている。これらを踏まえながら、今回の F D 研修会は、学士課程再構築の視点から GP、CUM（以下、カリキュラムマップ）の在り方の再検討、CFC（以下、カリキュラムフローチャート）の意義と作成方法の説明、CFC の作成依頼を目的とする。

保健学科では、学科の性質上、大学設置基準の改定で示された「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」や分野別質保証の「当該分野の学びを通じて獲得すべき基本的な知識と理解」および「獲得すべき基本的な能力(a. 分野に固有の能力)」については、既に確立されていると考えられる。一方、分野別質保証でいう「ジェネリックスキル」は、図 1 のように専門教育も含めて培われるため、今後も他の学部と同様に、カリキュラムマップを元にして、更なる検討が必要であるとの見解が示された。

また、個別学生の GP 達成度を確保する学習ポートフォリオの必要性等が示され、科目履修の順序性を表すカリキュラム・フローチャートの意義が説明され、作成の依頼がなされた。

次に、兼石教育コーディネーターより、山口大学における出口管理のグランドデザインの必要性が説明された。ここでは、大学・学部・学科・コース等の各 GP が階層構造を成すべき必要性、コース等の最小単位の GP と授業科目との対応関係を示す CUM の重要性が説明された。これに続いて、期待される GP の機能および GP が機能するまでの過程が示され、作業によって生じる問題点が説明された。また、保健学科の GP の記述に若干の問題（「身につけている」という表現が多用されている）があるとの指摘がなされた。

次に、大学教育センターの小川教授より CFC の意義と具体的な作成手順が説明され、作成依頼がなされた。CFC は科目履修の順序性を表す図であり、学内関係者だけではなく学生や学外者（受験生、保護者などを含む）にもカリキュラムを説明する上で重要であるとの説明がなされた。CFC の作成手順の説明では、一般的な手順が示された後に、学生や学外者にもわかりやすくするため、学問的な特性を考慮して科目をグループ化するなど CFC の表現を適宜変更してもかまわないとの説明があった。また、CFC の例として、本学工学部機械工学科、愛媛大学医学部看護学科の例が示された。CFC の提出期限については、今後他学部の意見も含めて大学教育センターで検討し、後日通知したいとの説明があった。

質疑応答においては、保健学科の教員から「CFC には共通教育のすべての科目を入れなければならないか」、「ひとつの科目が複数の GP に属する場合、単純に CFC で表現すると矢印を何本も引かなくてはならない。結果的に見難い図になるが、どうするか」等の質問がなされた。これに対して大学教育センターは、「共通教育で必修あるいは一部の選択必修にしている科目（「生物」など）のみを CFC に含めてはどうか」、「学生や保護者等に分かりやすい CFC であることも重要である。そのため科目のグループ化等を行い、CFC の簡略化を適時行ってほしい」と回答した。

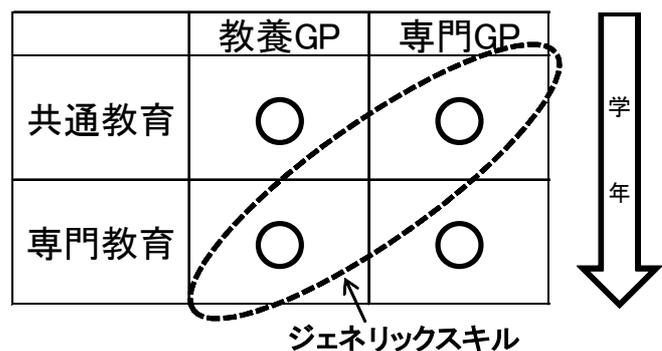


図 1 ジェネリックスキル

今回の研修会では、大学設置基準の改定および分野別質保証からみえてくる今後の大学に求められるカリキュラム改善の方向性を確認し、これらに対応する GP、CUM、CFC をどのように整備すれば良いのかについて議論を行った。今回の研修会は、医学部保健学科における組織的な FD 活動を継続する上で大変有意義であったと考えられる。

(8) 医学部医学科・医学系研究科

日時：平成 23 年 3 月 3 日(木) 16:00～16:45

場所：医学部本館 6 F 会議室 2

参加者：15 名 (内訳)：佐々木功典医学部長、中村教学委員会、FD 委員など合計 13 名、岩部大学教育センター長、小川勤大学教育センター教授 合計 2 名

研修内容：

医学部医学科（以下、医学科）の医学部長、教学委員、FD 委員等を対象に、本年度 8 回目の教育改善 FD 研修会を実施した。まず岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨とこれまでの本学の教育改善の方法や取組状況について説明があった。この中で平成 23 年 4 月の大学設置基準の改定に伴い、第四十二条には新しい項目として「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が付加されていることの説明があった。また、日本学術会議による「大学教育の分野別質保証の在り方について」（以下、分野別質保証）では、専門教育の在り方について今後対応すべき内容が記されており、3 年後に主要 30 分野で掲げられる予定である「教育課程編成上の参照基準」の作成の手引きも添付される予定になっている。これらを踏まえながら、今回の FD 研修会は、学士課程再構築の視点から GP、CUM の在り方の再検討（図 1 参照）、CFC の意義と作成方法の説明、CFC の作成依頼を目的として開催したという説明があった。

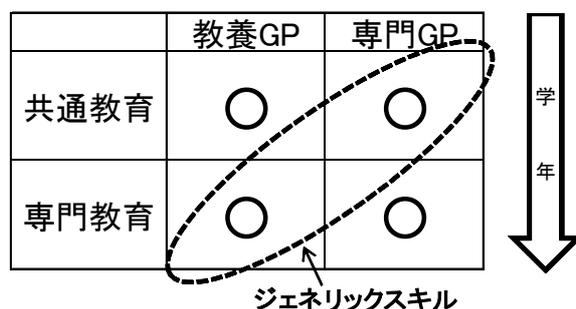


図 2 ジェネリックスキル

次に、大学教育センターの小川教授より CFC の意義と具体的な作成手順が説明され、作成依頼がなされた。CFC は科目履修の順序性を表す図であり、学内関係者だけではなく学生や学外者（受験生、保護者などを含む）にもカリキュラムを説明する上で重要であるとの説明がなされた。CFC の作成手順の説明では、学生や学外者にもわかりやすくするため、学問的な特性を考慮して科目をグループ化するなど CFC の表現を適宜変更してもかまわないとの説明があった。また、CFC の例として、愛媛大学医学部看護学科や教育学部の例が示された。CFC の提出期限については、3 月 31 日を目途に作成を進めて欲しい旨、依頼があった。

質疑応答においては、医学科の教員から「GP を再度組織的に見直す作業を実施するのか」、「CUM も全学的な CUM の改訂に併せた形にする必要があるのか」といった質問があった。CUM については医学科ではすでにかなり緻密な CUM が出来上がっており、Web を利用して学外に公表する形で対応することで相互に了解した。また、GP や CUM の見直しは本来、継続的に実施していくべきことであり、今回特に早



急に実施しなくてもよいという見解が大学センターから示された。

今までは、医学科の教育改善が他学部で先行して取り組んでいたためにセンターとの意見交換や研修会はあまり開催されなかったが、今回、CFCの作成を依頼したことをきっかけに、大学設置基準の改定および分野別質保証からみえてくる今後の大学に求められるカリキュラム改善の方向性を確認し、これらに対応するGP、CUM、CFCをどのように整備すれば良いのかについて議論を行ったことは全学的な取組を推進する意味で有意義のある研修会であった。

**設問 1 研修会に参加した感想は
いかがでしたか？**

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	23.1%
良かった	8	61.5%
どちらとも言えない	2	15.4%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	13	100.0%

第2章 共通教育授業科目別分科会のFD活動

1. FD活動を実施した授業科目別分科会

(1) 情報処理分科会（分科会長：大学教育センター 小川 勤）

平成21年度に「情報セキュリティ・モラル」の授業にDVD教材を取り入れた授業展開を研究し、本格的に実際の授業で活用してきた。平成22年度は、さらに教材のeラーニング化を目指して、ワーキンググループ内で研究を行った。特にmoodleを利用したeラーニング学習に先進的に取り組んでいる先生に講師になってもらい、実際の授業の中でどのように活用しているかを説明してもらい、ワーキンググループで情報セキュリティ・モラルの授業での利用の可能性について議論を行った。

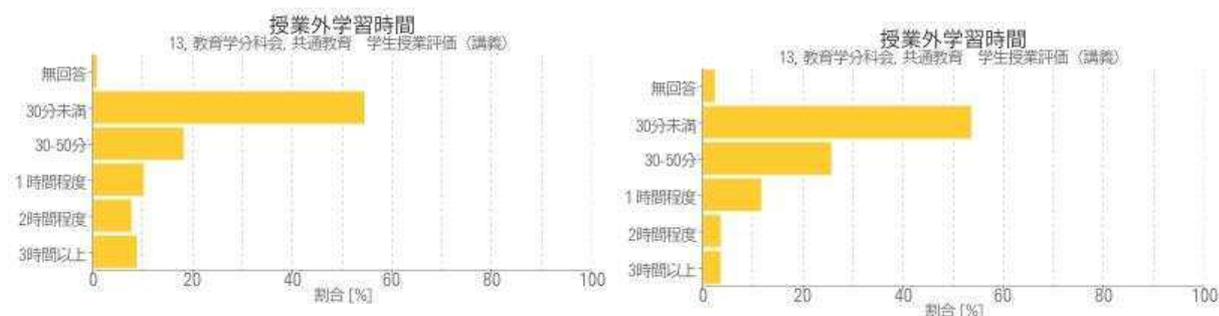
また、9月下旬に開催したFD研修会では、DVD教材やeラーニング教材の使い方や運用上の課題について研修会に参加した先生方（分科会所属の先生が多数参加していた）と協議を行った。この中でeラーニング教材の使い方の改善点や運用上の改善点について多くの意見が出た。

また、成績分布公表システムが開発されたため、このシステムから導き出される各種の成績データを活用して、厳格な成績評価について分科会内で議論するためにワーキンググループで成績分布について話し合うために全員で成績の共有化を図った。

(2) 教育学分科会（分科会長：大学教育センター 吉田香奈）

(1) 授業外学習時間の確保に向けた取り組み（単位制度の実質化）について

今回、初めて大学教育センターより教育学分科会の教員が担当している教育学系授業(教育学4コマ、比較教育概論1コマ、大学論1コマ)について学生授業評価の結果が返却された。各学期別にみた授業外学習時間の平均は以下のとおりである(左図2009年度後期(5コマ開講)、右図2010年度前期(1コマ開講))。いずれも30分未満の学生の割合が最も多く、全体の5割を超えている。大学教育センターから配布された資料によれば、今回の結果は他の文系・講義系授業とほぼ同じ傾向にある。単位制度の実質化のためには、各授業においてもっと授業外学習の指示を行うことが必要であるが、多人数・講義系授業のため毎回課すことは難しい面がある。来年度は分科会内でこの点について効果的な方法を検討する必要があると思われる。



(2)適正な成績評価

今回、試験後（新学期の成績配布時）に実施されている「試験の公正な実施に関するアンケート調査」においては、特に教育学系の授業での難易度の差および成績評価への意見は寄せられなかった。

なお、「教育学」（4コマ開講）は統一シラバスを採用しておらず、個々の教員がそれぞれ独自の授業内容で授業を行っている。従って、成績評価の方法も異なっているが、各自で適切な方法を選択し、厳格な成績評価に取り組んでいる。

今年度スタートした「成績分布共有システム」*において成績分布状況を確認したが、教育学履修者合計 295 名の成績分布は S=15.3%、A=24.4%、B=26.8%、C=16.9%、F=5.1%、K=11.2%であり、平均から大きく外れた成績評価を行っている授業は特になかった。

*成績分布共有システム <http://www.epc.yamaguchi-u.ac.jp/SSS.html>

(3)共通教育における試験監督体制（不正行為対策）

今回、試験後（新学期の成績配布時）に実施されている「試験の公正な実施に関するアンケート調査」においては、特に教育学系の授業での試験監督体制について意見要望は寄せられなかった。

（3）数学分科会（分科会長：教育学部 渡邊 正）

- 1) プレースメントテストの実施と学力別クラス編成
- 2) 工学部の学生対象の「数学Ⅰ」と「数学Ⅱ」については、標準シラバスと標準テキストを使用している。

（4）物理学分科会（文科会長：工学部 嶋村修二）

- (1) 学生授業評価結果の整理と分析
 - ・平成 22 年度の学生授業評価の集計結果の整理・分析.
 - ・学生授業評価集計結果の分科会内での公開について検討.
- (2) 「物理学実験 B」の独自アンケートによる教育改善
 - ・引き続き、工学部と医学部保健学科の「物理学実験 B」で学生への独自アンケートの実施とアンケート集計結果の整理.
- (3) 「物理寺子屋」の開設
 - ・引き続き、学習相談室の開設.
- (4) 「物理学Ⅰ・Ⅱ」に関して、以下のような問題点の検討と改善策
 - ・担当教員による授業内容難易度と成績評価の違い
 - ・試験における不正行為対策
- (5) 「物理寺子屋」（学生に対する物理学の学習相談室）の開設（年間通して）
 - ・数年来続けている学習相談室を前期・後期とも開き、TA の大学院生が相談員となり、授業内容や演習問題について学生の質問に対応した.
 - ・今年度の実施回数と利用学生数は未集計である.

(5) 地球科学分科会 (文科会長：理工学研究科 (理学) 大和田正明)

12月7日(火)に地球圏システム科学科主催でピアレビューを実施した。対象科目は岩石学II(専門教育;2年次の講義),当日は主として主催学科のレビュアー9名が参加し,同日夕方,この授業に対して授業研究会を実施した。

(6) 運動健康科学分科会 (文科会長：医学系研究科 (農学) 宮田浩文)

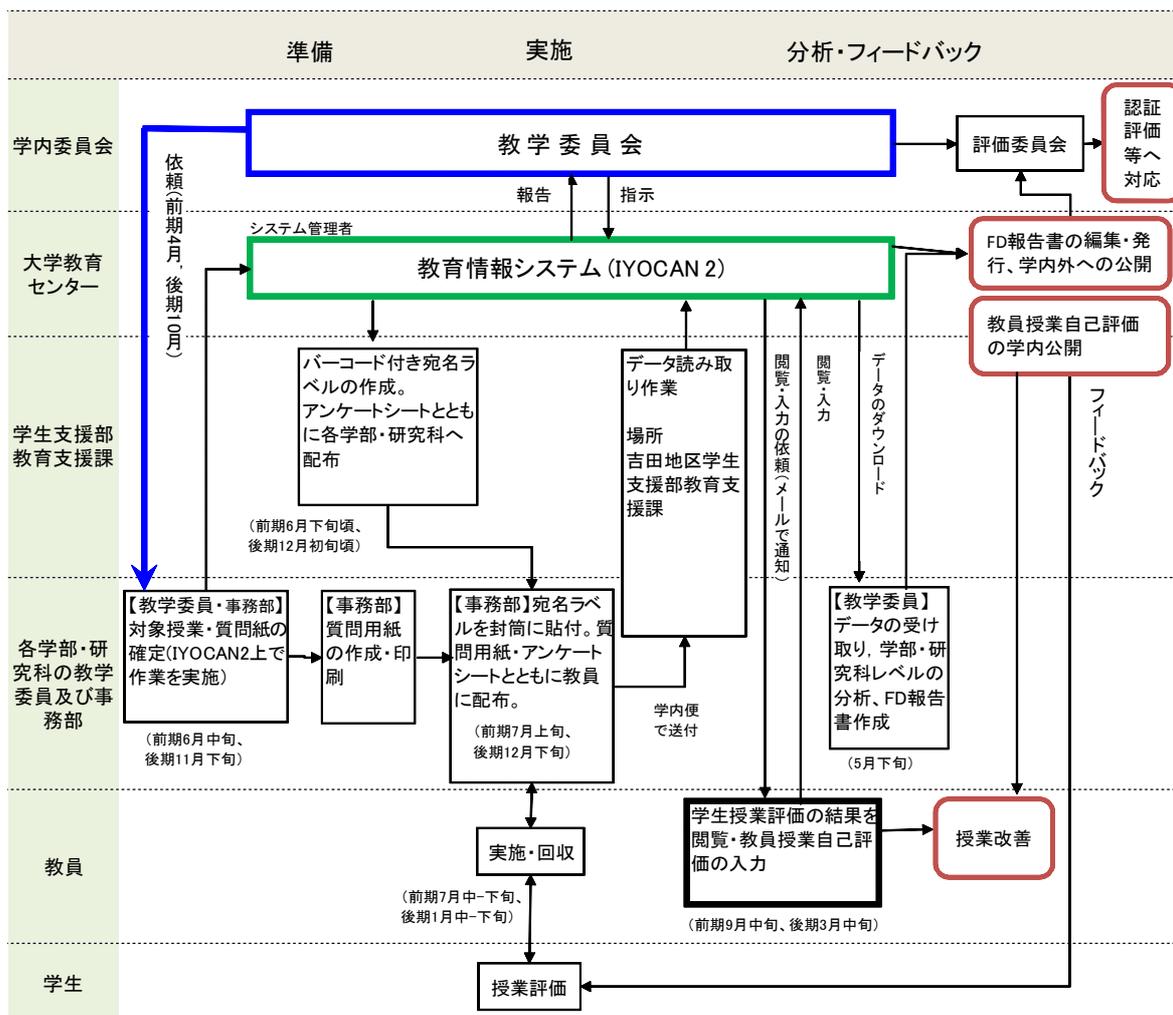
平成22年度(社)全国大学体育連合中四国支部夏期研修会『健康とマラソンー授業でマラソンを走るー』(講師：筑波大学 鍋倉賢治先生)を8月23日に山口大学で行い、FD活動に関する意見交換を行った。

第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価

第1節 実施方法・実施状況

(1) 実施方法

1) 教育情報システム(IYOCAN)による学生授業評価・教員授業自己評価



※教育情報システム(IYOCAN2)は授業評価のデータベースであり、共通教育、医学部の除く6学部、一部の大学院研究科の評価を扱っている。医学部は独自のシステムで実施しているためこれには含まれない。

山口大学では、平成17年度前期より、旧大学教育職員能力開発(FD)委員会(～2008年3月)。現在は教学委員会)のもとで、学生による授業評価(以下、学生授業評価)および教員による授業自己評価(以下、教員授業自己評価)を全学的にスタートした。平成16年度までは7学部・共通教育でそれぞれ独自に学生授業評価を実施してきたが、効率化・簡便化を図る必要性や、認証評価への対応の必要性から、大学教育センターがこの実施業務を引き受け、現在まで統一的に実施している(医学部を除く)。下図はその一連の流れである。マークシートに記入された回答は教育情報システム「IYOCAN」(Information of YOur Course

ANalysis の略、いよかんと呼称)に蓄積され、教員は Web 上で結果の確認と自己評価を行っている。2010 年度からは新データベース「IYOCAN 2」を導入し、教務情報の新システム「修学支援システム」と連動することで様々な情報を授業評価に直接的に利用することが可能となった。

なお、以下に述べるように、医学部（医学科、保健学科）は全学に先駆けて Web による授業評価を実施しており、独自のデータベースを構築しているため IYOCAN は利用していない。

● 授業評価の閲覧・入力画面（大学教育センターホームページ上に配置）



2) 医学部医学科「医学教育総合電子システム eYUME」

平成 13 年度より、医学教育センターが管理する「医学教育総合電子システム eYUME」上で毎回の授業ごとにオンライン授業評価（進行評価）が実施されている。また、ユニット終了時にはマークシート方式による「ユニット学生振り返り評価」「ユニット責任者振り返り評価」が実施されている。その結果は同システム上で公開されている。

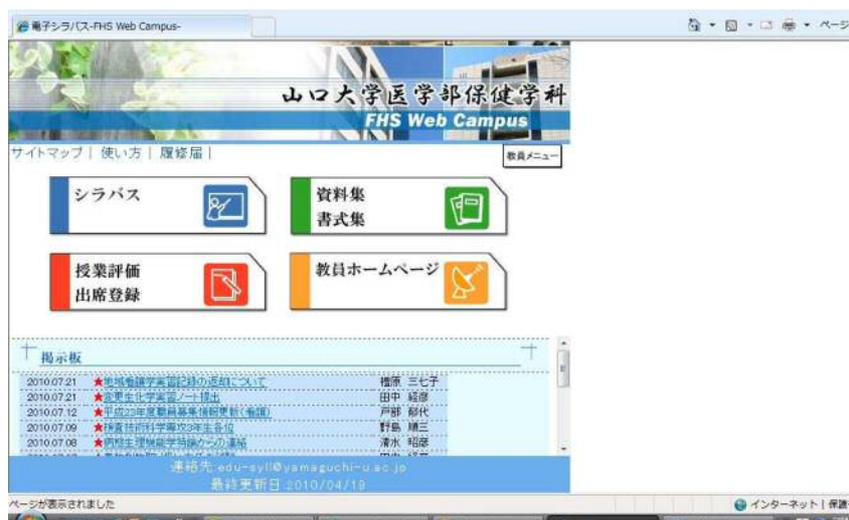
● 医学部医学科 医学教育総合電子システム



3) 医学部保健学科「山口大学医学部保健学科授業支援システム」

保健学科ホームページ上から「山口大学医学部保健学科授業支援システム」にログインし、教員が登録した授業評価メニューや出席確認メニューに対して、学生が教員から告げられた期間（時間）内にアクセスしてオンライン授業評価を行っている。

●医学部保健学科 授業支援システム



(2) 質問紙の種類

質問紙は各学部・研究科ごとに異なっている。また、授業区分（講義、演習・実験・実習等）ごとに分かれており、学部・研究科独自の質問項目も設けられている（詳しくは4章以降の各学部・研究科のFD報告を参照のこと）。これは各学部・研究科のニーズに合った授業評価を実施するためである。

なお、本学のシラバスでは下表のように様々な授業区分が設けられているが、用いられる質問紙は大まかに分類して以下のようになっている(医学部を除く)。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
「講義」の場合	講義用
「講義と演習」の場合	講義用
「講読」の場合	講義用
「演習」の場合	演習・実験・実習用
「実験・実習」の場合	演習・実験・実習用
「その他」の場合	講義用

共通教育では、上記に加えて、外国語系列の授業でシラバスの授業区分に関わらず「語学用」「TOEIC準備用」の質問紙が使用されている。この2つの質問紙は基本的には「講義用」と同じであるが、授業技術を尋ねる質問の内容が異なっている。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
共通教育・外国語系列 「講義」の場合	語学用（TOEIC 準備のみ TOEIC 準備用を使用）
共通教育・外国語系列 「演習」の場合	語学用

※「語学用」の質問紙は農学部専門授業の外国語科目でも使用されている

（３）質問項目

上述のように学部・研究科ごとに質問紙・質問項目は異なっているが、平成 17 年度からの統一的な実施に際して、全学共通の質問項目が 5 項目設定され、上記の「講義用」「演習・実験・実習用」「語学用」「TOEIC 準備用」の各質問用紙に盛り込まれた。この共通質問項目の導入によって山口大学全学の傾向の分析を行うことが可能となった。ただし、各学部・研究科では、共通質問項目に独自の質問項目を加えたオリジナルの質問紙を作成することができるので、これまで実施してきた学生授業評価との経年比較を行うことも可能となっている。

全学共通質問項目

- ①<授業外学習時間> あなたはこの授業のために授業時間以外にどのくらいの学習（予習・復習・宿題や関連した学習）を行いましたか？授業1コマ当たりの平均で教えてください
- ②<学習目標達成> あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか？
- ③<理解> あなたは授業の内容を理解しましたか？（講義、語学、TOEIC 準備）、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？（演習、実験・実習）
- ④<満足> この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？
- ⑤<出席> あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか？

（４）実施対象授業

1) 学部

基本的に全ての授業で実施しているが、授業評価の対象として適さない科目(例：教育実習、卒業論文等)については実施対象から除いている(詳しくは第 2 節「学生授業評価の結果について(全学)」の表を参照のこと)。なお、教員授業自己評価については学生授業評価を実施した授業を対象としている。

学生による授業評価実施要項 (H17ー)

	実施対象科目	授業規模	その他
全学部 (学士課程)	全て。ただし、学生授業評価の対象として適さない授業科目については実施対象から除くことができる。	規模に関係なく全ての授業で実施。ただし回答者が5名未満の場合は授業担当者に結果を開示しないものとする。	非常勤講師についても実施

※評価を実施しない授業科目名は一覧にして質問項目とともに大学教育センターに情報を提供。

2) 研究科

平成 18 年度より大学院における授業評価は、a)学生授業評価は各研究科で最適な方法を決定・実施する(IYOCAN を利用してもよいし、自由記述形式等の独自の方式でもよい)、b)その代わり、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず教員授業自己評価はすべての授業で実施し、授業の振り返りを通じた授業改善を促す、という方式で実施している。

● 大学院・学生授業評価の実施方法 (H18-)

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科 (修士)	学生授業評価の対象として適する授業科目全て。	各研究科で選定した評価対象授業については、各研究科独自の方法で授業評価を実施する。学士課程と同様の方法を用いる場合は「いよかん」を利用できる。	独自で実施する場合は、質問項目の選定も自由とする

※実施方法および対象授業については大学教育センターに情報を提供。

● 大学院・教員授業自己評価の実施方法 (H18-)

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科 (修士)	全て	学生授業評価の実施・非実施にかかわらず、全ての授業で自己評価を実施する。自己評価は「いよかん」で行う。 なお、評価項目については学士課程に準じるが、【28. 授業実施上の工夫】(10 項目)は任意とする。	

※授業形態の特殊性等の理由から学生授業評価を実施しない授業についても、教員自身による授業の振り返りを通じた授業改善を促す観点から自己評価については実施する。

なお、平成 23 年度前期からは以下のように変更することが平成 23 年度第 1 回教学委員会(平成 23 年 4 月 27 日開催)で承認された。

大学院における教員授業自己評価の対象授業選定方法の変更について(案)

大学教育センター

この度、大学院における教員授業自己評価の対象授業選定方法を以下のように変更する。

大学院・教員授業自己評価の対象授業

(現) 全て

(新) 学生授業評価と同じ (IYOCAN2 を利用する研究科)
対象として適する授業科目 (独自の方法で実施する研究科)

(理由)

現在、大学院における教員授業自己評価は、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず「全て」の授業で実施されている (平成 17 年度第 10 回 FD 委員会承認)。これは、当時、大学院(修士)の授業は規模・形態の面で学生授業評価に適さないものが多いという意見が多数であったため、少なくとも教員授業自己評価だけは全ての授業で実施する、という方針が承認されたものであった。

しかし、現在、すべての研究科では学生授業評価が導入されており、修士論文に関係する科目(課題研究、演習、セミナー等)、集中講義、実習科目など、一部の科目を除いた大多数の授業で評価が実施されている。従って、これまでのように教員授業自己評価を一律に全て実施する必要はなくなっている。

加えて、修士論文に関係する科目や実習科目などは授業の形態上「担当時間数(分)」が入力しにくい面があることが指摘されている。

よって、今回、上記のように選定方法の変更を提案したい。

(5) 学生授業評価の結果の閲覧方法、教員授業自己評価の実施方法について

これまで各学部・共通教育では個々の教員への学生授業評価の結果の通知を印刷物で行ってきた。しかし、これは非常に手間がかかるため、より効率的で効果的な方法として、Web 上での閲覧システムの導入が共通教育は平成 16 年度から、また専門教育は平成 17 年

度から導入された(医学部医学科は平成13年度より)。

教員は大学教育センターのホームページにアクセスし、公式メールアドレスとパスワードを入力して教育情報システム「IYOCAN」にログインし、学生授業評価の閲覧と自己評価の入力を行うことができる。Web上では過去の評価結果も閲覧でき、PDFでダウンロードすることもできる。また、非常勤講師も学外からデータベースにアクセスできるようになっている。

なお、学生授業評価の回答者が5人未満の場合、集計結果は教員には開示されない。これは学生が特定される危険性を避けるためである。

閲覧・入力の手順で工夫したことは、学生授業評価の結果を見る前にまず教員授業自己評価を行う点である。この目的は、自己の認識と学生による評価の「ずれ」を確認するためである。教員はこのずれを確認した上で、授業の反省点・改善点を記入することになっている。

(6) 学生への結果のフィードバックについて

平成18年度後期より、学生への結果のフィードバックの第一歩として教員授業自己評価の一部を学内公開した。具体的には【30.授業実施上の問題点・改善点(自由記述)】をWeb上で公開した。

●教員授業自己評価の学内公表用画面



The screenshot shows a web browser window displaying the IYOCAN2 system. The page title is "山口大学授業評価システム IYOCAN2". The main content area lists several courses with their respective feedback text:

- 1002323001 美術鑑賞と作品記述 藤川哲**
学生授業評価の結果は概ね好評だったと言えます。受講生の皆さん、有り難うございます。とても嬉しいです。評価指数による多角形状のグラフを見ると、唯一「家庭学習時間」の項目が2.5よりやや下と、大きくへこんでいる形になっていました。しかし、この評価項目で他と同じく4～5の指数を得るためには、毎回3時間以上かかるような宿題を課さなければなりません。ちょっと考えられません。むしろ1コマ90分の授業に対して、同程度の家庭学習時間が望ましい、という話を聞いたことがあります。したがって、新年度は、「30分未満」と答えた48.4%の学生さんたちの層から、少しでも多く「30分～50分程度」の家庭学習を行う層へと移行してもらえよう。復習や発展学習の指示に心を配ります。
- 1002331027 経済学 兵藤隆**
「新聞を読む習慣」という学習目標を達成するにはまだまだ高いハードルがある。若い学生たちの社会に対する関心度が低すぎるということもあるが、教員側もさらなる努力が必要であると感じた。
- 1002331032 産業倫理 笠谷和男**
新学科として最初の年であり、また、非常勤講師の方の入院で急遽代理授業を行うなど、万全の講義が行えたわけではない。
また、3年生の後期で一部の学生は就職活動のため休みがちであった。
※は、学生の理解を促す工夫を重ねていきたい。
- 1002331035 地理学 荒木一視**
ディスカッションが特定の学生に偏る。
予習の指示はしているのだが決して十分ではない。
- 1002331036 産業倫理 佐伯隆**

The browser's status bar at the bottom shows "インターネット | 保護モード: 有効" and "100%" zoom level.

第2節 授業評価の結果について（全学）

（1）学生授業評価の実施状況

今年度も山口大学ではすべての学部・研究科(修士課程)において学生授業評価が実施された。次頁に掲載されている「2010年度山口大学学生授業評価および教員授業自己評価結果一覧(経年変化)」（2011年6月20日現在）は、教育情報システム(IYOCAN)で処理された学生授業評価と教員授業自己評価、および IYOCAN を利用しないで独自に授業評価を集計している学部・研究科のすべての授業評価の実施率をまとめたものである。また、学生授業評価の回答数については一覧表の後に別表として掲載した。

2010年度の学生授業評価はすべての学部・研究科(修士レベル)・共通教育で実施され、回答数合計は101,330人(※IYOCANのみ)であった。

実施率が最も高かったのは技術経営研究科(100%)であり、続いて高かったのは理学部(98.2%)であった。全体的にみて昨年度より上昇した学部・研究科等が9、変化なし1、低下6であり、上昇した学部・研究科等が多いという喜ばしい結果となった。

（2）教員授業自己評価の実施状況

、教員授業自己評価は、医学部保健学科を除くすべての学部・研究科等で実施された。教員授業自己評価の実施率は医学部(100%)が最も高く、続いて技術経営研究科(67.6%)が高かった。昨年度より上昇した学部・研究科等は12、変化なし0、低下3であり、多くの学部・研究科で実施率が上昇した。

昨年度は IYOCAN の旧システムから新システムへの移行期であり、入力時期がずれたことから実施率が低下したが、今年度は大幅に改善された。

2010年度 山口大学 学生授業評価および教員授業自己評価 結果一覧 (経年変化)

2011年6月20日 現在 (最終)

<学部>学生授業評価

データベース	学部等	学生授業評価 (2005年度)	学生授業評価 (2006年度)	学生授業評価 (2007年度)	学生授業評価 (2008年度)	学生授業評価 (2009年度)	学生授業評価 (2010年度)	対象授業
I Y O C A N 2	共通教育	89.1%	94.2%	94.4%	93.6%	90.2%	89.5%	全て
	人文学部	91.6%	90.8%	90.5%	89.2%	86.5%	83.4%	卒業論文、集中講義、一部の演習を除く
	教育学部	78.1%	85.6%	86.0%	80.3%	85.4%	84.4%	卒業研究、教育実習、事前・事後指導、介護等体験実習を除く
	経済学部	89.6%	90.4%	89.1%	92.1%	87.9%	88.0%	卒業論文演習、演習Ⅰ・Ⅱを除く
	理学部	96.9%	98.0%	97.3%	94.7%	94.7%	98.2%	特別研究、集中講義、一部の演習等を除く
	工学部	81.6%	95.4%	89.0%	90.6%	82.1%	87.6%	卒業論文、国際実習、社会活動実習、インターンシップを除く
	農学部	82.7%	89.7%	93.0%	93.0%	83.9%	91.1%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターンシップ等を除く
独自	医学部(医学科)	96.7%	95.9%	100.0%	98.7%	98.7%	97.5%	自己開発コース、臨床実習1、臨床実習2、を除く
独自	医学部(保健学科)	48.6%	52.9%	55.2%	52.6%	66.7%	72.1%	授業評価の必要なものに限定

<学部>教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価 入力率 (2007年度)	教員授業自己評価 入力率 (2008年度)	教員授業自己評価 入力率 (2009年度)	教員授業自己評価 入力率 (2010年度)	対象授業
I Y O C A N 2	39.1%	43.6%	34.4%	36.5%	全て
	49.7%	68.8%	48.5%	50.9%	学生授業評価と同じ
	34.1%	47.0%	52.1%	54.2%	学生授業評価と同じ
	38.9%	47.5%	31.3%	43.2%	学生授業評価と同じ
	57.3%	64.9%	67.5%	62.0%	学生授業評価と同じ
	35.1%	36.7%	21.3%	34.3%	学生授業評価と同じ
	50.6%	66.2%	54.8%	65.3%	学生授業評価と同じ
独自	-	-	83.3%	100.0%	全て
独自	-	-	-	-	-

<大学院>学生授業評価

データベース		学生授業評価 (2005年度)	学生授業評価 (2006年度)	学生授業評価 (2007年度)	学生授業評価 (2008年度)	学生授業評価 (2009年度)	学生授業評価 (2010年度)	対象授業
I Y O C A N 2	理工学研究科	90% 80%	79.7%	81.3%	68.7%	71.2%	84.7%	学外特別演習、特別講義、演習、集中等を除く
	技術経営研究科	-	90.9%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	全て
	医学系研究科	-	46.5%	54.5%	64.4%	51.5%	57.1%	特別研究、オムニバスを除く
	教育学研究科	-	-	-	88.5%	73.1%	76.2%	課題研究、総合研究、実習等を除く
	経済学研究科	-	-	-	54.3%	48.7%	39.1%	演習、セミナーを除く
独自	人文科学研究科	-	-	-	24.1%	35.3%	36.8%	半期の授業全体に対する評価を実施しており、授業ごとには実施していない。
独自	農学研究科	-	-	-	28.6%	54.6%	41.2%	留学生特別コース対象の授業・日本語による授業でも受講者の少ない授業は対象科目から除外

<大学院>教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価 入力率 (2007年度)	教員授業自己評価 入力率 (2008年度)	教員授業自己評価 入力率 (2009年度)	教員授業自己評価 入力率 (2010年度)	対象授業
I Y O C A N 2	36.9%	33.1%	25.3%	29.3%	全て
	56.3%	29.4%	15.2%	67.6%	"
	53.5%	28.8%	26.4%	31.5%	"
	22.4%	38.0%	39.3%	31.8%	"
	36.5%	58.1%	49.2%	47.8%	"
	27.3%	38.0%	22.7%	48.5%	"
独自	48.8%	70.8%	42.2%	46.5%	"

なお、理工学・医学系研究科の博士後期課程、および連合獣医学研究科、連合農学研究科、東アジア研究科(すべて博士後期課程)は実施対象から除いている

学生授業評価 回答数 (IYOCAN2 集計分のみ)

回答数	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教)	語学(農学部)	その他	未指定	合計
共通教育(2005)	32,922		4,425	2,590			25		39,962
共通教育(2006)	34,504		3,701	2,682					40,887
共通教育(2007)	33,743		3,657	2,491			9		39,900
共通教育(2008)	41,399			1,544			998		43,941
共通教育(2009)	28,988			2,147	9,512				40,647
共通教育(2010)	27,715			2,328	9,309			238	39,590
人文(2005)	5,519	567	998	15					7,099
人文(2006)	4,977	568	1,042						6,587
人文(2007)	5,017	531	1,117						6,665
人文(2008)	4,927	626	1,368						6,921
人文(2009)	4,852	564	1,212						6,628
人文(2010)	4,301	657	1,132						6,090
教育学部(2005)	7,607	97	817	714			2,679		11,914
教育学部(2006)	8,268	76	1,002	762			2,920		13,028
教育学部(2007)	8,325	68	894	811			2,794		12,892
教育学部(2008)	8,167		712	635			2,501		12,015
教育学部(2009)	7,404		859	599			2,726		11,588
教育学部(2010)	7,118		710	562			2,744	694	11,828
経済(2005)	7,657						14		7,671
経済(2006)	10,057								10,057
経済(2007)	10,627								10,627
経済(2008)	10,454								10,454
経済(2009)	9,316								9,316
経済(2010)	10,100								10,100
理(2005)	5,431		1,159	458					7,048
理(2006)	5,329		860	550			167		6,906
理(2007)	5,132		428	577			400		6,537
理(2008)	4,599		469	433			442		5,943
理(2009)	4,457		389	383					5,229
理(2010)	4,753		311	440					5,504
工(昼)(2005)	14,807		1,391	1,526			1,346		19,070
工(昼)(2006)	14,128		1,639	1,464			1,312		18,543
工(昼)(2007)	13,920		1,532	1,432			1,264		18,148
工(昼)(2008)	14,301		1,243	1,981			1,462		18,987
工(昼)(2009)	14,667		1,643	1,981					18,291
工(昼)(2010)	15,083		1,596	2,063					18,742
農(2005)	3,473		325	1,083					4,881
農(2006)	3,483		252	1,051					4,786
農(2007)	3,753		365	1,023					5,141
農(2008)	3,691		268	1,082					5,041
農(2009)	3,198		204	757					4,159
農(2010)	3,711		98	852					4,661
大学院・理工(2005)	3,344		29				24		3,397
大学院・理工(2006)	2,653								2,653
大学院・理工(2007)	3,062		118						3,180
大学院・理工(2008)	5,442		140						5,582
大学院・理工(2009)	2,273		119	11					2,403
大学院・理工(2010)	3,372		163	9					3,544
大学院・技術経営(2005)	167		49						216
大学院・技術経営(2006)	247		67						314
大学院・技術経営(2007)	371		57						428
大学院・技術経営(2008)	315		67						382
大学院・技術経営(2009)								356	356
大学院・技術経営(2010)								325	325
大学院・医学系(2006)	92		37						129
大学院・医学系(2007)	213		150						363
大学院・医学系(2008)	234		108						343
大学院・医学系(2009)	350		24						374
大学院・医学系(2010)	277		89						366
大学院・教育学(2008)	208		83	38			112		441
大学院・教育学(2009)	247		104	26			128		505
大学院・教育学(2010)	137		110	4			183	8	442
大学院・経済学(2008)	187								187
大学院・経済学(2009)	146		4						150
大学院・経済学(2010)								138	138
合計(2005)	82,321	664	9,262	6,557			4,295		103,099
合計(2006)	84,730	644	8,661	6,606			4,492		105,133
合計(2007)	84,747	599	8,332	6,398			4,488		104,564
合計(2008)	94,033	626	4,470	5,728			5,515		110,373
合計(2009)	75,898	564	4,558	5,904	9,512		2,854	356	99,646
合計(2010)	76,567	657	4,209	6,258	9,309		2,927	1,403	101,330

(3) 全学共通の質問項目に関する分析

次に、全学共通質問項目である5項目を取り上げ、各学部・研究科ごとに経年変化をみていく。各質問項目の選択肢1～5の平均値を算出し、授業区分別（講義、講読、演習、実験・実習、語学）に結果を整理した。また、全体平均については図にも示した。

なお、大学院については、IYOCANを利用した学生授業評価を行っている研究科とそれ以外の独自の方法で実施している研究科が混在しているため、ここではIYOCANを利用している理工学研究科、技術経営研究科、医学系研究科、教育学研究科、経済学研究科のみの結果を整理した。ただし、教育学研究科については共通質問項目「満足」のデータのみ尋ねているため他の項目はデータが存在しない。

(1) 共通質問項目1「授業外学習時間」

Q. あなたはこの授業において、授業外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

1. 3時間程度または以上、2. 2時間程度、3. 1時間程度、4. 30分～50分程度、5. 30分未満

共通質問項目1は、授業1回あたりの授業外学習時間を尋ねたものである。平均値は1)3時間程度または以上を5点、5)30分未満を1点として授業区分別の平均値を算出した。

全体平均をみると、学部段階では2010年度の平均値データは2009年度の平均値をほぼすべての学部・研究科で上回っており、全体的な授業外学習時間は着実に伸びているとことが確認された。

なお、各学部・研究科とも講義形式の授業は授業外学習時間が短く、演習や実験・実習の授業の方が授業外学習時間は長い傾向にあるのは昨年度までと同じ傾向である。

(2) 共通質問項目2「学習目標達成」

Q. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

1. そう思う、2. ややそう思う、3. どちらとも言えない、4. あまりそう思わない、5. そう思わない

共通質問項目2はシラバスに記載された学習目標を学生自身が達成できたかどうかについて尋ねたものである。山口大学はシラバスに観点別の到達目標を記載する方式となっており、「知識・理解の観点」「思考・判断の観点」「関心・意欲の観点」「態度の観点」「技能・表現の観点」の5つのうちから教員が用いる観点を選び、それぞれについて具体的な到達目標を学生に示すことになっている。これらの学習目標を達成できたかどうかについて、「1.そう思う」を5点、「そう思わない」を1点として平均値を授業区分別に算出した。

今年度は全ての学部で平均値が上昇している。昨年度から修学支援システムが新たに導入されたため、受講登録の際にweb上でシラバスを読み、各授業の到達目標を理解して授業に臨んでいる者が増えていると推察される。授業の到達目標を知り、どのような成績評価方法で評価を受けるのかを事前に知って受講するのとしめないのとでは大きな差がでる。新システムの導入が学生の受講態度や理解度にいい意味で影響を及ぼしているとするれば喜

ばしいことである。

(3) 共通質問項目3「理解」

Q. あなたは、この授業の内容を理解したと思いますか？

1. そう思う、
2. ややそう思う、
3. どちらとも言えない、
4. あまりそう思わない、
5. そう思わない

共通質問項目3は授業の理解度について尋ねた設問である。全ての学部・研究科で昨年度を上回っており、特に共通教育では4.0を初めて超えた。これは多くの学生が「そう思う」「ややそう思う」といった肯定的な回答をしていることを意味しており、授業担当の先生方の努力が実っていると考えられる。共通教育という大人数の授業が多い中でこのように高い理解度であることは喜ばしい状況にあるといえよう。

(4) 共通質問項目4「満足」

Q. この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

1. そう思う、
2. ややそう思う、
3. どちらとも言えない、
4. あまりそう思わない、
5. そう思わない

共通質問項目4は授業の満足度について尋ねた設問である。全ての学部・研究科で平均値が上昇しており、満足度が上がっていることが確認できる。

なお、講義よりも実験・実習や演習の授業の方が平均値は高い傾向にあるのは例年どおりである。

(5) 共通質問項目5「出席」

Q. あなたは、この講義にどれくらい出席しましたか？（括弧内は、15回講義の場合の出席回数参考値）

- | | | |
|-----------------|-------------------|------------------|
| 1. 90%以上（14回以上） | 2. 80～90%（12～13回） | 3. 60～80%（9～11回） |
| 4. 40～60%（6～8回） | 5. 40%未満（6回未満） | |

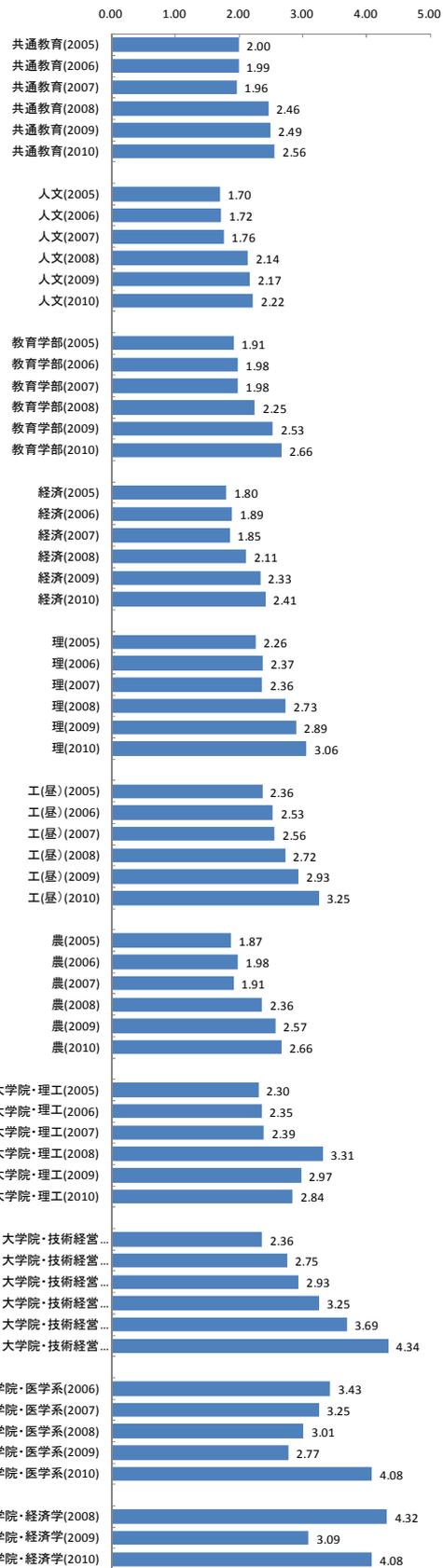
共通質問項目5は授業への出席状況について尋ねた設問である。本質問も選択肢1の90%以上を5点、選択肢5の40%未満を1として計算を行った。例年どおり、多くの学部で4.5以上の高い平均値となっている。昨年度より若干下がった学部・研究科もあるが、全体的にみて山口大学の学生の授業出席率は非常に良好であるといえる。

< 全学共通質問項目 1 授業外学習時間 >

授業外学習時間	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教)	語学(農学部)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2005)	1.95		2.00	2.62			0.44		2.00
共通教育(2006)	1.93		2.04	2.71					1.99
共通教育(2007)	1.88		2.09	2.79			1.89		1.96
共通教育(2008)	2.42			4.26			1.70		2.46
共通教育(2009)	2.29			3.07	2.97				2.49
共通教育(2010)	2.34			3.44	3.01			2.10	2.56
人文(2005)	1.44	2.67	2.54	2.33					1.70
人文(2006)	1.38	2.89	2.70						1.72
人文(2007)	1.48	2.75	2.53						1.76
人文(2008)	1.80	3.04	2.95						2.14
人文(2009)	1.80	3.26	3.13						2.17
人文(2010)	1.88	3.11	2.98						2.22
教育学部(2005)	1.65	1.74	2.57	2.66			3.50		1.91
教育学部(2006)	1.73	1.61	2.51	2.75			2.13		1.98
教育学部(2007)	1.74	1.66	2.57	2.87			2.10		1.98
教育学部(2008)	2.05		3.11	3.15			2.13		2.25
教育学部(2009)	2.32		3.25	3.31			2.68		2.53
教育学部(2010)	2.44		3.49	3.46			2.93	2.22	2.66
経済(2005)	1.80						2.93		1.80
経済(2006)	1.89								1.89
経済(2007)	1.85								1.85
経済(2008)	2.11								2.11
経済(2009)	2.33								2.33
経済(2010)	2.41								2.41
理(2005)	2.08		2.66	3.32					2.26
理(2006)	2.16		2.96	3.39					2.37
理(2007)	2.19		3.32	3.27					2.36
理(2008)	2.55		3.33	3.82					2.73
理(2009)	2.79		3.17	3.84					2.89
理(2010)	2.97		3.59	3.78					3.06
工(昼)(2005)	2.17		3.07	3.84			1.78		2.36
工(昼)(2006)	2.37		3.05	3.70			2.65		2.53
工(昼)(2007)	2.43		2.91	3.73			2.34		2.56
工(昼)(2008)	2.52		3.19	3.87			2.22		2.72
工(昼)(2009)	2.76		3.31	3.91					2.93
工(昼)(2010)	3.11		3.56	4.04					3.25
農(2005)	1.75		2.22	2.16					1.87
農(2006)	1.83		2.49	2.35					1.98
農(2007)	1.78		2.34	2.22					1.91
農(2008)	2.21		3.48	2.59					2.36
農(2009)	2.44		3.31	2.92					2.57
農(2010)	2.58		2.74	3.02					2.66
大学院・理工(2005)	2.29		3.24				2.50		2.30
大学院・理工(2006)	2.35								2.35
大学院・理工(2007)	2.36		3.08						2.39
大学院・理工(2008)	3.29		3.94						3.31
大学院・理工(2009)	2.95		3.39	2.45					2.97
大学院・理工(2010)	2.80		3.57	2.78					2.84
大学院・技術経営(2005)	2.19		2.92						2.36
大学院・技術経営(2006)	2.58		3.39						2.75
大学院・技術経営(2007)	2.92		3.02						2.93
大学院・技術経営(2008)	3.15		3.71						3.25
大学院・技術経営(2009)								3.69	3.69
大学院・技術経営(2010)								4.34	4.34
大学院・医学系(2006)	3.40		3.51						3.43
大学院・医学系(2007)	2.97		3.65						3.25
大学院・医学系(2008)	2.90		3.24						3.01
大学院・医学系(2009)	2.67		4.13						2.77
大学院・医学系(2010)	4.12		3.70						4.08
大学院・経済学(2008)	4.32								4.32
大学院・経済学(2009)	3.09								3.09
大学院・経済学(2010)								4.08	4.08

授業外学習時間(全体平均)

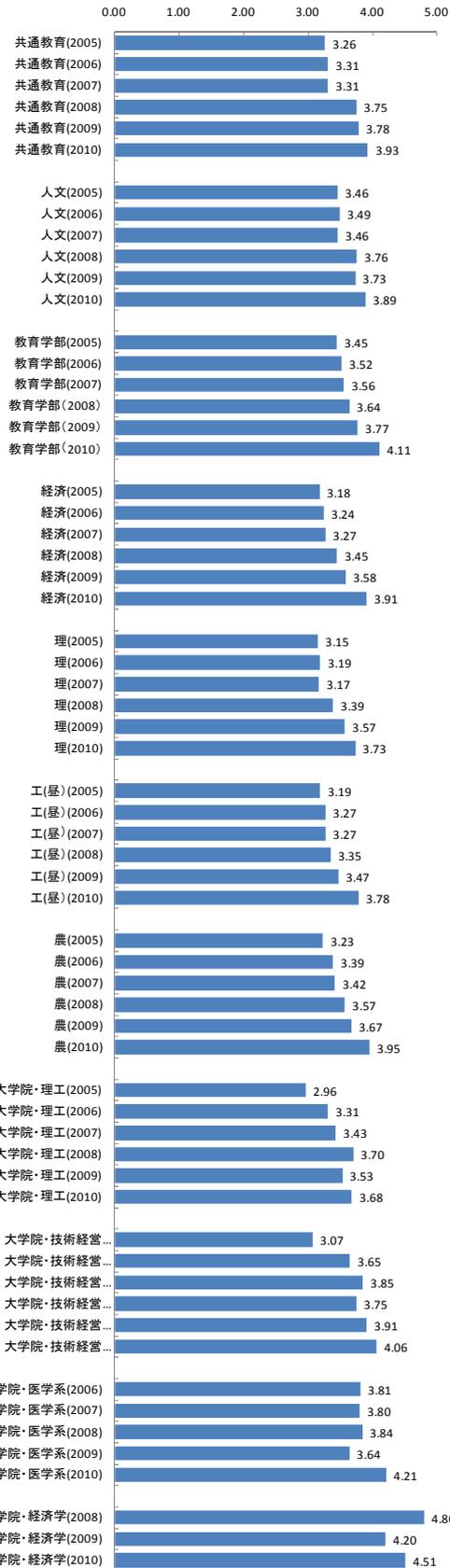
一経年変化一



< 全学共通質問項目 2 学習目標達成 >

学習目標達成	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教)	語学(農学部)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2005)	3.22		3.38	3.69			1.96		3.26
共通教育(2006)	3.27		3.40	3.70					3.31
共通教育(2007)	3.27		3.37	3.69			3.78		3.31
共通教育(2008)	3.72			4.12			4.21		3.75
共通教育(2009)	3.73			4.13	3.87				3.78
共通教育(2010)	3.88			4.25	4.02			4.20	3.93
人文(2005)	3.39	3.64	3.72	3.47					3.46
人文(2006)	3.40	3.78	3.76						3.49
人文(2007)	3.37	3.75	3.76						3.46
人文(2008)	3.73	3.81	3.75						3.76
人文(2009)	3.66	3.91	3.93						3.73
人文(2010)	3.82	4.00	4.08						3.89
教育学部(2005)	3.42	2.94	3.74	3.54			3.04		3.45
教育学部(2006)	3.45	3.07	3.86	3.73			3.47		3.52
教育学部(2007)	3.49	3.16	3.76	3.85			3.43		3.56
教育学部(2008)	3.60		3.84	3.95			3.63		3.64
教育学部(2009)	3.70		3.97	4.05			3.82		3.77
教育学部(2010)	4.04		4.28	4.17			4.16	4.33	4.11
経済(2005)	3.17						3.86		3.18
経済(2006)	3.24								3.24
経済(2007)	3.27								3.27
経済(2008)	3.45								3.45
経済(2009)	3.58								3.58
経済(2010)	3.91								3.91
理(2005)	3.11		3.17	3.56					3.15
理(2006)	3.14		3.32	3.48					3.19
理(2007)	3.12		3.45	3.51					3.17
理(2008)	3.32		3.77	3.78					3.39
理(2009)	3.53		3.71	3.95					3.57
理(2010)	3.70		3.99	3.97					3.73
工(昼)(2005)	3.15		3.45	3.54			3.71		3.19
工(昼)(2006)	3.24		3.38	3.50			3.35		3.27
工(昼)(2007)	3.25		3.35	3.48			3.25		3.27
工(昼)(2008)	3.28		3.52	3.62			3.35		3.35
工(昼)(2009)	3.44		3.60	3.62					3.47
工(昼)(2010)	3.76		3.84	3.94					3.78
農(2005)	3.15		3.16	3.50					3.23
農(2006)	3.31		3.45	3.61					3.39
農(2007)	3.34		3.72	3.60					3.42
農(2008)	3.47		3.95	3.83					3.57
農(2009)	3.63		3.90	3.80					3.67
農(2010)	3.91		3.92	4.15					3.95
大学院・理工(2005)	3.12		3.38				3.38		2.96
大学院・理工(2006)	3.31								3.31
大学院・理工(2007)	3.41		3.86						3.43
大学院・理工(2008)	3.70		3.62						3.70
大学院・理工(2009)	3.52		3.78	3.36					3.53
大学院・理工(2010)	3.68		3.65	4.00					3.68
大学院・技術経営(2005)	3.08		3.06						3.07
大学院・技術経営(2006)	3.62		3.76						3.65
大学院・技術経営(2007)	3.85		3.86						3.85
大学院・技術経営(2008)	3.72		3.85						3.75
大学院・技術経営(2009)								3.91	3.91
大学院・技術経営(2010)								4.06	4.06
大学院・医学系(2006)	3.92		3.54						3.81
大学院・医学系(2007)	3.76		3.86						3.80
大学院・医学系(2008)	3.81		3.90						3.84
大学院・医学系(2009)	3.62		3.96						3.64
大学院・医学系(2010)	4.26		4.13						4.21
大学院・経済学(2008)	4.80								4.80
大学院・経済学(2009)	4.20								4.20
大学院・経済学(2010)								4.51	4.51

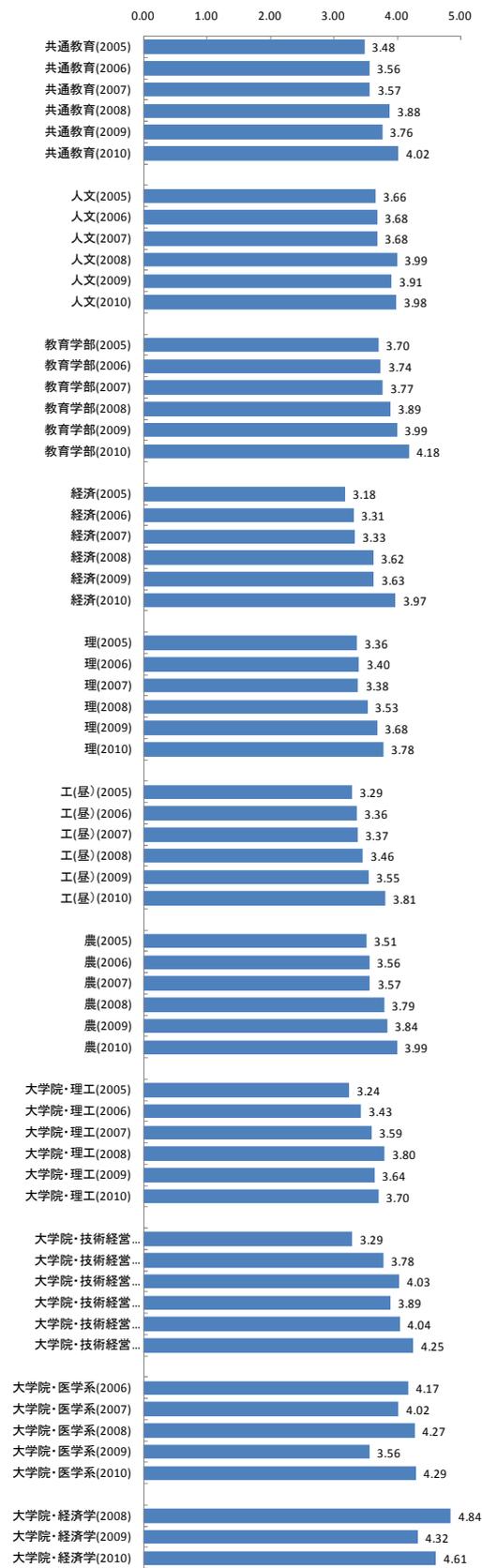
学習目標達成(全体平均)
— 経年変化 —



< 全学共通質問項目 3 理解 >

理解	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教	語学(農学部	その他	未指定	全体平均
共通教育(2005)	3.42		3.68	3.84			2.56		3.48
共通教育(2006)	3.50		3.78	3.93					3.56
共通教育(2007)	3.52		3.77	3.96			4.33		3.57
共通教育(2008)	3.85			4.15			4.52		3.88
共通教育(2009)	3.89			2.14	4.12				3.76
共通教育(2010)	3.95			4.32	4.16			4.35	4.02
人文(2005)	3.58	3.89	3.92	4.07					3.66
人文(2006)	3.58	4.02	3.98						3.68
人文(2007)	3.57	3.95	4.02						3.68
人文(2008)	3.84	4.09	4.03						3.99
人文(2009)	3.84	4.07	4.14						3.91
人文(2010)	3.90	4.11	4.21						3.98
教育学部(2005)	3.69	3.27	3.97	3.84			3.71		3.70
教育学部(2006)	3.68	3.29	4.06	4.01			3.70		3.74
教育学部(2007)	3.72	3.32	3.95	4.07			3.62		3.77
教育学部(2008)	3.86		4.14	4.12			3.89		3.89
教育学部(2009)	3.94		4.21	4.26			4.01		3.99
教育学部(2010)	4.12		4.40	4.25			4.21	4.39	4.18
経済(2005)	3.17						4.71		3.18
経済(2006)	3.31								3.31
経済(2007)	3.33								3.33
経済(2008)	3.62								3.62
経済(2009)	3.63								3.63
経済(2010)	3.97								3.97
理(2005)	3.32		3.39	3.81					3.36
理(2006)	3.35		3.62	3.85					3.40
理(2007)	3.34		3.74	3.76					3.38
理(2008)	3.47		3.89	3.91					3.53
理(2009)	3.63		3.89	4.05					3.68
理(2010)	3.74		4.09	4.08					3.78
工(昼)(2005)	3.24		3.64	3.70			3.41		3.29
工(昼)(2006)	3.30		3.56	3.68			3.29		3.36
工(昼)(2007)	3.31		3.56	3.72			3.34		3.37
工(昼)(2008)	3.40		3.57	3.69			3.59		3.46
工(昼)(2009)	3.51		3.72	3.71					3.55
工(昼)(2010)	3.78		3.88	3.95					3.81
農(2005)	3.36		3.68	3.92					3.51
農(2006)	3.43		3.87	3.94					3.56
農(2007)	3.42		4.16	3.91					3.57
農(2008)	3.66		4.55	4.08					3.79
農(2009)	3.76		4.47	4.01					3.84
農(2010)	3.94		4.11	4.19					3.99
大学院・理工(2005)	3.24		3.41				3.58		3.24
大学院・理工(2006)	3.43								3.43
大学院・理工(2007)	3.57		4.14						3.59
大学院・理工(2008)	3.80		3.91						3.80
大学院・理工(2009)	3.63		3.87	3.27					3.64
大学院・理工(2010)	3.70		3.65	3.56					3.70
大学院・技術経営(2005)	3.28		3.33						3.29
大学院・技術経営(2006)	3.74		3.94						3.78
大学院・技術経営(2007)	4.03		4.02						4.03
大学院・技術経営(2008)	3.84		4.14						3.89
大学院・技術経営(2009)								4.04	4.04
大学院・技術経営(2010)								4.25	4.25
大学院・医学系(2006)	4.21		4.08						4.17
大学院・医学系(2007)	3.92		4.16						4.02
大学院・医学系(2008)	4.23		4.36						4.27
大学院・医学系(2009)	3.75		2.17						3.56
大学院・医学系(2010)	4.37		4.15						4.29
大学院・経済学(2008)	4.84								4.84
大学院・経済学(2009)	4.32								4.32
大学院・経済学(2010)								4.61	4.61

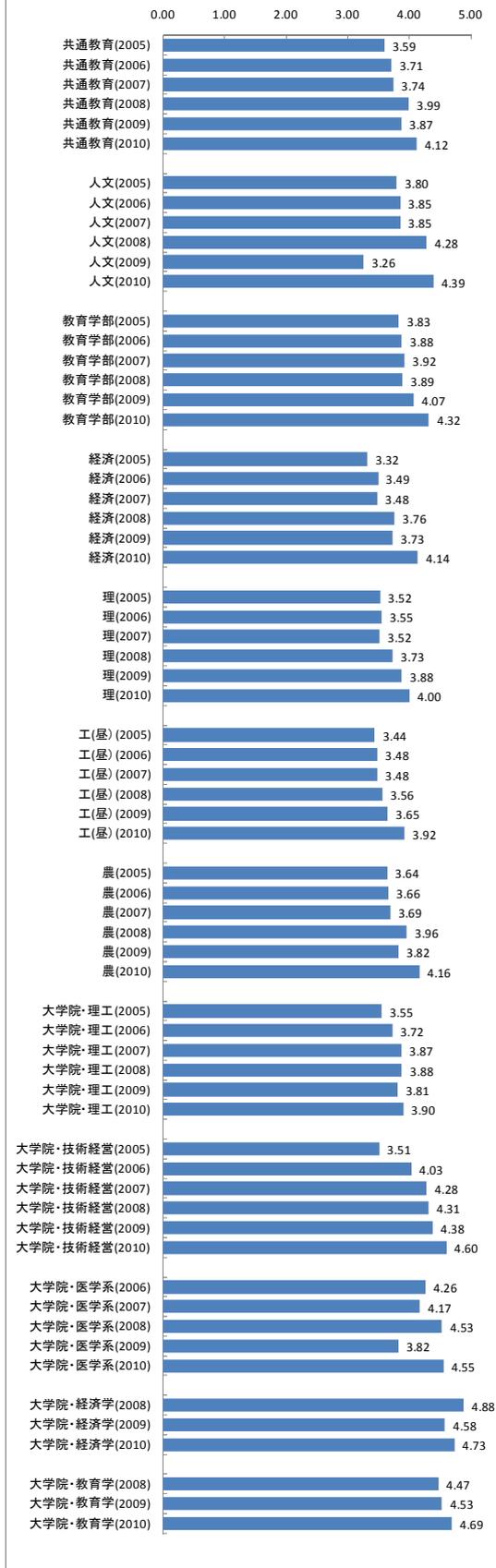
理解(全体平均) — 経年変化 —



< 全学共通質問項目 4 満足 >

満足	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教)	語学(農学部)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2005)	3.57		3.60	3.93			2.40		3.59
共通教育(2006)	3.69		3.69	4.05					3.71
共通教育(2007)	3.72		3.75	4.07			4.33		3.74
共通教育(2008)	3.97			4.26			4.60		3.99
共通教育(2009)	3.97			1.87	4.18				3.87
共通教育(2010)	4.05			4.32	4.28			4.49	4.12
人文(2005)	3.72	4.06	4.08	3.93					3.80
人文(2006)	3.74	4.22	4.13						3.85
人文(2007)	3.75	4.21	4.12						3.85
人文(2008)	4.22	4.50	4.39						4.28
人文(2009)	4.05	2.23	2.16						3.26
人文(2010)	4.31	4.54	4.60						4.39
教育学部(2005)	3.79	3.42	4.19	3.97			4.54		3.83
教育学部(2006)	3.82	3.49	4.27	4.17			3.82		3.88
教育学部(2007)	3.87	3.51	4.16	4.27			3.70		3.92
教育学部(2008)	3.86		4.14	4.12			3.89		3.89
教育学部(2009)	4.02		4.38	4.34			4.06		4.07
教育学部(2010)	4.26		4.62	4.35			4.35	4.52	4.32
経済(2005)	3.32						4.43		3.32
経済(2006)	3.49								3.49
経済(2007)	3.48								3.48
経済(2008)	3.76								3.76
経済(2009)	3.73								3.73
経済(2010)	4.14								4.14
理(2005)	3.48		3.57	3.91					3.52
理(2006)	3.52		3.62	3.85					3.55
理(2007)	3.48		3.95	3.78					3.52
理(2008)	3.68		3.99	4.05					3.73
理(2009)	3.84		3.94	4.23					3.88
理(2010)	3.97		4.14	4.30					4.00
工(昼)(2005)	3.42		3.68	3.68			3.94		3.44
工(昼)(2006)	3.44		3.60	3.69			3.31		3.48
工(昼)(2007)	3.46		3.58	3.62			3.55		3.48
工(昼)(2008)	3.51		3.68	3.79			3.71		3.56
工(昼)(2009)	3.61		3.84	3.79					3.65
工(昼)(2010)	3.89		3.99	4.05					3.92
農(2005)	3.61		3.18	3.86					3.64
農(2006)	3.63		2.92	3.94					3.66
農(2007)	3.65		3.47	3.91					3.69
農(2008)	3.84		4.49	4.25					3.96
農(2009)	3.73		4.39	4.07					3.82
農(2010)	4.11		4.32	4.40					4.16
大学院・理工(2005)	3.55		3.97				3.75		3.55
大学院・理工(2006)	3.72								3.72
大学院・理工(2007)	3.85		4.31						3.87
大学院・理工(2008)	3.88		3.76						3.88
大学院・理工(2009)	3.80		4.20	3.45					3.81
大学院・理工(2010)	3.91		3.79	3.56					3.90
大学院・技術経営(2005)	3.54		3.43						3.51
大学院・技術経営(2006)	4.00		4.13						4.03
大学院・技術経営(2007)	4.29		4.19						4.28
大学院・技術経営(2008)	4.27		4.53						4.31
大学院・技術経営(2009)								4.38	4.38
大学院・技術経営(2010)								4.60	4.60
大学院・医学系(2006)	4.36		4.03						4.26
大学院・医学系(2007)	4.05		4.34						4.17
大学院・医学系(2008)	4.52		4.56						4.53
大学院・医学系(2009)	4.05		2.08						3.82
大学院・医学系(2010)	4.60		4.46						4.55
大学院・経済学(2008)	4.88								4.88
大学院・経済学(2009)	4.58								4.58
大学院・経済学(2010)								4.73	4.73
大学院・教育学(2008)	4.37		4.64	4.63					4.47
大学院・教育学(2009)	4.46		4.79	4.31			4.50		4.53
大学院・教育学(2010)	4.76		4.76	4.75			4.58	4.88	4.69

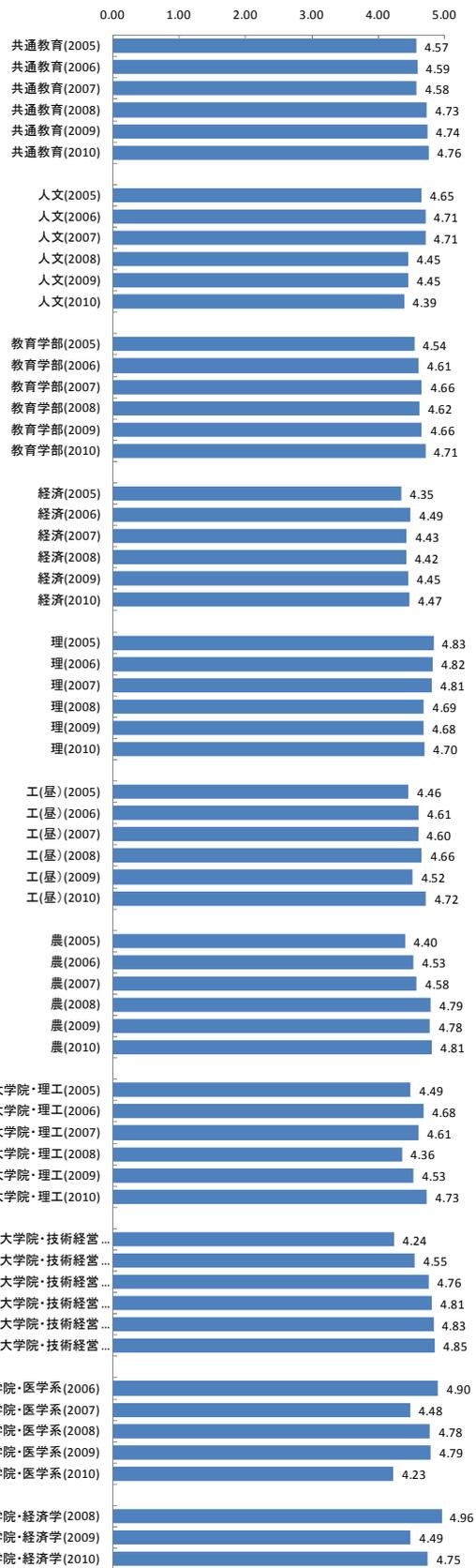
満足(全体平均) 一経年変化一



< 全学共通質問項目 5 出席 >

出席	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教)	語学(農学部)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2005)	4.55		4.65	4.68			3.28		4.57
共通教育(2006)	4.58		4.65	4.63					4.59
共通教育(2007)	4.57		4.64	4.65			4.89		4.58
共通教育(2008)	4.58			4.66	4.73				4.73
共通教育(2009)	4.73			4.81	4.74				4.74
共通教育(2010)	4.75			4.82	4.77			4.68	4.76
人文(2005)	4.66	4.68	4.57	4.87					4.65
人文(2006)	4.71	4.73	4.73						4.71
人文(2007)	4.70	4.72	4.72						4.71
人文(2008)	4.45	4.52	4.41						4.45
人文(2009)	4.47	4.42	4.38						4.45
人文(2010)	4.41	4.38	4.32						4.39
教育学部(2005)	4.55	4.66	4.54	4.48			3.66		4.54
教育学部(2006)	4.60	4.68	4.58	4.69			4.48		4.61
教育学部(2007)	4.65	4.69	4.57	4.74			4.65		4.66
教育学部(2008)	4.62		4.52	4.73			4.52		4.62
教育学部(2009)	4.64		4.61	4.76			4.71		4.66
教育学部(2010)	4.69		4.67	4.73			4.74	4.75	4.71
経済(2005)	4.35						5.00		4.35
経済(2006)	4.49								4.49
経済(2007)	4.43								4.43
経済(2008)	4.42								4.42
経済(2009)	4.45								4.45
経済(2010)	4.47								4.47
理(2005)	4.81		4.87	4.94					4.83
理(2006)	4.80		4.88	4.92					4.82
理(2007)	4.81		4.84	4.91					4.81
理(2008)	4.65		4.82	4.88					4.69
理(2009)	4.65		4.78	4.91					4.68
理(2010)	4.68		4.81	4.87					4.70
工(昼)(2005)	4.46		4.60	4.64			4.73		4.46
工(昼)(2006)	4.59		4.65	4.75			4.88		4.61
工(昼)(2007)	4.59		4.64	4.74			4.65		4.60
工(昼)(2008)	4.64		4.68	4.77			4.75		4.66
工(昼)(2009)	4.49		4.66	4.61					4.52
工(昼)(2010)	4.70		4.77	4.84					4.72
農(2005)	4.52		3.49	4.29					4.40
農(2006)	4.63		3.67	4.43					4.53
農(2007)	4.64		3.78	4.61					4.58
農(2008)	4.73		4.95	4.93					4.79
農(2009)	4.74		4.90	4.95					4.78
農(2010)	4.77		4.84	4.97					4.81
大学院・理工(2005)	4.49		4.03				4.50		4.49
大学院・理工(2006)	4.68								4.68
大学院・理工(2007)	4.76		4.77						4.61
大学院・理工(2008)	4.36		4.39						4.36
大学院・理工(2009)	4.52		4.70	4.55					4.53
大学院・理工(2010)	4.73		4.72	5.00					4.73
大学院・技術経営(2005)	4.28		4.10						4.24
大学院・技術経営(2006)	4.64		4.21						4.55
大学院・技術経営(2007)	4.74		4.44						4.76
大学院・技術経営(2008)	4.82		4.81						4.81
大学院・技術経営(2009)								4.83	4.83
大学院・技術経営(2010)								4.85	4.85
大学院・医学系(2006)	4.87		4.97						4.90
大学院・医学系(2007)	4.54		4.41						4.48
大学院・医学系(2008)	4.77		4.80						4.78
大学院・医学系(2009)	4.79		4.83						4.79
大学院・医学系(2010)	4.17		4.78						4.23
大学院・経済学(2008)	4.96								4.96
大学院・経済学(2009)	4.49								4.49
大学院・経済学(2010)								4.75	4.75

出席(全体平均) 一経年変化一



第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）

次に、第3節では共通教育に絞って2010年度の学生授業評価の結果を考察する。前節で示したデータのとおり、今年度の共通教育の学生授業評価実施率は89.5%、教員授業自己評価実施率は36.5%であった。前者は昨年度より0.7%減少したが、後者は2.1%上昇した。なお、回答数は合計39,590人であり、内訳は講義27,715人、実験・実習2,328人、語学9,309人、その他239人であった。

なお、以下に示す学生授業評価の結果は質問紙の種類（講義用、語学用、TOEIC準備用、実験実習用の4種類）別に分野別の平均値の変化を経年で示したものである。各分野に含まれる授業科目および開設科目は附表に掲載した。また、詳しい質問項目は節末に質問紙を掲載したので、適宜ご参照いただければ幸いである。

（1）講義系科目の結果について

以下の表・図は4種類の質問紙のうち「講義」用を使用している講義系科目を系列・分野別に整理し、評定平均値を算出したものである。講義系科目には大きく分類して「初期教育系列」「一般教養教育系列」「専門基礎教育」に分けられる。またそれぞれ分野別に細かく分かれている。

Q1の出席状況は「1. 90%以上（14回以上）」を5点、「5. 40%未満（6回未満）」を1点として平均値を計算したものである。すべて4.5を超えており良好である。

Q2の授業外学習は予習・復習・宿題やレポート作成、試験勉強を行った総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算した時間を尋ねたものである。「1. 3時間程度または以上」「2. 2時間程度」「3. 1時間程度」「4. 30-50分程度」「5. 30分未満」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。最も高い「理系基礎」が2.77、次に高かった「初期教育」が2.62であり、その他の授業は昨年度よりは若干の増減はあるが2.5以下である。これは授業外学習時間が30-50分程度の授業が大半という状況ということであり、「単位の実質化」という点から考えると授業担当教員はもっと積極的に宿題や授業外レポートを課していくことが望まれる。なお、大学設置基準には「1単位の授業科目は45時間の学修を必要とする」と規定されており、この中には授業時間の他に予習、復習の時間が含まれている。例えば、2単位の講義を行う場合90時間の学修が必要であり、このうち授業の30時間を除く60時間が授業外学習となる。つまり、半期15回の授業では1回の授業2時間に対して4時間の授業外学習が必要という計算になる。

Q3の教員の話し方が明瞭で聞き取りやすかったかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。すべての科目で3.5を上回っており4.0を超えている科目も多い。

Q4の専門用語や理論的な話が適切に説明されたかについては前問と同様に「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を計算した。ほとんどの授業で4.0を上回っており、全体的に昨年度よりもやや上昇している。

Q5のテキストやプリントなどの教材が効果的に使われたかについてとQ6の板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われたかについてはQ4と同様の計算方法で平均値を算出した。なお、これらの設問には「6. この授業は該当しない」という選択

肢があるが、平均値の計算には含めていない。どちらの設問も平均が 4.0 を超えている分野が多く、良好である。

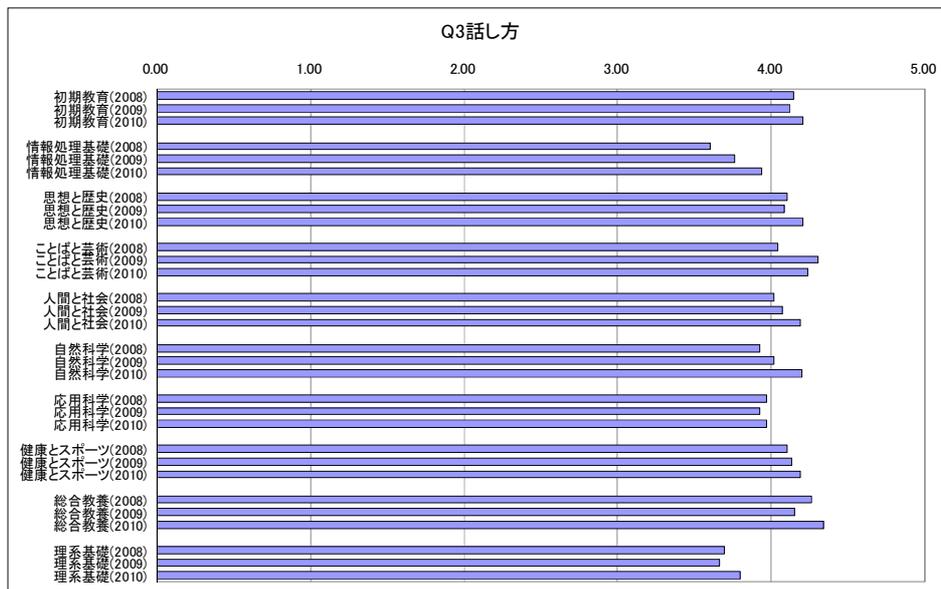
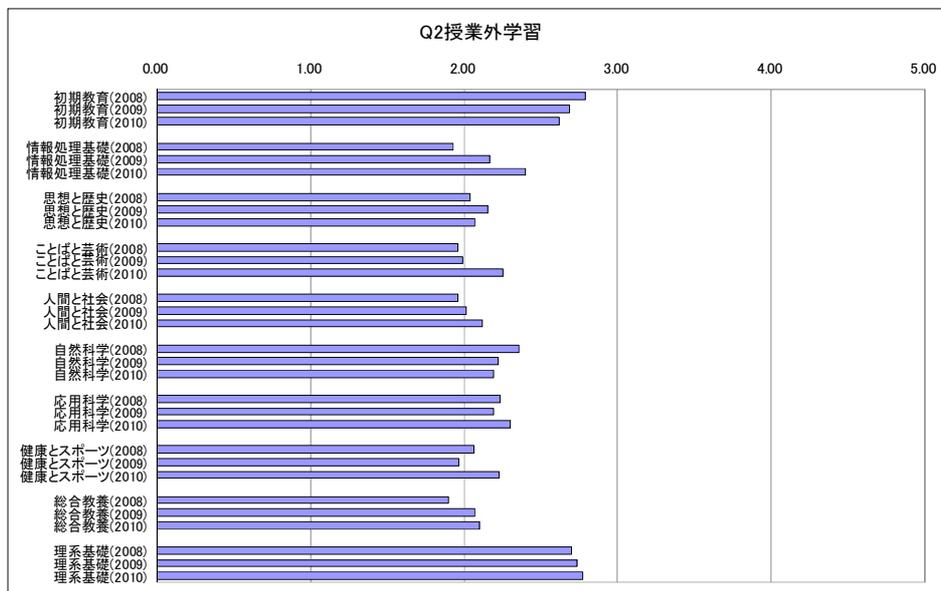
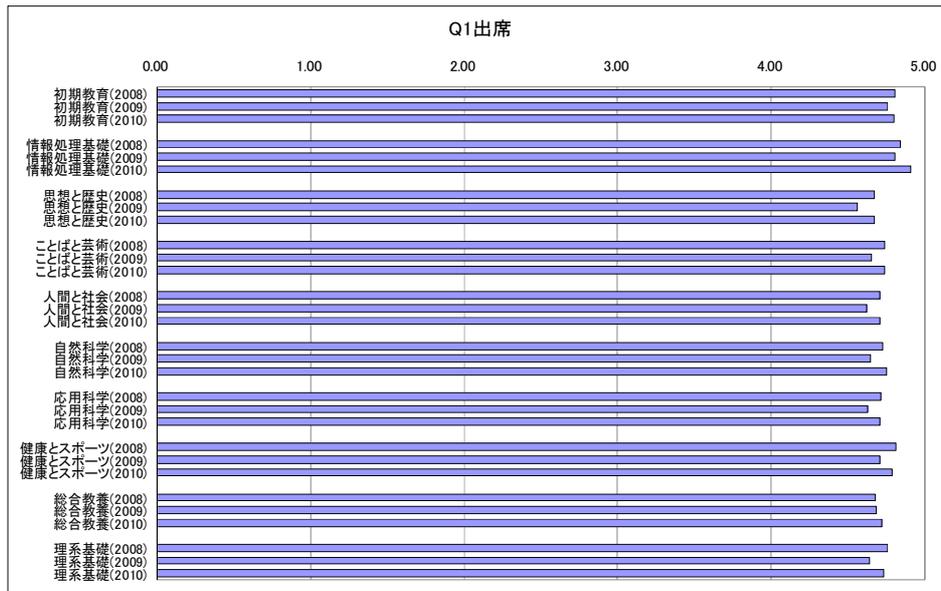
Q7 の学生の疑問や質問への対応は充分でしたか？という問いについては 4.0 を超えた分野が増加した。共通教育は規模の大きな授業が多く、質問への対応が小規模授業で比べて難しいと考えられるが、学生授業評価の結果は現在のところ良好である。

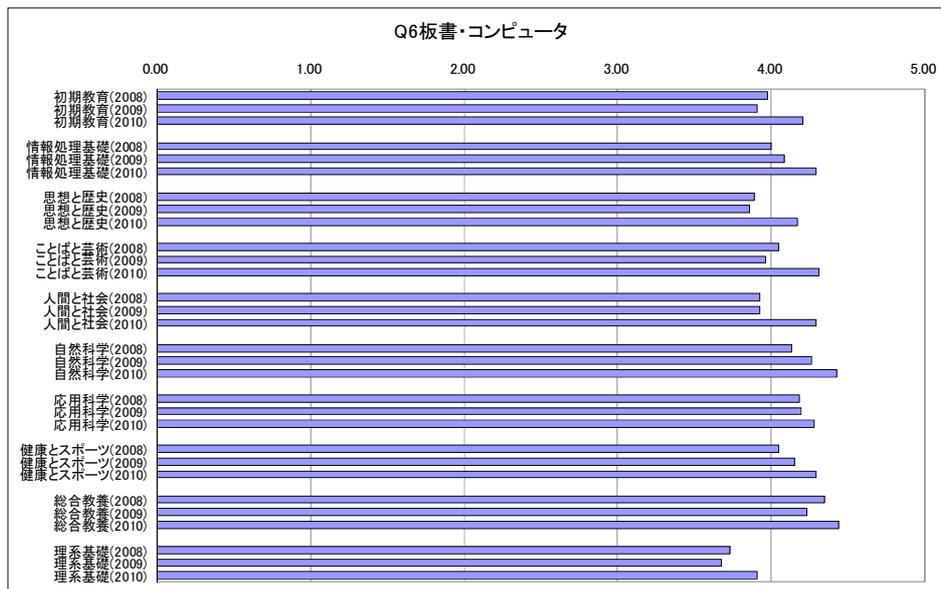
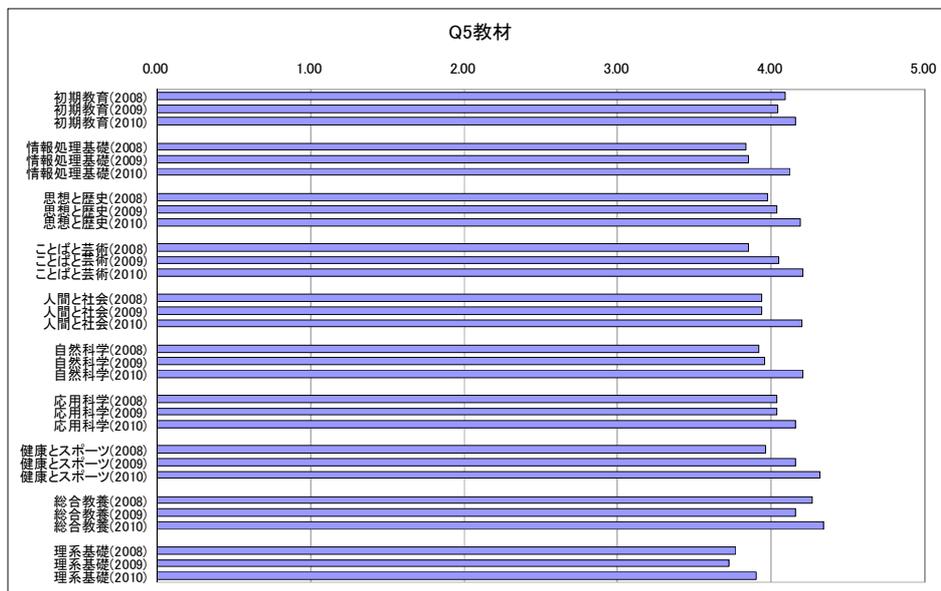
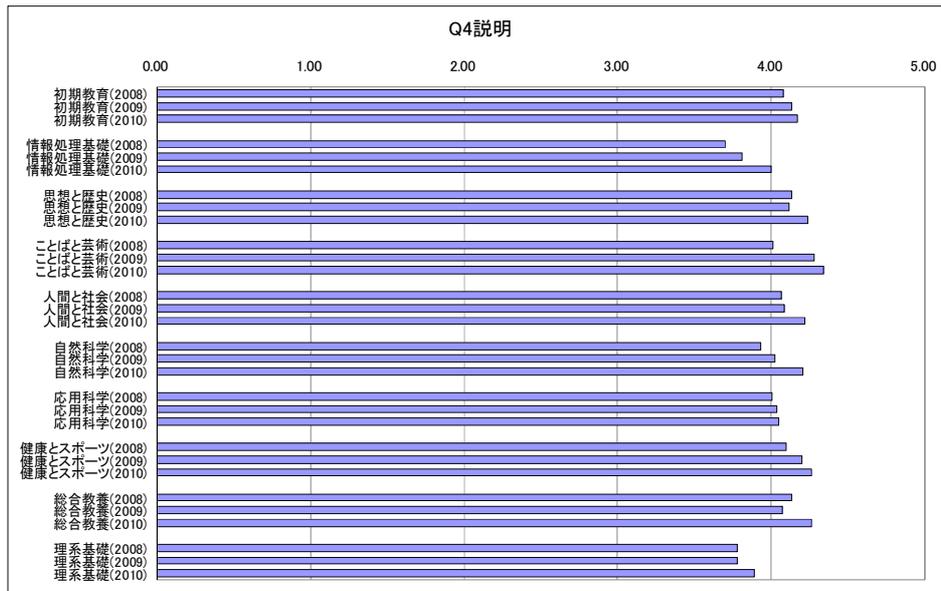
Q8 のシラバスに記載された学習目標を達成したかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」を 5,4,3,2,1 とし、「6. 答えられない」は平均値の計算から除いた。これはシラバスを読んでいない学生や学習目標を忘れた学生のために設けられた選択肢である。平均値はすべての科目で 3.5 を上回っており良好である。また、昨年度よりもすべての分野で上昇している。

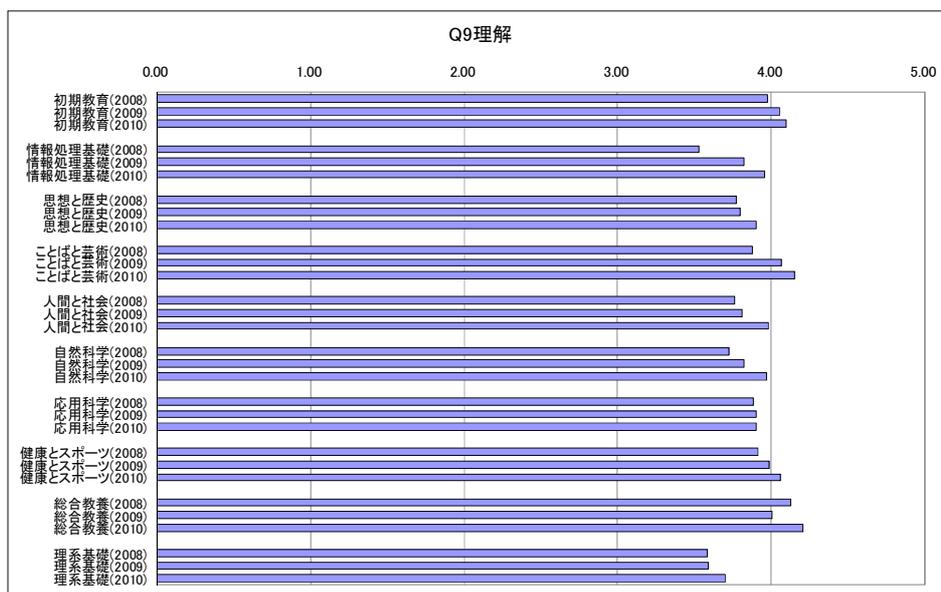
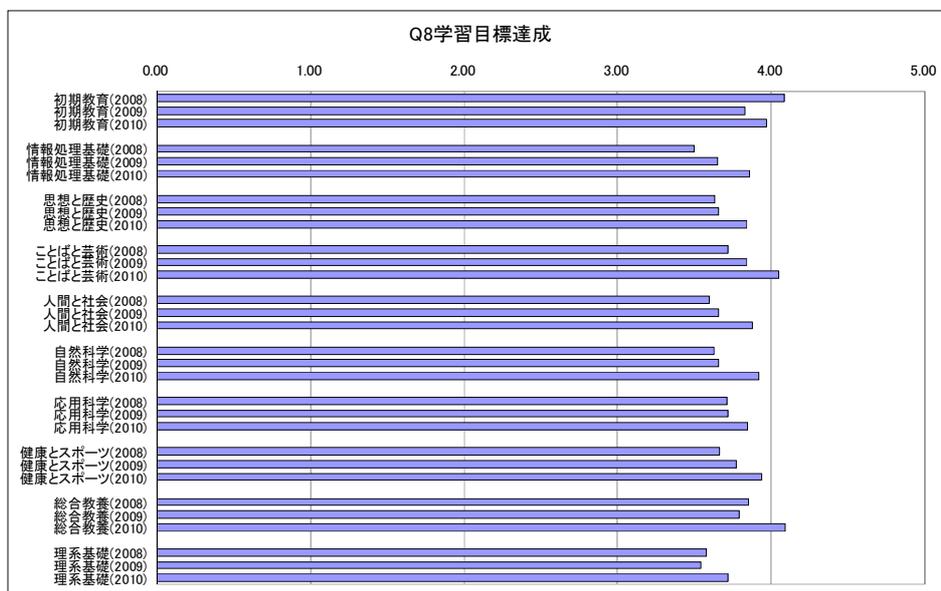
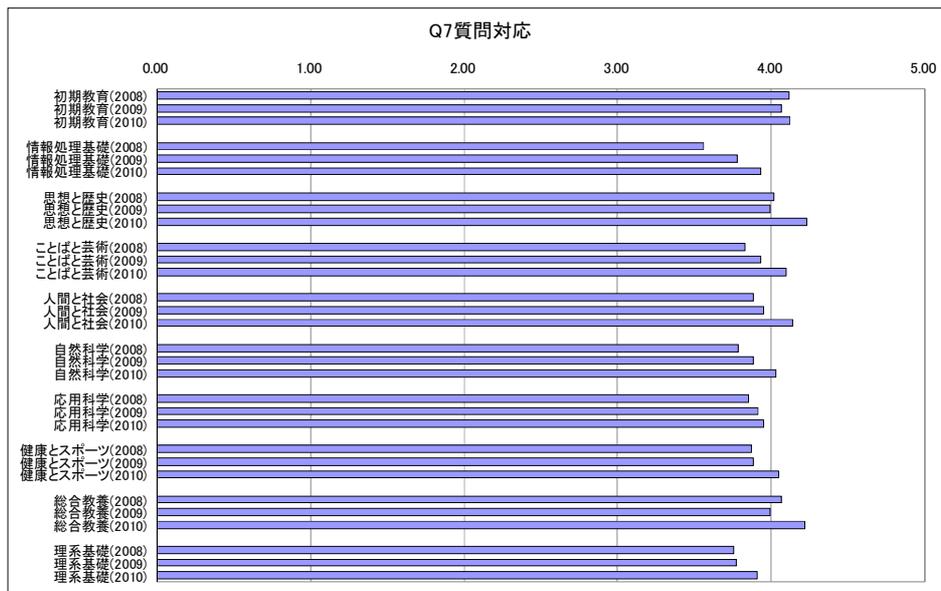
Q9 のこの授業の内容を理解できたかという質問についてはすべての科目で 3.5 を上回っており良好であった。

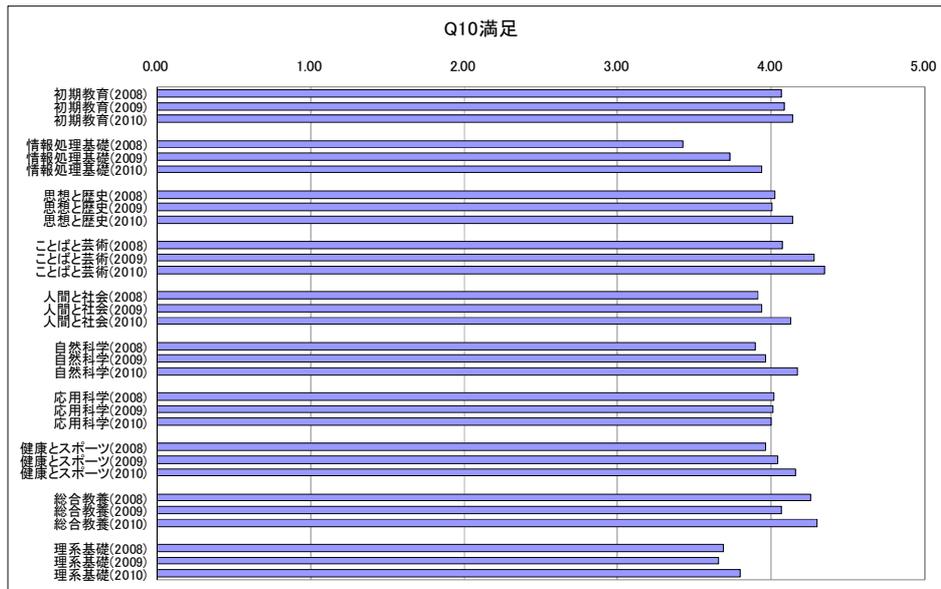
最後に Q10 のこの授業はあなたにとって満足のいくものだったかという質問については最も平均値が高かったのはことばと芸術(4.35)であり、次に高かったのは総合教養(4.30)であった。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6板書・コンピュータ	Q7質問対応	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
初期教育	初期教育(2008)	講義	4.81	2.79	4.14	4.08	4.09	3.97	4.12	4.09	3.97	4.07
初期教育	初期教育(2009)	講義	4.75	2.69	4.12	4.13	4.04	3.91	4.06	3.83	4.06	4.08
初期教育	初期教育(2010)	講義	4.80	2.62	4.21	4.17	4.16	4.21	4.12	3.97	4.10	4.14
初期教育	情報処理基礎(2008)	講義	4.85	1.93	3.60	3.70	3.84	4.00	3.56	3.50	3.53	3.43
初期教育	情報処理基礎(2009)	講義	4.80	2.17	3.76	3.81	3.86	4.09	3.78	3.65	3.82	3.73
初期教育	情報処理基礎(2010)	講義	4.91	2.40	3.94	4.00	4.12	4.29	3.93	3.86	3.96	3.94
一般教養教育	思想と歴史(2008)	講義	4.67	2.04	4.10	4.13	3.98	3.89	4.02	3.64	3.77	4.03
一般教養教育	思想と歴史(2009)	講義	4.56	2.16	4.08	4.12	4.04	3.86	3.99	3.66	3.80	4.01
一般教養教育	思想と歴史(2010)	講義	4.67	2.07	4.21	4.24	4.19	4.17	4.23	3.84	3.90	4.14
一般教養教育	ことばと芸術(2008)	講義	4.74	1.96	4.04	4.01	3.85	4.05	3.83	3.72	3.87	4.07
一般教養教育	ことばと芸術(2009)	講義	4.66	1.99	4.30	4.28	4.05	3.96	3.93	3.84	4.07	4.28
一般教養教育	ことばと芸術(2010)	講義	4.74	2.25	4.24	4.34	4.21	4.31	4.10	4.05	4.15	4.35
一般教養教育	人間と社会(2008)	講義	4.71	1.96	4.02	4.07	3.94	3.93	3.89	3.60	3.76	3.91
一般教養教育	人間と社会(2009)	講義	4.62	2.02	4.07	4.09	3.94	3.93	3.95	3.66	3.81	3.94
一般教養教育	人間と社会(2010)	講義	4.71	2.12	4.19	4.22	4.20	4.29	4.14	3.88	3.98	4.13
一般教養教育	自然科学(2008)	講義	4.73	2.36	3.93	3.93	3.92	4.13	3.79	3.63	3.73	3.90
一般教養教育	自然科学(2009)	講義	4.65	2.22	4.02	4.02	3.95	4.26	3.88	3.66	3.83	3.96
一般教養教育	自然科学(2010)	講義	4.75	2.19	4.20	4.21	4.21	4.43	4.03	3.92	3.97	4.17
一般教養教育	応用科学(2008)	講義	4.71	2.23	3.97	4.01	4.03	4.18	3.85	3.71	3.88	4.02
一般教養教育	応用科学(2009)	講義	4.63	2.19	3.93	4.04	4.04	4.19	3.92	3.72	3.90	4.01
一般教養教育	応用科学(2010)	講義	4.71	2.30	3.97	4.05	4.16	4.28	3.95	3.85	3.90	4.00
一般教養教育	健康とスポーツ(2008)	講義	4.81	2.06	4.10	4.10	3.96	4.05	3.87	3.67	3.91	3.96
一般教養教育	健康とスポーツ(2009)	講義	4.71	1.97	4.13	4.20	4.16	4.15	3.88	3.77	3.99	4.05
一般教養教育	健康とスポーツ(2010)	講義	4.79	2.23	4.19	4.26	4.32	4.29	4.05	3.94	4.06	4.16
一般教養教育	総合教養(2008)	講義	4.68	1.90	4.27	4.13	4.27	4.35	4.07	3.85	4.13	4.26
一般教養教育	総合教養(2009)	講義	4.68	2.07	4.15	4.07	4.16	4.23	3.99	3.79	4.01	4.07
一般教養教育	総合教養(2010)	講義	4.72	2.10	4.34	4.26	4.34	4.44	4.22	4.09	4.21	4.30
専門基礎教育	理系基礎(2008)	講義	4.76	2.70	3.69	3.78	3.77	3.73	3.76	3.58	3.58	3.69
専門基礎教育	理系基礎(2009)	講義	4.64	2.73	3.67	3.78	3.72	3.67	3.77	3.54	3.59	3.66
専門基礎教育	理系基礎(2010)	講義	4.73	2.77	3.80	3.89	3.90	3.91	3.91	3.72	3.70	3.80







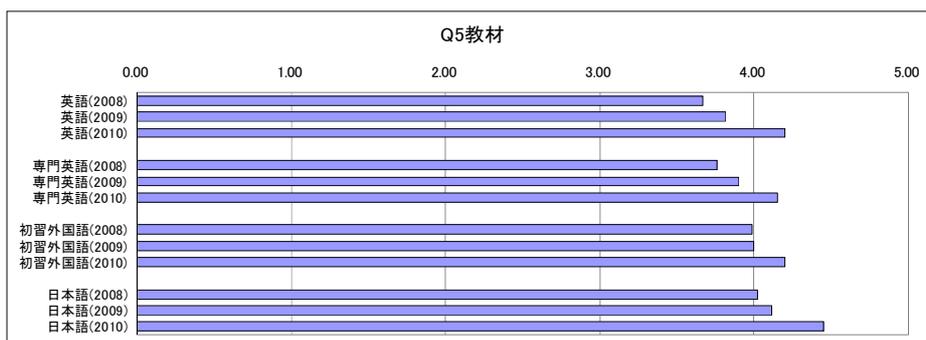
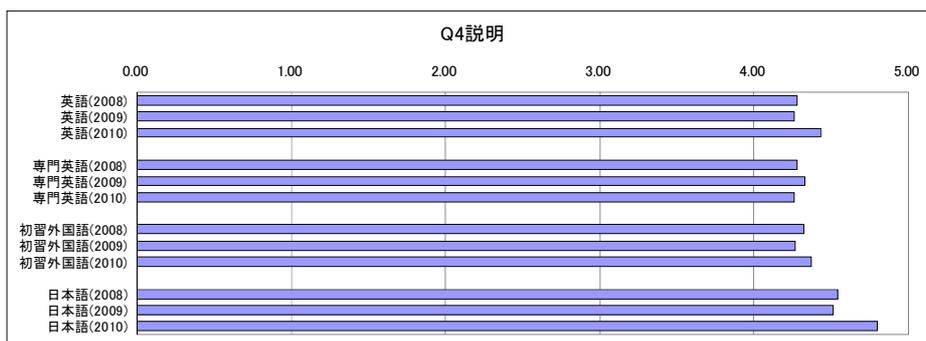
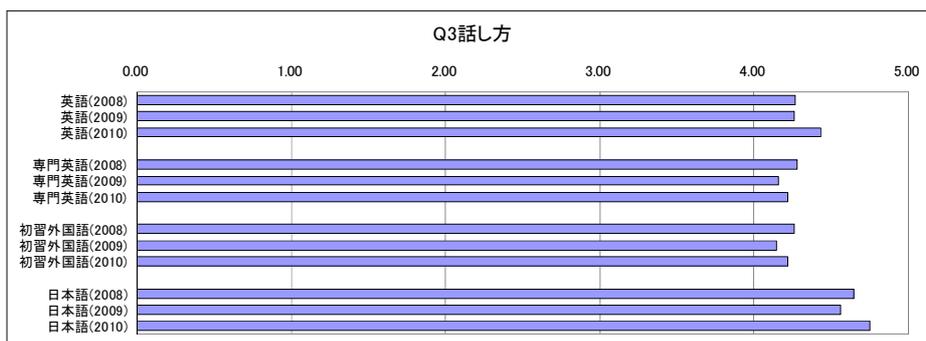
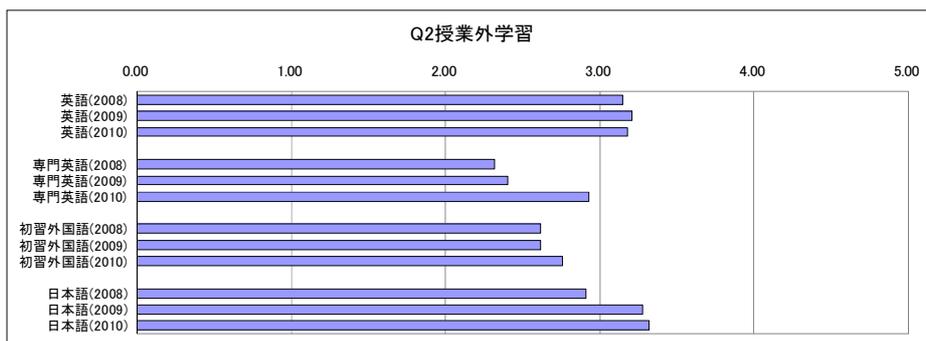


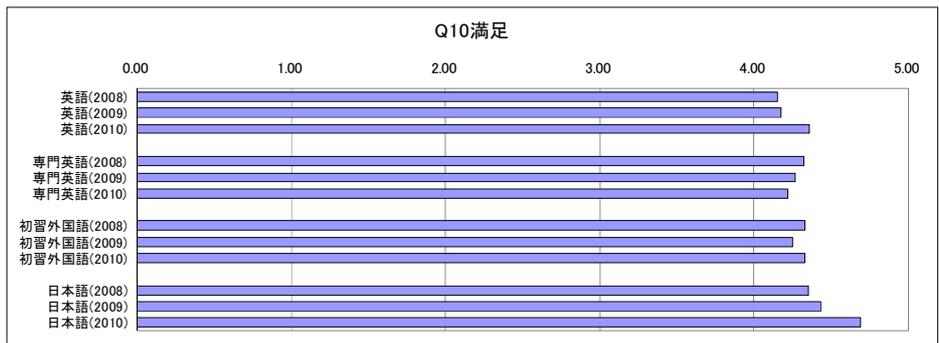
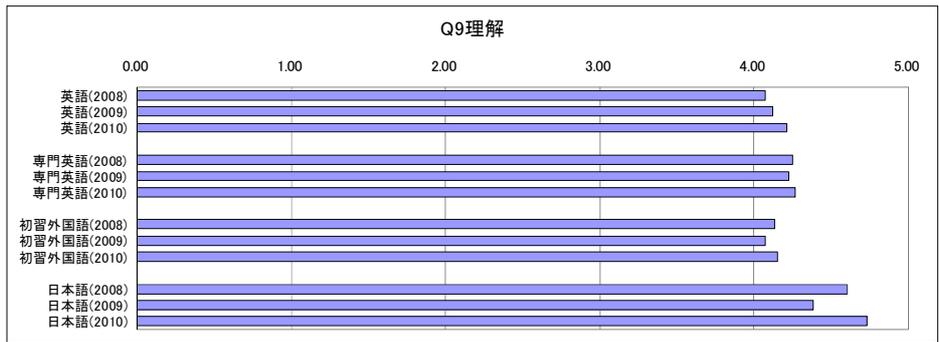
(2) 外国語教育科目の結果について

以下は「語学」の質問紙を用いた外国語科目の平均値である。「英語」「専門英語」(*ここでは医療系英語科目を便宜的にこう呼称する)「初習外国語」「日本語」の4つの分野のそれぞれに含まれる授業科目の評価の平均値を表している。

Q1の出席はすべて4.5以上を維持しており良好である。Q2の授業外学習は日本語分野が最も高く、次いで英語分野が高い。Q3の話し方とQ4の説明は昨年度と比較して大きな変動はないが、日本語分野は平均値が特に高い。Q5の教材はすべての科目で上昇しているが、特に英語は2008年から徐々に伸び、2010年は4.20であった。Q6の質問対応はどの分野も非常に高い。Q7は教員が授業内容の説明以外に学生に演習や練習の時間を十分に与えましたか?という質問である。これもすべて4.0以上を維持しており良好である。Q8の学習目標達成は今年度初めてすべての分野で4.0を超えた。Q9の理解、Q10の満足もすべて4.0以上を維持しており良好である。

分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6質問対応	Q7演習時間	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
英語(2008)	語学	4.74	3.15	4.27	4.28	3.67	4.12	4.26	3.88	4.07	4.15
英語(2009)	語学	4.63	3.21	4.26	4.26	3.81	4.14	4.24	3.93	4.12	4.17
英語(2010)	語学	4.76	3.18	4.43	4.43	4.20	4.33	4.39	4.08	4.21	4.36
専門英語(2008)	語学	4.91	2.32	4.28	4.28	3.76	4.29	4.37	4.03	4.25	4.32
専門英語(2009)	語学	4.86	2.40	4.16	4.33	3.90	4.26	4.45	3.89	4.22	4.27
専門英語(2010)	語学	4.85	2.93	4.22	4.26	4.15	4.32	4.31	4.08	4.27	4.22
初習外国語(2008)	語学	4.69	2.62	4.26	4.32	3.99	4.29	4.33	3.91	4.13	4.33
初習外国語(2009)	語学	4.57	2.62	4.15	4.27	4.00	4.23	4.29	3.86	4.07	4.25
初習外国語(2010)	語学	4.72	2.76	4.22	4.37	4.20	4.32	4.37	4.05	4.15	4.33
日本語(2008)	語学	4.42	2.91	4.64	4.54	4.03	4.54	4.50	4.06	4.60	4.35
日本語(2009)	語学	4.21	3.28	4.56	4.51	4.11	4.62	4.52	4.23	4.38	4.43
日本語(2010)	語学	4.71	3.32	4.75	4.80	4.45	4.72	4.62	4.53	4.73	4.69

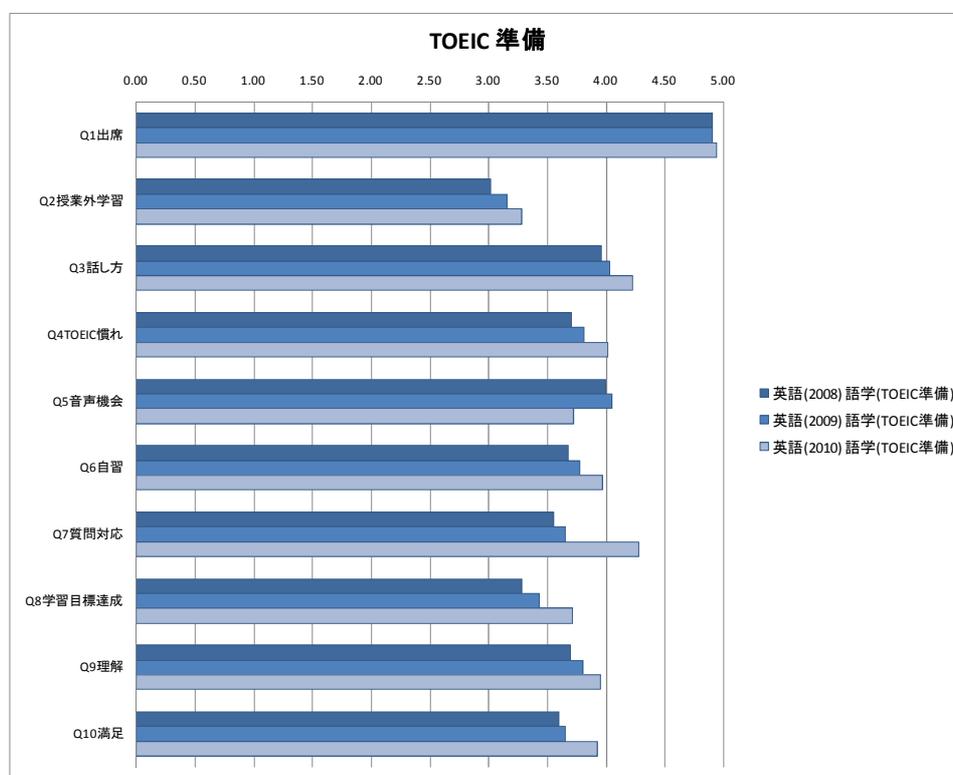




(3) 外国語科目 (TOEIC 準備) の結果について

以下は外国語科目 (TOEIC 準備) の平均値を示したものである。TOEIC 準備は1年生全員が受講する必修科目であり、山口大学が学生の英語力を高めるために全国に先駆けて導入したことから、この科目に限って専用の質問紙を準備して評価を行っているものである。昨年度と比較すると、Q5「授業中に(CD 等で)英語の音声を聞く機会はたくさん与えられましたか?」が低下しているが、これ以外はすべて昨年度を上回っており良好である。特に、Q7「学生の疑問・質問などに答える機会(オンライン自習課題の質問機能も含む)が十分に与えられていましたか?」が大きく伸びている。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4TOEIC慣れ	Q5音声機会	Q6自習	Q7質問対応	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
外国語教育	英語(2008)	語学(TOEIC準備)	4.90	3.02	3.96	3.70	3.99	3.68	3.55	3.28	3.69	3.60
外国語教育	英語(2009)	語学(TOEIC準備)	4.90	3.16	4.03	3.81	4.05	3.77	3.65	3.43	3.80	3.65
外国語教育	英語(2010)	語学(TOEIC準備)	4.94	3.28	4.22	4.01	3.72	3.97	4.28	3.71	3.95	3.92



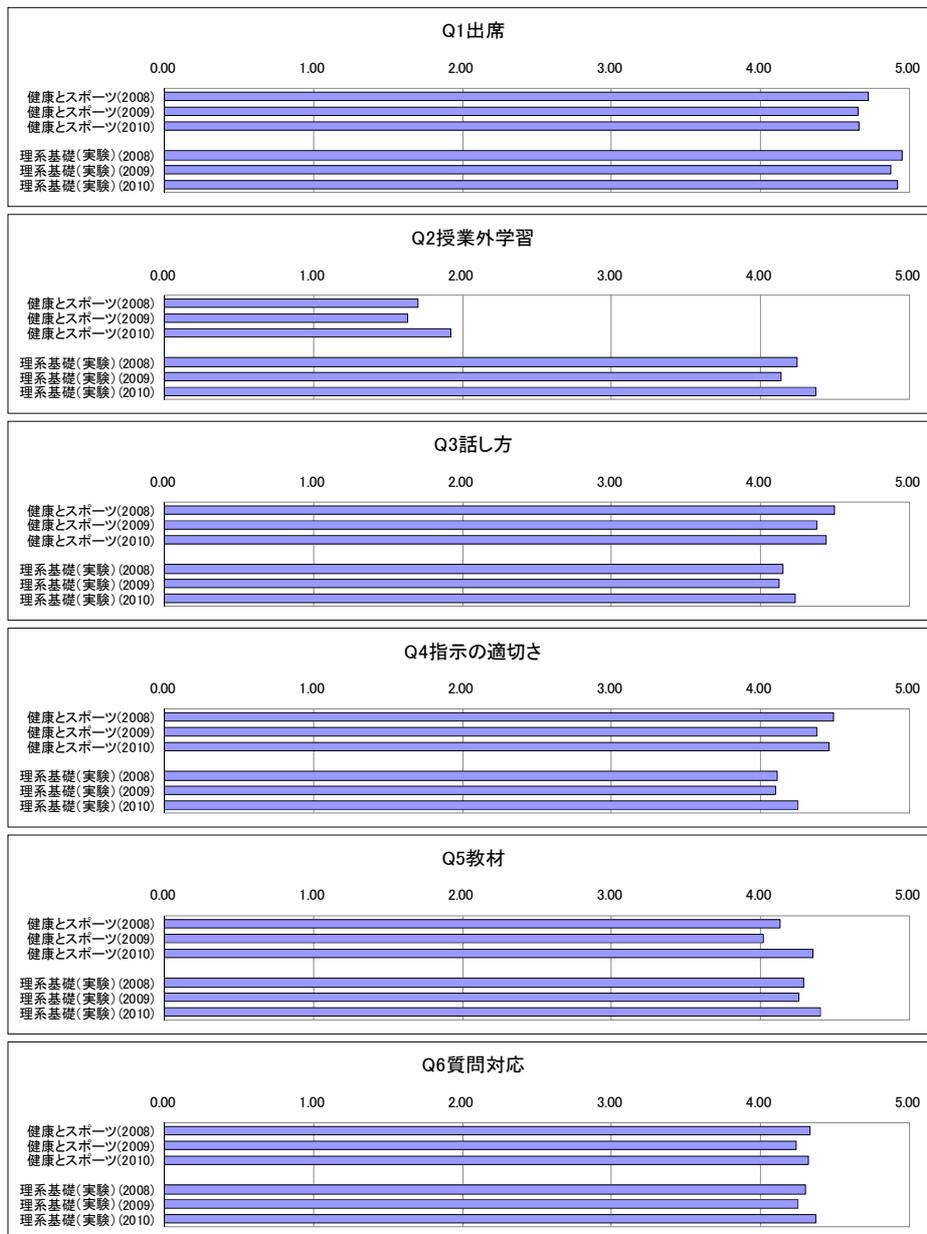
(4) 演習・実験・実習系科目の結果について

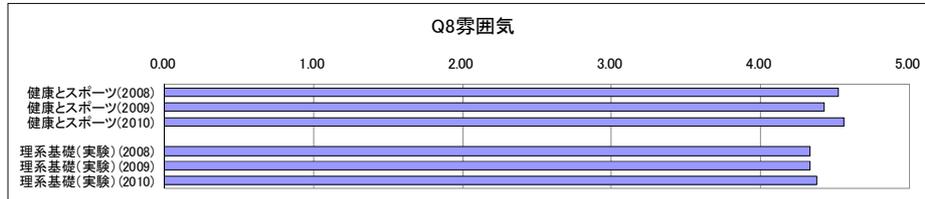
以下は「演習・実験・実習」の質問紙を用いた授業の平均値である。共通教育のうちこのタイプに当てはまるものは「健康とスポーツ」分野のスポーツ運動実習の授業、および「理系基礎(実験)」分野の実験科目である。Q2の授業外学習については健康とスポーツ分野は1.9と低く、反対に理系基礎(実験)は4.37と非常に高く、分野間で大きな差がみられる。健康とスポーツ分野は授業の性格上授業外学習を課すことが難しい面もあると考えられるが、何らかの取り組みは必要であると思われる。一方、理系基礎(実験)は多くの学生が授業1回につき2時間以上の授業外学習を行っていることが分かり、単位の実質化と

いう点からみて望ましい状況にあるといえる。

Q3以降も4.0をすべて超えており大変良好な状況である。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4指示の適切さ	Q5教材	Q6質問対応	Q7手本・示範	Q8雰囲気	Q9学習目標達成	Q10理解	Q11満足
一般教養教育	健康とスポーツ(2008)	演習・実験実習	4.73	1.70	4.50	4.49	4.13	4.33	4.47	4.52	4.21	4.52	4.60
一般教養教育	健康とスポーツ(2009)	演習・実験実習	4.66	1.63	4.38	4.38	4.02	4.24	4.39	4.43	4.14	4.42	3.77
一般教養教育	健康とスポーツ(2010)	演習・実験実習	4.66	1.92	4.44	4.46	4.35	4.32	4.49	4.56	4.37	4.54	4.37
専門基礎教育	理系基礎(実験)(2008)	演習・実験実習	4.95	4.25	4.15	4.12	4.29	4.30	4.22	4.33	4.12	4.16	4.24
専門基礎教育	理系基礎(実験)(2009)	演習・実験実習	4.87	4.14	4.12	4.10	4.26	4.25	4.22	4.33	4.06	4.10	3.66
専門基礎教育	理系基礎(実験)(2010)	演習・実験実習	4.92	4.37	4.23	4.25	4.40	4.37	4.36	4.38	4.18	4.18	4.30





附表 <各分野に含まれる授業科目および開設科目>

系列	分野	授業科目	開設科目名		
初期教育	初期教育(GP1)	フレッシュマンセミナー	フレッシュマンセミナー		
		基礎セミナー1	基礎セミナー1 基礎セミナー(経)		
	情報処理基礎(GP2)	基礎セミナー2	基礎セミナー2		
		情報リテラシー演習	情報リテラシー演習		
外国語教育	英語(GP3)	情報セキュリティ・モラル	情報セキュリティ・モラル		
		TOEIC準備	TOEIC準備		
		Basic English	Basic English		
		English Speaking	English Speaking		
		TOEIC認定	TOEIC認定		
		TOEIC認定400	TOEIC認定400		
		英語リーディング	英語リーディング		
		英語ライティング	英語ライティング		
		英語特別演習	英語特別演習		
		英語特別演習	英語特別演習1a 英語特別演習1b		
		Comprehensive English	Comprehensive English Fundamental Comprehensive English Pre-Intermediate		
		TOEIC認定500 (TOEFL450)	TOEIC認定500 (TOEFL450)		
		TOEIC認定600 (TOEFL500)	TOEIC認定600 (TOEFL500)		
		海外英語研修	海外英語研修		
	専門英語(GP3)	医学英語1	医学英語1a 医学英語1b		
		医学英語2	医学英語2		
		医療英語	医療英語		
		基礎医療英会話	基礎医療英会話		
		医療英会話	医療英会話		
	初習外国語(GP3)	初習外国語初歩		ドイツ語初歩 フランス語初歩 中国語初歩 ハンガール初歩	
			初習外国語入門1	ドイツ語入門1 フランス語入門1 中国語入門1 ハンガール入門1	
				初習外国語入門2	ドイツ語入門2 フランス語入門2 中国語入門2 ハンガール入門2
					初習外国語初級1A
		初習外国語初級1B	ドイツ語初級1B フランス語初級1B 中国語初級1B ハンガール初級1B		
			初習外国語初級2A	ドイツ語初級2A フランス語初級2A 中国語初級2A ハンガール初級2A	
				初習外国語初級2B	ドイツ語初級2B フランス語初級2B 中国語初級2B ハンガール初級2B
		初習外国語会話1			ドイツ語会話1 フランス語会話1 中国語会話1 ハンガール会話1
			初習外国語会話2		ドイツ語会話2 フランス語会話2 中国語会話2 ハンガール会話2
				海外初習外国語研修	海外中国語研修 海外ハンガール研修
		初習外国語認定		ロシア語 スペイン語	
		日本語(GP3)	日本語 ※外国人留学生対象科目	日本語1A	日本語1A 日本語1B 日本語2A 日本語2B 日本語3A 日本語3B 日本語4A 日本語4B 日本語5A 日本語5B 日本語6A 日本語6B 日本語7A 日本語7B 日本語8A 日本語8B 日本語9A 日本語9B 日本語10A 日本語10B 日本語11A 日本語11B 日本語12A 日本語12B 日本語13A 日本語13B 日本語14A 日本語14B 日本語15A 日本語15B

<各分野に含まれる授業科目および開設科目(続き)>

一般 教養 教育	思想と歴史 (GP4)	思想と倫理	哲学 倫理学 生命倫理学 宗教学	
		歴史	日本史 東洋史 西洋史	
		主題 (思想と歴史)	漱石の思想Ⅰ 漱石の思想Ⅱ 東洋の思想	
	ことばと芸術 (GP4)	文学と言語	日本文学 漢文 外国文学 (アメリカ文学) 言語学	
		芸術	芸術史 (芸術史) 芸術史 (日本近代芸術史) 芸術概論 (音楽の歴史) 芸術概論 (美術) 芸術概論 (音楽) 芸術実録 (美術) 芸術実録 (音楽) 芸術実録 (工芸)	
		主題 (ことばと芸術)	芸術鑑賞と作品記述	
	人間と社会 (GP4)	人間と社会	法学	政治学 経済学 社会学 (人権・ジェンダー・人間環境論) 社会学 地理学 民俗学 文化人類学 産業倫理 社会科学概論 社会福祉学
			人間と教育	教育学
		心理学	心理学	心理学 (適応と不適応) 心理学 (子どものこころを科学する) 心理学 (臨床心理学) 心理学 (臨床心理学) 心理学 (自分自身を再発見する) 心理学 (心のとらえ方) 心理学 (行動分析の基礎と応用) 心理学 (心と社会の心理学) 心理学 (道徳性心理学) 心理学 (学習・記憶・認知) 発達心理学 医療心理学
			日本国憲法	日本国憲法
主題 (人間と社会)			マーケティング入門 観光と交通 経営理論と応用 リスクマネジメント入門 日本の財政を考える 中国経済入門 戦略と経済心理 アジアの交通と文化 比較教育概論 大衆と観光 大学論 日常の価値を再考する 性をめぐる今日の状況 比較文化心理学 平和と文化のつながり 法と市場経済 契約と不法行為 国際コミュニケーション論 臨床人間学 Classroom Japan—Various Aspects of Culture and Society.	
自然科学 (GP5)		自然科学の考え方	数学の考え方 物理学の考え方 地球科学の考え方	
		自然科学	数学概論 物理学通説 現代化学総説 現代生物学総説 現代地球科学総説	
		主題 (自然科学)	宇宙と人間 科学の中の動物 環境とバイオテクノロジー 人間とバイオテクノロジー 歴史の中の動物 火山と地震 地球と人間 生命を科学する 生命現象のいろいろ	
応用科学 (GP5)		統計学	社会科学のためのやさしい統計学 理工学のための統計学 医学のための統計学	
		環境科学	環境学 科学史	
	応用科学	技術概論	技術概論 生命科学概論 生活科学 デザイン工学入門 行動科学	
		社会と医療	社会と医療 (いのちと発達) 社会と医療 (心と身の座) 社会と医療 (日本の医療) 社会と医療 (性を考える)	
	主題 (応用科学)	命と場 森りと人間 環境と植物 環境と人間 環境と農業 現代の科学技術 暮らしの中の動物 交通と社会 知的財産の開発と権利 情報技術と社会 人間と植物		

<各分野に含まれる授業科目および開設科目(続き)>

健康とスポーツ (GP6)	運動健康科学	運動健康科学 スポーツ運動実習(エアロビクス) スポーツ運動実習(サッカー) スポーツ運動実習(ショットテニス) スポーツ運動実習(ターゲットバードゴルフ) スポーツ運動実習(バスケットボール) スポーツ運動実習(バドミントン) スポーツ運動実習(ハンドボール) スポーツ運動実習(フィットネストレーニング) スポーツ運動実習(フライングディスク) スポーツ運動実習(空手) スポーツ運動実習(硬式テニス) スポーツの医学
	主題 (健康とスポーツ)	ライフスタイルと健康 加齢と健康 食・環境と健康 アクティブ・ラーニング キャリアデザイン クロスアップ・ドイツ ベンチャービジネス論 ボランティアと自主活動 メディア情報処理 環境と地域共生 観光と経済 国際交渉論 自然科学と現代社会A 知の広場一人と学問二 言語の多様性と普遍性 山口県の特産政策 教職協働実践I 哲学・思想入門 キャリアと就職 キャリア形成とコミュニケーション パソコンSOS1 パソコンSOS2 現代経営学事情 自然科学と現代社会B 時間学I 時間学II 生命と倫理 知的財産権論 教職協働実践II 教職協働実践III 医療環境論1 医療環境論2
総合教養 (GP7)	総合教養 A	総合教養 B
	総合教養 B	総合教養 A
専門基礎教育	理系基礎 (GP5)	理系基礎 (GP5)
	理系基礎 (実験) (GP5)	理系基礎 (実験) (GP5)

＜参考＞ 共通教育 学生授業評価 質問紙（４種類）

共通教育 学生授業評価（講義）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学 生 区 分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部 7. 農学部

【質問 1】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
5	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
6	板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
7	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない
9	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

	い
10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11~30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価（語学）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部 7. 農学部

【質問Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80~90%（12~13回） 3. 60~80%（9~11回） 4. 40~60%（6~8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
5	板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
6	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
7	教員は、授業内容の説明以外に、あなたたちに演習や練習の時間を十分に与えましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない
9	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11~30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価 (TOEIC 準備)

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部 7. 農学部

【質問Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？ (括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です) 1. 90%以上 (14回以上) 2. 80~90% (12~13回) 3. 60~80% (9~11回) 4. 40~60% (6~8回) 5. 40%未満 (6回未満)
2	あなたはこの授業において、時間外学習 (予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強) をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	この授業を通して、TOEIC テストの出題形式と問題内容に慣れることができましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
5	授業中に (CD 等で) 英語の音声を聞く機会はたくさん与えられましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
6	配布プリントやオンライン自習課題を有効に使って自習 (復習を含む) を行いましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

7	学生の疑問・質問などに答える機会（オンライン自習課題の質問機能も含む）が十分に与えられていたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない
9	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11~30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価（演習・実習・実験）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部 7. 農学部

【質問Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80~90%（12~13回） 3. 60~80%（9~11回） 4. 40~60%（6~8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	演習・実習・実験の方法に関する指示は、わかりやすく説明されましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
5	教材または器材が使用された場合、それらは適切に活用されましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない

6	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
7	教員から手本・示範が示された場合、それらは適切でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
8	授業中は、演習や実習に集中できる雰囲気でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない
10	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
12~30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

第2部 学部・研究科のFD活動

第4章 人文学部のFD活動

第1節 授業公開

当学部では2010年度中に、以下三つの授業公開（ピア・レビュー）を実施した。

- ① 「基礎セミナー1」（平成22年7月9日、授業者：湯川教員）
- ② 「日本語学Ⅲ」（平成22年7月9日、授業者：林教員）
- ③ 「基礎セミナー1」（平成22年7月17日、授業者：脇條教員）

<詳細は資料1>

第2節 学部・研究科主催FD研修会

当学部では2010年度中に、以下の通り、2回のFD研修会を実施した。

- ① 「平成22年度 教育改善研修会」（2010年10月6日）。
<資料2を参照>
- ② 「人文学部2010年度FD研修会」（2011年3月30日）。
<資料3、資料4>

第3節 教育改善に関する活動

当学部では2010年度に、全学的な教育改善・FD活動と連動し、全2学科9コースで、グラデュエーションポリシー、カリキュラムマップ、カリキュラムフローチャートの更新を行った。今後の課題として、これらの教育ポリシー、マップ、チャートを実質的な教育（授業）の中身にまで反映させることである。

これに関連する今後の課題として、こうした教育ポリシー、マップ、チャートに沿った、コース・研究分野ごとの、一定の教育指針を策定することである。すなわち、教材の作成とまではいたらないが、個々の教員の力量と研究・教育手法に依存しない、当学部における教育（授業）の題材と方法に関する、ある程度の標準化を目指すことである。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

当学部では2010年度に、例年通り、学生授業評価・教員授業自己評価を実施した。同年度における

学生授業評価の実施率は83.4%であり、前年度および前前年度とほぼ同様の実施率である。

しかし学生授業評価・教員授業自己評価についての今後の大きな課題は、「フィードバックによる教育の実質的な改善体制」を具体的に検討することである。現在の授業評価は、「学生の評価と満足度」の点からみれば、比較的良好な結果を表しているといえる。しかし、「問題の発見」や「改善の手掛かり」を示すものには、あまりなっていないが現状である。

学生授業評価を通して、どのような教育改善の体制を整えるべきかについては、第6節で触れる。

第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
人文学部	FD研修会参加(広島大学)	旅費	12,460	FD研修会の題材
	FD研修会参加(神奈川工科大学)	旅費	48,880	FD研修会の題材
	人文学部FD研修会、FD部会備品	印刷経費・消耗品費	42,350	FD部会活動の継続性
		計	103,690	

第6節 来年度の課題

当学部の来年度の教育改善の課題として、もっとも大きいものは、FD活動そのものを学部教育の重点課題の一つに位置付け、それなりの体制を組織して取り組むことである、と思われる。たとえば学生授業評価とピアレビューを、より頻繁かつ柔軟に実施する体制、結果について教員が話し合う体制、新たな教育方法を実践に移す体制、を構築することである。

なお、他学部における当面の教育課題である「適正な成績評価」や「試験の不正行為対策」については、レポート方式の評価・試験を主体としている当学部においては、緊急度の高い問題にはなっていない。

ピアレビュー「基礎セミナー1」

【概要】

日時	平成22年7月9日（金） 8:40～10:10
場所	人文学部第5講義室
授業者	湯川洋司教授
参加者	岩部浩三 エムデ・フランツ 尾崎千佳 柏木寧子 富平美波 根ヶ山徹（五十音順・敬称略）

【授業者による事前コメント】

本授業の位置	授業全体を3部に分けたうちの第3部「レポートを作る」の5回目。
本授業に至る経緯	大学生生活の目標について各自に考えさせ、それに即したレポートテーマを設定し、文献やインターネットで調査を進めた。
本授業の概要	レポートのテーマとその構成案について、パワーポイントを使って発表する。
今後の予定	発表した構成案に基づき、7月23日までにレポートを作成して提出する。教員がコメント・添削を施し、7月30日に返却する。

【当日の授業展開】

時間	概要	内容	備考
8:40-8:50	導入	<ul style="list-style-type: none"> 本日の授業内容の紹介 出欠を確認すると同時に、発表の用意をしてきたかどうかを確認する 	全体の3分の1程度の学生が発表準備ができていないと解答
8:50-10:05	発表	<ul style="list-style-type: none"> 発表準備ができている者から順に発表。発表者は正面に出、卓上のパソコンにUSBからデータを送り、パワーポイントを使いながら発表。マイクも使用する。人文社会学科→言語文化学科の順に発表を進めた。 	発表に対するコメント者をあらかじめ指名しておき、発表終了後、まずコメント者が感想等を述べる。教員はそれを受けて補足をする。 
10:05-10:07	総括	<ul style="list-style-type: none"> 本日の発表に対する授業者の全体的な感想を述べ、次週に発表の続きをすることを予告して終了。 	

[参観者から寄せられた感想・意見]

- ・基礎セミナーの趣旨にかなう、良く構成された授業でした。正直、基礎セミナーのシラバスは学部学科で見直しが必要と考えていましたが、不十分なのは後期に自分が担当しているところだけだったのでしょう。学生参加型の良い授業でした。キャリア教育にもなっています。学生のプレゼンテーション能力も高く、潜在能力の高さを感じました。



・大学生活の目標に基づいてレポートを書かせようという狙いは、1年生にとって、今後の大学生活について自己確認する良い機会になり得るでしょう。〈日本語論述〉より大学生活の目標を各自が掘り下げるところに力点が置かれているように見え、その点では後期基礎セミナーへの連続性もあるように思われます。学生の発表は、中身もレベルもさまざまでしたが、密度の濃い発表をする者が何名もあり、全体への刺激にもなるだろうと感じました。発表した学生はみな充実した表情をしていたのが印象的でした。ところで、学部の要職にある方に、前期基礎セミナーの担当まで強いるのはあまりにも酷なことと感じます。何か改善できないものでしょうか。

- ・さすがはというか、模範的な初年次教育の実践例を拝見させていただき、たいへん勉強になりました。今日の授業内容は、既に成果発表の段階に入っているもので、「今年の1年生、なかなかやるじゃないか」というおめでたい感想を抱いて帰ってきましたが、彼らがこういう事を考え、こういう発表ができるようになるまでに、先生のほうからどれだけ周到な働きかけをなさったかを想像すると、やはり、とても真似ができないと心底から思います。また、「レポートの構想」や「プレゼン」についても、あまりに高すぎる水準を要求されることなく、そのためか、教室内に適度に自由な雰囲気があって、学生が堅くならず物言っているのは、とてもよいことだと思いましたし、こういう風にお互いの将来像や考え方を提示しあう機会があるなら、2学科混成のクラス編成も、かえって悪くないと思えてきました。基礎セミナーの授業一般については、ピアレビューさせていただくたびに、もう少し少人数(20~25名?)でのびのび時間を使えたら、理想的だという感想を持ちますが、学部のマンパワーも少なくなる一方ですし、難しいことなのでしょう。何かを手厚くするためには、別の部分を切らないとどうしようもなさそうです。
- ・学生による発表が次々とスムーズに進んでいて、内容は様々でしたが、問題意識と簡潔なまとめ方はとてもよかったです。これは今までの授業の成果ではないかと思えます。授業の流れはたんと進んでいましたが、学生全員がかなり集中して、興味深く聞いていました。その理由は、学生一人と教員のそれぞれの評価の言葉にもあったし、発表のテーマが学生たちの親近なものだ

ったからではないかと思います。コメントは、ポジティブなポイントを取り上げることでよかったですと思います。場合によって、発表方法についてもヒント（例えばスクリーン向きではなく聴衆へ話すこと、スライドの文字サイズを大きく、言葉数少なくするなど）が少々あってもいいと思いました。そして、学生のコメンテーターが前に行ってマイクで話した方が後ろの方も聞こえやすいと思います。発表のバリエーションとして、同じテーマについてグループ発表を行うことも考えられます。

- ・学生がプレゼンをし、学生がコメントをした上で、先生方前向きな補足をして激励するという双方向授業の典型を参観させていただき、勉強になりました。
- ・当番が回ってくる度、手探りで担当している「基礎セミナー1」ですが、このたびの授業は、シラバスで授業計画を拝見するだけでも大変参考になりました。①山口大学を知る、②分りやすい日本語を作る、③レポートを作る・発表する、の三本立ての構成は、学生の必要に見合ったものと思います。今後参考にします。教員と学生、また学生同士、顔を見、名を呼んで、責任をもって自らの意見を述べ合う関係性が確立されており、学生たちも互いに信頼し、充実感をもって授業に臨んでいるように感じました。2学科混合ではありますが、きちんとクラス（担任教員、同級生）が形成されており、具体的な技術指導以前に大切なことと、気づかされました。学生一人一人、個性の差はありますが、ゆるやかな課題設定の下、それぞれの意欲に応じて取り組むことが可能で（大いに意欲のある人はいくらでも勉強でき、そうはいかない人も十分課題をこなすことができる）、よい課題の出し方だと思いました。期末の最終レポートは、普段の取り組みさえ着実であれば、過大な負担感なく、(むしろ過程を十分に楽しみながら)仕上げられるものと思います。提出後の指導も計画されているとのこと、行き届いていると感じました。当日聞いた学生12人の発表は、それぞれしっかりしたもので、授業の目標がじっさい達成されつつあることがよくわかりました。以上、さまざまなことを学ばせていただいた貴重な機会でした。湯川先生、また、FD部会の先生方に感謝します。

ピアレビュー「日本語学Ⅲ」

[概要]

日時 平成22年7月9日(金) 10:20~11:50
 場所 人文学部第1講義室
 授業者 林伸一教授
 授業科目 「日本語学Ⅲ」
 参加者 古荘真敬

[授業展開]

時間	概要	内容	備考
10:20-10:35	前回の授業内容の復習	・受講生一人一人に、前回の授業で学んだことを1項目ずつ簡潔に発表させる。	タイマーウォッチを用いて制限時間以内に発表させる。また、聞き取りやすい発声で発表するよう適宜促す。
10:35-10:55	学生による用語法アンケートの実施と、各自の回答の検討	・卒論を準備中の4年次学生が、格助詞「へ」と「に」の使い分けについてアンケートを行う。まず、各受講生は、多種多様な例文を吟味しながら、自分は各文において「へ」と「に」のどちらの使用を自然と感じるか回答する。次に、隣の学生と回答を見せ合い、それぞれの語感の違いについて気づいたことを発表させる。	
10:55-11:25	留学生による発表と討論	・「卵の中に骨を探す」という中国語の言い回しについての考察。「重箱の隅をつつく」という日本語表現との比較。この場合の「卵」や「骨」が、何を意味しているのか等について隣の席の受講生と共に考察させた上で、代表者に発表させていく。	隠喩、換喩、提喩の基本概念についても再確認。
11:25-11:45	日本語の名詞をめぐるさまざまなトピック	・「うさぎ」という語の韓国語起源説、「牡丹鍋」という語の由来、いわゆる「出世魚」の名前の呼び分けの基準、「お愛想」という言い方の本来の意味についてなど。あらかじめ担当の受講生が調べてきたことを発表させ、次に、発表内容について各自、隣の席の受講生と共に考察させ、さらにその際の気づきを発表させていく。	「語源」というものについてのさまざまな見方の例を紹介、吟味。民間語源説と学問的な語源説のあいだを往復しながら、自発的考察を促す。
11:45-11:50	総括：「授業ふりかえりシート」の回答提出	・6つの質問項目からなる記名式の「授業ふりかえりシート」に回答させて、各受講生の学習達成度の自覚と授業満足度をフィードバックさせるとともに、受講生が今日一日の学習内容を自己確認するよう促す。	

[参観者の感想・意見]

- ・随所に工夫のこらされた対話形式の授業のお手本として、興味深く参観した。この授業において「対話」とは、授業者と受講生との対話ばかりでなく受講生同士の対話をも意味し、どの学習項目においても、基本的に、各受講生が隣席の受講生と二人一組となって、そのつど対話的な議論を行いながら学習する「ペア・ワーク」を展開していく。この授業形式は、日本語を母語とする受講生が自身の日常的発話を反省的に吟味しながら研究対象としての日本語を考察するきっかけをつかむうえで、とても有効に機能していると思われた。こうした「ペア・ワーク」から得られる初歩的な気づきを学問的に深めていくためには、やはり、より体系だった従来型の「講義」形式の授業も同時に必要かと思われたが、専門的学問へと学生を導き入れる手法として、このような「対話」形式も大変有効であることを学ばせていただいた。

授業ふりかえりシート

2010年(7)月(9)日

(人文)学部 (言語文化)学科 (日文)コース(2)学年 [男・女]

国籍 (日)氏名()

開設科目名(日本語)

授業を振り返って、各項目にそれぞれ、よくあてはまる:5、あてはまる:4、どちらとも言えない:3、あてはまらない:2、全くあてはまらない:1の評定をし、その数字を○で囲んでください。

① 授業内容を理解することができた。

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

② 日本語のことで何か新しく気づくことがあった。

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

③ 今日の授業は対話があつて楽しかった。

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

④ 今日の授業は自分のためになった。

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

⑤ 集中して参加できる授業であった。

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

⑥ 感じたことや気づいたこと考えたことを書いてください。

「卵の中に骨を採す」(題の「採」は違(はず)よね?)ですが、完全体としての球形をもつ卵や
 立方形の豆腐の中に不定形である鋭利物(不完全なもの)の骨やとげがある、という表の表
 とらえる説を聞いてはみほどと目から鱗が落ちるような思(おも)ひがしました。
 また「虎と詐欺」説もおもしろかったです。おそらく詐欺ということばは最近でよ(よ)いもの
 でしょうから違(はず)うとは思いますが、日本物語などの説話(せつわ)でしかにウサギは良(よ)いイメージ
 で描(えが)かれていないですよ。(ウサギとか(と)然(さ)り)グリム童話(どうわ)などでは狼(おおかみ)のような凶(よ)悪(あく)
 な動物(どうぶつ)が悪(わる)として描(えが)かれるのに、日本(にっぽん)では猿(さる)やま(ま)つね(ね)などの動物(どうぶつ)が「悪(わる)のシンボル」とされる
 のが不思議(ふしぎ)だなと感じました。

授業ふりかえりシート

2010年(7)月(9)日

(人文)学部 (言語文化)学科 (言語情報学)コース(2)学年 [男・女]

国籍 (日本)氏名

開設科目名 (日本語)

授業を振り返って、各項目にそれぞれ、よくあてはまる:5、あてはまる:4、どちらとも言えない:3、あてはまらない:2、全くあてはまらない:1の評定をし、その数字を○で囲んでください。

① 授業内容を理解することができた。

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

② 日本語のことで何か新しく気づくことがあった。

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

③ 今日の授業は対話があつて楽しかった。

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

④ 今日の授業は自分のためになった。

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

⑤ 集中して参加できる授業であった。

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

⑥ 感じたことや気づいたこと考えたことを書いてください。

「エギ」の語源についてですが、昔話では、たいてい、うエギが、悪いためき(まっね)をだまして、こらしめる内容が多い気がします(例えば「かちかち山」とか)。だから、「うエギ」の「エギ」の部分を「詐欺」としてとらえることもできるのかもしれないと思いました。

「卵の中に骨を探す、このエギについては、「卵」や「骨」のイメージで使われている、と糸内得ました。が、「重箱」の方は、どうして、この語が使われたのが不思議に思いました。

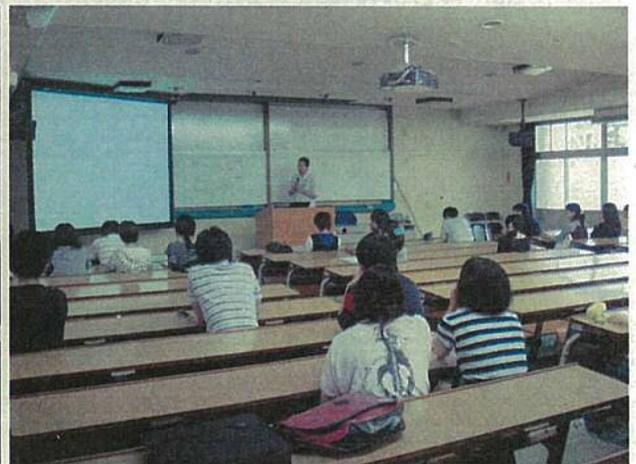
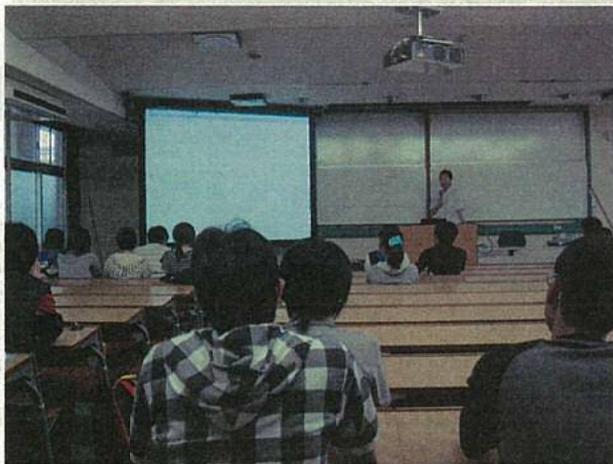
ピアレビュー「基礎セミナー1」

【概要】

日時 : 平成22年7月16日(金) 08:40~10:10
 場所 : 人文学部小講義室
 授業者 : 脇條教授
 授業科目 : 「基礎セミナー1」
 参加者 : アラム、尾崎、根ヶ山、富平

【授業の方式と展開】

- ・ 授業はまず、30分ほどの講師による解説ではじまる。当日のテーマは「セインズベリー (Richard Mark Sainsbury) のパラドックスの哲学を題材とする、詭弁の論法・論理学」である。同テーマの主な中身と課題は、前週の授業の後半の部分で、すでに解説され、学生は講師から課せられた前週の課題を、当日の授業の前に、メール送信による小レポートとして提出している。
- ・ 当日の講師による解説は、学生の小レポートを部分的に引用しながら、前週の話をおさらいするというものである。およそ以下のような課題である：



哲学者は職場の同僚の女性にしきりに交際を申し込むが、いつも断られている。そこで、哲学者は女性に紙に書かれた次の二つの質問に答えてくれたら（そしてその答えの通り実行してくれたら）、もうそれ以外のことで二度と何か誘ったりしないと約束する。

(A) ————— してくれますか。Yes/No

(B) ————— してくれますか。Yes/No

女性は、哲学者をうっとうしい男だと敬遠していたが、(なにしろ哲学者なので) 言ったことは律義に守る男だとわかっていたので、質問に答えて害はないと判断した。「質問に何が書かれていようと、嫌ならNoと答えればいいのだから…」と彼女は考えた。

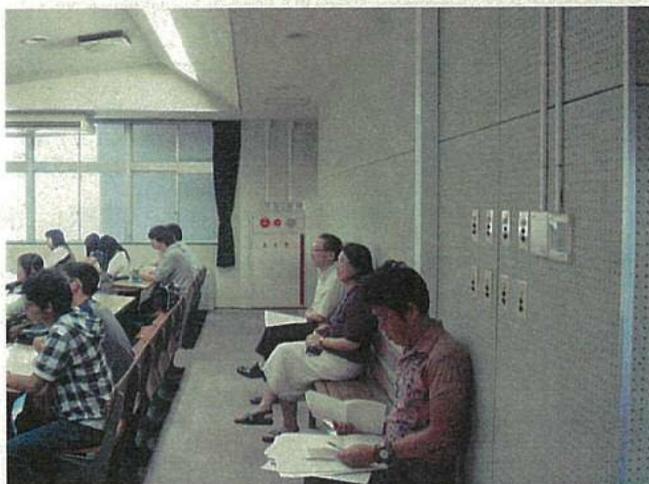
【課題】

「哲学者の質問に答える方がよい」という結論に至るこの女性の推論を整理せよ。

- ・ 学生が書いた小レポートには、例えば次のようなものがある。

- (1) 女性は、哲学者に付きまとわれている。
- (2) 二つの質問に答えてくれたら、哲学者はもう付きまとわれないと約束してくれた。
- (3) 『「……………」していただけますか?』という問いに、「……………」したくないなら No で答えればいいので、質問に答えたところで、女性に不利益はないと思われる。
- (4) (1) ~ (3) より、女性はこの2つの質問に答えるほうが良い。

- ・ 講師による解説の終盤は、今回提示されたシチュエーションのさらなる展開として、結局この女性は困った状況に陥ったので、今度は、「この推論のどこが間違えていたのか」(あるいは間違えであるというケースを想定してみる) ということ、さらなる問いとして学生に投げかけた。
- ・ このさらなる課題に沿って、10分間ほど、グループディスカッションが行われた。
- ・ その後、グループの代表者発言が順番に行われた。



- ・ 代表者発言を受け、再び講師による解説に入る。
- ・ その後、さらなる推論がグループディスカッション方式で行われ、いくつかの代表者発言があった。
- ・ 今回の代表者発言からは、いずれも、「女性の推論が間違えていたこと」(あるいは間違えであるというケースを想定しみること) は、立証されるにはいかなかった。

- ・ そして最後の講師による解説では、この問題の一つの答え方が、次のように提示された。

(A) 「Bに、Aと同じ答えを」していただけますか。Yes/No

(B) <女性にとって好ましくない任意の事柄を>していただけますか。Yes/No

⇒ たとえば (B) が「私とデートしていただけますか」の場合、(A) に Yes と答えたら (B) にも Yes と答えることなので、デートに応じるということになり、逆に、(A) に No と答えたら (B) には Yes と答えることなので、やはりデートに応じるということになる。

[参観者の感想・意見]

- ・ この授業は、その方式と中身(題材/テーマ/課題)から見ると、次の4点におよぶ教育的なメリットが、比較的是っきりと感じられる。①哲学的・論理的課題に準拠しているものの、日常生活感のある事例に置き換えられているため、とっつきやすい(共有しやすい)。②グループに分けて一人一人に考えたり話したりする機会が与えられているため、一定の「参加度」(双方向性)が保証されている。③グループディスカッションは、学生が「一人で学ぶ」ので

はなく、「人と接したり交流したりしながら自身を磨いていく」ということを刺激する。④授業の方式が（特にレポートによって）前週・当週・次週をつなぎながら展開するようになっているので、連続的・段階的（または弁証法的）な勉強ができる。基礎セミナー1は、日本語を中心とするGP1を目的として掲げているが、今回の授業は、一定の哲学的・論理的な課題を通して、日本語で「聞く」「思考・分析・推論する」「理解する」「書く」「言葉で表現する」「議論する」ことにより、十分にこのGPを人文科学にふさわしい仕方で行っているものを見る。一方、今後の課題としては、以下2点のことがレビューワーとして考えさせられた。①一定の授業方式を維持することは重要だが、14・5回のうちの2・3回は、「飽き防止」のような若干異なった方式を交えてみることは必要だろうか。②今回のコマに限ることなのかもしれないが、「もっとも正しい推論」は、学生（個人またはグループ）自身が導くように、可能な限りのヒントを通して講師が誘導するということが、よいことなのか（あるいは逆効果になるのか）。

- ・班分けしてディスカッションの時間を作り、その時に出席を確認していられたのが興味深かったです。授業中の雰囲気落ち着いていて良かったのも、班を固定して、グループディスカッションを繰り返してきた成果だろうかと思いました。また、さすがに教学経験がお長いので、時間配分が見事でした。いろいろな基礎セミナーを見学すると、どの工夫も素晴らしいので、形式としては、あれもこれも取り入れたくなくなってしまいます。脇條先生の「考える訓練」。湯川先生の「プレゼンテーションとキャリア教育」。「読んで書く訓練」をさせておいての先生も多数おられる由ですし、他に、山口について知るとか、図書館オリエンテーション・修学システム説明会なども、どこかでせねばなりません。でも、脇條先生の方法は、ご専門に立脚した、考える訓練・行動を決める訓練として、理想的なものだと敬服しましたが、哲学者ならばその手法で、余人に真似のできるものではありません。大学で勉強する基礎固めをするという目的だけなら、受講者の方に意欲があれば、前期のセミナーもオムニバス方式だっただけかまわないのだと思いました。しかし、それでは、モチベーションが高くない学生が、大学生活に馴染み、学友と親しくなるという点の効果が薄くなる可能性があります。むずかしいものですね。
- ・適宜グループディスカッションを取り入れる点に工夫が見られた。グループの中では男女を問わず意志疎通が円滑に行われているようであり、学生が楽しそうに授業に参加しているのが印象的であった。難問に対しても意欲的に学生が発言している点には感心した。ハーバード白熱授業を連想させるものがあった。〈日本語論述〉という意味では、やや話材が難しすぎるようにも感じた。

平成 22 年度 教育改善研修会（人文学部）

日時: 平成 22 年 10 月 6 日(水) 14:30~16:30

場所: 人文学部大会議室

参加者: 24 名 (内訳): 学務委員長、学科長、学務委員 (教学委員を含む) F D 委員など合計 19 名、岩部大学教育センター長、兼石教育コーディネーター、大学教育センター専任教員 (小川勤、木下真、岡田耕一) 合計 5 名

研修内容:

本年度 3 回目の教育改善研修会を人文学部の教学委員、F D 委員長、F D 委員、学務委員等を対象に実施した。最初に、岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨が説明された。平成 23 年 4 月の大学設置基準改定に伴い、第四十二条には新しい項目として「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が付加されている。また、日本学術会議による「大学教育の分野別質保証の在り方について」についても説明があり、専門教育の在り方について今後対応すべき内容が記されており、3 年後に主要 30 分野で掲げられる予定である「教育課程編成上の参照基準」が公表されることなどの大学教育の質保証についての説明があった。また、



大学設置基準改定に合わせて、これまで整備してきた学部・学科・コースの GP に「社会的及び職業的自立を図るための必要な能力」をどのように取り入れるかをカリキュラムマップ (以下、CUM) やシラバスを用いて今後、検討して欲しい旨、人文学部に対して依頼があった。

次に、兼石教育コーディネーターより、山口大学における出口管理のグランドデザインの必要性が説明された。ここでは、大学の GP は学部の GP を包含し、学部の GP は学科の GP を包含し、更には学科の GP はコース等の GP を包含する関係にあるべきであり、CUM はコース等の最小単位の GP と授業科目との対応関係を示すべきであるとの説明がなされた。これに続いて、人文学部の CUM をチェックした感想や必要な改善点が説明があった。

次に、大学教育センターの小川教授よりカリキュラム・フローチャート (以下 CFC) についての説明と作成依頼がなされた。CFC の説明では、学科・課程、コース等の特性によっては資料に示した手順による作成が困難な場合も考えられるため、その際は学問的な特性に応じて CFC の作成・表示方法を適宜変更してもかまわないと説明された。また、CFC の例として、本学工学部機械工学科、愛媛大学人文学部の各専攻・コースが作成した例が示された。CFC の提出期限については、今後行われる他学部の教育改善 FD 研修会で出される意見を参考にして後日センタから各学部に作業依頼の通知を正式に行いたい旨、説明があった。

次に、人文学部の教員との意見交換や質疑応答が行われた。人文学部の教員からは、今後人文学部として当面取り組まなければならない教育改善について明確にして欲しいという要望があった。また、CFC の作成については趣旨は理解できるが、科目間の関連性や順序性については愛媛大学のような形であれば、CFC は作成可能であるが、GP を意識した CFC の作成は工夫が必要であるという意見があった。

今回の研修会では、「大学設置基準の改定」および「大学教育の分野別質保証の在り方について」からみえてくる今後の大学に求められるカリキュラム改善の方向性を確認し、これらに対応するため

に GP、CUM、CFC をどのように整備すればよいのかについて議論を行った。また、昨年度すでに CFC 作成に関する意見交換がある程度行われていたため、CFC の作成意義などについてはある程度理解が得られていたため、当日の意見交換は比較的スムーズに進めることができた。

また、今回の研修会には、昨年度に比べてより参加者が多かったため、組織的なFD活動を推進する上で有意義な研修会であったと考えられる。

人文学部 2010 年度 F D 研修会

日時: 平成 23 年 3 月 30 日(水) 14:30~16:30

場所: 人文学部大会議室

参加者: 10 名 (内訳): 湯川学部長、アラム、尾崎、岩部、富平、森野、林、脇條、宮原、柏木 合計 10 名

研修内容:

今回の F D 研修会は、本年度の F D 活動を総括するという意味を込めて、行われました。研修会は、以下二つ

の部から構成され、それぞれ 1 時間に及んだ。

① 学士課程における「教育の仕組み」と「教育の方法」について、他大学（広島大学および神奈川工科大学）主催の研修会に F D 委員が参加して受けた内容を中心に、考えてみる、というものです。

② 学士課程における「教育の仕組み」と「教育の方法」について、人文学部で今年度前期に実施したピアレビューから受けた内容を中心に、模索する、というものです。



第 1 部では、まず尾崎 F D 委員が、出張先の広島大学で受けた研修内容を、独自にまとめて参加者に紹介した（資料 3：1 頁～5 頁を参照）。次に、アラム委員が、出張先の神奈川工科大学で受けた研修内容を、独自にまとめて参加者に紹介した（資料 3：6 頁～16 頁を参照）。なおこの研修会（「シンポジウム 大学の授業を改善する」）は、震災直後であったため、実質的に中止となった。その代り、先方の特別な配慮により、アラム委員が予定通り横浜に出向き、計画されていたシンポジウムの説明をきいたり資料を入手したりし、今回の研修会の題材とした。第 1 部の後半部分では、こうした他大学の研修内容に対する、自由な討論と意見交換を行った。

第 2 部では、本年度に学部内で行われた三つのピアレビューを F D 委員が紹介し、授業者からの補足説明とともに、参加者と自由な意見交換を行った。まず、尾崎委員が、「基礎セミナー 1」（授業者：



湯川教員)のピアレビューを紹介し(資料3:17頁~19頁を参照)、続いてアラム委員が「日本語学Ⅲ」(授業者:林教員)と「基礎セミナー1」(授業者:脇條教員)のピアレビューを紹介した(資料3:20頁~26頁を参照)。



平成 23 年 3 月 25 日

人文学部教員各位

人文学部 F D 部会

人文学部 2010 年度 F D 研修会の開催について (通知)

人文学部では今年度、いくつかの F D 活動を実施しましたが、この一年の総括として、「人文学部 2010 年度 F D 研修会」を開催することになりました。ご参加お待ちしております（部分的な参加も歓迎します）。

今回の研修は、互いに関連する、以下 2 つのテーマからなっています。

- ① 学士課程における「教育の仕組み」と「教育の方法」について、他大学（広島大学および神奈川工科大学）主催の研修会に F D 委員が参加して受けた内容を中心に、考えてみる、というものです。
- ② 学士課程における「教育の仕組み」と「教育の方法」について、人文学部で今年度前期に実施したピアレビューから受けた内容を中心に、模索する、というものです。

今回の F D 研修会は、年度末というやや忙しい時期に行うことになりましたが、フレッシュな新年度にフレッシュな新生を明るく迎え入れることにもつながりましたら、幸いです。

研修スケジュール

【日時】 2011 年 3 月 30 日（水） 14 時 30 分～16 時 30 分

【場所】 大会議室

14:30～14:35 開催挨拶（人文学部学部長）

14:35～15:35 第 1 部

- ・ 学士課程における「教育の仕組み」と「教育の方法」について、他大学の試みを通して、考えてみる。F D 委員（アラム、尾崎）より報告。
 - ・ 意見交換
-

15:35～16:30 第 2 部

- ・ 学士課程における「教育の仕組み」と「教育の方法」について、学部内ピアレビューを通して、模索する。F D 委員（アラム、尾崎）より報告。
 - ・ 意見交換
-

人文学部2010年度FD研修会

2011年3月30日

「教育の仕組み」と「教育の方法」について考える

【第1部】 他大学の試みから学ぶ

【第2部】 学部内ピアレビューから学ぶ

人文学部FD部会

人文学部2010年度FD研修会

広島大学教育GP国際シンポジウム 「学士課程教育の質保証と教育内容の革新」 レポート

2011/3/30 尾崎千佳

主催 広島大学教育室
日時 平成23年3月3日-4日
場所 広島国際会議場
参加者 32機関47名

第一部「学士課程教育の質保証」プログラム

- 基調講演① 学士課程教育の構築にむけた現状と課題（文部科学省
高等教育局大学振興課大学改革推進室長・樋口聰）
- 基調講演② カリフォルニア大学バークレー校における学修
を重視した学士課程教育の教育評価の文化の構築（カリフォ
ルニア大学バークレー校・Cynthia Schrager）
- 事例報告① 新世代到達目標型教育プログラムの構築（広島
大学学士課程会議・小澤孝一郎）
- 事例報告② ICUにおける学生の主体的アカデミックプランニ
ングと教育の質保証（国際基督教大学アカデミックプランニ
ングセンター・森島泰則）
- パネルディスカッション 講演者+報告者+コメンテータ（山
口大学大学教育センター・吉田香奈）

基調講演「学士課程教育の構築にむけた現状と課題」ポイント①

【問題の所在】

➤ 大学進学率・大学院進学率の増加

平成22年度の大学院進学率7%は、昭和35年度の大学進学率8.2%にほぼ等しい

➤ 18歳人口の減少を見据えた準備の必要性

平成21—32年度はほぼ横ばいで推移するが、平成33年度から再び減少することが予測される

基調講演「学士課程教育の構築にむけた現状と課題」ポイント②

【近年の動向】

➤ 人材養成目的と成績評価基準の明示義務化

どのような人材を育成するか明確化し、それに沿ったカリキュラムを組み、厳格な成績評価をすること

➤ カリキュラム改革

過去5年間において約9割の大学がカリキュラム改革を実施

➤ 初年次教育の実施

約8割の大学が入学生に対する初年次教育を実施

技能＝文章作法・口頭発表技法・情報処理...

動機＝大学教育とは何か・学問とは何か...

態度＝メンタルヘルス・学修習慣...

基調講演「学士課程教育の構築にむけた現状と課題」ポイント③

【機能別分化と大学間連携】

- 大学の有するさまざまな機能のうち、どこにどう比重を置くか、社会にわかりやすく見せる必要がある

平成17年中央教育審議会答申（将来像答申）の提言による

- 大学の機能別分化は、大学間連携と表裏一体の関係にあり、大学を「面」としてとらえ、複数の大学で同一の教育プログラムを実施することも模索すべきである

山口大学+鹿児島大学の共同獣医学部構想...

四国地域におけるSD拠点としての愛媛大学...

→大学・学部・学問分野の淘汰につながる危険性？

基調講演「学士課程教育の構築にむけた現状と課題」ポイント④

【学士課程教育の構築にむけた課題①】

- 大学のミッションを明確にし、教育の内容と機能をわかりやすく示すこと
- 学校教育法施行規則等の改正による、平成23年度以降の情報開示の必要性

- ・ 教員組織・教員数・教員の業績

山口大学では教員DBがこれに対応？

- ・ 教育課程を通じて修得が期待される知識・能力体系

山口大学ではグラジュエーションポリシー

およびカリキュラムフローチャートの公開が

これに対応？

基調講演「学士課程教育の構築にむけた現状と課題」ポイント⑤

【学士課程教育の構築にむけた課題②】

- 学生の将来を見通した体系的な指導と効果的な支援
- 大学生の「就業力」の育成
 - ・ 近年の就職内定状況の厳しさが提言の背景にある
 - ・ 就職活動早期化・長期化の原因の半分は大学の閉鎖性にある
 - ・ 大学側が学生に身につけさせた力を社会に対してわかりやすく発信することができれば、就職活動早期化・長期化の問題は改善されるはずである
 - ・ 「就業力」とは、資格取得のようなことがらを意味せず、社会で役立つ汎用的な能力のことである
 - ・ 「就業力」というタームの設定は、学生や社会が資格の取得を偏重する流れを牽制するためのものでもあり、大学の存在意義を保証するものとして、むしろ好意的に理解すべきか

基調講演「学士課程教育の構築にむけた現状と課題」ポイント⑥

【学士課程教育の構築にむけた課題③】

- 卒業までに修得すべき能力を明確にし、学修成果を保証するシステムの構築
- 到達目標を設定した授業設計
 - 広島大学「新世代目標型教育プログラム」
 - 山口大学「目的達成型大学教育改善プログラム」

基調講演「学士課程教育の構築にむけた現状と課題」ポイント⑦

【特に強調されていたことから】

- **学士課程教育の構築は、入口の問題として考えるより、出口の問題として考えるべき**
多様な学生が入学してくる以上、出口も多様になっている
- 大学と社会の距離が縮まっている以上、社会と隔絶したところで大学は存在できない
- **社会や企業は、学生が大学で学んだ個別具体的内容そのものに興味があるわけではない。就職活動とは、学生にある負荷をかけ、その負荷を乗り越えてくる人材を採用しようというテストでもある。例えば、大学時代に、各人が、どのように困難や苦手を克服したか、わかりやすく示してほしい**
- 大学と社会との対話の場が必要である。そのために、**卒業生というリソースをよく活用されたい**
山口大学人文学部で学んだどのようなことが、社会に出て、どのように役立ったか。あるいは役に立たなかったか。大学時代にどういうことをやっておけば良かったか...
- **広い意味での「教養教育」の重要性**

神奈川工科大学主催シンポジウム
「大学の授業を改善する」
レポート

ジュマリ・アラム

大学レベルで行われている（模索されている）三つのFD活動の試み：

- ① 「DVD授業ライブラリー」
- ② 「授業評価に対するフォローアップ活動」
- ③ 「授業を教育“業績”として見るための模索」

【DVD授業ライブラリー】

- 全学レベルの「教育開発センター」が、FD活動の一環として行っている。
- 全国の、「ベストティーチャー賞」「教育賞」等を受賞した先生、あるいは大学側から推薦を受けた先生の、実際の授業を、1・2コマ分収録するという企画。
- ここ10年間、約100本のビデオ/DVDが制作された。

- 大学関係者への部分的な配布（有料）を行っている。
- 一見、映像教材（丸善、放送大学、かつてのジェムコ社等が行っている事業）に似ているものと思われるが、現時点では、教材という位置づけではない。「見本/手本」と「評価」という意味合いが重視されている。

【授業評価に対するフォローアップ活動】

- 教育開発センター」が実施する、全学レベルのFD活動（専任200名弱＋非常勤280名）。10年目を迎える。
- 「学生授業アンケート」と、それにこたえるかたちの「各先生による学生宛てのコメント作文」を実施。
- 先生によるコメント集から、みなにも有用と思われるものを選んで編集し、『授業を良くしませんか！！』という小冊子を刊行（年刊）。
- マンネリ化の傾向にある学生授業アンケートを活性化するだけでなく、継続的に、実際の授業の改善に広く役立たせる試み。授業改善に取り組む教員への「評価」と「モチベーションの向上」につながる。「授業改善」を、学生授業アンケートも含めた、一つのサイクル（絶え間ない循環的な活動）として行うこと。

【授業を“教育業績”として見るための模索】

- 大学が教員を通して世に提供するプロダクトは、「研究」と「教育」である。とりわけ学生が得る、もっとも明確かつ直接的な“商品”は、後者（教育）の媒体としての「授業」である。
- しかしながら、教員評価に関する現状の大学制度は、授業を、量のみならず質までを評価の対象にするというシステムを、備えていない。
- 何らかの評価システムが必要と思われるが、その場合、教員自身が、自らの努力で到達した「授業成果」を、“業績”としてアピールすることも必要ではないか。
- こうしたシステムとアピールの仕組みが、大学の授業改善に関する今後の、重要課題であろう。なおアピール方法に関しては、「映像化（DVD媒体化）」は、一つの有力な選択肢と思われる。

第5章 教育学部のFD活動

第1節 授業公開

実施していない。

第2節 学部主催FD研修会

1. DocuWorks の使い方

(1) 概要

日時：平成22年10月20日（水）17時30分～16時00分

場所：教育学部21番教室

講師：富士ゼロックス山口株式会社 山口大学営業課・吉松勉 課長

(2) 研修内容

教職員の日々の仕事の中で、多くの書類を扱っている。最近では、コンピュータ及び情報ネットワークの普及に伴い、電子的に作成された書類を電子メール等により配布・蓄積し利用する環境が整いつつある。多くの書類が電子化される中で、既存の紙媒体で蓄積された書類等をどのように電子的に蓄積するか、課題となっている。紙媒体の書類を電子化することによって、保管場所の確保や再利用等の管理に関わる事務的作業の効率化を図ることができ、教育研究及び事務における効率化・正確化に役立つと期待できる。山口大学では、富士ゼロックス社の複合機及び文書管理ソフトウェア DocuWorks の導入により、紙媒体書類等の電子化及び活用のための情報環境が既に整っている。本研修会では、これらの情報環境の紹介と、複合機の操作方法及び DocuWorks の活用法を紹介する講演を実施した。

以上の講演内容に対して、以下の3件の質疑応答があった。

質問：複合機で電子化された書類の保存場所とアクセス可能な範囲は？

応答：電子化された書類は、いったん複合機内の保存場所（ハードディスク）に蓄積される。その後、DocuWorks によりアクセスし、各自の PC に保存する。学内 LAN に接続されている PC であれば、複合機にアクセスできる。

質問：アップル社のコンピュータへの DocuWorks の対応状況は？

応答：アップル社のコンピュータに DocuWorks は対応していないが、それに代わる Web ブラウザーを用いる方法がある。

質問：電子化した際の著作権の問題は？

応答：電子化した者の責任にゆだねられる。教員が授業中に必要な範囲のみを提示することは可能である。

2. 教育改善FD研修会

(1) 概要

日時: 平成22年11月10日(水) 16:10~17:40

場所: 教育学部23番教室

参加者: 32名

(内訳): 学務委員(教学委員を含む)、FD担当教員、教育学部課程・コース委員、教育学部教務係など合計27名、岩部大学教育センター長、兼石教育コーディネーター、大学教育センター専任教員(小川勤、吉田香奈、岡田耕一)合計5名

(2) 研修内容

最初に、岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨の説明があった。平成23年4月の大学設置基準改定に伴い、第四十二条には新しい項目として「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が付加された。さらに、日本学術会議による「大学教育の分野別質保証の在り方について」において、専門教育の在り方について今後対応すべき内容が記されており、3年後に主要30分野で掲げられる予定である「教育課程編成上の参照基準」が公表されることなどの大学教育における質保証が求められている。また、大学設置基準改定に合わせて、これまで山口大学で整備してきた学部・学科・コースのGPに「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力」をどのように取り入れるかをカリキュラムマップ(以下、CUM)やシラバスを用いて今後、検討する必要がある。学士課程教育の再構築について、今後は学部・学科・課程・コースが自分の専門教育分野だけの教育だけでなく、共通教育として教育学部としてどのような科目が必要なのかを議論し4年間一貫した学士課程教育を学部として考えていく必要がある。

次に、兼石教育コーディネーターより、山口大学における出口管理のグランドデザインの必要性が説明された。大学のGPは学部GPを包含し、学部GPは課程・コースのGPを包含するといった関係から再考すべきである。また、CUMはコース等の最小単位のGPと授業科目との対応関係を示すべきである。教育学部のCUMでは、GPの立て方が少ないコース・選修があり、また、非常に多くの科目があるためか、○付けが行われていない科目が一部ある。(補足:科目数の多いことについては、同じ授業科目でも科目名が異なるものがあり、それらが統合されないまま、今回提示されている状況が教育学部の教務委員から指摘された。これらを統合して考察する必要がある。)

さらに、大学教育センター小川教授よりカリキュラム・フローチャート(以下CFC)についての説明と作成依頼があった。CFCの作成については、課程、コース・選修等の特性によっては資料に示された手順による作成が困難な場合も考えられる。その際は学問的な特性に応じてCFCの作成・表示方法を適宜変更してもかまわない。愛媛大学の教育学部のカリキュラム・マップ(本学のCFCに該当)の事例も参考になる。各学部の教育改善FD研修会で出される意見を参考にして、後日、大学教育センターから学部へ作業依頼の通知を正式に行う。

以上について、教育学部教員と大学教育センターとの意見交換・質疑応答があった。教育学部の教員からは、現在の共通教育の全員出動体制と学士課程教育の再構築の関係やCFCの作成に関してGPとの関係について質問があった。

本研修会では、(1)「大学設置基準の改定」および「大学教育の分野別質保証の在り方について」からみえてくる今後の大学に求められるカリキュラム改善の方向性、(2)これらに対応するためのGP、CUM、CFCの再整備の進め方、(3)共通教育を含めた学士課程教育の再構築の進め方、を考えるきっかけになった。研究会参加者も多く、組織的なFD活動を推進する上で有意義な研修会であった。

3. 「最近の学生の状況と対応について」

(1) 概要

日時： 平成23年3月16日（水）16時50分～17時45分

題目： 最近の学生の状況と対応について

講師： 山口大学学生相談所カウンセラー 今井佳子 先生

場所： 共通教育棟28番教室

参加者数： 約65名

（2）内容

講演に入る前に、FD担当教員より、本研修会についての趣旨説明があった。最近の学生の中には、大学の授業に継続して出席することが困難となり、大学での学業に問題を抱える者が増えつつある。教員としては、学生と面談し励ましながら、卒業に至るようサポートしたいと考える。しかしながら、そのような学生は大学に出てくること自体が困難となっていることも多く、教員が学生と面談することや連絡を取ることさえも困難な状況も見受けられる。このような最近の状況について、まず、山口大学全体としてどのような状況にあるのか、また、教員はどのように学生に対応したらよいのか、その考えるきっかけを得るため本研修会を企画した。

講師による講演の内容は次の通りであった。

講師は、これまで単科の精神病院で常勤職として勤務した後、いくつかの非常勤職を経験し、8年ほど前から、山口大学吉田地区の学生相談所に勤務するようになった。この8年間で、吉田地区の学生相談所において受けた相談件数は年々増加しており、およそ年間200名まで増加している。男女比は同程度であり、性別による多少は認められない。現在、1日当たり2,3件、多くて5件程度の相談を受ける。但し、1年間の中で多い月と少ない月がある。2010年度では、4月が多く（1日当たり12,13件）、5月に一旦減少し、その後、6月に再び増加し、8月は減少するが、後期が始まるころから再び増えるという振動しながら減衰していくような傾向をたどる。

今の学生を理解するために、まずは、彼らの育った時代（1990年頃以降）における世相について考えてみる。まず、1989年に日本で初めてのセクハラ裁判があり、上司から暴言を受けたとして、裁判となった。この裁判の過程で、「心」にスポットが当たることになった。また、1990年代に入り、体罰が非常に問題となり、そのような状況の中で育った学生は怒られることに非常に敏感となっている。1995年には阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件が起こり、特に心のケアが考えられるようになった。スクールカウンセラー（SC）が学校に配置されるようになったのも1995年からである。1997年には大手証券会社が倒産し、バブル崩壊後の不景気な時代背景とも相まって、人々が不安を過度に感じる時代でもあった。実際、自殺者は3万人（1日80人）を超え、賃金は削減、正社員は減少していた。和歌山毒カレー事件が起きたのもこのころである（1998年）。日本全体で、不景気、災害、重大事件など不安を感じずにはいられない時代であった。また、それらに呼応するように、ボランティアも盛んになった。

悩みを抱えている学生は、そのいろいろな悩み・心配事が頭の中で絡み合っている状態に陥っているように思う。カウンセラーの一つの仕事は、そのような状態から問題を整理して見直していくようにアドバイスすることだと思う。また、その整理・見直す場が、学生相談所である。悩み・心配事の内容としては、学生個人がこれまで抱えてきた家庭環境や友人関係に関するものが多い。相談を受けている中で感じるものの一つとして、学生は一人で自分の頭で十分に悩んでいないことが挙げられる。そうすると、すぐに身体に反応が出て・行動化される。すぐに解決したい、面倒くさい人間だと思われたくないと思うためだろうか。希望する大学に入れなかった挫折感や、妥協して入学した山口大学でさえも、大学の学業が満足にいかないという、さらなる挫折感や孤独感、少数派にいる自分という現実、悩みが深刻になっていくのかもしれない。なお、学生支援の変遷や実践モデルに関する「廣中レポート」や「苦米地レポート」の紹介、「悩めない」学生の増加の傾向については、高石によって報告されている（高石、京都大学高等教育研究、2009、15: 79-88）。

引きこもりや連絡がつかない学生への具体的な対応について考えてみる。まず、精神的な病気か？そうでなければ、まずは安心できる。そして、電話よりもメールで連絡を取るようにする。内容は、睡眠や食

事の状況に関する事などがよく、頻度は教員の可能な範囲でよい。毎週が大変であれば、1月に1回程度でもよい。学生が大学に出て来ることができない・連絡がつかないで、困ることは何かというと、現実問題として出席日数が足りなく単位が取れないことや、卒論のゼミができないことなどであろう。そうすると卒業できないことになり、周りの人たちはなんとか卒業できるように励ます。ただ、悩み考え、その結果として退学という結論を出すならば、それでも学生自らが考えて決めたことであり、何かを「成す」という意味では宝物であり成長につながると考える。

ここで、学生からの言い分を紹介しておく。まず、先生から学生へ連絡するときは、電話よりメールにして欲しい。電話だと負担に感じる。また、怒っていないことを伝えてほしい（今の学生は怒られることに敏感な世代）。そして、褒めて褒め殺しにしてほしい。「とりあえず・・・」や「早く・・・しっかりしなさい」、「他の人は・・・あなただけ・・・」などといわないでほしい。簡単にできることをメールで具体的に指示してほしい。また、メール等で連絡してくれていた先生から連絡がなくなると、見捨てられた気持ちになる。返事はしなくてもメールは読んでいるので、先生からのメール連絡は続けてほしい。

日頃、学生対応をしているカウンセラーとして最も心配していることは、ニコニコしている学生、何でも任せられる学生、文句を言わずにやってくれる学生の中には無理している者がいることである。良い子を演じることを強制されてきた者は、無理をしているので、注意が必要である。

学生支援を如何にしていくかと定める。現代は情報が過多の時代であり、今の時代では不安はつもの一方である。東北地方で大きな地震があったが、テレビの好きな者は一日中一人で地震のニュースを見ているだろう。そして、不安感でいっぱいになるかもしれない。閉じこもる者、逃げる者、に対して細やかな学生支援、すなわち一人ひとりに対してひとつ余分な関わりが必要と考えている。また、五感で感じた物を表現するような活動を取り入れることも重要と考えている。大学の中で、教職員とは少し違った、1人の社会人として学生に接したいと思っている。

以上の講演に対して質疑応答があった。質問としては、(1)学生相談所が他の機関と連携してうまくいった例はあるか、(2)無理している学生をどのように見つけて話をしていくか、(3)教育実習等における影響を考えた時の学生に対する対応について、の3件であった。それに対して、(1)他機関と連携してかなりうまくいった例があること、(2)無理をしている学生を見つけ出すのは難しいが、面談をしていく中で、学生の表情をよく見ていくと気付くことがあること、(3)周囲の状況を説明しつつも、その時点での学生の状況・気持ちをくみ取って対処することが必要である、といった回答であった。

最後に、教育学部長より講師に対するお礼の言葉が述べられた。

(3) 参加からのアンケート結果

研修会の内容について、以下の質問項目からなるアンケートを実施した。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. 今回のFD研修会の時間（長さ）及び構成はいかがでしたか？
時間：ちょうどいい・もう少し長い方がよい・もう少し短い方がよい
構成：適切であった・改善すべき点がある
お気づきの点など：2. 今回のFD研修会の内容に関連して、さらに聞いてみたいことなどありましたら、お願いいたします。3. 次回のFD研修会で取り上げてほしいテーマなどありましたら、お願いいたします。4. その他、FD研修についてのご要望やお気づきの点などありましたら、お願いいたします。（学生相談所への要望を含む） |
|--|

以上の質問項目に対する回答をまとめると概ね次のようなものであった。

1. の質問項目については、興味あるテーマであったこと、講演内容について、学生指導の上で参考になるなどの回答が多かった。また、さらに聞きたいということで、もっと長い時間を取ってほしいという意見も1件あった。FD研修会の開催時期を3月ではなく、もっと落ち着いた時期にして欲しいという意

見もあった。

2. の質問項目については、様々な要望や感想が寄せられた。特に目立ったものとして、日々の学生指導に悩みを持つ教員から、学生指導においてどのように学生と接したらよいか相談したいというものが何件もあった。あるいは、過去に学生相談所で相談を受けてもらったことのお礼もあった。特にこの質問項目に対する回答から、教員側も学生指導に悩みを抱えているという状況が分かった。

3. の質問項目については、情報セキュリティー・情報リテラシーに関するものを要望する回答も2件あったが、ほとんどは、今回と同様のテーマを要望するものであった。またそれと関連して、保健管理センターでの状況を聞いてみたいという要望も複数件あった。このことから、FD研修会でのテーマを企画する上では、今回のテーマと同様のものを定期的に計画していく必要があると考える。

4. の質問項目については、次のようなものであった。前者のFD研修についての要望・意見としては、3. の回答と重なる部分が多かったが、FD活動に関する担当部署の明確化と研修会で扱うテーマの設定方法：すなわち学部構成員の要望を事前に調査することの要望もあった。また、後者の学生相談所に対する要望としては、可能な範囲で、学生相談所と学部との情報の共有化・連携、学生相談所の活動の広報を求めるものなどが多かった。

第3節 教育改善に関する活動

平成22年11月10日に実施した教育改善FD研修会において、大学教育センターより、カリキュラムフローチャートについて紹介があった。Graduation Policy (GP)をまとめた表の中で、GPと授業科目との対応関係が整理されているが、必ずしも学生にとって分かりやすいものとはなっていない旨の指摘があった。その後、大学教育センターより、教育学部の各課程・コースにおいてカリキュラムフローチャート作成の依頼があり、それに応える形で、履修フローチャート(カリキュラムフローチャート)の作成に取り組んだ。作成したものを図1～5に示す。

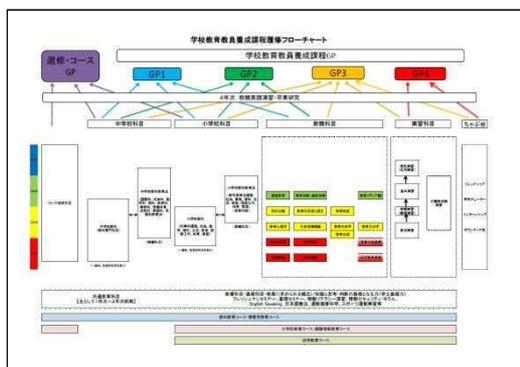


図1 学校教育教員養成課程の履修フローチャート

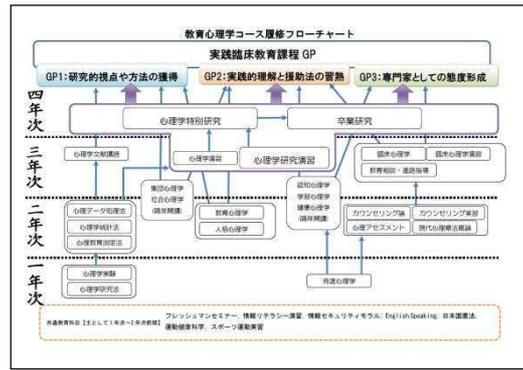


図2 実践臨床教育課程の履修フローチャート

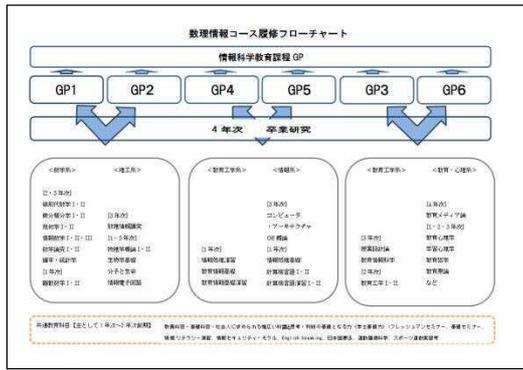
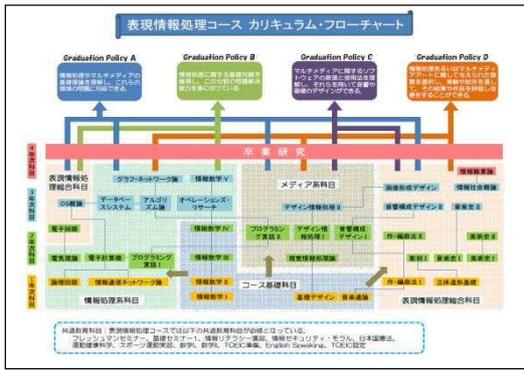


図3 情報科学教育課程の履修フローチャート

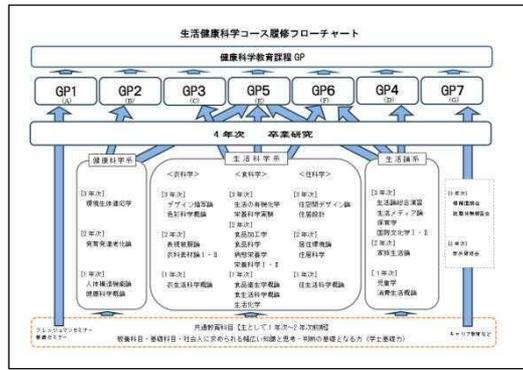
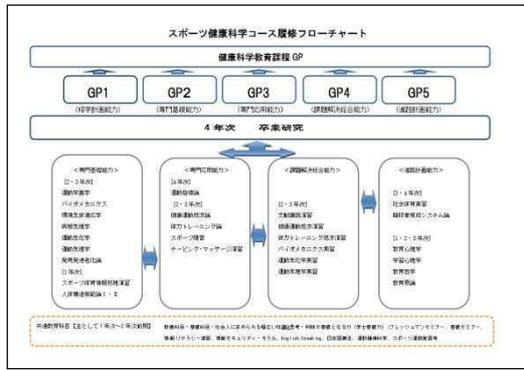


図4 健康科学教育課程の履修フローチャート

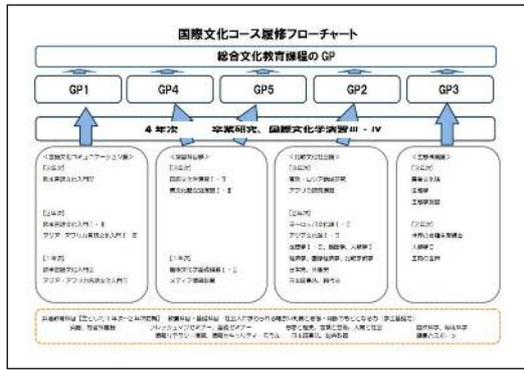


図5 総合文化教育課程の履修フローチャート

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

まず、学生授業評価と教員授業自己評価の実施状況について確認する。年変化も確認するため、表1に2010年度及び2009年度の学生授業評価の実施率を、表2に2010年度及び2009年度の教員授業自己評価の実施率を示した。表1の学生授業評価については、両年とも86%程度の実施率となっており、安定して高い割合で実施されていることがわかる。それに対して、表2の教員授業自己評価について、2009年度が50.4%であったのに対して、2010年度は53.1%となっており、前年度に対して若干改善されている。

次に、学生授業評価の結果を表3に示す。2010年度と2009年度を比較すると、概ね評価値は向上している。質問番号2の時間外学習を問う質問項目については2009年度は2.53であったものが、2010年度は2.65となっており、0.1ポイント以上向上している。2.65は「1時間程度」と「30分～50分程度」の間となり、授業1回あたりの予習・復習時間としては十分ではないが、この評価値が上昇することは良い傾向にあるといえる。また、質問番号6の「板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？」については、2009年度が3.88であったのに対して、2010年度は4.09となり、0.2ポイント以上向上している。これらより、教員は、学生が授業に取り組むための環境づくりの面においても、授業技術の面においても、毎年工夫を重ねている状況を読み取ることができる。

表1 学生授業評価実施率(%)の年変化。2011年5月20日のデータに基づく。

年度	全数(A)		開設科目(B)			対象科目(C)			履修登録者ありの科目(D)			実施率最大
	CABOS登録科目数	実施数	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	
2010	758	583	758	583	76.9	728	583	80.1	648	541	83.5	86.0
2009	749	582	749	582	77.7	734	582	79.3	524	450	85.9	86.9
年度	B&C			B&D			C&D			B&C&D		
	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
2010	728	583	80.1	648	541	83.5	629	541	86.0	629	541	86.0
2009	734	582	79.3	524	450	85.9	518	450	86.9	518	450	86.9

表2 教員授業自己評価実施率(%)の年変化。2011年5月20日のデータに基づく。

年度	全数(A)		開設科目(B)			対象科目(C)			履修登録者ありの科目(D)			実施率最大
	CABOS登録科目数	実施数	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	
2010	758	374	758	374	49.3	728	374	51.4	648	334	51.5	53.1
2009	749	367	749	367	49.0	736	366	49.7	524	262	50.0	50.4
年度	B&C			B&D			C&D			B&C&D		
	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
2010	728	374	51.4	648	334	51.5	629	334	53.1	629	334	53.1
2009	736	366	49.7	524	262	50.0	518	261	50.4	518	261	50.4

表3 教育学部全体における学生授業評価の結果。「N」は全回答数を表し、「平均」は評価値（回答選択肢の括弧内の数値）を学部全体で平均した値を示す。アンケート質問用紙には評価値は記載されていない。2011年5月22日のデータに基づく。

質問 番号	質問文 回答選択肢	2010年度		2009年度	
		N	平均	N	平均
1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上）(5) 2. 80～90%（12回～13回）(4) 3. 60～80%（9～11回）(3) 4. 40～60%（6～8回）(2) 5. 40%未満（6回未満）(1)	11,710	4.71	11,574	4.68
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上(5) 2. 2時間程度(4) 3. 1時間程度(3) 4. 30分～50分程度(2) 5. 30分未満(1)	11,700	2.65	11,568	2.53
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)	11,704	4.36	11,569	4.21
4	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？ 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)	11,725	4.37	11,576	4.22
5	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1) 6. この授業は該当しない(評価値なし)	11,720	4.23	11,551	4.07
6	板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？ 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1) 6. この授業は該当しない(評価値なし)	11,731	4.09	11,555	3.88
7	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)	11,727	4.28	11,552	4.10
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1) 6. 答えられない(評価値なし)	11,723	3.98	11,540	3.79
9	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)	11,744	4.17	11,531	4.02
10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)	11,602	4.32	11,384	4.16

第5節 FD実施経費報告書

年度当初に配分された予算は、FD研修会・講演会のための講師謝金・旅費と、学生授業評価のためのアンケート用紙等の配布のための事務的経費（印刷・封筒）であった。しかしながら、FD研修会については、学内の講師による研修を実施したため、旅費等の経費支出はなかった。また、学生授業評価のための経費については、再利用によって経費を節減した。これらのように、本年度のFD活動について要した経費はなく、年度当初に配分された予算の全額を大学教育センターに返納した（表4）。

表4 FD活動の実施経費一覧。

FD研修・FD活動の内容	経費の用途	執行額	FD活動の効果
学生授業評価及び教員授業自己評価	なし	0	教員が授業を振り返ること、学生からの評価を知ること、授業改善につながった。
FD研修会（DocuWorksの使い方）	なし	0	教育研究及び業務において、効率を高めることに寄与する複合機及びソフトウェアの利用法について知ることができた。
教育改善FD研修会	なし	0	履修フローチャートの基本的な考え方を学び、各課程・コースにおいてそれを作成することができた。
FD研修会（最近の学生の状況と対応について）	なし	0	最近の学生の状況を知ることができ、学生指導の参考となった。

第6節 来年度の課題

まず、授業公開についての課題を述べる。教育学部では、過去に授業公開を行っていた時期もあったが、現在は実施していない。次年度においては、授業公開の実施について再検討する必要がある。

次に、FD研修会等から読み取れる課題は次のようなものである。本年度は学部主催のFD研修会として、学生相談所カウンセラーの方を迎えて最近の学生の状況を伺う機会を設けた。この研修会については、本章の第2節3.に記したように、多くの教員が関心を持って聴講した。この課題については、多くの大学でも認識されていることであり、教育学部としても継続的に取りあげていきたいと考えている。

学生授業評価及び教員授業自己評価から読み取れる課題として、授業外学習時間の確保に関するものがある。学生授業評価の結果から、学生の授業外学習時間が増加傾向にあるものの、まだ不十分な状況が見られた。それに対して、教員授業自己評価の自由記述欄には、授業外学習時間が少ないとする記述がある一方、それを確保するための工夫により一定の成果を得ている教員もあった。これらの教員の取り組みを教員全体で共有できるような取り組みの実施が課題として考えられる。

第6章 経済学部のFD活動

第1節 授業公開(ピア・レビュー)

経済学部では学科単位で授業公開を実施するとともに、学科ではなくゼミ単位でFD活動を実施した。前者の学科単位では経営学科、国際経済学科、経済法学科および観光政策学科において授業公開を実施した(後掲するように経済学科では大学院の授業科目として授業公開を実施した)。以下、4つの学科における授業公開並びに1つのゼミにおけるFD活動について紹介する。

経営学科

藤田 健(経営学科准教授)

1. 担当者：藤田 健
2. 授業科目：流通論
3. テーマ：ロジスティクス
4. 日時：2010年6月29日(火) 3・4時限(10:20~11:50)
5. 場所(教室)：第2大講義室
6. 参加人数：2名(中田範夫教授、野村淳一准教授)
7. 内容

以下では「内容」の部分を報告する。

(1) 授業内容

授業内容は「流通論」のなかの「ロジスティクス」に関する内容であった。はじめに、ロジスティクスを考えるとどのような効果が発生するのかをFedex社の戦略にもとづいて説明し、授業の中でロジスティクスを考えるきっかけを提示した。Fedex社は物流専門家であるため、流通論に適した事例として「ファッションセンターしまむら」(以下、「しまむら」と記す)を取り上げ、事例の説明をおこなった。

しまむらは1953年に北関東で生まれた小さな衣料品店であったが、現在は1280もの店舗を展開するファッション衣料専門のチェーンストアである。郊外幹線道路沿いに立地し、比較的小規模な店舗を作るが、そのなかには4~5万点もの商品を品揃えしている。しまむらの特徴は商品の扱い方にある。しまむらは1アイテムの在庫を2着までとし、「売り切れご免」を基本とする。その代わりに、新商品を次々と投入し、常に店内が高いファッション性を維持するようにしている。このように商品がすぐになくなり、新しい商品との入れ替わりの激しい点が、しまむらの特徴である。

しまむらが回転の高い商品を扱おうとすれば、在庫の移動や保管をうまく管理しておく必要がある。そこで取り入れられた考え方がロジスティクスである。しまむらは、中国で生産された商品を日本の店舗に運ぶまで、輸送・保管・荷役・流通加工といった物流活動を一貫して管理している。それでも、日本から中国へ商品を1つ運ぶのにコストは59円しかかからない。このように、しまむらは、物流活動をうまく管理して確実に店舗まで在庫を届け、しかも低コストで実施できるように物流の仕組みをうまく設計している。

以上のような事例を見た上で、物流機能について順番に説明を行った。物流機能は①輸送、②保管、③包装、④荷役、⑤情報の5つである。第1の輸送はトラック・船などの輸送機関を、②保管については通常倉庫と冷蔵倉庫について、③包装については物流の出発点になるとともに販売方法を規定すること、④荷役については人肩荷役と機械による荷役を説明し、⑤最後に情報によってこれら4つの機能が結ばれる

ことを説明した。そのうえで、これらの諸機能を統合的に管理し、活動とコストをコントロールする考え方がロジスティクスであると締めくくった。

(2) 工夫したと考えている授業方法

以上のような授業内容を、すべてパワーポイント資料を用いて実施した。パワーポイント資料は約 30 枚程度利用した。内容は文字だけでなく、図、写真を多用し、一部はアニメーションを入れ込み、プロセスや変化を理解しやすいように工夫した。

この授業で、特に工夫を凝らした点は次の 3 点である。第 1 は映像資料を多用できる環境なので、学生がよく見聞きする現象・製品・店舗を多く取り込んだことである。主な事例はつかみの「Fedex」と本論の「しまむら」だけであるが、主要な概念を説明するときにはコカ・コーラ、卵パック、しょうゆなど具体的な製品を取り上げ、店舗での陳列やどのように運ばれているのかといった現象面を見せるようにした。

第 2 はスライドとスライドのつながりを明確にすることである。パワーポイント資料は前後のスライド間のつながりがわかりにくいいため、①授業の冒頭に本日の授業の流れを説明するとともに、②スライドの切り替え時には、出来る限り、以前のスライドとのつながりを強調した。また、③全体の流れを理解してもらえよう、学生には穴埋め式のプリントを配布した。

第 3 は理論と事例を可能な限り対応させていることである。事例を取り上げる授業だと、事例を聴いて「面白かった」とは答えるが、理論が理解できたかどうか怪しいものである。そこで、理論と事例を出来るかぎり一致させ、事例がわかれば理論も自ずとわかり、(試験前などで)理論を考えるときに事例も頭に浮かべられるよう工夫した。要するに、事例が単に「興味を持たせる小話」に矮小化されないように授業全体を組み立てたことが、最も工夫を凝らした点である。

(3) 他の教員からの意見

1) 空欄のある(穴埋めする)プリントを配布することについて

配付資料として「空欄のある(穴埋めする)プリント」を配布していたが、これは興味深い。パワーポイントを使用しているからと言って、すべての資料を配付してしまうと、学生が文字を書かなくなる。そうすると、授業の内容や大切な箇所が、覚えられない。自分の授業では計算をさせるので具体的な数字が出てくるので、学生が寝ることはあまりない。しかし、論理を追う授業をするときは十分な資料を準備すると学生が寝てしまうし、すべて板書をするようにしてみると、学生の負担が重くなる。だからこそ、論理を追う授業では、ときどき、重要な言葉を書かせるようにわざと穴埋めにするのは興味深いアイデアだと思う。

2) パワーポイントで見えにくい文字がある

パワーポイントファイルの赤字が見えにくい。色を変えて赤字で表示することは重要だと思うのだが、逆に見えにくいのは問題だ。教室にあわせた色設定が必要だと思われる。赤字で書かれた「荷役」が見えなかった。

回答→教室の光の具合や機械の特性によるが、毎年不満が出ているので、その都度確認するように心がける。

3) 空欄のある(穴埋めする)プリントの様式・内容について

① 配付資料を A3 サイズにしているのはなぜか。A4 サイズだと小さすぎるという理由であれば、B4 用紙を使わないのはなぜか。

回答→学生の持っているフォルダを見ると、ほとんどが A4 サイズである。そのため、フォルダのサイズに合わせて、大きなサイズの用紙にした。過去に B4 用紙を配布したこともあったが、フォルダからずりりと抜けてしまい、プリントが落ちているのをよく見かけた。

② 空欄を埋める作業をさせるのは良いのだが、もう少し学生が考えるような問題なども出せないのだろうか

か。簡単な「クイズ」的な設問でもあれば、学生が考えるようなものがあるだけでも、授業中に眠ったりケータイを見たりすることはない。

回答→穴埋めをさせる以外に、問題を出すことも重要だと思う。今後の改善点としたい。ただ、穴埋めプリントは、ある意味、解答を提示していることになるので、試験勉強などはしやすいと思う。しかし、このパワーポイントを写してプリントの穴埋めをしさえあればいい、という発想になってしまいかねない。そこで、教科書も読んでもらい、教員の話聞いてもらうことで、はじめてプリントの意味を理解してもらえるように授業を組み立てている。

4) 大教室での着席ルールについて

座席は後ろがあいていたところを見ると、着席ルールがあるのか。第2大講義室を使用しているのに、授業注のこの静けさは見たことがない。

回答→授業の最初から7・8回は、確実に着席ルールを伝えている。第2大講義室であれば、中央の通路を基準の一つ飛ばしで座ること、後ろ3列は座らせないというルールを完全に徹底している。そして、ルールを守らない学生がいれば、その都度怒っている。

以上

国際経済学科

2010年度ピア・レビュー報告書

石川耕三（国際経済学科講師）

1. 実施内容

日時： 2011年1月18日（火） 5・6時限（10：20-11：50）

場所： 経済学部 C-202 教室

科目： 経済発展論（2010年度後期）

担当者： 石川耕三

2. 参加者

中田範夫 教授

吉川信将 教授

油納健一 教授

藤田健 准教授

梶原健佑 准教授

3. 参加者から寄せられた意見

下記をご参加頂いた先生方から頂戴した意見を、報告者が要約したものである。

良かった点

- ・声も通り、早口にもならず聴き取りやすい。
- ・パワーポイントのスライドの枚数が適切である。
- ・豊富なデータ・資料が用意されている。
- ・復習部分が授業時に設けられている。
- ・パワーポイントに穴埋め部分があり、学生が手を動かす仕組みが組み込まれている。

悪かった点

- ・学生を前方に着席させるように誘導すべきではないか。
- ・レジュメの穴埋め部分についても、学生に解答させるなど、双方向性を取り入れるべきではないか。(一方的な講義である)
- ・レジュメを使っての解説について、重要な点について学生に考えさせる時間がもうすこしあった方が、学生の記憶の中に授業内容が残りやすいのではないか。(授業の進行が速足である)
- ・配布プリントのスライドに番号が付されていないため、どのスライドを説明しているかわかりにくい。

4. 報告者による今後の改善方針

- ・できるだけ学生の方を向いて講義を行う(学生に語りかけるようにする)。また、適宜感想表などを配布して、学生の疑問点や興味を持った点などをのちの授業において取り入れる工夫をする。
- ・学生に、できるだけ前方に着席するように誘導する。
- ・パワーポイントの穴埋め部分は今後も積極的に活用し、学生に適宜質問しながら進めるようにする。

以上

経済法学科

平成22年度経済学部「ピア・レビュー」実施報告

梶原健佑(経済法学科准教授)

実施日時:平成22年11月18日 8:40-10:10

授業科目:憲法Ⅱ

担当教員:梶原健佑(経済法学科准教授)

実施教室:経済学部C202教室

参加教員数:1名(担当教員除く)

授業内容:日本国憲法20条(信教の自由と政教分離)について

投影・配布資料:別紙

授業の概要:日本国憲法20条が規定する信教の自由と政教分離につき、パワー・ポイントを用いながら講義した。次のように展開した。①人権保障の性格のひとつとしての義務免除について、他の憲法条文との比較から確認し、具体的な判例・裁判例を概観。②政教分離とは何か、何のためのものかをそれぞれ歴史的経緯、比較法的観点から説明。③政教分離違反をいかなる基準で判定するか、最高裁判所の判例理論を複数の事件を挙げて説明。平成22年1月20日の大法廷判決にも言及。④信教の自由保障のための義務免除と政教分離が衝突する可能性について、裁判例を挙げて説明。なお、講義冒頭には当日、新聞の一面に触れられていた東京高裁の違憲判決(参議院選挙における一票の格差)について、時事問題解説を行った。

1. 担当教員が授業の実施にあたって工夫していること。

(1) 学生がただ聴くだけにならない講義

学生には毎回、レジュメを配布しているほか、判例集、教科書、六法の携行を指示している。今回の講義では、判例集に掲載されていない最新判例の判決文・新聞記事を載せた資料を配付した。パワー・ポイントのスライドをそのままコピーして配布すると、学生に必死さがなくなるため、配布のレジュメは講義の進捗計画のみを示すとともに、資料集の役割を兼ねた、シンプルなものとしている(原則として、A3で1枚)。学生には適宜、六法、判例集、教科書、レジュメ、スライドへの注意を促し、自ら手を動かしながら学習させるようにしている。

毎回、次回扱う判例を確認してくるよう宿題として指示してある(判例集の該当箇所をレジュメに記載)。

(2) 学生にとって見通しのある講義

学生の集中力を途切れさせる要因は、教員が扱っている話題が何のために話されているか理解できない点や、途中で講義の筋を見失ってしまう点等にあるようだ。これに対応するため、毎回、講義冒頭に「本講の見通し」というスライドを見せて、講義の粗筋(着地点)を示すようにしている。レジュメにも「本講のポイント」欄を設け、講義の肝がどこにあるかを意識させるようにしている。

講義の最後には「本講のまとめ」というスライドを設け、教員が90分間で何を習得して欲しかったのかを示すようにしている。

(3) 視聴覚教材を用いた講義

文字だけを迫らせる講義では学生が興味・集中を持続させることができないようにみえるため、パワー・ポイントのスライドには、必要に応じて画像(写真・イラスト)や動画を用い、学生がイメージをもって講義内容を理解できるよう工夫している。

(4) 教科書を読むだけでは不足する知識を伝える講義

教科書には執筆時点までの情報をコンパクトにまとめなければならないという限界がある。これを補うことができる点に、「講義」のメリットのひとつがあると考えられる。そのため、教科書出版後の最新判例・裁判例の動向や新しい法制度の紹介、時事問題の憲法学的解説等を、時間と教員の能力が許す範囲で盛り込むようにしたいと考えている。

2. ピア・レビュー参加教員のコメント(要旨)

(1) レジュメ、映像資料等を利用して、学生が目と耳から内容を理解しやすい授業だった。

(2) 私語も殆どなく、学生はおおむね真面目に講義を聞いていた。

(3) 「一票の格差」といった時事問題を冒頭で取り上げたのは良いことだ。

(4) 学生が教室の後ろの方にばかり座っている。

3. 反省点

(講義担当者として)

(1) スライドに動画を用いるのは後期になって初めてであった。「前期にほぼ同様の機材を用いた教室(C201)ではうまく利用できていたので大丈夫だろう」と考えていたところ、当日になってケーブルを繋いでも音が出ないというトラブルに直面。応急的にPCのスピーカーから流れる音声をマイクで拾って急場を凌いだ。事前に機器をチェックしておく必要性を痛感したところである。

(2) 毎回、1回の講義で内容的まとまりのあるテーマを完結させるよう心掛けている。しかし、積み残してしまうことがしばしばあり、今回も、冒頭に時事問題解説を行ったためもあって1つの重要判例を時間内に終わらせることができなかった。学生に不親切なスピードアップも避けねばならず、時間配分は大きな課題である。出席していただいた先生からは、この点、「あまり気にする必要はない」とのコメントをいただき、少しだけ安堵している。

(3) 一方的に教員が喋るだけの講義となっており、学生との間に双方向の遣り取りのある講義になっていない点は以前から気になっている。今後の課題としたい。

(4) 学生が前の方に座っていないとの指摘は、その通りである。無理矢理、前に移動させる必要も感じないので放ってある。当面は講義進行に妨げとなるほどの私語はないが、これが放置できないときには、学生の座席指定も検討したい。

(評価委員として)

参加教員が少なかったことには、講義題目、時間帯、広報等、幾つかの理由が考えられる。次年度以降は効果的・実質的なFDとなるよう、学科内での担当者選定方針を含め、必要な検討を行っていききたい。

観光政策学科

FD 活動報告（観光政策学科）

鴨川 啓信（観光政策学科准教授）

1. 担当者： 鴨川 啓信
2. 授業科目： 観光英語
3. テーマ
科目全体： 「観光」に関連する様々な局面で用いられる英語を学習する。
対象回： 観光スポットの紹介文（英語）を用いて、情報収集の訓練と表現の研究を行う。
4. 日時： 2010年10月28日(木) 1・2時限（8:40-10:10）
5. 場所（教室）： B202 教室
6. 参加人数： 教員 4名（学生 24名）
7. 内容

以下は「内容」について報告している。

【授業の概要】

「観光英語」は、FD 公開授業担当者鴨川と観光政策学科教員武本とが共同で担当している科目であり、各年度それぞれが担当する内容に関して情報・意見の交換を行っている。担当者間では、限定的ながら毎年 FD を行っていると言える。今回 FD 活動として公開した授業は、観光のための情報収集および情報発信の基礎を学習目標としている鴨川担当部分である。ここでは、インターネットの HP 等で実際に使用されている英語表現を教材とし、速読による情報収集の訓練と、使用されている英語表現を応用した情報発信の練習を行う。

FD 対象回は、観光スポット（具体的には、英国ロンドン市にある寺院）を紹介・宣伝する英文の読解を中心課題としていた。90分の授業は以下の通りに進行した。

- (1) 導入： クイズ 山口市瑠璃光寺の英語紹介文（英文ガイドブックから引用）を学生に速読させ、場所を特定させた。（観光スポットを紹介する英文の読解） [10分]
- (2) 前回の課題の総括： 前の回に提出された課題（ホテルの紹介文を英語で書くもの）を学生に返却し、代表例を紹介。重要事項・注意点の説明を行った。 [10分]
- (3) 表現の解説： 2と関連して、重要な英語表現（この回は分詞構文）を解説。 [10分]
- (4) 観光スポットの情報収集：
学生を3名のグループに分け、各人に異なる観光スポットの紹介文を提示
 - 1) 個々の学生が、自分が担当する場所についての情報収集（読解） [10分]
 - 2) グループ内で、それぞれが担当する場所の情報を紹介 [15分]
 - 3) 各グループで場所ごとの特徴を比較し、最良の場所を選択 [10分]
- (5) 表現の解説： 4と関連して、特徴的な英語表現や役に立つ表現の確認。また、3で解説した表現を再確認。 [15分]
- (6) 授業のまとめと課題の回収 [10分]

【授業の工夫】

読解による情報収集の訓練を授業の主目的としており単調な作業の連続となりかねないため、授業の組み立てにおいて次の点に工夫を凝らした。

- ・90分を複数のパートに分け、テンポ良く進行することで単調にならないよう留意する。
- ・学生によるグループワークを導入して、緊張感・集中力を維持できるようにする。
- ・実際に使用されている英文を教材とし、学生が興味を持てるようにする。
- ・解説で取り上げる内容が反映されている教材を使用し、授業の焦点を明確にする。

【FD 出席者からのフィードバック】

FD 活動出席者の反応としては、複数パートでの授業進行と教材の工夫（「教材選びに相当の時間をかけているだろう」点も含めて）に関して、高評価を得られた。また、グループワークの導入についても「学生が楽しんで」参加していると良い評価を得た。

一方で、朝一コマ目の開講であるため、遅刻して来る学生が多いことを取り上げ、「対応が必要だろう」という指摘も受けた。今後の課題としたい。また、経済学部および観光政策学科では、TOEIC の利用を積極的にすすめていることもあり、「TOEIC 試験と関連させてもよいのではないか」という意見も出された。授業担当者は、特定の試験制度に対応するより、総合的な英語運用能力の向上を目標としているが、受講生の要望があるようならば、この点についても今後検討しよう。教室の設備に関して、使用したのが机椅子が固定されている教室であったため、グループワークに不向きではないかという意見も出された。可能なら次年度以降対応したい。

ゼミ活動としての FD 活動

【FD 活動報告書】

鍋山祥子（経済学科准教授）

計画

演習（ゼミ）教育の向上を目的として、演習に所属する学生の継続的な世代間交流のあり方を考える

目的

世代を超えたゼミ生の交流を活発化し、継続的なものとすることによって、在校生にとっては将来の社会における自分の姿をイメージすることが容易になり、積極的な就職活動や在校時の学習意欲につながる。

また、卒業生にとっては「山口大学経済学部へ所属していた」という帰属意識を継続することになり、結果的に経済学部にとって、社会的ネットワークの活性化につながる。

昨年度の成果

昨年度、他のゼミにおける世代間交流（例えば定期的なゼミ同窓会の開催や、ゼミ OGOB による就職説明会の実施や、定期的な連絡先の収集など）のしくみをアンケート調査によって明らかにした。

その結果、卒業生との連絡を不定期に取っている教員は多いものの、定期的に会合などを開いている

ゼミは少なかった。しかし、在学生の就職相談などで、卒業生に個人的に協力をしてもらっているケースもみられ、在学生と卒業生を繋ぐポイントはやはり「就職」にあるとも言える。さらに、重要なのは、在校時からの学年間の交流だという指摘を受け、ゼミ生同士を繋ぐしなを、在校時からおこなっておくことの重要性を認識した。

今年度の成果

1. 実施回数

昨年度の成果を受け、今年度、鍋山ゼミにおいていくつかの試みをおこなった。FDの実施回数としては合計4回で、在学生へのニーズ調査のための座談会が2回で、4年生との就職活動相談会が1回、卒論報告会が1回である。

2. 参加者

在学生：鍋山ゼミ3年生12名／4年生8名／卒業生3名

3. 在学生に対するニーズ収集

在学生は就職に関する不安が大きく、就職活動を経験した学年のゼミ生に対しては、就職活動の相談を希望しており、既に社会人となって働いているゼミ生に対しては、就職活動そのものへのモチベーションに繋がるという意見が出た。

4. 在校中の先輩との繋がり強化

まずは、在校中のゼミ生同士の関係作りに着手した。昨年度の意見交換会でのアドバイスを取り入れ、ポイントとなる就職活動と卒業論文にテーマを絞り、それぞれを経験した4年生から3年以下のゼミ生が話を聞く、という形式で相談・報告会を開いた。その感想は、「未知の世界だったものが身近に感じられた」「先輩たちの話がリアルで参考になった」など、同じゼミの先輩から聞く話ならではの身近さが高評価だった。また、先輩のゼミ生たちも、依頼を快く引き受けてくれて、自分が経験した就職活動や卒論執筆の話の後輩たちに語ることによって、また、自分の経験を伝えていける喜びを感じられたようだった。

5. 既卒のゼミ生との繋がり

卒業していった学生が、卒業後もゼミ所属の意識を持ち続けること、また、在校生にとっても、社会で活躍する先輩がいるという認識を持つこと、それらを可能にするために、定期的に連絡を取り合えるような仕組みを考えた。

具体的には、ゼミ卒業生の連絡先（実家の住所・携帯電話番号・携帯アドレス）をデータベース化し、年に1、2回の「ゼミ通信」を発行し、送付することによって、まずは卒業生との繋がりをシステムの的に作ることにした。

今年度は、その前段階として、これまでの卒業生の実家に対して、現住所確認の郵便物を発送し、返信を待つことにより、情報の更新をおこなった。現時点で、まだ作業は続いている。

6. 作業過程での効果

在校生と一緒に仕組みを考え、また実際の作業をゼミ生にゼミ活動の一部として担ってもらうことによって、卒業後も繋がっていく山口大学経済学部やゼミとの繋がりを、ゼミ生自身が感じ取っているようで、このような作業自体に意味があるともいえる。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成22年11月17日(水)、16時より約1時間30分にわたって大学教育機構との共催による教育改善FD研修会を実施した。この日は経済学部 の定例教授会の開催された日で、研修会開催の開始時刻が教授会の直後ということで教授会へ出席していたほとんどの教員が研修会へ出席した。そのため、研修会は盛況であった。

平成22年度 教育改善FD研修会（経済学部）

日時: 平成22年11月17日(水) 16:00～17:30

場所: 経済学部会議室

参加者: 47名 (内訳): 学務委員(教学委員を含む)FD委員、教育学部課程・コース委員、教育学部教務係など合計43名、岩部大学教育センター長、兼石教育コーディネーター、大学教育センター専任教員(小川勤、岡田耕一)合計4名

研修内容:

大学教育機構との共催による教育改善研修会が経済学部の教学委員、FD委員、学務委員、各課程・コース委員等を対象に実施された(なお、この研修会は大学教育機構としては本年度5回目のものである)。当日は教授会の後で開催されたため昨年に比べて多くの教員が参加した。最初に、岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨が説明された。平成23年4月の大学設置基準改定に伴い、第四十二条には新しい項目として「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が付加されていることが述べられた。さらに、日本学術会議による「大学教育の分野別質保証の在り方について」についても説明があり、専門教育の在り方について今後対応すべき内容が記されており、3年後に主要30分野で掲げられる予定であり、「教育課程編成上の参照基準」が公表されることなどの大学教育の質保証についても説明があった。今後はそれらに注意を払い、経済学部・学科のGPを再検討して欲しいことや、大学設置基準改定に合わせて、これまで整備してきた学部・学科のGPに「社会的及び職業的自立を図るための必要な能力」をどのように取り入れるかをカリキュラムマップ(以下、CUM)やシラバスを用いて今後、検討して欲しいという要望があった。最後に学士課程教育の再構築に関する話があり、今後は各学部・学科が自分の専門教育分野だけでなく、共通教育を含めた学士課程教育を経済学部としてどのようにするのかを考えていく必要があることが明らかにされた。

次に、兼石教育コーディネーターより、山口大学における出口管理のグランドデザインの必要性が説明された。

大学のGPは学部GPを包含し、学部GPは学科GPを包含し、さらに学科GPは課程・コースGPを包含するといった関係から再考すべきであるという見解が示された。また、CUMは学科等の最小単位のGPと授業科目との対応関係を示すべきであるとの説明がなされた。経済学部のCUMをチェックした感想については、学科におけるGPの数が少ないことが明らかにされた。これに対して経済学部の教員からは学生になるべく幅広い科目を履修させているため、学科の人材育成の特性が明確でなりつつある。このため、どの学科でもGPの数が必然的に少なくなるという見解が示された。

次に、大学教育センターの小川教授よりカリキュラム・フローチャート(以下CFC)についての説明と作成依頼がなされた。CFCの説明では、学科の特性によっては資料に示した手順による作成が困難な場合も考えられるため、その際は学問的な特性に応じてCFCの作成・表示方法を適宜変更してもかまわないと説明があり、愛媛大学の人文学部総合政策学科のカリキュラム・マップ(本学のCFCに該当)の事例などが示された。なお、CFCの作成については、各学部の教育改善FD研修会で出される意見を参考にして後日大学教育センターから各学部へ作業依頼の通知を正式に行いたい旨、説明があった。CFCの作成については、上記で述べたように現在、経済学部の各学科としての特性が表しにくい状況にあるため、学科ごとに

大学教育センターから示されたような CFC を作成することは難しいという見解が示された。しかし、国立大学として、保護者や学生だけでなく、納税者である国民に対して経済学部の教育内容と GP との関係をなんらかの形で明らかにする必要はあるため、今後、学部で CFC の作成に向け、可能な形で前向きに検討して欲しいと要望が示された。

今回の研修会では、大学教育機構の意図が明確になったこと、並びに意見のすりあわせにより課題や問題点が浮き彫りになったことが効果としてあげられる。経済学部の教育は理科系学部と違って必ずしも卒業時の目的が細分化されていない。たとえば、5 つの学科が存在するがそれらの学科の垣根は低い。2 年から開始する演習が経済学部では最も重点を置いた授業科目であるが、その選択においても授業科目の体系性や一貫性よりも自由度を重視している。たとえば経済学科に所属する学生が他学科に所属する教員の演習を選択するというケースも珍しくない状態である。このような学生は卒業単位取得のためには経済学科の科目が中心（ただし、それほど多くない）であるが、大学生活の中で最も多くの時間をかけて勉強する科目はそれ以外の学科の科目ということになる。

ただし、商業教員養成課程と経営学科の中のコースである職業会計人コースに属する学生の場合は少し事情が異なる。後掲の CFC でもわかるようにこれらの課程とコースは目的が明確であり、授業科目がこれらの目的を達成できるように配置されている。理科系学部の CFC はこのように作られているのではないかと想像している。

いずれにしても、大学教育センターと経済学部教員が相互にそれぞれの立場から意見を出しあったことは、今後、組織的な教育改善を全学的規模で推進する上で有意義な研修会であったと考える。

第 3 節 教育改善に関する活動

ここでは前節で紹介した FD 研修会を経て経済学部教務委員会を中心にして作成された CFC を紹介する。ただし、これらの CFC は経済学部において学科レベルで初めて作成されたものである。したがって、今後これをベースにして改善が行われる可能性が高い。

FD 研修会等で示されたモデルケースでは学年別と内容が 2 次元になっていたように思う。このうち内容は基礎、応用、実践といったものです。モデルケースでは、1 年次からこれら 3 つの分野の内容が配置されています。

これに対して、経済学部では必ずしもモデルケースのようになっていません。むしろ、学年ごとに 1 年は基礎、2 年で応用、3 年次以降で実践といった科目体系だと思ふ。

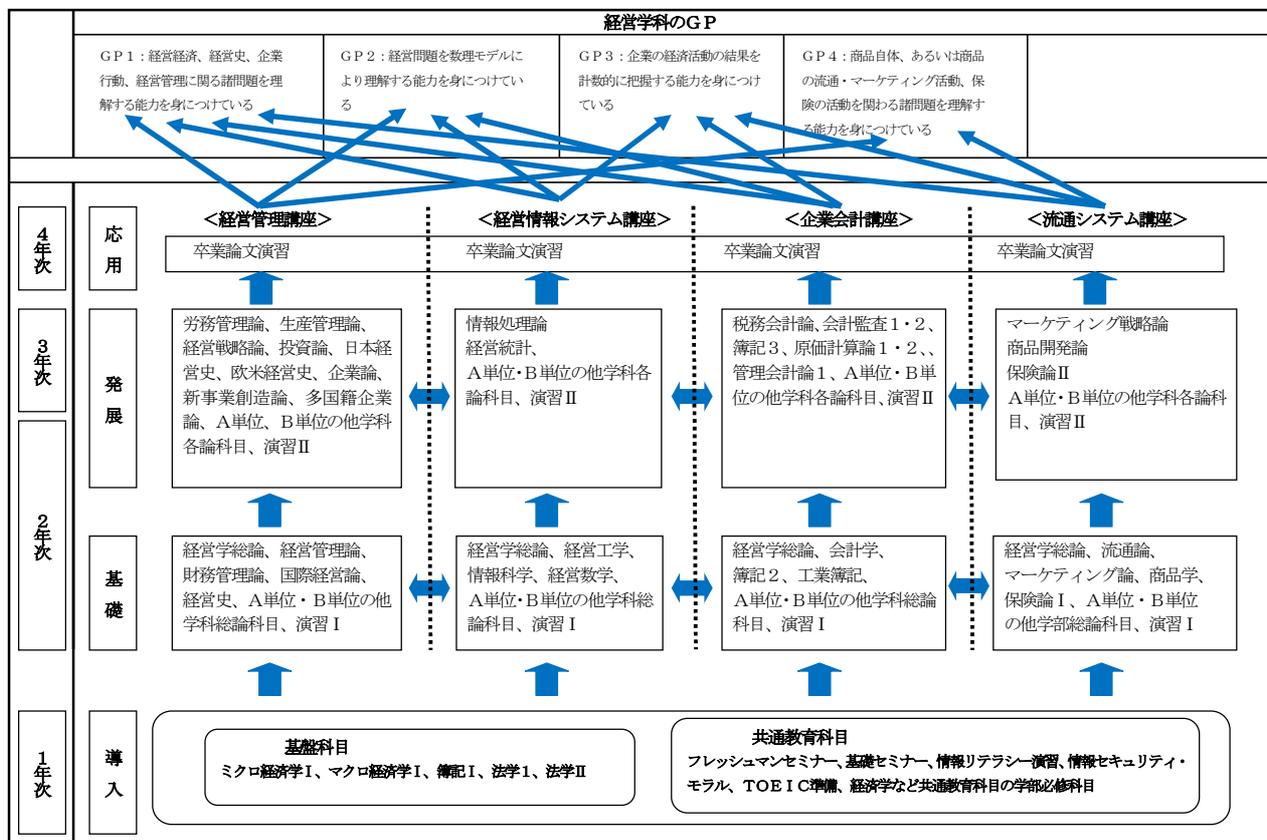
このように経済学部の CFC は他学部のものとは異なっていると考えます。ただし、商業教員養成課程と職業会計人コースのカリキュラムは経済学部の中では異色です。その理由は、課程やコースの名前から推測されるようにこれらの課程とコースが極めて明確な目的を有しているからです。前者は商業教員、後者が会計士や税理士を目指しているからです。このように設立目的が明確なために配置される授業科目もそれらのために必要な科目群で構成されることとなります。

経済学部 経済学科 カリキュラム・フローチャート
2011年2月17日版

		GP1(経済計量のGP) ミクロ経済学、マクロ経済学、マルクス経済学の理論と計量的な分析を含む応用能力を身につけている。	GP2(経済政策のGP) 経済政策、政府の財政活動、金融経済、地域経済の理論と現実的な問題の分析能力を身につけている。	GP3(経済社会のGP) 労働経済や社会保障を含めた社会経済の現状と社会経済の歴史的変遷を理解し分析する能力を身につけている。
4年次	応用	卒業論文演習		
		経済計量の各論科目	経済政策の各論科目	経済社会の各論科目
3年次	発展			
2年次	基礎	経済計量の総論科目	経済政策の総論科目	経済社会の総論科目
1年次	導入	専門基礎科目(ミクロ経済学、マクロ経済学、簿記、法学などの基盤科目) 共通教育科目(基礎セミナー、情報リテラシー演習、TOEIC準備)		

経済学部 経営学科 カリキュラム・フローチャート

2011年3月31日版



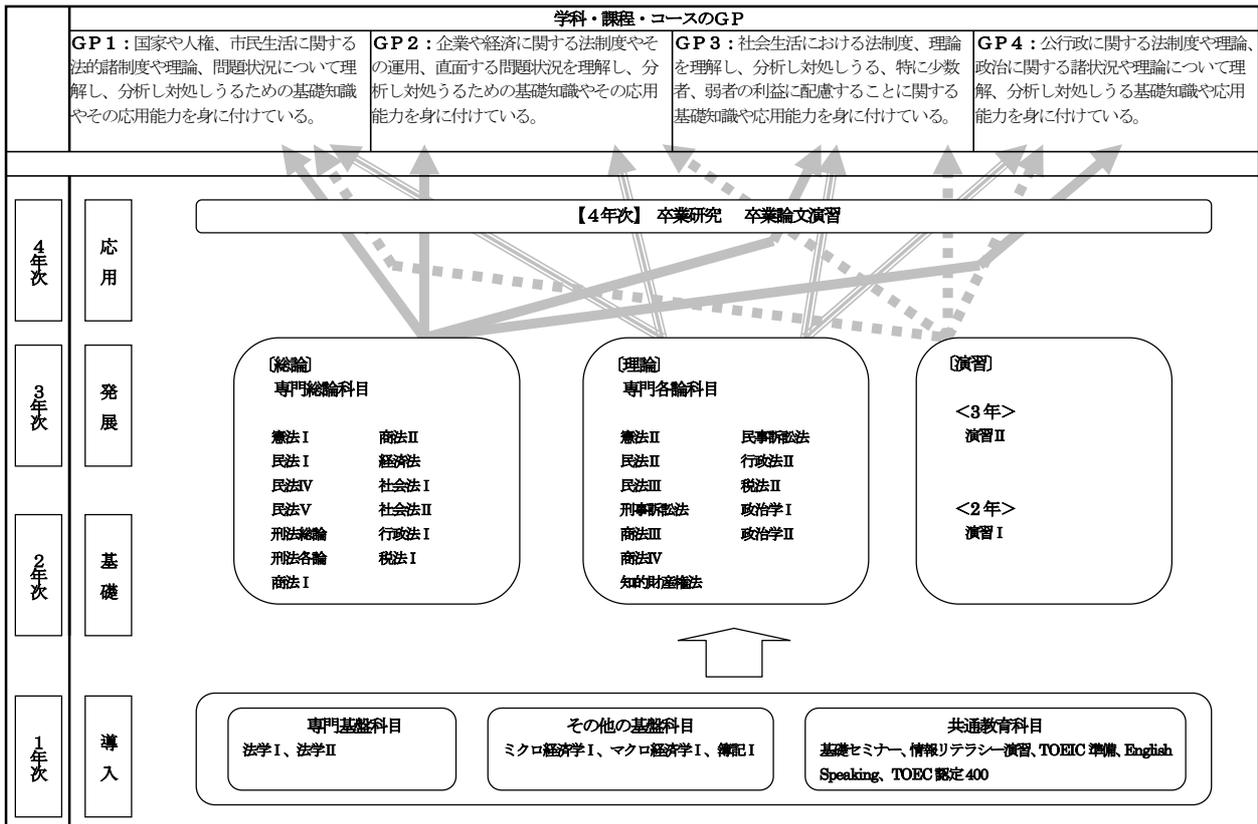
経済学部 国際経済学科 カリキュラム・フローチャート 2011年2月16日版

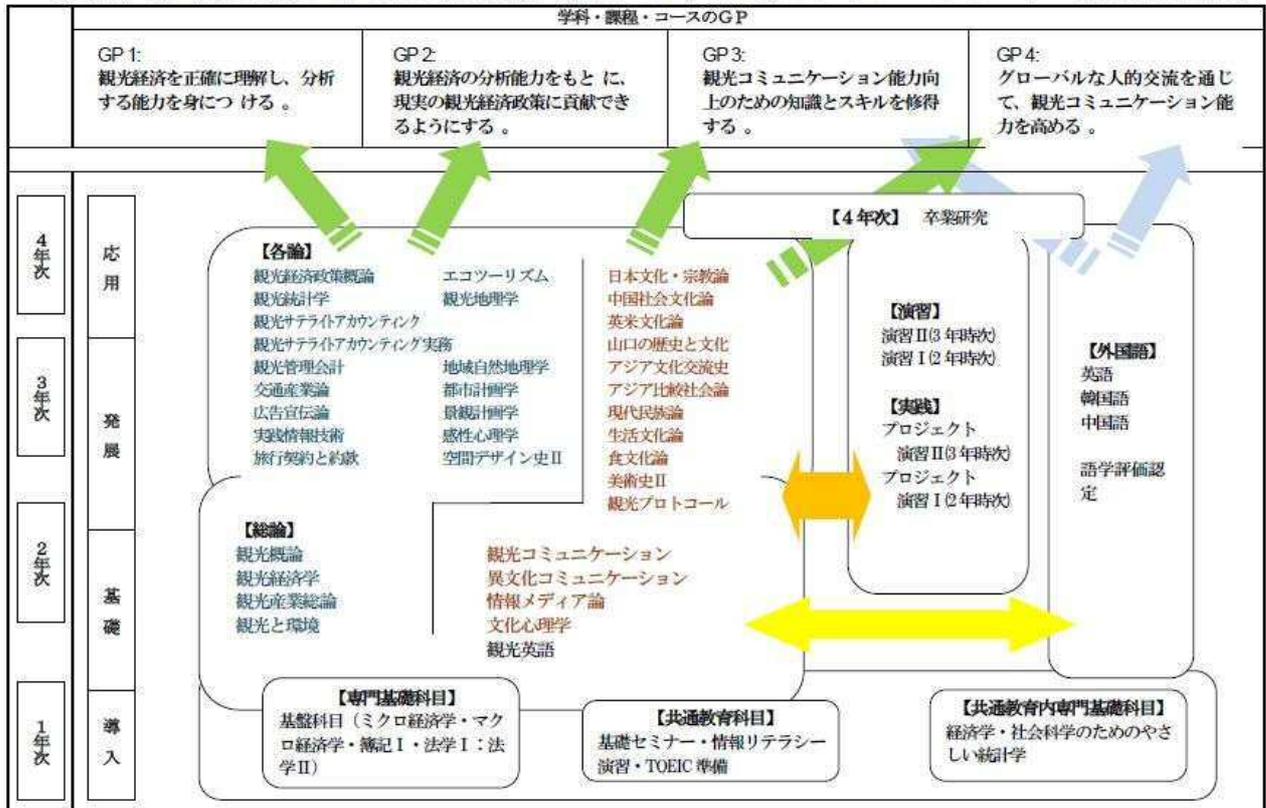
		GP1(国際経済システムのGP) 国際貿易、国際金融、国際運輸などの国際経済システムを理論的に理解する能力を身につけている。	GP2(国際協力のGP) 欧米を中心とした国際関係と、途上国を中心とした経済発展、および国際協力の現状を分析する能力を身につけている。	GP3(東アジア経済のGP) 中国、韓国をはじめとした東アジア近隣諸国の経済・社会・歴史について分析する能力を身につけている。
4年次	応用	卒業論文演習		
3年次	発展	国際経済システムの各論科目	国際協力の各論科目	東アジア経済の各論科目
2年次	基礎	国際経済システムの総論科目	国際協力の総論科目	東アジア経済の総論科目
1年次	導入	専門基礎科目(ミクロ経済学、マクロ経済学などの基盤科目) 共通教育科目(基礎セミナー、情報リテラシー演習、TOEIC準備)		

経済学部 経済法学科

カリキュラム・フローチャート (案)

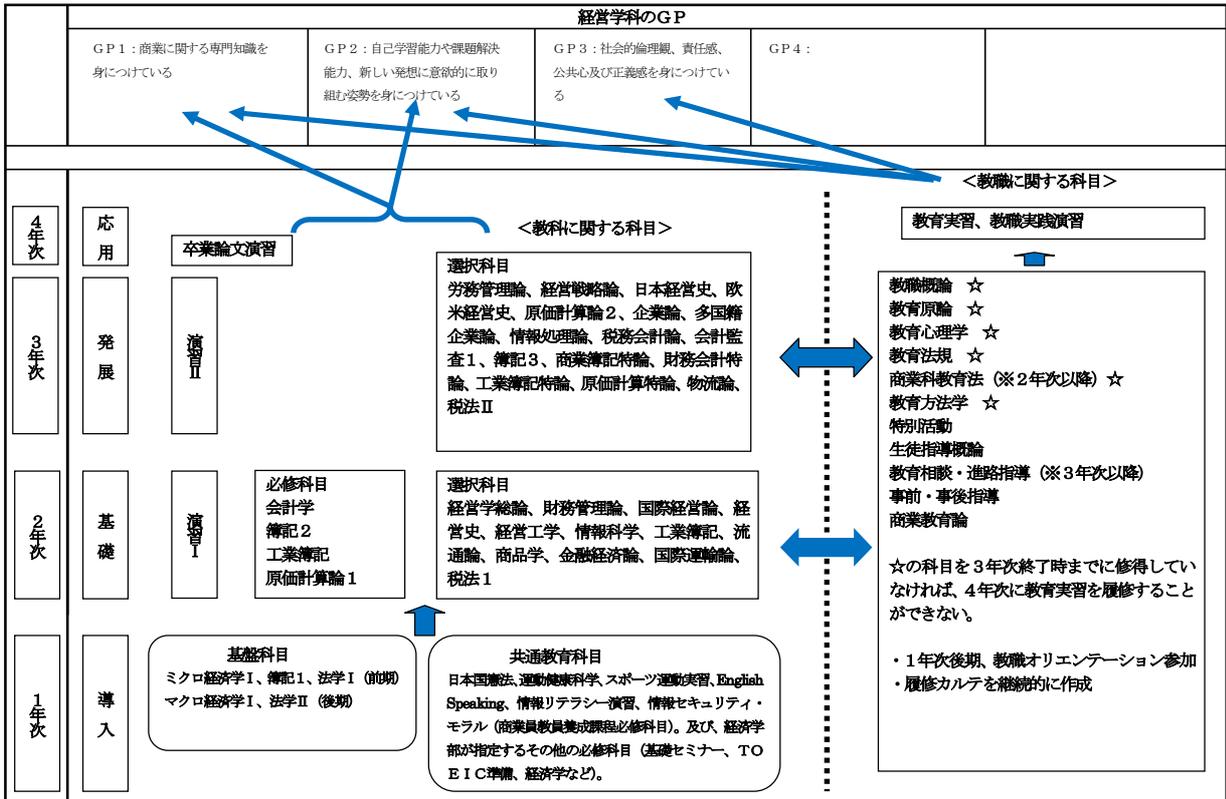
2011年3月6日版





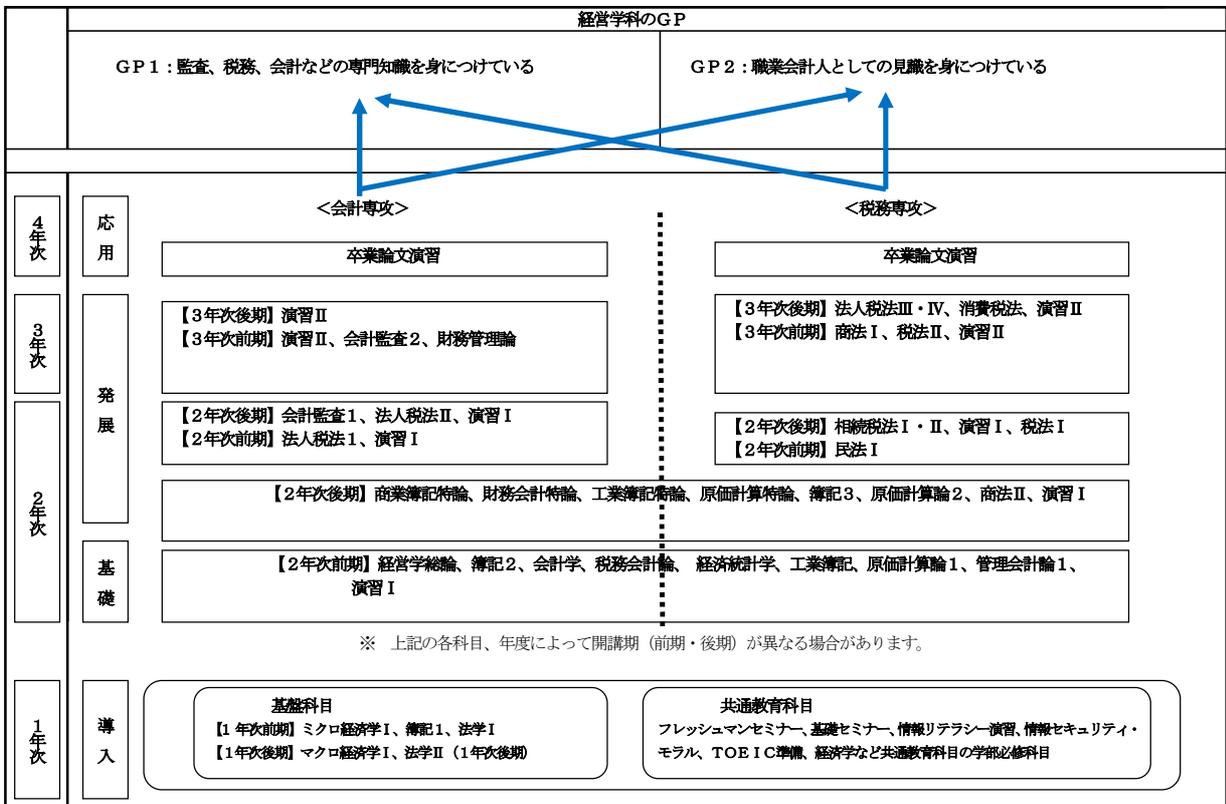
経済学部 経営学科 商業教員養成課程 カリキュラム・フローチャート

2011年3月31日版



経済学部 経営学科 職業会計人コース カリキュラム・フローチャート

2011年3月31日版



第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

学生授業評価について経済学部の実施率は88.0%である。学部については2005年度から89.6%、90.4%、89.1%、92.1%、87.9%そして88.0%へと推移している。今年度の数字は昨年度よりも高いが最近5年間の平均(89.8%)よりも低い状況である。

さて、学生授業評価の中身については詳しく記述する余裕がないので1点のみ指摘しておきたい。2010年度前期FD報告書作成資料「試験の公正な実施に関するアンケート調査」の中で経済学部関連として報告された内容である(出典：平成23年度第1回教学委員会資料)。授業科目は「法学Ⅰ」であり、この授業の試験方法について複数の学生から意見が表明されている。授業は前期と後期に実施されている。学生から前期と後期の試験について次のような意見が出ている。「前半クラスは教科書の持ち込みありなのに後半は教科書を持ち込めないこと」、「2の方はテキスト持ち込み可で簡単な設問だったのにbは持ち込み不可で論文形式だった」、・・・。

「法学Ⅰ」は経済学部の基盤科目であり、上記のような学生による意見が出ることは好ましくない。試験方法や試験問題の難易度について検討し、学生の不信感が生まれないように対処したい。

次に、教員による授業評価についてである。今年度の経済学部の入力率は、35.9%である。学部については2007年度から38.9%、47.5%、31.3%そして35.9%へと推移している。今年度の入力率は昨年度のそれよりは高いが、ここ3年間の平均(39.2%)よりも低い状況である。

第5節 FD 実施経費報告

平成22年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
系経済学部	ピア・レビューの実施(国際経済学科)	図書	22	教材づくり・授業方法に関する図書を購読し、授業方法の改善を行った。それを踏まえ、ピア・レビューを行い、授業方法に関する理解を深めた。
	ピア・レビューの実施(経営学科)	図書	22	ピア・レビューのあと、授業内容・方法をめぐって議論をおこない、授業の進め方・資料の作り方などについて理解を深めた。
	ピア・レビューの実施(経済法学科)	図書	22	教材づくり・授業方法に関する図書を購読し、授業方法の改善を行った。それを踏まえ、ピア・レビューを行い、授業方法に関する理解を深めた。
	就職活動相談会(ゼミ)	記録媒体他	6	在学中のゼミ生同士の学年間交流の促進
	卒論報告会(ゼミ)	記録媒体他	3	在学中のゼミ生同士の学年間交流の促進
	卒業生データベースの作成(ゼミ)	切手・文房具	31	今後、卒業生と在学生在を繋ぐための発送物を郵送する基盤の作成
	ピア・レビューの実施(観光政策学科)	図書	22	ピア・レビュー後に参加者から示された意見を取り入れ、教材研究を拡充するために図書を購読し、授業の改善に取り組んだ。
		計		128

第6節 来年度の課題

まず、授業公開については教員の参加者を増やしたい。公開授業を実施されている方々の労に報いるためにも何とかしたいと考えている。これに関して思うところがある。それは、数年前までは各教員が1年間に1度は大学で開催されるFD研修会へ出席することが義務とされていた。しかし、各学部・研究科主体にFD活動を実施するようになって以来、参加の意識が低くなってきたように思う。各教員に参加を強制することは必ずしも好ましいこととは思わないが、参加の意識を高めていくことを検討したい。

次に、平成22年度に初めて各学科・課程・コースでCFCを作成したが、このCFCをベースにしてより完成度の高いものにしたいと考えている。ただし、経済学部のカリキュラムは突き詰めれば経済学士と法学士取得のためのものであり、商業教員養成課程と職業会計人コースを除けば、極めて自由度が高いものとして作られている（したがって、GPも他学部のものと比較して包括的な内容である）。従って、理科系学部のCFCとは異なったものになることが予想される。

最後に学生授業評価・教員授業評価についてその実施率・入力率は他学部と比較して特に低いとは思わないが、どちらの評価についてもここ数年間の学部平均値と比較して低い状態である。これらの評価を実施することは、学生や父兄、そして社会に対する説明責任に関連するので、これらの実施率・入力率の向上に努めたいと考える。

平成21年度経済学部評価委員会委員

角田由佳・藤田 健・石川耕三・梶原健佑・鴨川 啓信・中田範夫(委員長)

第7章 理学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 数理科学科のピア・レビュー

(1) 実施科目「数理科学入門セミナー」(数理科学科1年生授業)

日時：11月22日(月) 5・6時限

この授業は、内藤・宮澤・吉村・村井・鍛冶の5人の教員が担当し、それぞれの担当者ごとに教室に分かれて個別指導で行われる。

この5人の担当者のそれぞれに郷間・中内・木内・菊政・幡谷の5人の教員がピアレビューを行った。

2. 物理・情報科学科のピア・レビュー

2.1 物理コース

(1) 実施科目「物理学実験 III」

1) 概要

①日時：平成23年1月17日(月) 5・6・7・8時限

②対象学生：物理・情報科学科物理学コース3年生 (29名)

③授業の概要：あらかじめ設定された実験テーマから、半期で2テーマの実験を行う。2テーマの実験終了後に、実験結果のプレゼンテーションを行う。各テーマごとに実験レポートを作成し、数回の添削を経て、実験レポートとして完成させる。

授業の到達目標：物性物理学分野の基本的な物理現象やそれを観測する実験手法、原理・概念を説明できるようになる。決められた実験目的に対して、具体的な実験方法や手順を計画し、それに従って実験を行い、得られた結果をグラフや表にまとめ、考察し、結論を導き、報告する、という一連の作業を行うことができるようになる。

④授業担当教員：野崎浩二・藤原哲也

レビュアー：物理・情報科学科教員7名+教育コーディネータ

⑤レビューの方法：実施後にアンケート調査により、感想、コメントを収集。

2) レビュー結果

学生の私語を防ぐ対策をとる。実験成果報告を学生同士で評価させる等、学生が相互の実験結果に興味を持つような工夫をする。

(2) 実施科目「物理学実験 A」

1) 概要

①日時：平成23年1月20日(木) 5・6・7・8時限

②対象学生：物理・情報科学科1年生 (60名)

③授業の概要：力学、光学、熱力学、電磁気学等の分野に渡って設定された基礎的な実験テーマについて、自らの手で実験を行い、測定結果の処理、解析をし、その結果について考察を加え、実験レ

ポートを作成する力を養うことを目指している。実験は原則として二人一組で行い、また、実験は授業計画の所に記したA～Mの12テーマをローテーション表（オリエンテーション後に掲示）に従い、毎回1テーマずつ行うという形で実施する。

授業の到達目標：様々な物理現象を実験的に検証することを通して、物理学に対する基礎知識を習得し、深く物理現象を理解する。

実験に必要な基礎的な技術や解析方法を習得し、レポートにまとめて報告する力を養う。

④授業担当教員：野崎浩二・輪島清昭

レビュアー：物理・情報科学科教員3名、教育コーディネータ、高等学校教諭3名

⑤レビューの方法：実施後にアンケート調査により、感想、コメントを収集。

2) レビュー結果

ティーチングアシスタントの教育が良く行き届いており、レベルの高い指導を行っていた。テーマ設定や教科書が充実していたとのコメントがあった。

2. 2 情報科学コース

(1) 実施科目：情報科学基礎演習（2年生学生演習発表会）

日時：2011年1月28日（木）7・8時限

場所：理学部第15講義室

対象学生：2年生

担当教員：吉川学教授、松野浩嗣教授

レビュアー：内野英治、西井淳、末竹規哲、川村正樹

授業の目標・概要

○対象学科・学年：理学部物理・情報科学科2年、授業区分：演習

○概要：コンピュータサイエンスやコミュニケーションを理解する上で手助けとなる基礎的なテーマについて実習を行う。8つの実習テーマを用意しているが、2つの実習を終えるごとに、そのテーマについてパワーポイントを用いて発表を行う。合計、4回の発表会を行うことになる。できなかった、あるいは仕上がりのよくなかった人のために再発表会を実施する。

○授業の到達目標

知識・理解の観点：基本的なプログラミングができるようになる。コンピュータの基本構造について説明ができる。コミュニケーションにおける信号について説明できる。

思考・判断の観点：シミュレーションを用いた思考の意義が理解できるようになる。

態度の観点：他者の発表を見て、質問することで聞き手としての姿勢を養う。

技能・表現の観点：発表を通して表現する能力を身につける。

○授業計画

8班が8つの実習テーマを巡回する。2回実習を行うごとに、1回発表会を行う。パワーポイントを用いて発表する。全員が1回発表する。実習テーマは、(1)増幅器と周波数、(2)光通信の基礎、(3)VB、(4)パソコン計測 (GPIB)、(5)逆ポーランド記法、(6)ダイオードとトランジスタによる論理回路、(7)電子回路シミュレーション、(8)ワンボードマイコン。

○レビューの方法

発表会を聴講し、学生の発表に対して、質問・コメント等を行った。

レビュアーによる授業に対する意見・コメント

[学生の発表について]

○（質問）「1000H」の読み方は？（後半の発表なので、間違えていることには問題がある）

○（質問）主記憶装置とは何を指しているのか？レジスタと間違えていないか？

- (質問) 信号波形をみると少し歪んでいるようだが、それは何故か。
- (コメント) 聞き手を意識したプレゼンの手法や話し方を出来ない学生多い。
- (コメント) 答えを説明しようとする一方で、答えを導く過程を説明することに注意が向かない学生が多い。 など。

[検討会]

分野内でE-mail 会議を開き、検討会を行った。

(参加者：吉川学、山本隆、内野英治、西井淳、末竹規哲、浦上直人、川村正樹)

○低学年のうちから、授業で発表会(プレゼン)を行うことはコミュニケーション技術を向上させる上で非常に意義があり、今後も続けていく必要があると思われる。また、他の授業でも積極的にプレゼンの場を増やした方がよいと思われる。

○質問者を指定していたが、これだと一度質問すれば、後は聞いていなくても良い状態になる可能性があり問題だ。

(前回(平成18年度)のときには、自由質問にしていたが、質問する学生がほとんどいないので、指定するようにしたという経緯がある。この指摘は、他の指摘にもあるように、発表会後に発表内容を提出させることで改善できると思われる。)

○聴衆になっている学生全員に、プレゼンについての評価やコメントをさせ、発表者にフィードバックするようにすると、より批判的に自分のプレゼンの内容を工夫できるようになるのではないか?

(この意見は、前回(平成18年度)に情報科学基礎演習のFDをやったときにも指摘されたことで、出来ていないことである。確かに効果があると思うので、実施を検討したい。) など。

3. 生物・化学科のピア・レビュー

3.1 生物学コース

(1) 実施科目：細胞生理学

1) 概要

①日時：平成22年12月22日(水) 3・4時限 場所：理学部22番講義室

②対象学生：生物・化学科、生物学コース3年生(約40名)

③授業の概要・到達目標

(授業の概要)：細胞骨格の主要タンパク質である微小管はチューブリンダイマーの重合により管状構造を形成する。脳からの抽出方法、インビトロでの重合特性、ダイナミックインスタビリティについて解説した。微小管は細胞内では中心体から伸長し、その活性はガンマチューブリンが担っていることを説明した。その後、微小管が関与する生理現象として、分裂装置、色素顆粒の運動、軸索流動について説明した。さらに微小管が細胞の形態維持に重要である例として赤血球と植物の例を上げて説明した。細胞の電子顕微鏡写真の見方としてステレオ写真による立体視の方法についても解説した。主にパワーポイントを用い、図を多く用いることで分かりやすい説明に心がけた。また、立体視についてはプリントを配り実際に体験させた。

(授業の到達目標)：細胞骨格の主要タンパク質である微小管について、その分子レベルの構造およびそれが重合する分子機構を説明できるようになる。また、微小管が関与する細胞の生理作用について例を挙げて説明できるようになる。

④担当教員：祐村恵彦、レビュアー：宮川 勇、村上柳太郎

⑤レビューの方法： 授業を参観し、学生の様子も見ながら評価した。

2) レビュー結果

平成22年12月22日(水曜日)10:20分より、祐村恵彦教授の細胞生理学を参観した。授業はパワーポイントを使用して、ステレオ写真の立体視の説明に続いて、本題の微小管の構造と機能についての説明がなされた。パワーポイントの図は大変分かりやすく、また、適宜なされる説明の内容と話す速度、声の大きさも適切であると思われる。授業の合間と最後にはレポート課題が出され、授業時間外学習を促進するのに効果的である。受講生の手元にプリント等の資料があったかどうかを確認していないが、資料があればより効果的であると思われる。

3. 2 化学コース

(1) 実施科目:有機構造化学及び演習(生物・化学科 化学コース3年生・選択科目)

授業担当教員:石黒勝也・村藤俊宏・藤井寛之(ピアレビュー当日の担当は石黒)

実施日時:2010年5月27日(木)9・10時限 16:10~17:40(プラス 延長 15分程度)

実施場所:理学部11番講義室

参考書:「ジョーンズ有機化学」上巻(東京化学同人)

資料:プリントを配布,問題や解答例・解説はホームページ(<http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~env2/>)に掲載

授業の目標・概要

授業内容:化学分野では、昨年度、教育改善の取り組みの一環としてTAによる補習を多数実施し、その経緯を元に、今年度のカリキュラムを一部変更した。有機化学では、「有機構造化学及び演習」を3年前期に、「有機反応化学」を後期に移動させ、それぞれ「構造」および「反応」に関する総まとめを行い、演習を大幅に取り入れることとした。この「有機構造化学及び演習」では、従来の授業内容(分子のスペクトル)を後半にまとめ、前半で分子の構造に関する演習を行った。ピアレビュー当日の授業は、前半の演習の最終回であった。

毎回の演習では、前日までに解答をレポート提出させ、授業開始時にチェックしたレポートを返却し、授業で何人かの学生を指名し説明させる形式を取ったが、問題数・授業時間の制約から、当たるのは受講生41名中の一部に限られてしまう。そこで、この最終回では、2008年度FD研修会「第57回中国・四国地区大学教育研究会」で紹介された「協調演習」を参考としたグループワーク演習を試行した。全学生が問題ごとに5~6人のグループに分かれ、グループのリーダーを中心に問題を解いてパワーポイントにまとめ、授業では、グループ内で交代しながら全員が発表を行った。質問に対しては、グループ全体の責任として全員が誰でも解答できるようにしておくこと、との指示の下、当日はレビューアーの先生方からも質問をしていただき討論を行った。

レビューアー:4名(西井淳・山崎鈴子・村藤俊宏・藤井寛之)

レビューアーによる授業に対する意見・コメント

化学分野だけではなく、他学科からもレビューに来ていただき、貴重なご意見をいただいた。

1. 授業内容についての指摘

- ・有機化学の基本的な考え方を問う内容で、適切と考えます。
- ・理解度の高い学生にとっては、実力を高めることのできる大変良い内容だと思います。発表形式であることを考えると、課題数が少し多すぎる感じがしました。
- ・毎週、これだけの課題を翌週に提出させているのでしょうか?自習にかなりの時間をかけているのではないかな?かなりの時間が必要なのでは?と思いました。
- ・少人数クラスであれば、学生はかなり力がつくだろうと思います。

2. 授業の進め方についての指摘

- ・各グループで学生同士が互いに協力する様子が見られ良かったです。
- ・「答を説明する」のではなく「答を導く過程を説明する」と指導してみても良いでしょう。

・集中力が持続できていない（下を向いて眠っている）学生もいるので、できる限り時間内に終わる方が良いように感じました。

・発表の途中で先生が次々に質問されるのですが、それが長すぎることがあり、聴衆がフォローしていない様子が見うけられました。先生の解答はまじめに聞いていましたが、授業の最後の方では、解答の説明すら明らかに聞いていない（ボーッとしている）学生も見うけられたので、時間内に終わった方が教育効果が高いように思います。

・自分の担当が終わった人の中で数名が力尽きて放心状態になっていました。

・質問の答がすぐに得られない時は、もっと短時間で切り上げた方が時間のロスが少ないのでは？

3. その他改善を要する点の指摘・感想

・せっかくのプレゼン演習ですので、プレゼンテーションのマナー（声の大きさ、話しかける方向、ポインタの指し方等々）も注意されてはどうでしょう。

・学生同士でプレゼンの採点をさせると、プレゼンの良し悪しを理解する上でもよいかもせれません。

・発表者の中に声が小さい人がおり、先生とは話しが通じているのは分かるのですが、後ろの方では全く聞きとれなかったです。

・質問者は講義室の後ろにいた方が、質問者と発表者の会話が全員に聞きやすいかもしれません。

・プレゼン資料で緑色の字が見つらなかったです。

レビュー後の改善

レビューアーの先生方のご指摘のように、今回は「全員参加」を目的としてグループごとに人数分の小問を含む問題を用意したため量が多くなり、プロジェクタによる発表を用いても時間内に終わらなかった。学生は、グループで問題を解き教えあうことよりもパワーポイントの資料作りの方に苦勞し、また、授業中も自分達の発表にばかり気が取られ、他のグループの発表に対しては集中力が欠けていたようであった。

後期の「有機反応化学」においても「グループワーク演習」を行ったが、この反省をふまえ、問題数を減らし、正解が一つではなく、何通りもの方法の中から最も適切な方法を提案するタイプの課題で演習を行った。自分の解答を用意してきた学生の間では議論ができたようだが、全く提案できない学生は加わることができない。

ピアレビューでコメントいただいたように、担当教員を増やし少人数クラスで演習が行えればきめ細やかな指導が可能であるが、現状では困難であり、できるだけ効率的に、受講者全員が参加していることを実感できるようなやり方を模索したいと考えている。

4. 地球圏システム科学科のピア・レビュー

(1) 実施科目：岩石学Ⅱ（後期 2年生必修科目）

担当教員：大和田正明 教授

日時：2010年12月7日（火）10：20－11：50 理学部11番講義室

出席学生：2年生 24名

レビューアー：金折、今岡、宮田、澤井、阿部、福地、鎌田、永畷、永尾

授業の目標・概要

<概要> プレートテクトニクス の進展とともに変成作用が生じる仕組みやその広がり次第に明らかにされてきた。変成岩は変動地帯に広くかつ普遍的に産出し、複雑な地殻変動の履歴をもつ岩石群である。本講義では、変成岩と変成作用について記載の事項と成因的事項をおりまぜて平易に解説する。また下記の教科書を随時使用する。

<一般目標> 変成岩の記載的特徴を把握し、テクトニクスの背景が理解できる。変成作用の概念が説明できるようになる。変成帯の分布と形成年代の基礎知識を持つことによって、大陸の形成過程に興味を持つ。

<授業の到達目標>

知識・理解の観点

1. 地球で起こる地質現象のうち、変成作用の概念が理解できる。
2. 変成岩の分類が理解できる。

思考・判断の観点

1. 変成作用の時空間的な関連について説明できる。
2. 個々の岩石の特徴を理解した上で、変成作用の解析法を適応できる。
3. 変成作用の解析からテクトニクス像のメカニズムを指摘できる。

関心・意欲の観点

1. 変成帯の分布と形成年代の基礎知識を持つことによって、大陸地殻の形成過程に興味を持つことができる。

<授業計画>

はじめに変成岩と変成作用の概念を説明し、地質学的環境下での変成岩の位置付けを理解してもらう。そして、変成帯の形成・分類を解説し、最後に変成作用の解析方法と変成帯とテクトニクスの関係について考察する。

第1週 ガイダンス

第2-6週 変成作用の概念

第7-10週 変成作用の解析方法

第11-14週 変成帯とテクトニクス

第15週 試験

第16週 試験の返却と解説

<本日の内容（第9週目）>

学習・教育の達成目標

鉱物相平衡の基礎と相平衡図が理解でき、反応曲線網が作成できる。

キーワード: Schreinemakers の束

概要： 前週までに鉱物相平衡の基礎を学習している。この講義では、1成分3相系、2成分4相系および3成分5相系の相平衡を理解し、単変曲線を作る鉱物反応から、それぞれの相平衡図（反応曲線網）を Schreinemakers の束を用いて作成する。

レビュアーによる授業に対する意見・コメント

(1) 授業技術に関して

- ・明快な説明で、とても聞き取りやすい授業であった。
- ・学生の反応を確かめながら授業を進めていた。
- ・到達目標を提示して授業を進める点がすばらしい。（サイド黒板で常時確認できる）
- ・理解しながらノートが取れるので板書は有効。
- ・授業中に演習のプリントを配り、使用したのがよかった。
- ・教科書があるのが良い。

(2) 授業運営・構成に関して（難易度・過不足など）

- ・難解な内容を理解させようとする努力の大変さを感じた
- ・講義と演習を組み合わせていたのがよかった。
- ・「シュライネマーカスの束」の意義、利用価値など実例を挙げて紹介していたのがよかった。
- ・複雑系の解説の後で、より単純なものを演習で復習するのがよかった。

(3) 授業の目標、達成度、理解度、満足度、内容に関して

- ・到達目標がキーワードとともに知らされるのは良い。
- ・難しい内容を分かりやすく解説しているが、学生が理解できているか疑問
- ・前回の復習を学生に当てながら行ったのは良かった。（学生参加でもある）

(4) 学習活動、学生の参加に関して

- ・学生を授業に参加させようとしている様子がよくわかった。
- ・課題プリントがあると学生は授業に必然的に参加する
- ・学生の反応がないので理解できているかどうかわからなかった。
- ・欠席が多いのが気になった (8名欠席)。
- ・質問の時間が少し短いような気がした。

(5) その他

- ・講義、実験、および実習との連携が必要である。
- ・授業の内容に関していくつかの技術的な意見があった。

授業研究会

日時：2010年12月7日 午後5時～5時30分

場所：地球科学セミナー室

出席：金折、今岡、大和田、阿部、永瀧、永尾

内容：教育改善ワーキンググループの永尾委員から、本日の授業の学生アンケート結果とレビューアーのコメントが伝えられた。その結果をふまえて、大和田先生の本日の講義への意見・感想（ほとんどが肯定的な意見）や質問が行われた。大和田先生からは、質問に対する回答や授業改善の取り組みについて話があった。また、大和田先生から、学生アンケートの学習達成度と成績には相関があるとのデータが示された。

その後、出席者によって授業で工夫している点や学生の状況などについて意見交換がおこなわれた。また、学科内での講義、実験、および実習との連携・意義付が必要であるとの共通認識を得ることができた。

授業アンケート

2010年12月7日に実施し、23通を回収した。

1. 自分自信が考えるこの授業の学習達成度はどのくらいですか。
1. 30%未満 (0%) 2. 30-50%未満 (8.7%) 3. 50-70%未満 (21.7%)
4. 70-90%未満 (52.2%) 5. 90%以上 (17.4%)
2. この授業の内容に興味をもてましたか。
1. もてなかった (0%) 2. 少しだけ持てた (13.0%) 3. どちらともいえない (8.7%)
4. もてた (60.9%) 5. 非常に持てた (17.4%)
3. 話し方はききとりやすかったですか。 1. はい (100%) 2. いいえ
4. 黒板の字やプロジェクターの字は読みやすかったですか。
1. はい (100%) 2. いいえ
5. 教え方(説明の仕方)はわかりやすかったですか。 1. はい (100%) 2. いいえ
6. 質問をする時間は十分与えられましたか。 1. はい (82.6%) 2. いいえ (17.4%)
7. 質問、疑問に対して適切な対応がなされましたか。
1. はい (52.2%) 2. いいえ (0%) 3. 該当事項なし (47.8%)
8. 私語等への注意は適切になされましたか。
1. はい 2. いいえ 3. 該当事項なし
9. 野外の授業(実習)の利点と問題点について、気づいたことを述べて下さい。
10. 感想を自由に述べてください。
 - ・試験がんばります。
 - ・いつも分かりやすく、興味をそそるように話されるのでとてもいい授業だと思います。
 - ・TPがしっかりしている。
 - ・板書がうまくまとまっているのでノートもまとめやすい。
 - ・今までに比べると考えないといけないことが多くて、少しややこしくてむずかしいと思った。

- ・授業のはじめに到達目標、キーワードを書いてくれるのはすごくわかりやすいと思う。
- ・演習する前に疑問はないか聞いて欲しかった。書いた図で合ってはいたがよくわからない状態でシュライネマーカースの束を書いてしまった。
- ・授業の最初に到達目標やキーワードを提示してくれると理解しやすいです。他の学科の先生の授業は、前置きなく内容に入ることが多いので、何が重要で、何が目的なのかわからないことが多いです。
- ・黒板が見やすくてよくまとまった授業だと思う。
- ・相平衡図の作成がよくわかりました。
- ・説明がわかりやすいです。前回の復習があるのもわかりやすいです。
- ・わかりやすいです。
- ・とてもわかりやすい授業だと思います。
- ・分かりやすいです。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 第1回 理学部FD研修会

テーマ：「平成21年度の理学部学生授業アンケート結果から汲み取れること」

日時：平成22年7月21日（水）15:00 - 16:00

場所：理学部 第22講義室

講師：理工学研究科 増山 博行 教授（前理学部FD委員長）

参加者：理学部教員44名

授業科目のうち、理学部用の質問紙には学科・学年等の属性の質問以外に、次の11項目の設問が設定されていた。学期最後の授業時に回収されたマークシートは大学教育センターにおいて集計された。そして項目毎に、良い、やや良い、普通、やや劣る、劣る、の5段階評価点に換算され、表データとして、学部のFD委員会に送付された。その中は学部全体と、授業担当教員の所属により6分野に分けた項目毎の評価値と値を表に示してある。また授業科目数と回収率=(回答数)/(履修登録者数)の平均値もあげてある。

この評価点の学部、分野別平均点がレーダーチャートで示された。このチャートでQ1～Q10は設問1から10の平均値を示す。一見すると、分野間の差は少ないが、授業毎に見ていくと、一部に、1年生の授業に対する評価が低い傾向が示された。

学科・コース間の差違には、若干の傾向があるが、それ以上に授業担当教員間の差違が見られた。これは教員の個性を反映した当然の結果と見ることもできる。一方で、教員が気付いていない癖を反映していることもあるので、自分の授業に対する学生の評価が、同僚への評価と比べてどうなのか、改良の余地がないのか、自省する機会も必要であろう。そこで、学科・コース毎の平均値 m と標準偏差 s を計算し、 $m+3s$ を超える場合を5、 $m+s\sim m+3s$ の範囲を4、 $m-s\sim m+s$ の範囲を3、 $m-3s\sim m-s$ の範囲を2、 $m-3s$ より下がる場合を1、の評点を授業毎につけた結果が示された。個別の授業に付したこの平均点の度数分布をみると、評点高い授業には実験や演習が多いこと、評点4の授業担当者には、かつてベストティーチャーとして表彰あるいはノミネートされた教員が含まれており、学生から評価が高い授業と言えること、逆に、評点2の授業では、Q5の教員の話し方が極めて低い評価の授業や、Q4の理解度の低さから、授業の難易度が高すぎるものが推測される授業があり、改善の余地があるかもしれない、ことなどが紹介された。さらに、こうした評価に基づいて、教員との面談を行い原因についてさらに検討したいということで



あった。

2. 第2回 理学部 FD 研修会

テーマ：「授業技術スキルアップのためのワークショップ」

日時：平成22年10月20日(水)

15:30～17:30

場所：理学部 第11講義室

講師：立命館大学 教育開発推進機構 教授
林 徳治 先生



1. アクティブラーニングとその重要性について紹介があった

アクティブラーニングの定義とは、「学生の自らの思考を促す能動的な学習」のことで、学生が能動的に、現象・データ・情報・映像などの知識のインプットに対して、読解・作文・討論・問題解決などを通じて分析・統合・評価・意志決定を行い、その成果を組織化しアウトプットするような活動である。これを実現するには、まず自らの授業を客観的に評価する必要がある。評価方法として、フランダーズのコミュニケーション分析とよばれる講義や質問など項目別の活動頻度(時間)の測定による評価が紹介された。

2. ICT を活用したアクティブラーニング実施に向けて

【課題】

- 1)学習用タブレットなど特別な備品環境が必要(先行研究より)
- 2)少人数での試行で多人数授業での実施事例が少ない
- 3)教員に負担(技術操作、教材準備)が増す

【授業の現状】

- 1)どこに基準を当てて授業を行うのか(学力の多様化) --シラバス通りに実施できない
- 2)教員と学生間での意識(興味、関心)のズレ -- 教員主導による講義(一方向)
- 3)継続した形成評価の測定が出席や教員の課題レポートになっている -- 学生の無意欲、単位取得(義務化)
- 4)学生間での学習の共有環境(場)がない
- 5)学習 PF が全体に普及・活用されていない -- 教員の負担増、アナログデータ
- 6)web-CT の活用率が極めて低い(5%)
- 7)対面授業と e ラーニングが学生の意識の中で遊離している
- 8)授業中に学生は質問をしない(できる環境ではない -- 雰囲気、文化、関心等)
- 9)教室の後部座席の学生(寝る、ケータイをする、他のレポート作成、私語等)

3. アクティブラーニング実践案

【目標】授業中に学生の学習行為(「お返し」)の頻度を増加する。学生間の学習成果(意見、質問等)を共有する

【条件】1)特別な備品(タブレット)を必要としない;学生のケータイなどを利用

2)LAN 教室での授業

3)教員に特別な技術換作を求めない

【方法】1)授業中に教員が提供する課題について、ケータイメールを利用して意見を求める。

2)メール内容は、授業中に全員がプロジェクターなどで視聴できる。

3)学生のメール内容について、教員がコメントしその日の授業目標に導く。

4)学生のメール発信をトラッキングし集計する。

5)コミュニケーションノートのデジタル化(単発のレポートではなく PF として)

6)学生が発信できる情報は、テキスト情報と画像(写真など)とする。

この研修では、林先生が中心となって開発された「一斉授業支援システム」を体験した。その目的は、
【授業開始時】・本授業のねらいを知らせる。・学生のレディネス、関心を知り共有する。・お知らせ・アンケート、選択式回答

【授業の過程】・学生の考えを把握し、共有する。「～をどう思いますか」

- ・学生からの質問を把握、共有し、回答を授業につなげる。
- ・アンケート、記述式回答、選択式回答・記述式回答

【授業のまとめ】・授業のまとめについて理解度を把握する。「～が理解できましたか」

- ・次の授業のための課題などを学生に知らせる。
- ・アンケート、選択肢小テスト、・お知らせ

授業中に学生からの意見や回答を収集して、授業に活用する方法を体験した。この日の研修参加者はケータイやパソコンなどを持参している。手順は以下のとおりである。

1.ケータイ付属のカメラで以下の QR コードを読み取りアクセスする。(パソコンも可)

「一斉授業支援システム」<http://www.el-labo.jp/studyTool01 /logon.asp>

2.配布シートで各自の username、 password を確認し、ログインする。

3.出席確認をしましょう。[教員]出席確認のための「今日の番号」を受講者に指示する。全員の出席状況を提示する。

4.アンケートを体験しましょう。設問(アンケート名:山大の先生)

(1)あなたの性別は? 1.男性 2.女性

(2)あなたの専門分野は? 1.人文社会系 2.理工系

(3)本学での教職経験は何年ですか? 1.3年未満 2.5年未満 3.10年未満 4.10年以上

(4)学生100名以上の授業をもっていますか? 1.もっている 2.もっていない

ここで、教員]集計データをグラフで提示する。

5.記述式回答で意見の書き込みを体験しましょう。

設問:現代の学生で最も欠けている内容は何だと思いますか?

ここで、[教員]回答内容を提示する。□今回は、回答者名を表示した(教員サイトで、表示する/しないの選択ができる)。

その場で集計結果をプロジェクトに写し、全員でみることができると実演された。さらに、回答した本人に説明を求めたりできる。通常は質問がないかと、全員に尋ねても挙手する学生はいない。しかし、この方式だと自分の回答がスクリーンに表示されていることもあって、説明を求めると拒むことなく回答することがわかった。この「一斉授業支援システム」は希望に応じて林先生にお願いすれば使用できるということである。

3. 第3回 理学部 FD 研修会

「大学教育センターとの共催による教育改善FD研修会」

日時:平成22年12月1日(水) 14:30~16:10

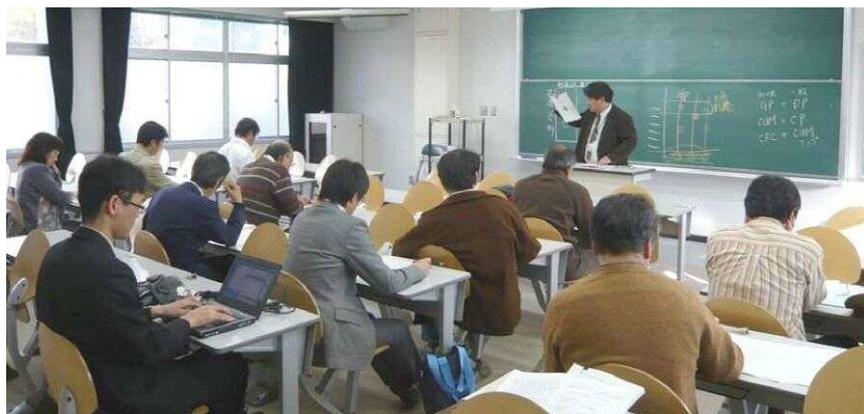
場所:理学部11番教室

参加者:16名(内訳):教務委員、FD委員、学科・コース委員など合計12名、岩部大学教育センター長、兼石教育コーディネーター、大学教育センター専任教員(小川勤、岡田耕一)合計4名

研修内容:

本年度6回目の教育改善研修会を理学部の教学委員、FD委員、学務委員、各コース委員等を対象に実施した。最初に、兼石教育コーディネーターより、GPの立て方について、大学のGPは学部GPを包含し、学部GPは学科GPを包含し、さらに学科GPはコースGPを包含するといった関係から再考すべきであるとい

う見解が示された。また、CUMは学科等の最小単位の GP と授業科目との対応関係を示すべきであるとの説明がなされた。理学部の GP については、山口大学の理学部であるとはっきり分かる特徴が示されていないこと、CUM については丸付けがされていない科目の存在や学科により GP の数かなり異なる点などが明らかにされた。これに対し



て理学部の教員からは地球圏科学学科の CUM の分析結果がないがなぜかという質問があった。これは理学部と大学教育センターとの間で、ファイルの受け渡しミスであったのが原因であることがあとから判明したので今後調査し、新しいデータを元に分析を行い、理学部に対して資料を再提出することになった。

次に、岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨が説明された。平成 23 年 4 月の大学設置基準改定に伴い、第四十二条には新しい項目として「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が付加されていることが述べられた。さらに、日本学術会議による「大学教育の分野別質保証の在り方について」についても説明があり、専門教育の在り方について今後対応すべき内容が記されており、3 年後に主要 30 分野で掲げられる予定であり、「教育課程編成上の参照基準」が公表されることなどの大学教育の質保証についても説明があった。今後はそれらに注意を払い、理学部・学科・コースの GP を再検討して欲しいことや、大学設置基準改定に合わせて、これまで整備してきた学部・学科の GP に「社会的及び職業的自立を図るための必要な能力」をどのように取り入れるかをカリキュラムマップ（以下、CUM）やシラバスを用いて今後、検討して欲しいとの要望があった。最後に学士課程教育の再構築に関する話があり、今後は各学部・学科が自分の専門教育分野だけでなく、共通教育を含めた学士課程教育を理学部としてどのようにするのかを考えていく必要があることが明らかにされた。

次に、大学教育センターの小川教授よりカリキュラム・フローチャート（以下 CFC）についての説明と作成依頼がなされた。CFC の説明では、まず作成手順について説明があった後、学科の特性によっては資料に示した手順による作成が困難な場合も考えられるため、その際は学問的な特性に応じて CFC の作成・表示方法を適宜変更してもかまわないと説明があり、愛媛大学の理学部のカリキュラム・マップ（本学の CFC に該当）の事例などが示された。説明後、理学部の教員から、この作業は何のために行うのか明確でないという意見が出された。学生に科目の履修順序や科目間の関係については、すでに理学部では履修手引きの中に示されている。また、GP の達成を中心に科目間の関連性や順序性を記述するといっても、これは単なる認証評価などのために実施するだけで意味がないのではないかという疑問が示された。大学教育センターとしては、他大学でも同様な意見が出ているために、各学部からの意見を参考にして、後日、各学部にもどのような CFC を作成してもらうかを検討の上、作業依頼の通知を正式に行いたい旨、説明があった。

今回の研修会では、理学部との意見交換を通じて、理学部の教育内容の特徴や CFC や CUM を作成する上での課題が改めて明らかになったので、今後、CFC の作成や CUM の改訂作業に向けて参考になることが多かった。また、大学教育センターと学部教員が相互にそれぞれの立場から教育改善を巡って意見交換が行われたことは、組織的な教育改善を全学的規模で推進する上で有意義な研修会であったと考えられる。

第 3 節 教育改善に関する活動

1. 生物・化学科 FD 研修会

「山口湾～カブトガニ生息地における生物観察」

1) 目的

生物学分野では昨年に引き続き、分野独自の FD 研修企画として野外生物観察の専門家を講師として招き、山口市周辺の特徴的な自然環境に生息する動物・植物について学ぶ第 3 回目の野外生物観察研修。

2) 概要

山口市を流れる榎野川河口域に位置する山口湾は、瀬戸内海でも有数の規模を誇る 350ha にも及ぶ広大な干潟を有しており、そこには貴重な干潟生態系が残されている。山口湾の干潟は、日本の重要湿地 500 にも選出されており、本州で唯一のカブトガニ繁殖地でもあるが、近年は生活排水対策の遅れや沿岸部の開発・整備によって、カブトガニの生息域は減少しつつある。今回の FD 研修では、カブトガニの生息状況やカブトガニ保護の重要性について理解を深めることを目的として、「山口カブトガニ研究懇話会」代表を講師として招き、山口湾のカブトガニに関する講義と、生息地における観察を以下の内容で実施した。

①日時： 平成22年9月11日

②場所： 山口大学理学部（講義）および山口湾秋穂岩屋付近（野外観察）

③講師： 原田 直宏 先生
（山口カブトガニ研究懇話会代表、山口県立宇部中央高等学校教諭）

④参加者： 9名（理学部生物学分野、時間学研究所）

⑤研修スケジュール

10:00-12:00 カブトガニに関する講義（理学部 3号館第2セミナー室）

12:00-13:00 昼食・休憩

13:00-13:30 野外観察の概要の解説・説明

13:30-16:30 秋穂岩屋周辺へ移動・カブトガニの観察

16:30 現地解散



3) 実施内容

午前の研修では、原田講師が持参したカブトガニの標本を前に、カブトガニに関する概説、山口市のカブトガニ生息状況、環境変化の問題などについて、資料を交えた解説が行われた。昼食をはさみ、午後には野外観察地の説明と観察内容について解説が行われ、その後、観察場所である榎野川の河口～秋穂岩屋周辺の干潟に移動した。榎野川の河口域では、堤防に面した小さな砂地のある場所で、産卵後の胚や、孵化したばかりの幼生を観察することができた。その後、成長したカブトガニが生息する秋穂岩屋周辺の広い干潟へ移動した。生きているカブトガニの観察は、大部分の参加者にとって初めての経験であり、炎天下にも関わらず、簡単には見つけることのできない小さな幼生を熱心に探しては体長を測定して、年齢の推定を行った。ここではさまざまな成長段階（1 齢～4 齢）の幼生が生息しており、合計で 100 匹あまりの幼生を観察することができた。

4) 今回の FD 研修によって得られた成果

専門家の指導による野外観察の研修は、生物学分野として第 3 回目となるが、今回も参加教員に非

常に好評なものとなった。吉田キャンパスから車で 30 分もかからない場所に、カブトガニが生息していることを知り、あらためて山口大学が豊かな自然に囲まれていることを実感するとともに、初めて目にするカブトガニの姿に参加者全員が強い感銘を受け、山口の自然についての認識を深めることができた。このような実践的な FD 研修の経験を、山口大学理学部ならではの教育・研究に活かしてゆきたい。

2. 第 4 回理学系大学教育に関する研究フォーラム

期 日 : 平成 22 年 12 月 18 日 (土)

会 場 : 岡山大学理学部大会議室 (本館 1 階)

出席者は、島根大学、広島大学、山口大学、愛媛大学、高知大学、岡山大学からそれぞれ 2, 3 名で、以下のような取り組みが紹介され、質疑が行われた。

1. “上級生による学修サポート – 総合理工学部でのメンター制度の導入とその効果 –”
2. 初年次教育におけるドリル型課題の試み
3. 理数学生応援プロジェクトのねらいと取組み
4. 学習意欲と科学リテラシーで育む発表力
5. 数理科学科における少人数教育
6. 創成科目としての研究室体験授業
7. 組織的な数学のリメディアル教育について
8. 往復型宿題の増強による単位の実質化
9. 5 週目アンケート・アクションプランによる授業改善
10. 理系授業でのグループワーク導入効果
11. 岡山大学マッチングプログラムコースでの新たな教育・指導の取組み
12. 岡山大学理学部における e-Learning の活用

山口大学からは、上記 5 のテーマで、理学部数理科学科のカリキュラムの特徴として、各学年に少人数教育を配している点が挙げられる。これは、平成 18 年度のカリキュラムマップ改訂に伴って導入されたが、その経緯、少人数教育の狙い、運用の実態、今後の課題等について報告した。このフォーラムで紹介された取り組みについては、その後理学部の教育企画センター会議を通じて報告された。

3. 大学教育改革フォーラム

期 日 : 平成 23 年 1 月 24 日～25 日

会 場 : 秋葉原コンベンションセンター

文科省では、大学教育改革に向けて様々の取り組みを行っている。そうした取り組みの事例発表としてこのフォーラムが開催されており、理学部からも昨年に続いて 1 名が参加した。今後の理学部の教育改革に向けて取り組みへの参考になるものが少なくない。今回はフォーラムの基調講演および分科会に参加して、文科省の考え方や個々の大学の取り組みを学んだ。フォーラムの概要については、その後理学部の教育企画センター会議を通じて参加教員から報告された。詳細は別途報告してあるが、教育学専門家の用語 (コンピーテンシーやアビリティなど) には少なからずとまどいを感じさせたようである。

4. 高大博連携による地学教職員意見交換会

期 日 : 平成 23 年 3 月 12 日 (土)

会 場 : 県立山口博物館

山口県において地学教育に携わる高校教員・大学教員・博物館学芸員など 30 名あまりが初めて一同に

会して地学教育に関する情報交換と意見交換を行った。とくに高校における地学の開講と履修の状況、新教育課程の現状と見通しなどの話題が提供され、今後の受験者・入学者の動向を知る上で貴重な情報源となった。

5. 防府高校授業公開

期 日 : 平成22年11月15日(月)、16日(火)

会 場 : 山口県立防府高等学校

昨年度に続いて第二回目の授業公開が行われ、今回は理学部教員だけでなく一般にも公開された。理学部入学者の情報リテラシーの習熟度は千差万別である。今回、高校での情報教育の実態を見ることができたが、演習というより講義形式に近いものであった。理学部在校生からの情報も、多くはこれに近い。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

平成21年度に開講された理学部の授業科目のうち、学内兼担の他学部教員が行っているものは除き、同名の授業科目で担当者が異なるものは別の授業とカウントすると、162の授業(うち76が前期分)で学生による授業評価が行われた。理学部用の質問紙には学科・学年等の属性の質問以外に、次の11項目の設問が設定されていた。学期最後の授業時に回収されたマークシートは大学教育センターにおいて集計された。そして項目毎に、良い、やや良い、普通、やや劣る、劣る、の5段階評価点に換算され、表データとして、学部のFD委員会に送付された。学部全体と、授業担当教員の所属により6分野に分けた項目毎の評価値と値を表に示している。また授業科目数と回収率 $=$ (回答数) \div (履修登録者数)の平均値もあげている。

この評価点の学部、分野別平均点をレーダーチャートにした。このチャートでQ1~Q10は設問1から10の平均値を示す。一見すると、分野間の差は少ないようにみえるが、しかし、分野の特質も見えてくる。まず、回収率は数理で低く、地球で高い。JABEE コースを設けている地球圏システム科学科では、必修科目の比率が高いので、履修登録を行った授業には最後まで出席する割合が高いようである。

Q1の出席率は、アンケート実施の最終日に出席した学生が、どれだけ出席していたかという数値であり、それ故に学科・コースによる差は少ない。最後の授業に出席していた学生が回答する仕組みを反映して、回答者の出席率は高い。

Q2の授業外学習時間はいずれの学科・コースでも1時間程度であり、教員側の期待値を下回っている。

Q3の学習目標達成度の自己評価は地球、情報でやや高く、物理でやや低い。

Q4の授業内容の理解度は地球、化学で高く、物理で低いが、これはQ3と相関している。

Q5の教員の話し方、Q6の説明の仕方は、互いに相関が見られる。いずれもかなり高いといえるが、物理と情報で相対的に低い。

Q7の教材、Q8のプレゼンテーションは学科・コースで多少の特徴が現れている。地球はいずれも高い評価であり、数理は低い。数理では板書を中心とする授業展開であり、地球などではカラフルな画像を活用していることと関係があるように見える。

Q9の質問への対応は数理と物理でやや低めで地球と化学でやや高いが、大きな差はない。

Q10の授業への満足度はQ11の授業の総合評価と相関が認められる。これらはQ3、Q4の目標達成度、理解度とも相関がある。学問体系が積み上げ式の数理や物理でやや低いが、Q3、Q4ほどの分野間の差

は無く、学科・コース間で大きな差があるとは言い難い。

この評価点の学部、分野別平均点をレーダーチャートで示したのが図1である。このチャートでQ1～Q10は設問1から10の平均値を示す。なお、授業毎に見ていくと、一部に、1年生の授業に対する評価が低い傾向が見られる。これは高校までの授業と大学の授業のやり方のカルチャーギャップによることが考えられる。初年時の授業のやり方には丁寧な工夫が求められであろう。

学科・コース間の差違には、若干の傾向があるが、それ以上に授業担当教員間の差違が見られた。これは教員の個性を反映した当然の結果と見ることも出来る。一方で、教員が気付いていない癖を反映していることもあるので、自分の授業に対する学生の評価が、同僚への評価と比べてどうなのか、改良の余地がないのか、自省する機会も必要であろう。そこで、学科・コース毎の平均値 m と標準偏差 s を計算し、 $m+3s$ を超える場合を5、 $m+s\sim m+3s$ の範囲を4、 $m-s\sim m+s$ の範囲を3、 $m-3s\sim m-s$ の範囲を2、 $m-3s$ より下がる場合を1、の評点を授業毎につけてみた。個別の授業に付したこの平均点の度数分布をみると、評点高い授業には実験や演習が多い。きめ細かい指導の結果として、学生に達成感を与えていることが窺われる。また評点4の授業担当者には、かつてベストティーチャーとして表彰あるいはノミネートされた教員が含まれており、学生から評価が高い授業と言えよう。逆に、評点2の授業では、Q5の教員の話し方が極めて低い評価の授業や、Q4の理解度の低さから、授業の難易度が高すぎるものが推測される授業があり、改善の余地があるかもしれない。

第5節 FD 実施経費報告

「理学部・研究科 FD 実施経費実績報告票」

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
理学部	教育改善に関する講演会開催 「授業技術などスキルアップのためのワークショップ」	講師謝金・交通費1名分	54,900	10月20日に標記ワークショップを実施し、学生参加の授業技術を体験した。
	教育改善のための高等学校の理科教育の研究	理科2教科(化学・地学)、各5出版社の教科書	57,280	生物および地学分野の学部教育改善資料とした。
理工学研究科・学部共通	「第3回野外生物観察研修－山口湾の干潟および沿岸の生物」	講師に対する謝金・交通費 参加教員に対する交通費1回分	37,820	生物分野における学部学生のフィールド教育の方法を学んだ。
計			150,000	

第6節 来年度の課題

ピアレビューについては各学科ともすでに定着しており、計画的に実施されている。しかし、授業改善にどのようにつながったのかについては、必ずしも十分に検証されていないケースがあり、課題として残された。各学科では、それぞれに特色あるFD研修が実施された。しかし一方で全学のFD研修会への参加は多くない。今後はきめ細かく参加を呼びかける必要があるだろう。学生授業評価については、2年目を迎え経年変化を検討することになっていたが、本報告に間に合わせるができなかった。一方で、理学部では今年度からFD委員会の業務を理学部教務委員会が担うことになり、各学科では学科長・分野長に代わって教務委員が担当することとなった。そのため、当初は多少のとまどいがあったが、次年度以降はスムーズに活動できるものと思われる。

第8章 医学部のFD活動

各部署のFD活動報告は、本来、学部単位で取りまとめるべきであるが、医学科と保健学科では、医療人を養成するという教育目的は一致するものの、職種の違いに起因してカリキュラムと授業形態が根本的に異なり、必然的に教員に要求される教育技能も異なっている。さらに、FD活動に関する歴史的経緯も異なることから、従来、活動は医学科と保健学科で、それぞれ独立して行われていた。

平成22年度は、こうした従来の慣例に風穴を明ける動きが生じた。保健学科主催で企画された2つのFD研修会（「社会人基礎学力の養成と大学教育改革」、「学生を巻き込むFDの発想—教学改革の次のステップ—」）に医学科が相乗りする形で、医学部のFD活動としては初の合同のFD活動が推進された。今後も、この流れを一層推進することが期待される。

他方で、合同の動きは、まだ極一部に留まるため、本報告においては、従来通りそれぞれの活動を別個に記述する。

1. 医学科

（1）活動概要

医学科では、社会からの医学教育への強い期待に応え、また全国的に急ピッチで進行する医学教育改革の動きの中で主導的な役割を果たすため、全学規模でのFD活動が本格的に開始される以前の平成9(1997)年度から、年1,2回の1泊2日のワークショップを中心として独自のFD活動を展開してきた。

継続的に展開してきたFD活動は、平成13(2001)年度以降、毎年、着実かつ具体的な教育改善に結実してきた（例：コース・ユニット制へのカリキュラムの根本的改変、展開医学系チュートリアルの実施、多肢選択型客観問題による統一試験の実施等）。

他方で、平成15年度以降は、ワークショップの必要回数が増大する一方、予算的制約もあり、1泊2日型から1日で完結するワークショップに活動の中心が移行しつつある。

平成22年度も、基本的にはこの流れの延長線上に、教育改善上の具体的な個別テーマに基づいた1日完結型のワークショップおよび数時間の講習会を中心に活動を展開した。

（2）具体的活動

1) ワークショップ

a. 「新入生指導法ワークショップ」

2010年9月24・25日（金・土） 場所：山口県セミナーパーク

※ 1泊2日のフレッシュマンセミナーに合わせて、1年生の指導法についてワークショップ形式で研修を行った。

b. 「多肢選択型客観問題作成ワークショップ」

2010年5月7日（金） 場所：霜仁会館3階

※ 全国の共用試験 CBT 他、統一試験（基盤系統一試験&卒業試験）で使用される、多肢選択型客観問題の作成技法を習得するためのワークショップ。

※ 参加者が事前に作成した問題を持ち寄り、ブラッシュアップを主体に実施した。

なお、例年実施してきた「チュートリアル・ワークショップ」（平成 22 度も計画済）に関しては、カリキュラムの改訂に伴い、チュートリアルの実施時期が変更されたため、平成 23 年度以降に持ち越された。

2) 講習会・講演会

- a. 「チューター講習会」（計 2 回）（2 回とも同一内容）
2010 年 4 月 21 日（水） 場所：第 1 講義室
2009 年 4 月 23 日（金） 場所：第 1 講義室
- b. 「シラバス講習会」
2010 年 12 月 7 日（火） 場所：第 2 講義室
※ 医学科独自のコース・ユニット制カリキュラムおよびそれと一体化した eYUME のコンテンツ更新方法に関する講習会。
- c. 「GP, CUM, CFC について」
2011 年 3 月 3 日（木） 場所：第 2 講義室
※ 大学教育センターから、岩部先生・小川先生をお招きし、山口大学全体として推し進めている教育改革について、GP, CUM, CFC を中心にご講演いただいた。この講演を元に、年度内に医学科の CFC を完成させた。

3) 教育評価活動

平成 13（2001）年度から実施している「振り返り評価」（ユニット終了後、マークシートで実施）と平成 13（2002）年度から実施している「進行評価」（1 回 1 回の講義終了後、オンラインで実施）を 22 年度も引き続き実施した。

2. 保健学科

（1）活動概要

本学の大学教育改革が著しく進む中、保健学科では今年度、以下の 4 つの目標を定め、教員の教育・研究に対する意識のさらなる向上を目指した。具体的には、1) 「目標達成型大学教育改善 (GP マップ作成、教育改善 FD など)」、2) 「社会人基礎力育成」：学生にキャリア教育の強化などを通じて“社会人基礎力”を如何に育むか、3) 「学生・教職員が連携して進める“新しい FD への発想転換”を目指して」、さらに、4) 「組織人としての人材育成を如何に進めるか（企業の取り組みより）」を、主たる目標として、医学部合同あるいは保健学科独自の FD 研修会を企画運営した。

1) 「目標達成型大学教育改善」

大学の「教育パラダイムシフト」の方針に基づき、保健学科でも、学生が何を獲得したかを主体とする新しいカリキュラムの学士課程教育を整備したことである。つまり授業科目のキャリアキュラムマ

ップ (CUM) を共通教育と専門科目を併せ構築した。また、授業科目の内容は学部・学科・専攻ごとの**グラジュエーションポリシー (GP)**のうち、その科目から何を学生が獲得するのかを図示化することでわかりやすくした。さらに、**カリキュラムフローチャート(CFC)**を作成し、教育課程の組織的な教育の連携や有機的構成が一目で分かる様にした。こうした取り組みは、組織的に意義深い FD 活動であり、また外部に向けた教育課程の開示であり、受験生向け案内や大学間交流にもつながる。

2) 「社会人基礎力育成」

小川先生をお迎えした講習会で、背景や期待される効果など具体的に学んだ。大学では、教育改革の柱である、いわゆる学士力 (中教審による“学士が身につけるべき知識や能力”) から、**社会人基礎力 (経産省による、“前に踏み出す力”、“考え抜く力”、および“チームで働く力”)** 育成へと教育ゴールが大きく転換してきた。すなわち社会で今、必要とされている従来からの知識・実践能力の育成に加え、“それを生かす力”を育ませ、人間性や社会での基本的習慣を身につかせようとするものである。手法として、職場体験などによるキャリア教育が効果的とされ、本学では医療施設などへの見学研修 (**インターンシップ**) を3年次から年2回以上実施している。学生は、働くことの意味や、その報酬の価値観が、達成感による内部報酬に変わること、職業意識が目覚め、学習意欲へとつながることが伺えた。したがって、本学ではインターンシップによる社会人基礎力への影響を高く評価している。

3) 「学生・教職員が連携して進める“新しいFDへの発想転換”を目指して」

まず、FDの定義には歴史的変遷が著しいことを理解した。従来より、大学設置基準の法令にある「授業の内容および方法の改善を図るための組織的な研修および研究」とされてきた。しかし最近、「各大学が掲げる教育目標を実現することを目的とする**教員の職能開発**と幅広くとらえ、また個人的・集団的な日常的教育改善の努力を支援し、また**教職員のキャリア開発支援**や**教職員の協働**や**学生参画授業**による、多様なアプローチを組織的に促進する」ことに主眼が置かれるようになった。具体的には、保健学科のFD活動はこれまで、「人材育成」や「時代を乗り切るイノベーション」なども企画したが、主には研修会の実施率、参加率、および学生授業評価の実施率と評価であった。今後に向けては、本学の**GP達成のための活動を評価**すること、**教員の職能開発を検証**する、また日常的境域改善の成果を評価すること、などの観点へと移行することを学んだ。特に、職員や学生との協働、つまり学務課職員や学生の参画による授業の展開で、授業の効率があがり、学生の**修学力向上**となることを事例から学び、本学の今後のFD活動に貴重な事例であると思われた。

4) 「組織人としての人材育成を如何に進めるか (企業の取り組み)」

組織において、最も重要な活力となるのは「人を如何に動かすか? 生かすか?」であろう。本テーマでは、企業に長年貢献し人事管理も幅広くアプローチされた野利本講師から、その背景と手法を学んだ。国立大学は平成16年に**独法化**をし、組織のハード、ソフト両面より、著しい改革を迫られてきた。したがって、企業においても、まず方策は社会環境に依存することから、まず1) 企業の歴史と変遷について概況が述べられ、さらに、2) 健康と食や背景となる世界の食糧事情の分析がなされ、社会のニーズを踏まえた企業戦略が存在することが述べられた。こうした中、企業では「人が生かされ、成果を生み社会貢献する」ことから、人材育成は極めて重要であることを解説された。保健学科においても人材育成は極めて重要な課題である。

以下に、今年度の保健学科における主な活動4つの目標に対するFD活動について述べる

(2) 実施内容

1) 授業公開(ピュア・レビュー)

1. 日 時： 平成 22 年 1 月 26 日 (木) 10:20-11:50 S1 教室 (参加者：26 名)
2. 科 目： 「血液学」 血栓止血学の総括
担当： 野島 順三教授 (検査技術科学専攻)
3. 対 象： 検査技術科学専攻 2 年生 必修 講義形式 (最終講義)

内容：

近年、臨床検査診断学の進歩発展は目覚ましい。単に病名の診断にとどまらず病態像の把握や有効な治療法の選択、さらには予後の推定など、臨床検査診断学は臨床医学の軸をなすものとなってきた。中でも、診断・治療の根拠となる臨床検査データを担当する臨床検査技師には、高い検査技術・専門知識と併せて生態の機構やそれに関連した疾患の発症機序など分子レベルの知識が必要となってきている。本講義では、血液凝固・線溶機構の異常 (組織因子・炎症反応・感染症・腫瘍細胞) に伴う出血症状および臓器障害の診断プロセスとして、近年、臨床サイドから検査部に対して最もコンサルタントの多い播種性血管内凝固症候群 (DIC) をモデルに臨床検査データによる早期診断および病態鑑別法を解説する。本講義は、検査技術科学専攻 2 年生を対象とした血液学・血栓止血学の総括であり、今学期学んできた「血小板・凝固・線溶機構のバランスと破綻」の知識を実際の臨床症例に応用することで一層理解を深めることを目的としている。

【講義のスケジュール】

10:20~10:25 Introduction

10:25~10:50 血管内皮細胞による血栓制御機構と血小板・凝固・線溶機構のバランスによる血管内恒常性の維持について概説する。

10:50~11:00 分子マーカー測定による凝固・線溶系異常の診断プロセスについて解説する。

11:00~11:30 播種性血管内凝固症候群 (DIC) の発症機序および病態像について解説し、臨床検査データによる DIC の早期診断および病態鑑別法を教授する。

11:30~11:40 総括・学生からの質問への返答

11:40~11:50 小試験 (本日の講義内容の理解度を自己評価するため)

2) 保健学科主催 FD 研修会について

(1) 山口大学 FD 講演会

「目標達成型大学教育改善プログラムと達成評価の方法」

1. 日 時： 8 月 10 日 (火) 午後 1:30~4:30 (GP ワーキング担当者)
2. 場 所： 医学部第 3 講義室 (遠隔システム)
3. 講 師： 岩部 浩三 教授 大学教育センター

内容：平成20年度に大学教育センターが文部科学省に申請した「目標達成型大学教育改善プログラム」が「質の高い大学教育推進プログラム」に採択された。その背景には、中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」(2008年12月24日)の中でも述べられているように、ユニバーサル化とグローバル化が同時進行する日本の高等教育にとって、社会からの負託に応えられるような質の高い学士課程教育の充実をさまざまな分野から大学に対して求められていることがある。

今回のFD講演会では、**学生の自己管理能力と学修意識を高める取組**を具体的にどのように取り組むのか、**達成度の評価方法**および**学生の自己評価**を通じた学習意欲を向上させるという観点から、山口大学が今後取り組まなければならない重要な事柄である。岩部浩三大学教育センター長により、本学が取り組んできた「目

「標準成型大学教育改善プログラム」の概要と成果および今後の課題について、指摘があった。

(2) 「社会人基礎学力の養成と大学教育改革」

1. 日 時： 2月15日（火） 午後3：00～4：30
2. 場 所： 総合研究棟 3F S3 講義室
3. 講 師： 小川 勤 教授 大学教育センター

内容： 学科FD研修会として当該研修会が開催された。研修内容は最初に最近の大学を取り巻く環境変化と大学改革について、統計資料を使って示された。その後に経済産業省が示した「社会人基礎力」を大学教育の現場でどのように養成すべきかをテーマに説明と他大学の事例紹介が行われた。最初になぜ最近、企業等の社会から大学に対して「社会人基礎力の育成」が求められるようになったのかその背景について説明が行われた。さらに、他大学でどのような社会人基礎力を養成するためにプログラム（授業）が設置されているのかについては、札幌市立大学看護学部の事例が紹介された。そして最後に研修会に参加した先生方に、自分の立場から社会人基礎力をどのように育成していくべきかについてそれぞれ意見交換が行われた。具体的な研修内容は以下の通りであった。

大学教育改革とキャリア教育（社会人基礎力の養成）との関係を中教審答申や大学設置基準改訂などを踏まえて説明が行われた。その後、山口大学の教育改革の仕組みと本学が今後取り組もうとしている改革の方向性について説明があった。最後に、本学が大学教育の中でどのようなキャリア教育を推進しているかについて説明があった。今回の大学設置基準改訂に対応するためには、これらの教育改善作業に加えて、**キャリア・ポリシーの早急な確立と実施**が必要であることがまず説明された。そこで本学では学生支援センターの就職支援室を中心に、各学部教育組織単位（教室、学科）で、**キャリア・ポリシーの策定**を急ぎ、これを実効あるものとするために、平成23年度入学生からを対象とする**学生による目標作成と自己評価（ポートフォリオ）の導入**によるキャリア教育を進める予定であることの説明があった。

参加者からは、「現状の把握と今後の展望がわかった。」「GPとCFCの理解が深まった。」という意見が寄せられた。その一方で、「他大学の事例より本学の事例を示して欲しかった」や「同じテーマでいいのだが、解決案が示されるような内容が良いと思う。」といった「社会人基礎力」の育成を目指した具体的な取り組みを行う際の**サポート体制の充実**などについて言及する意見が多かった。今回学科研修会という形で開催されたが、内容的にはCFCの作成が教育機構から各学科に対して依頼が来ている段階であったので、キャリア教育を絡めて大学の教育改革を説明してもらったことは教員の意識を高めるためにはタイムリーであった。

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	6	22.2%
良かった	18	66.7%
どちらとも言えない	1	3.7%
あまり良くなかった	2	7.4%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	27	100.0%

(3) 「学生を巻き込むFDの発想 —教学改革の次のステップ—」

1. 日 時： 3月 3日（木） 午前10：00～11：30 参加者： 39名
2. 場 所： 総合研究棟 3F S3 講義室
3. 講 師： 沖 裕貴 教授 立命館大 教育開発推進機構

内容：



R RITSUMEIKAN

これからのFDの定義？

羽田(2009):
 アメリカのFDは、大学のアクレディテーションや教員評価を前提に、教員に対する大学による「支援」であり、教員への「サービス」として位置づけられている。

Good(1985):
 Professional Development(研究や技術の能力を高める専門性開発)
 Personal Development(教員自身の理解、社会的組織的地位の理解、仕事に対する姿勢の改善を図る個人開発)

Summary:

1. What for: 建学の精神と教学理念、学部・研究科の教育の目標の実現
2. What: すべての日常的な教育改善活動
3. Who: 教員が職員と協働し、学生の参加を得て実施
4. How: PDCAサイクル

R RITSUMEIKAN

当面、FDをどう構築し、評価するか

これまでのFDの効果検証の指標

- ・研修会・講演会の実施率
- ・研修会・講演会への参加率
- ・学生授業評価の実施率と評価 etc.

当面のFDの効果検証の観点

- ・各大学の建学の精神や各学部・学科のDPの達成のための活動を評価する
- ・そのための教員団の職能開発を検証する
- ・日常的な教育改善活動の成果を評価する

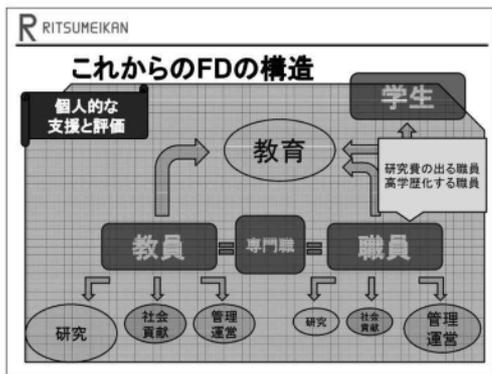
R RITSUMEIKAN

FDの組織的实施—教職協働の観点から—

そう言えば、マーチン・トロウ(1976)も大学の管理者について、エリート段階:アマチュアの大学人の兼任
 マス段階:専任化した大学人+巨大な官僚スタッフ
 ユニバーサル段階:管理専門職と書いていたぞ!
 アマチュアの大学人の兼任はもう古いけど、管理専門職って何? FDにも専門職が現れるのかな?

実は、立命館大学でも、次のFDのステップが始まっている!

しゃべり場:立命館大(2009)



R RITSUMEIKAN

FDの組織的实施—学生参画の観点から—

学生参画型大学運営
 大学運営やFD活動そのものへの学生の参画、意見の聴取等を行うもの、あるいはそれに伴う学生主体の企画、事業の実施など

学生参画型授業
 日常的な授業設計、実施、評価等に主体的な学生参画を求めるとともに、ピア・サポーターとともに授業改善を図るもの

R RITSUMEIKAN

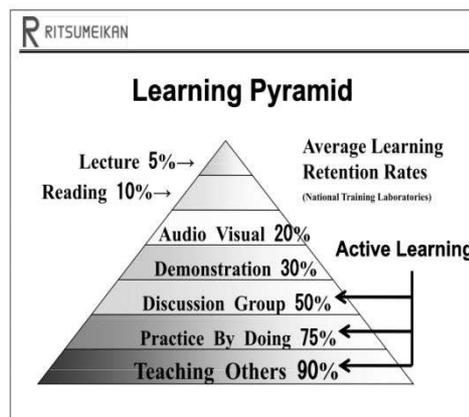
学生参画型大学運営とは

◆**学生FDスタッフのさまざまな活動** (立命大)

大学の授業におけるさまざまな問題の改善や授業の質の向上などを目的とした学生団体。学内においては「授業にどんな不満を持っているか」「どういった狙いで授業をしているか」「授業のどこが難しいか」「何気ない授業にどんな工夫が隠れているか」といったように、学生と先生方のお互いの意見交換を円滑にすることを目的し、学外や大学コンソーシアム京都主催イベントで他大学の学生や教職員と幅広く交流(例:学生FDサミット実施、山形大学との学生交流企画の実施、教育改善学生交流「See2010」への参加)。

◆**学部執行部と学生代表との懇談会**
(立命大、北九州市立大学)

学部執行部と学生や院生あるいは留学生や社会人学生との定期的な懇談会を全学部で毎年実施し、教学に対する学生の要望、意見を聴取、改善に反映(立命館大)。「カリキュラムを考える会」のメンバーが教務部・教務課と懇談会を実施(北九州市立大)。



R RITSUMEIKAN

クリッカーを活用したアクティブ・ラーニング

クリッカーのメリットとデメリット

<メリット>

- ① 授業の大小にかかわらず、学生の反応(理解度)を確認しながら授業を進めることができる。
- ② 学生の意見によって授業展開を工夫できる。
- ③ 学生の興味を引きつけ、授業に集中させることができる。
- ④ おとなしいクラスでも、学生の反応(意見)を引き出すことができる。
- ⑤ 特に答えにくい個人的な回答を引き出すことができる。

<デメリット>

- ① クリッカーの持ち運び、配布・回収が手間である。
- ② 多用すると飽きやすい。
- ③ 自由記述による意見表明ができない。
- ④ 授業進度が遅くなる。

R RITSUMEIKAN

学生参画型大学運営の課題は
いかに学生を信頼し、任せるか。

それには、彼らがサービスを享受するだけのお客さんではなく、大学を創造する「学びのコミュニティ」の一員であることをまづ教職員が認識する必要がある。
最初は手取り足取りであっても、彼らを信じ、任せて、ともに進もうとする態度こそ学生を成長させ、ひいては大学を発展させる。

SSP (Student Staff Partnership、佐藤)
は大学活性化の切り札。
もちろん、Staffとは教員と職員!

「教育改善」の新たな展開は、
学生・教員・職員全体を見渡す議論から始まる!

アンケート調査結果

参加者:39名(アンケート回収 35)

1. 所属 医学科 (5/参加 6名) 保健学科 (30/参加 32名)
2. 本日の研修会について以下のA~Fにお答え下さい。
 - A. 講演の内容はあなたにとって有意義でしたか?
有意義 → 5 (28名(80%))・4 (5名(14%))・3 (1名)・2 (1名)・1 (0) → 無意味
 - B. 講演内容はあなたにとって理解しやすかったですでしょうか?
理解しやすかった → 5 (30名(86%))・4 (4名(11%))・3 (0)・2 (1名)・1 (0) → 理解しにくかった
 - C. 講演内容はあなたにとってどのような点が最も印象的でしたか?
1) 「学生参画型授業」(16名)
・学生の活用の仕方について参考になった。・学生による授業・学びのコミュニティ、学生の活性化。・文系の授業にはスバラシイが。・学生を巻き込み、そして(E S、E Sを見た後輩ともに)学生の意欲をあげられ、効果があり素晴らしいと思いました。・学生を巻き込んだ授業を活性化するための数々の手法が印象的で新鮮でした。
 - 2) 「教員、職員の意識改革」(8名)
・教員のレベルの高さ。E Sの学生さん達の自己意識が高い。・お話は分かり易くまたスライドも

見やすかった。そのこと自体印象深く授業の方法を考える上での参考になった。・学生参画型の大学教育運営・事務職の方が企画できるということに。・山口大学はあまりに遅れている！

・専門職として職員が委員会活動を主に行っておられること。

3) 「講演 (プレゼンテーション)」 (3名)

・講師の先生の話し方が、とてもわかりやすく、聞きやすかったです。(理解しやすい)

4) 「アクティブラーニング」 (8名)

・アクティブラーニングの例・以前、CGI を使い同様の事をしようとしたのですが、学生が PC を持って来ないなどでやめてしまいました。再度チャレンジしようと思います。・授業の中で、学生の反応をリアルタイムに見ることができ、それをすぐ授業に反映できること。

5) 「その他」

・FD の動向や今後の展望が分かったが、自身の勉強不足のために、少し理解できない所があった。

D. 今後のあなたの教育改善において参考になっていましたか？

1) 「学生参画型授業」

・実際、学生をいかに参画させるか！・一緒に成長するという。・専門教育(講義)に TA 等の学生参加は困難ですが、教員の立場でも参考にできる部分が多く有りました。

2) 「アクティブラーニング導入・クリッカーの活用」

・共通教育の授業で活用できるかな？・アクティブラーニングの重要性、行い方。とても参考になりました。・立命館大学で実施されている様々な工夫が参考に成りました。・200 人以上のオムニバス授業を改善する参考にさせていただきます。・多人数のクラスでも、学生主体の授業は可能だと思ったこと。

3) 「その他」

・講演の内容はもちろんですが、講師の先生の論理的な展開と話術。(クリッカーやLMS等)・教員がたくさんの役割をしすぎて、本来の教育がおろそかになりがちにあることを改善していきたい。

E. テーマから考え講演時間については如何でしたか？

適切だった (30名(86%))・長かった (3名(9%))・短かった (0)・どちらともいえない (1名)

F. 開催時期については如何でしたか？

適切だった (30名(86%))・不適切だった (2名(6%))・どちらともいえない (3名(9%))

その他：FD 企画について自由な意見をお寄せ下さい

・もっと多くの教員、職員が参加すべき。・資料はスライドで示していただいているので必要であれば(期限を決めるなどして)ダウンロードできるようにしてはどうでしょうか。あまり保存しておこうと思わない資料の場合(失礼ですが)ゴミになりますし、もったいないと思います。・FD 委員会そのものに問題はありますか？・質疑応答の時間も含めた、予定時間を示して頂けると助かります。・大変興味深いお話でした。ただ決められた時間に終わってもらわないと、次の予定に間に合わなくなります。

(4) 「組織における人材育成一人を動かす」

1. 日 時： 3月 25日 (金) 午前10:00~11:30

2. 場 所： 総合研究棟 3F S3 講義室

3. 講 師： 野利本 悠 氏 医学部ライフサイエンス室 室長 (前協和発酵 (株) 役員)

企業における取り組みなどでは、概ね歴史的・社会的背景に依存することが常であることから、組織の改革や人材育成においてその影響を考えることが必要であると指摘された。国立大学も平成 16 年に独法化をし、組織のハード、ソフト両面より、著しい改革を迫られてきた。したがって、まず

1) 医薬品と合わせ食品製造に関わる企業の歴史と変遷について概況が述べられ、さらに、2) 日

本人の健康と食や背景となる世界の食糧事情の分析がなされ、**社会のニーズを踏まえた企業戦略が存在**することが述べられた。こうした中、企業では**人が生かされ**、成果を生み社会貢献することから、今回の主題である人材育成のノウハウを詳しく平易に解説された。以下のことなどが主な内容であった。

1. 組織における人材育成 ～人を動かす～

1) 企業戦略とポリシー：

“画期的な新薬を世界に送り出す” オンリーワンの創薬技術や世界トップクラスのバイオ医薬品製造技術を駆使し、世界フィールドに事業展開 “

“1日でも早く、一人でも多くの患者さんに私たちの薬を届けられるようグローバルな研究・開発体制を整備してゆく。”

2. 人事評価制度（人事評価委員会）企業はヒト、モノ、カネの内“**企業は人なり**”業務を円滑に遂行した人、人材育成を含め、**業績を上げた人を評価、処遇**する。

1) 賞与事例：S-3：400万円（400%）～A-3：150万円～B：100万円（標準額例：100%）

C-1：75万円（75%）～C-3：0万円（0%）

2) 昇級、昇号（昇給）：特別昇給、抜擢昇給、等

・ライン職務 ・スタッフ職務 ・徐々職務

3. 教育指導の取り組み：研修・教育（各層別にOJTも個別に実施）

1) 新入社員教育 2) 主任研修・教育 3) 管理職研修・教育 4) 経営職研修・教育

4. その他

1) 各種・**資格試験推奨**（原則：初回試験受験費用は会社負担、以後は本人負担）

・国家試験・資格試験・TOEIC・海外留学制度（MBA取得、共同研究開発派遣留学等）

・特許発明奨励金・新規特許申請受理完了時奨励金・特許事業化段階奨励金・販売後事業規模確定時奨励金・厚生福利制度の充実

2) 他社の事例：

・島津製作所：田中さん（ノーベル物理学賞受賞）

入社後23年間は主任止まり。ノーベル賞受賞後は急遽、研究フェロー（役員）に昇任

・富士通：プラズマテレビ開発者

液晶テレビとの激しい開発競争のもと研究開発。

グループから排除、長年21年間、工場の品質管理に配属。競合他社、パナソニック、SONY、東芝、日立等

にライセンス外後高い評価を受け急遽、執行役員に格上げ

・第一三共：マロチン（抗・高脂血症剤）2500億円/年売上。

退職後15年後に表彰、満70歳で3000万円。特別奨励金授与

3) 教育改善に関する活動

センターの主旨「大学設置基準の改定および**分野別質保証**からみえてくる今後の大学に求められる**カリキュラム改善**の方向性を確認し、これらに対応するGP、CUM、CFCをどのように整備すれば良いか、**学科教職員が大教センターと連携して取り組み整備することにある**」を基に、今年度も鋭意整備を進めた。以下にその活動内容を述べる。

(1) カリキュラムマップ (GP) の見直し作業について

作業の目的：

- a) 共通教育も含め、一貫した学士課程教育の整備。各授業科目について関連するグラジュエーションポリシー (GP) の○付け作業を行い、今後の教育再構築の基盤とする。
- b) GP やシラバス到達目標の見直しを通じて組織的なカリキュラム改善を推進する。特に組織的に行うことで授業科目間の連携等を意識し今後の授業改善に大きく貢献できると思われる。

(2) 平成 22 年度 教育改善 FD 研修会

1. 日 時： 平成 22 年 12 月 9 日(水) 14:30～16:00
2. 場 所： 医学部保健学科 研究棟 1F 会議室
3. 出席者： 高橋保健学科長、保健学科 FD 委員など (石川教授、渡部教授、正村教授、野垣教授、山城准教授、合計 7 名)、
岩部大学教育センター長、兼石教育コーディネーター、大学教育センター専任教員 (小川勤、吉田加奈、木下真、岡田耕一) 合計 6 名

研修内容：

医学部保健学科の FD 委員等を対象に、教育改善 FD 研修会を実施した。まず岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨が説明された。平成 23 年 4 月の大学設置基準の改定に伴い、第四十二条には新しい項目として「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が付加されている。また、日本学術会議による「大学教育の分野別質保証の在り方について」(以下、分野別質保証) では、専門教育の在り方について今後対応すべき内容が記されており、これには 3 年後に主要 30 分野で掲げられる予定である「教育課程編成上の参照基準」の作成の手引きも添付されている。これらを踏まえながら、今回の FD 研修会は、学士課程再構築の視点から GP、CUM (カリキュラムマップ) の在り方の再検討、CFC (カリキュラムフローチャート) の意義と作成方法の説明、CFC の作成依頼を目的とした。



保健学科では、学科の性質上、大学設置基準の改定で示された「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」や分野別質保証の「当該分野の学びを通じて獲得すべき基本的な知識と理解」および「獲得すべき基本的な能力 (a. 分野に固有の能力)」については、既に確立されていると考えられる。一方、分野別質保証でいう「ジェネリックスキル」は、図 1 のように専門教育も含めて培われるため、今後も他の学部と同様に、カリキュラムマップを元にして、更なる検討が必要であるとの見解が示された。また、個別学生の GP 達成度を確認する学習ポートフォリオの必要性等が示され、科目履修の順序性を表すカリキュラム・フローチャートの意義が説明され、作成の依頼がなされた。

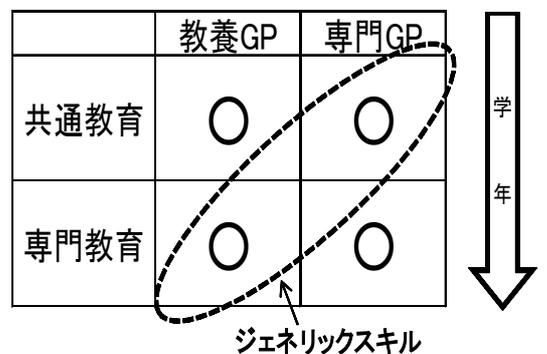


図 3 ジェネリックスキル

次に、兼石教育コーディネーターより、山口大学における**出口管理のグランドデザインの必要性**が説明された。ここでは、大学・学部・学科・コース等の各 GP が階層構造を成すべき必要性、コース等の最小単位の GP と授業科目との対応関係を示す CUM の重要性が説明された。これに続いて、期待される GP の機能および GP が機能するまでの過程が示され、作業によって生じる問題点が説明された。また、保健学科の GP の記述に若干の問題（「身につけている」という表現が多用されている）があるとの指摘がなされた。

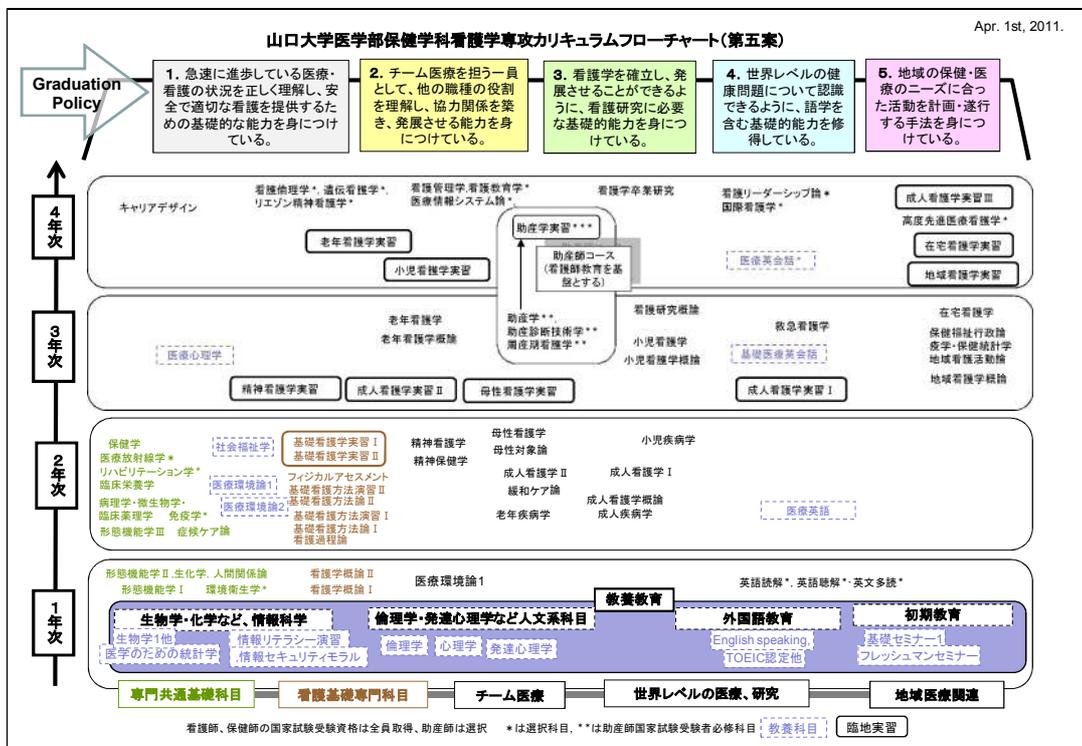
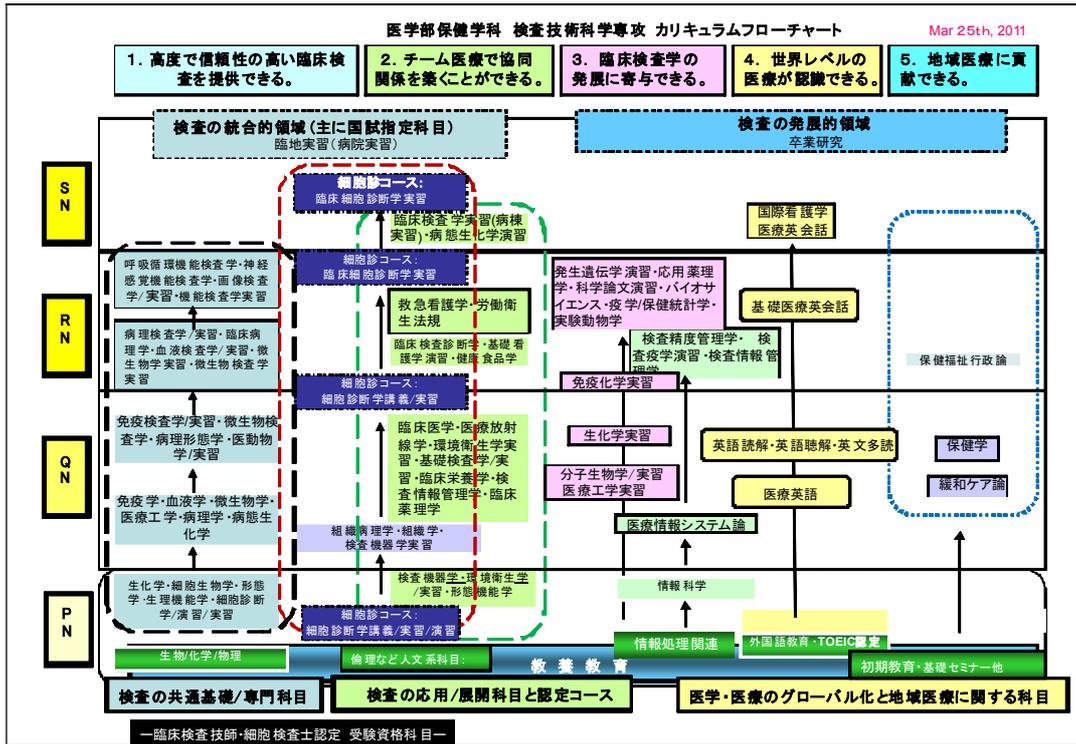
次に、大学教育センターの小川教授より CFC の意義と具体的な作成手順が説明され、作成依頼がなされた。**CFC は科目履修の順序性を表す図**であり、学内関係者だけではなく**学生や学外者（受験生、保護者などを含む）にもカリキュラムを説明する上で重要**であるとの説明がなされた。CFC の作成手順の説明では、一般的な手順が示された後に、学生や学外者にもわかりやすくするため、学問的な特性を考慮して**科目をグループ化する**など CFC の表現を適宜変更してもかまわないとの説明があった。また、CFC の例として、本学工学部機械工学科、愛媛大学医学部看護学科の例が示された。CFC の提出期限については、今後他学部の意見も含めて大学教育センターで検討し、後日通知したいとの説明があった。

質疑応答においては、保健学科の教員から「CFC には共通教育のすべての科目を入れなければならないか」、「ひとつの科目が複数の GP に属する場合、単純に CFC で表現すると矢印を何本も引かなくてはならない。結果的に見難い図になるが、どうするか」等の質問がなされた。これに対して大学教育センターは、「**共通教育で必修あるいは一部の選択必修にしている科目（「生物」など）のみを CFC に含めてはどうか**」、「学生や保護者等に分かりやすい CFC であることも重要である。そのため**科目のグループ化等**を行い、**CFC の簡略化**を適時行ってほしい」と回答した。

今回の研修会では、大学設置基準の改定および分野別質保証からみえてくる今後の大学に求められるカリキュラム改善の方向性を確認しこれらに対応する GP、CUM、CFC をどのように整備すれば良いのかについて議論を行った。今回の研修会は医学部保健学科における組織的な FD 活動を継続する上で大変有意義であったと考えられる。

(3) 保健学科および各専攻における GP, CFC 作成について

保健学科両専攻における CFC について、継続的に、専攻ごとで意見を集めてきた。FD 研修会で全教員へ配布した。また年度末に、保健学科案を、大学教育センターへ提出した。



4) 学生授業評価・教員授業評価

学生授業評価においては、例年より約8ポイント改善したが、依然72%実施率と、全学のなかで低い基準であった。早急に再度、個人レベルでの教育改善や学生との信頼などにおいても、この授業評価の実施と自己評価は重要であることを周知したい。

2010年度 山口大学 学生授業評価および教員授業自己評価 結果一覧

<学部>学生授業評価

科目	医学部(医学科)	96.7%	95.9%	100.0%	98.7%	98.7%	97.5%	自己開講コース、国際 実習1、国際実習2を 除く
科目	医学部(保健学科)	48.6%	52.9%	55.2%	52.6%	66.7%	72.1%	授業評価の必要な ものに限定

<学部>教員授業自己評価

独自	-	-	83.3%	100.0%	全て
独自	-	-	-	-	-

<大学院>学生授業評価

医学系研究科	-	46.5%	54.5%	64.4%	51.5%	57.1%	特別研究、オムニバ スを除く
--------	---	-------	-------	-------	-------	-------	-------------------

<大学院>教員授業自己評価

1	53.5%	28.8%	26.4%	28.5%	#
Y					

5) 来年度の課題

(1) 「大学教育の分野別質保証の在り方について」について

学士課程再構築の視点からGP、CUM、CFCの在り方とその意義のさらなる検討を大教センターと連動して早急に整備する。

(2) 「社会人基礎力」をはぐくむ組織的取り組みについて

キャリア教育の強化と併せ、継続する必要がある。

(3) 授業への学生参画,および、教育への職員の参加について

学内学生の後輩への支援などで学習意欲が上がり、また教職員が同じ意識で教育に参画する様を目指したい。このことは、大学における望まれるFDであろう。

F D実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
医学部	教育改善に関する講演会－学生を巻き込むFDの発想－教学改革の次のステップ	講師謝金・旅費 1名	69	授業内容の改善について、知見を得た。
計			69	

第9章 工学部のFD活動

第1節 授業公開

工学部では、これまで毎年度前期と後期に各学科2～4科目を選び、それを公開授業として一般教員の授業参観を進めてきた。昨年後期からは、参加率の向上を期待して、一定期間を定め、学部全開講科目を対象として授業科目を実施した。

平成22年度(前期)公開授業一覧

後期公開授業実施期間 7月1日(木)～7月22日(木)

学科	授業科目名	授業実施者		実施日時	備考
		職	氏名	月 日	
全学科	全開講科目	全職	全教員	7月1日～ 7月24日	非常勤講師 担当の科目 は除く。

平成22年度(後期)公開授業一覧

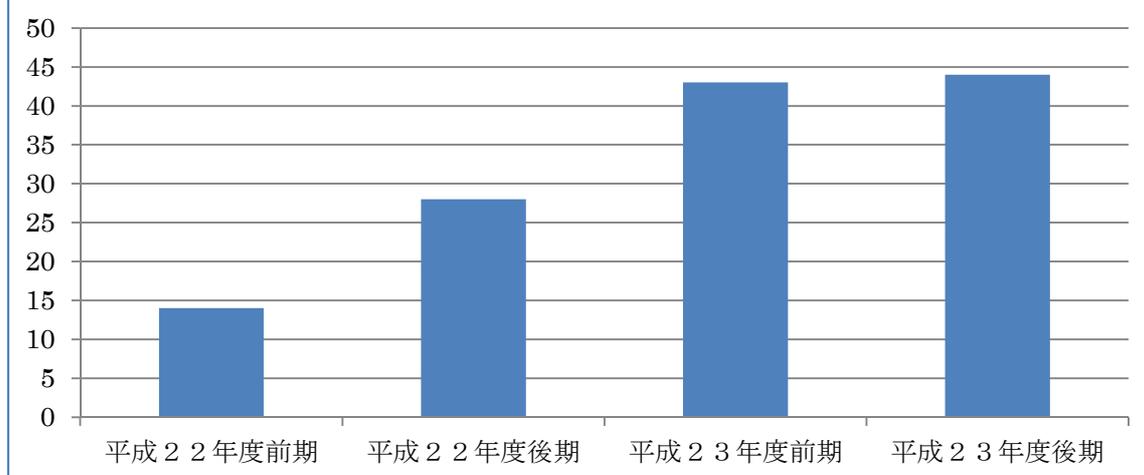
後期公開授業実施期間 12月1日(水)～12月24日(金)

学科	授業科目名	授業実施者		実施日時	備考
		職	氏名	月 日	
全学科	全開講科目	全職	全教員	12月1日～ 12月24日	非常勤講師 担当の科目 は除く。

授業参観参加者の推移を下表に示す。

下表のとおり、参加者は前期43名、後期44名、合計87名であり、対象科目を全開講科目としたことによる参加者の増加が見られた。しかし、この人数は工学部の教員数の45%に当たり、2人にひとりの教員が授業参観に参加したことになる。しかし、工学部として、教員には年1度の授業参観を目標に掲げており、目標達成までにはいま一步の改善と普及が望まれる。そのため、多忙な教員のニーズに合わせた工夫・改善が必要と考えられる。

授業参観参加者の推移



授業参観した教員から提出された感想や指摘などを、原文通り以下に列記する。

前期公開授業感想まとめ

●優れていると思われる点

説 明

- ・ 工夫されたPPTを使用して実際的な例を示しながら、また、学生の興味を引くように強弱を付けて説明をされていた点。
- ・ 実例を多く挙げて説明していた点。
- ・ 工夫されたPPTを使用して、分かり易く説明した点。
- ・ ホワイトボードを使って学生に説明させており、理解が確実なものとなるよう工夫して指導している。
- ・ 学生の理解度を深めるように、丁寧な演習問題の解説が行われていた。
- ・ 公式の導入部となる数式で教科書では省略されているようなものを、省略せずに丁寧に説明している点
- ・ 電子計算機のハードウェアとソフトウェアの両面から解説があり、バランスの良い講義だった。
- ・ プリントをみると後でわかるし、スライドがあったので本当におもしろい。もっともっとスライドをみてみたいと思いました。
- ・ 微分方程式の解法を丁寧に説明している。
- ・ 発表においては、聞き手の理解度を推測して、それによって話す内容や表現方法を変えることがとても大事だということを再確認しました。藤永様は、少し難しい所になると話すスピードを遅くし、学生と十分なアイコンタクトを取りながらおいてきぼりになる学生さんがいないよう十分な配慮をしておられました。その結果、学生も藤永様が伝えたい重要なポイントをしっかりと理解することができていたのではないかと感じました。
- ・ 藤永様は日頃から市民の方と接する機会が多いとのことでしたが、授業でも説明の上手さが各所に現れていました。例えば、問題提起にいたるまでの導入部分では、いきなり専門用語を使うのではなく、学生がとっつきやすい簡単な表現でエネルギー消費の現状や地球温暖化を的確

に表現していました。

板書

- ・ PPTでの説明を補うように準備したプリントの配布。
- ・ パワーポインターと板書を同時に使用することは効果的と思いました。
- ・ 黒板を使っての従来からある教授方法であるが、板書の字が大きく、わかりやすくノートに写せるような配慮があった。
- ・ PowerPointの資料の説明だけではなく、適度にホワイトボードで計算を行うことにより、より分かりやすい説明となった。
- ・ 板書の字が大きく、読みやすい
- ・ 板書の文字を大きく丁寧に書いているので、見やすい。

資料

- ・ パワーポイントを使って授業内容を説明すると同時にプリントを配布し、故意に空欄とした場所を学生に穴埋めさせることによって学生の授業へ集中させていた。
- ・ スライドとプリントを準備して効率よく授業を進める点
- ・ 配付資料はなく、パワーポイントを投影して学生にノートをとらせており、全員が熱心に授業に取り組んでいる。
- ・ 配布資料を用いた独自の教材による講義であったこと。
- ・ 講義の進行は主に PowerPoint だが、教科書のページを適度に参照しているため、後で学生が自主学習するのに役立つ。
- ・ PowerPointの数箇所が穴あき文章となっており、学生が適度に手を動かして学習していた。

進め方と工夫

- ・ 出席表およびその取り方に新しい工夫があった点。
- ・ 授業の後半での動画による実例の紹介が最新のものであった点。
- ・ 演習問題やまとめを適切に行っており、演習問題については解答の解説も丁寧に行われていた。
- ・ 時折指名するなど授業への参加を促す工夫が見られた。
- ・ 学生の方を見て話している
- ・ ゆっくり授業を進めているので理解がしやすい
- ・ プロジェクター使用でわかりやすい
- ・ 途中で演習問題を課していることで理解を深めやすい
- ・ 大きな声で教室の後方席までよく聞こえるように話す点
- ・ 前回授業の演習の解説を丁寧に言い、また提出物を添削して返却する点
- ・ 学会コンペ「自然と呼応する建築」の課題作品の投票会である。学生のグループによる主体的取り組みと、プレゼン能力の育成に有効な方法として評価される。
- ・ 基礎科目で退屈になりがちな内容に、身近な例を提示して学生の関心を高める点
- ・ 演習をかねて理解しやすい授業でした。
- ・ 予め授業内容に相当する範囲を学生に伝え予習を促している点
- ・ スライド・黒板の両方を用いて、視覚的に理解できるように工夫している点
- ・ 重要なポイントがどこかを途中で振り返りつつ授業を進めている点
- ・ 毎回、学生から質問を受け付け、授業の冒頭で全回の内容の復習と組み合わせて網羅的に応えており、学生の授業への積極的参加を促していると思われる。
- ・ 全ての学生がノートをとりやすいよう、内容が簡潔に整理されている。学生によっては表のようにまとめ直すなど、積極的なノート作成の姿勢が見られる。

- ・ 内容のまとまりごとに、研究（理論）が明らかにした問題→それを解決することを目指した実例→その実例における問題点、という学生の建設的な発想につながる論理的な構成になっている。
- ・ 期末試験直前の授業だったので演習を中心に行っていた。この時期は受講生にとって最も関心が高くなり、授業への取り組む姿勢も積極的になる。初めに過去の問題等を配布し、試験と同じような雰囲気の中で解答させ、一定時間後に質問等がある場合は、個別に指導していた。実戦形式で行うことで、理解度や内容の定着率も上がると感じた。
- ・ 演習との連携が強いようであった。
- ・ 落ち着いた話し方と詳細な板書は参考になった。
- ・ 質問票を書かせるという受講生の興味を引く工夫がなされており、その効果が見られます。
- ・ 受講生の反応、態度を意識しながら授業をされている。
- ・ 考え方のヒントやポイントを与え、演習への意欲を高めている。
- ・ パワーポイントを使って講義が行われており、学生が理解しやすいような工夫がなされている。

その他

- ・ これに対し、聴講する学生達の多くは、雑談をする、居眠りをする、教室を勝手に出入りする、などの良くない態度が目立ち、せっかくの準備された講義が台無しになる場面も見られた。
- ・ データベースの基礎から演習までの広範囲を網羅しており、入門者にとっても非常に分かり易い内容であった。
特に、このデータベース科目は、情報処理推進機構（IPA）のオープンソースソフトウェア（OSS）モデルカリキュラム導入実証事業（導入実証の対象教育機関：山口大学）における「簡易ビジネスシステムを利活用した仮想企業間での導入実証実験とOSSモデルカリキュラムの有効性評価」の対象科目に含まれており、大規模情報システム開発に必要なデータベースのスキルに関して、座学だけではなく実践的な内容も取り上げられていた。
本科目は、昨年度も参観した科目であるが、上述のように、年々講義スタイルが変化しており、ドッグイヤーと言われる情報分野において、社会ニーズに応じて柔軟に対応している点が非常に高く評価できる。
また、OSSモデルカリキュラムに関連する科目とも連携しており、科目間の接続性の面においても学生にとっての習得目標が明確となる印象を受けた。
- ・ 座学での解説時間および演習時間のバランスがよく考慮されており、学生が集中して講義を受講している。
- ・ 理論だけでなく、学生が身近に感じるような、より実践的な内容を含んだ演習を実施しており、学生が講義内容に興味を持てるように工夫している。
- ・ 重要な項目に関して、ビデオを準備し、それを学生に見せることで学生の興味を引き出していた。
- ・ 声が聞き取りやすい。
- ・ 学生の名前を呼んで適宜、質問をしている。
- ・ 1班の学生人数が3人程度と以前より少なくなっており、一見ただけでも実験テーブル上のスペースが楽になっている。学生には良い環境になっていると思います。
- ・ TAをうまく組み込んで運営されているように感じました。
- ・ 今回はこれまでの学習の総括として、学生による成果発表であったが、班ごとに目的を持って協力しながらテーマに取り組んでおり、よかったと思う。
- ・ 多くの人に自分の伝えたいことを的確に伝えるにはどのようなプレゼンをすればよいのかトレーニングする機会は少ないので今回の企画は学生にとって有意義なものになると考えられ、将来の就職活動における面接にも役立つと思う。

- ・ 当日は最終報告会を行っていた。学生をリラックスさせ、発表・質疑応答を積極的に行える雰囲気をつくっていた。ロケットの作製について各学生が深く考察していた。
- ・ 期末試験前であったので、試験範囲やポイント等の説明がなされていた。
- ・ 出欠が厳密に管理されていた。
- ・ 前半講義60分、後半演習30分があり、演習を行うことで、より学生の理解が深まっている。
- ・ 演習課題は難しいが、資料としてフローチャートを提示しており、講義を聞いている人には、きちんと理解できる適切な難易度だった。
- ・ 講義の開始時に挨拶を行うことで始まりを明確にしている点
- ・ とにかく興味があつたのでおもしろくてしかたがない授業でした。周りの学生に寝ている人がいて不思議でした。
- ・ 理解を促すための時間を十分に取りながら講義を進めている
- ・ 受講生に対してフレンドリーな印象の話し方、態度がよいと思う。
- ・ 演習について基礎から応用的な問題まで内容が充実している。
- ・ 受講者の状況に目を配り、適宜個別、全体にアドバイスしている。
- ・ 演習にもかかわらず自然と静かな雰囲気が保たれている。
- ・ 具体例を示しながら、学生に将来のキャリアについて自分で考えるように仕向けられていたこと。
- ・ 客観情報を情報源を明示した上で開示されていた点。
- ・ 配布資料がよく準備されている。
- ・ 履修者全員が参加する公評会は、ほどよい緊張感が保たれていたと感じました。
- ・ デッサンの全体および細かい箇所に対する具体的な指摘と評価が、学生の理解を促進していると感じました。
- ・ 専門性の高い授業ではありますが、アドバイスの内容が明瞭で、素人である私にも分かりやすいものでした。
- ・ 予習内容を他の学生に対して説明させ、それをもとにして議論をおこない理解を深めさせるといった工夫がなされている。
- ・ 講義資料を企業とともに作成しており、社会のニーズをとらえている。
また講義資料だけでなく、模擬講義を何度も実施し、教授方法を洗練している。
- ・ TAに対する指導も十分行われている。

●改善を検討すべきと思われる点とその理由

説明

- ・ 今回の講義の内容が前回からの続きとなっていたこともあり、以下の点の改善が望まれる
- ・ 話題が多彩であったため、少しまとまりのない（総花的な）講義内容となっていた。
- ・ 期待した産業倫理と関係のない話題が多く、どの点が主題と関係があるのかの焦点が少しぼやけていた感じがした。

板書

- ・ 板書は丁寧に行うべきだと思われる。
後ろの座席では指示が聞き取れず、板書している通りにノートを取っていた。

資料

進め方等

- ・ 発表の時間配分・説明の要点を明確にする事前指導が望まれる。

その他

- ・ 学生が時間に遅れてきたり、私語が多くあっても注意することなく淡々と説明をしていた点。大学の授業なので、他人への迷惑も考えてもっと注意しても良いのではないかと思われる。授業担当者の忍耐力の問題かも知れないが・・・。
- ・ 学生のノートパソコンを利用した演習（システム開発）を実施しており、また必修かつ 80 名を超える講義であるため、可能であれば、学生の質問に対応できる複数の TA を配置した方がよい。
- ・ 先生の声が後ろでは聞き取りにくかった、もっと積極的にマイクを利用した方がよいのではないのでしょうか？
- ・ 細かなことですが、学生のカバン等を一箇所にまとめて棚の上に置いている班と各自の足元に置いている班があります。邪魔になっていなければよいのですが。
- ・ 私語をしている学生が見受けられる
- ・ 時々注意を促すことが必要かもしれない
- ・ 教室の後ろの方は声が聞き取りにくいのでマイクをしようしたらよい
- ・ 2 コマ目の授業であるにもかかわらず遅刻者が多いこと：この授業だけの責任ではないと思われるが、その都度の注意喚起が必要と思われる。学生の授業に対する緊張感がやや薄いように感じられたのも、このことと関係していると思われる
- ・ 特には無いが、受講生が 100 名近くいるので質問が多い場合は TA 等を活用した方が教育効果も上がると感じた。
- ・ 朝 1 コマ目ということで、遅刻学生が数人いたが、ノーチェックであった。
- ・ 教科書を持ってきていない学生がいた。PowerPoint の資料がとても詳しいので学習は可能だが、良いのだろうか。ノート PC を持ってこないのは論外だろう。
- ・ PowerPoint の命令一覧の表が見え辛かった。おそらく、以前の講義で説明済みなのだろう。
- ・ スライドの文字が小さくて読みづらい点
- ・ 白板のマーカーは書けるのを用意する。見にくいという理由。
- ・ 遅刻してくる学生が比較的多く見られ、遅刻した受講生も平然とした様子である。集中して授業を受けている者への授業の妨げにもなっていると思うので、遅刻を抑制する手立てを考えるべきだと思います。
- ・ 後ろの方で聞いていると、声が届きにくい感じでした。
E 2 1 教室は縦長であり、講師と一番後ろには距離感がある。
マイクがないと後部の学生には聞こえない。
また、いわゆる黒板型の教室ではない。
このタイプの教室をどのように使いこなすかは、私たちの課題である。

● その他

- ・ この講義で使用した B22 教室をはじめ、今般改修された教室いづれでも、一部可動の床固定いすを採用しているが、着席姿勢が不安定なことに加え、中央部席への出入りの際には端部の席に着席した学生が立ち上がらねばならない状況は以前の設備と同様であり、改修の効果がほとんど感じられない。学生には不評である。
- ・ 演習の講評会参加。学生の取り組みは良好である。
担当者の努力ではどうしようもないが、部屋が学生、TA で密集した状態なので、もう少しスペースに余裕のある教室があればよいと感じた。
- ・ プロジェクター用スクリーンが正面にあるため、パワーポインターと板書を同時に行う場合、スクリーンの上げ下げや同時に見れない部分があって、スクリーンを脇のほうにも設置してプロジェクターを使用できるような環境を整備してほしい。
- ・ 自分は 1 年生の基礎セミナーを担当しているが、この 1 年間で学生のプレゼンテーション能力

が顕著に向上していることがわかった。彼らの成長を感じる事ができた。

- ・ C11 では、黒板の前にスクリーンが下りてくるので、板書できる黒板のスペースが限られてしまいます。できれば、D12 のようにホワイトボードのサイドにスクリーンが下りてくるような構造の教室が増えれば、授業がし易いかと思いました。
- ・ 実例の平面図等の図版資料が示されると、より建築設計に結びついた具体的理解が深まるように思った。
- ・ 演習形式で有ったためか、後の座席では寝ている学生や音楽プレーヤーを聴いている学生もいた。他人に迷惑をかけていないが、講義室全体の雰囲気が損なわれると感じた。
- ・ 専門科目 II の講義であるが、受講生が 20 名程度であった。教室は静寂で、居眠り、内職することなく教員の板書を熱心に書き写していた。当方の担当講義では受講生が 80 名を超え、どうしてもすべての受講生に目が届かないが、このような少人数での講義は互いにとって大変よい環境であることがわかった。
- ・ 授業が 40 分程度で終わった。前期最後の授業であったからか？
- ・ ご存知かもしれませんが、PowerPoint の資料として、「情報機器と情報社会のしくみ」が使えるのではないかと思います。ご参考まで。
<http://www.kome100.ne.jp/main/contents/cec/mext/joho-kiki/index.html>
- ・ 全期間受けて見たいし、実際の設計を手で動かしたときにこの授業の意味がわかったと思いました。
- ・ 演習問題・小テストの解答は、まず、学生に板書させてみることも検討しては如何でしょうか（積極性の育成&シラバスの積極性に関わる評価項目に対応、成績にも反映させるとなお好ましい）。
- ・ どの授業でもあることだが、最近は遅刻してくる学生が多い。
- ・ 定期試験に向けた演習を実施したので、通常の講義の進め方はよくわからない。ただ、講義を実施するにあたり、教員として講義に臨む態度に問題点があるように思う。講義に悠然と遅れて来たり、教壇に立っているにも関わらずガムを噛んでいるというのは、大いに問題があると思う。
マイク設備がある教室に変更されたらどうでしょうか。
- ・ 2 日連続の集中講義では学生の知的スタミナがもたないかもしれない。

後期公開授業感想まとめ

●優れていると思われる点

説 明

- ・ 受講学生に順番に質問しながら、講義に積極的に参加させている
- ・ ご研究での経験を効果的に取り入れておられて、非常に興味深い授業でした。
中間試験の解説が丁寧に行われていました。
- ・ 全体的にゆっくりと授業を進め、丁寧な説明に心がけている。
- ・ ゆっくり話されており、聞き取りやすく、理解しやすい。
- ・ 混乱するポイントを繰り返し説明されている。
- ・ 資料を読み上げるだけでなく、身近な例や最新の情報を織り交ぜた授業で分かりやすい
- ・ 知識の活用を意図した説明が多く、学習意欲喚起に有効ではないかと思いました。
- ・ 流れの方程式について、その定式化と解放がわかりやすく丁寧に説明されていた。
- ・ 説明は、懇切丁寧で、ポイントになるところが的確に指摘されていた。
- ・ 技術職員、TAによるきめ細かい説明。

板 書

- ・ タブレットの使用により、パワーポイントの機能と板書の機能が複合されていてよいと感じた。
- ・ 講義形式は、板書によるもので、学生にとって説明を聞きながら、板書内容をノートに書き写すに十分な時間が確保されていた。
- ・ 板書の量は多すぎず少なすぎず、スピードも適度であり、学生が理解する時間を上図に与えている。
- ・ 数式が多く出てくるが、プロジェクタのみを使うのではなく、板書を利用して学生に手を使って考えさせる時間を作っている。
- ・ 進行速度は学生が板書をノートしやすいようにゆっくりしている。
- ・ 一番後ろで参観させていただきましたが、板書の文字の大きさは十分で、声も十分聞こえました。演習問題は問題からきちんと板書され、図も書かれており、授業を進行されるスピードも適当と思いました
- ・ プロジェクタの文字が大きく、B11教室の後ろの席からでも良く見えた。
→自分のスライドも、情報量を減らして大きな文字サイズにしてみようと思う
- ・ プロジェクタとホワイトボードへの板書が使い分けられていた。重要な式の誘導（4.9式と4.10式）を、長いホワイトボードの左右全面にわたりゆっくりと板書されていた。受講生は重要な式の誘導を考えながらノートに書き写すことができた。その結果、4.9式の左辺の書き間違いを学生が指摘する場面があった。これは受講生が良く理解しながら書き写していることを示す良い例であった。
→自分はプロジェクタしか使わないので時々受講生が書き取れないことがあったが、ホワイトボードを有効利用してみようと思う。
- ・ 数式を適切な速度で実際に展開して、ゆっくりと説明しているところが印象に残りました。あえて板書し、受講生たちに写す時間をとりながら、丁寧に説明されていました。
- ・ ゆっくりと板書されており、学生の理解する時間に対して配慮が行き届いている。

資 料

- ・ 授業資料のフォントは大きく、パワーポイントに映写しても大型の教室でも見やすいものとなっている。
- ・ 講義に則したパワーポイントが用意されている。
- ・ 資料テキスト（HTML）が良く整備されている。
- ・ スライドの配布資料も配られていた。
- ・ 資料配付。
- ・ 各授業ごとに、課題演習に関するオリジナルの資料・プリントが作成・配布されている。内容は、ていねいかつ詳細で、学生にとってもより理解が深まると考えられる。
- ・ 詳細な説明を授業資料として配布しており、予習や復習がしやすくなっている。

進め方と工夫

- ・ 受講学生に順番に質問しながら、講義に積極的に参加させている。
- ・ 英語だけでなく、日本語も同時に示しながら学生の理解向上に努められている
- ・ 授業の進行は早すぎず、豊富な解説をもとに進められており、学生に理解しやすいものとなっている。
- ・ 空白の授業資料を埋めることで学生に作業する機会を与え、関連する計算問題を授業内レポートで課すなど、さらに理解を深める工夫がなされている。
- ・ 同じ理論式を違うアプローチから説明されており、条件によって問題を解くための選択肢を与

えられている。

- ・ 内容の理解や問題を解くことだけでなく、相手に分かりやすい答案作成方法についても説明されており、プレゼンテーション能力の向上を促されている。
- ・ 教科書と独自教材の併用で分かりやすそうだった。
- ・ 講義30分後の演習時間にレポート面談を行っているのは効率的
- ・ テキストを丸読みしたり板書だけにならずに、学生の方を向いて適度な間を持って講義をしているため、学生は理解しやすく講義を聴いている気になる。
- ・ 学生の理解度を確認しながら授業を進めていること
- ・ 授業の中で質問する時間と機会を十分に与えていること。特に、質問しやすい雰囲気を作るように努力されている様子が伺えて参考になった。
- ・ 情熱が感じられた。また分かりやすい語り口であった。
- ・ 演習問題を課す際に、学籍番号によって計算に用いる数値を変えるようにしており、個々で問題を解かせる工夫が見られる。
- ・ 演習問題を解かしている間は、教室内をまめに巡回して集中力を保たせ、解答状況を見て適宜補足説明をするなど、前向きな取り組みを促す工夫が見られる
- ・ 演習問題の答え合わせは学生間で行っており、他人の答案を見ることでより理解を深めさせたり、採点の作業で集中させたりする工夫が見られる。
- ・ 直前の講義の内容で解説が行われた内容について、演習が行われていた
- ・ 視聴覚機器を多用して、超電導関連機器やデバイスについてイメージしやすくしている。また、レポートを出しており、授業以外で講義内容について考える時間を作っている。
- ・ 実習を含めた実践的授業。

その他

- ・ 遠隔講義で、ウダヤナ大学と山口大学学生を対象とした大学院の講義である。
- ・ ウダヤナ大学側で、カメラを適宜操作することによって、教室の状況がよく伝わってきた。
- ・ 講義の内容については、毛管上昇高を求める内容であった。演習ということで、特にコメントはありません。
- ・ 全体的にゆっくりと授業を進め、丁寧な説明に心がけている
- ・ 後方席においても聞き取りやすい。
- ・ 学生の名前を把握されている。
- ・ 教員・TAによる丁寧な指導がなされている。
- ・ 強調や繰り返しなど、丁寧だった。
- ・ 学生の方を向いて説明されていた。
- ・ 先生自身が楽しそうでした。
- ・ 座学での習得した知識の確認と理解に役立つ。
- ・ 実験器具の交換部品などがテーマ別にボックスに整理されている。
- ・ 受講学生が真剣に取り組んでいた
- ・ グループ単位で実験を行っているが、メンバーの一部がサボらないような対策をとっている点
- ・ TAが単に実験補助という役割ではなく、理解すべき理論や公式、実験器具や方法等を履修学生に丁寧に説明をしており、履修学生のみならず、実験を担当しているTAにとっても貴重な経験になっていると予想される。
- ・ 履修学生への実験関連事項の質問、Excelを利用した理論計算の実習により、履修学生がより積極的な姿勢で授業に望んでいるように感じられた。
- ・ 個々人の能力、主体性の差により実験を担当する学生がグループ内で偏りがちになってしまうが、本実験では実験を担当する学生や質問に答えさせる学生を、TAがグループ内で順番に指名

しており、この問題がある程度解消されていたように思う。

- ・ 講義とコンピュータによる演習を交えて、理解させるようにしていただける。演習においては、いつも席を回って、確認していただける。また、マイクを使用しているため、良く説明が聞こえる。
- ・ テレビ画面に映る字が読めないということがない（十分大）。
- ・ 思いの外高度な内容であった：演習課題として、`malloc`を使った配列実現。
- ・ 製作したロボットで競技会を実施しており、学生が熱中して演習に取り組める工夫がなされていると感じました。
- ・ 私は講義にパワーポイントを使用しているが、学生のノート記録に十分な時間が取れないとの批判もあり（過去の講義アンケート）、改めて板書講義の良さを教えられ、大変参考になった。
- ・ 重要な点や試験に出る点はレポート等として自分で解かせている。
- ・ 学生の理解度に合わせて進行している。（時折、学生に質問し分からないところまで戻る工夫がされている。）
- ・ 先に結果を述べて、その後にその理由を述べている。
- ・ 受講生が多かった。他の3年後期の選択科目は受講生が少ないのに、この科目では30名以上受講していた。講義内容の重要性が受講生に伝わっていると思われる。
- ・ 授業時間中に今展開した式について簡単な問題を与えながら演習して理解の確認を進める時間をとっていました。
- ・ 実験開始後1,2時間が経過しても、TAや指導教員が熱心に説明をしており、学生の理解を促していた。
- ・ 日本の学生にも判りやすい英語で講義している。
- ・ 整理され、空間的にも余裕のある実験室で集中して作業を行うことができる。
- ・ 身近な山口の地理・事項から、導入を図っている。
- ・ イオン化ポテンシャル、電子親和力、酸化還元と分子軌道のエネルギー、酸化還元電位、励起エネルギーと電子スペクトルの解釈等についての講義であった。講義はパワーポイント資料に沿って行われた。
- ・ 講義のクオリティーはきわめて高いと思われる。
- ・ カバーしているフィールドも広い。例えば、電気化学、有機化学、光化学、無機化学、物理化学、物理と関連している。
- ・ イオン化ポテンシャル、電子親和力、酸化還元を単に言葉や式ではなく、分子軌道エネルギー準位図、HOMO・LUMO、金属のフェルミ準位、電位と関係づけ矛盾なく説明している点は非常に参考になった。
- ・ 授業および演習は、大変静かな環境下で行われており、学生も集中して演習問題に取り組むことができる。
- ・ 学生が主体的に表計算ソフトの使用法と数値解析手法の学習に取り組めるように、綿密なプリント資料が準備されている。学生のレベルに合わせたプリント上の説明および課題内容は非常に良質である。さらに、学生の質問に対応するために、教員と複数のTAが連携して授業を円滑に進行している。
- ・ 具体例がわかりやすい。

●改善を検討すべきと思われる点とその理由

説明

- ・ 説明の際に学生の方を向くことが少なかったように思います。

板書

資料

- ・ スライドの図中の文字等が小さく、教室の後方に座っている学生が見づらそうでした。

進め方等

- ・ 講義中に説明される例題については、流す程度に簡単に説明されている。演習時間があるので、問題ないと思われるが、講義中の例題も少し考えさせる時間があってもよいのではないかと感じました。

その他

- ・ 受講学生の（特に座席後方の学生）私語が多い。講義中にケータイを扱っている学生が散見されるので、適宜注意が必要と思われる。また遅刻者も何人かみられ、その中でも大幅な遅刻（30分程度）が目立った。
- ・ 受講学生の（特に座席後方の学生）内職や、講義中にプレイステーションや携帯電話のゲームで遊んでいる学生が散見されるので、適宜注意が必要と思われる。また講義中にトイレに立つ者がいるのが目立つ。大講義室の特性上やむを得ない面もあると思われるが、学生を前側に座らせるなどの工夫が必要と考えられる。
- ・ これは学科全体で問題意識を持つべきことなのですが、昨今の学生は自分で考えて答えを得ようという姿勢が非常に薄いと思います。（おそらく高校までで「考え方」を習得していないのでしょうか。）「考えてみて下さい」と投げかけても、戸惑う学生が多いかも知れません。
- ・ 説明時には実際の地形の写真があれば、より効果的だと思われました。
- ・ 受講者数が少ないせいか活気がない気がした(見学した会がたまたまかもしれないが)。
- ・ 最前列に座っている学生のみあてていた。
- ・ 知識の確認と理解には反復学習は必須であり、その為の本講義の果たす役割は大きい。このことから改善の必要性はないと考える
- ・ プレゼンの問題を写すことに時間を取られ、説明をきちんと聞いていない学生がみかけられる(携帯カメラで問題を取るものもいる)。説明の前に、もう少し時間を取る必要があるのかもしれない(ノートを取らせることも良く分かりますし、適当に時間を取られているとは思いますが)。
- ・ マイクの低音がこもって聞き取りにくいので、高音を強調してはどうか。
- ・ 画面の動きが少ない(先生の顔が見たい)。
- ・ テーマそれぞれに学生の理解を進める工夫がなされており、現状でも悪くはないと思いました。
- ・ 講義は、担当教官が学期全体の講義計画のもとで実施しているものであるから、もとよりその一部を断片的に参観して全体を評価し得るものではないが、特に改善を要する点は認められなかった。
- ・ 制御工学の講義であるため、数式の説明が多いが、何かビジュアルで理解させる、イメージで理解させる工夫があれば最高だと思われる。スライドなどを使って、ビジュアルでの理解を組み合わせて欲しい。
- ・ 教員としてはどうしようもないが、講義室が狭く、学生が窮屈そうである。
- ・ 演習科目ですが、授業に参加していない学生が2割くらいいるのではないかと思います。また、途中で出入りする学生も目立ちました。注意されるのがいいのか、演習の進行に合わせたプリントを配布させるのがいいのかわかりませんが、ノートすら取らない、教科書も開かない、携帯をそうさしている学生もいました。

- ・ 手元の資料やスクリーン、ホワイトボードを向いて話すことが多かった印象があり、視線を学生に向けて話す機会を増やすことで、より学生の集中力が高まることが期待される。
- ・ プロジェクタの、たぶん、ケーブルのコネクタの不具合で、プロジェクタの映像の色が頻繁に代わりスクリーンを見づらい時が時々あった。常時この教室を使う教員が教務係に修理（あるいはケーブルの交換）を申し出るべきと思う。
- ・ 30分ほど参観したが、定刻より遅れて入室する学生が10名近くいた（でも、遅刻者を減らす工夫はなかなか難しい）。
- ・ 出席確認で紙を配る方式をとられていましたが、この方法ですと指導教員に大変な時間的労力を強いることとなります。私立大学では当たり前となっている学生証による電子的な出席確認は早急に導入できないものなののでしょうか。国立大学が私立大学に比べて20年以上も遅れたシステムをとり続けて改善もできないのでは、大きな疑問を感じます（これは教員に対しての批判ではなく本学のシステムに対しての批判です）
- ・ 改善は無理ではあるが、一度に実験する人数が多い。
- ・ 授業内容そのものはこれ以上改善する必要は無いと思われる。
- ・ しかしながら、この高度な授業を学生がどの程度消化しているかは気がかりである。（恐らく、今回までの蓄積があるとは思いますが）
- ・ 周辺の授業、例えば無機化学、物理化学、分光化学の担当者と連携すれば、この授業は学生にとってもっと有意義なものになると思われる。この意味で、3年前期 or 後期あたりに開設してはどうか？
- ・ 授業が始まって、10数分して、遅刻して来た学生が2名ばかりいました。
“情報・演習”という、授業の性格上からも、これらの学生に対して、何らかの注意・対策が必要かと思われます。
- ・ 一部学生の私語がうるさかった。他の学生の迷惑になっていると思う。少なくとも私はうるさくて授業に集中できなかったため思わず叱ってしまった。彼らは個人的に話していると思いやつではないので、意思を持って反抗的な態度をとっているのではなく、一種の障害を持っているのではなからうか。結局今までそのようなことに配慮するという経験が乏しく、そのまま放置されてきただけのように感じる。

● その他

- ・ 講義中に飲食している学生がみられた。（教員の注意によって片付けたが、学生の講義に対する意識低下が窺える）
- ・ 講義の部屋が小さいこともあり、雑談や居眠りをしている学生がほとんどいない。
- ・ 前期に履修した内容を、「前期にやられた内容だから覚えていると思うけど…」と仰っていた。
「やられる」というのは親しみをこめた表現とも思えるが、講義提供側の教員が発言すると学生にあまりいい影響がないのではないかと思います。
- ・ 指導教員が熱く説明していました
- ・ ほとんど自習しない学生に対して、大学の講義内容をきちんと理解させることはできないと思います。3年生の授業で、基礎から説明しないといけない学生が半数近くいては、深い講義などができるはずありません
- ・ 応用実験 II の岡本先生の実験テーマの内容確認を行い、若佐担当のテーマ（制御工学実験）との関連性を確認した。
- ・ この講義に関係することではないが、学生の受講マナーが低下している。例えば、大幅な遅刻、途中退席、着帽のままの受講等。小生は、最低限のマナーに関わる問題と考え、これらに対して常に該当学生に直接注意することにしていく。基本的マナーの欠落は学生自身にとって不幸なことである。このような点に関し、他の教官はどのように考え、対処されているのであろう

- か。
- ・ 細長い教室の前の方に座る学生が多かった。内職をしている学生がいなかった。3年後期の選択科目でも、このような良い雰囲気での授業ができるのはすごい。どこにその秘密があるか、考えてみたい。
 - ・ 担当教員は出張で、補佐員によって問題用紙と答案用紙が配布された。時間内に、答案を作成し、提出するものであった。問題の難易度を2～3人に尋ねたが、時間内には出来るだろうと言っていた。教員不在にも関わらず平穏な状態で時間は進行していった。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成21年度も山口大学FD研修会への参加を積極的に行った。本年度工学部、理工学研究科工学系、及び医学系研究科工学系のFD参加教職員を以下の表に示す。

「FD推進者のための研修会」

日時：平成22年5月10日

場所：常盤地区

	所属部局	職名	氏名
1	工学部	教務委員長・教授	内藤 裕志
2	工学部	准教授	亀田 孝嗣
3	工学部	教授	中田 幸男
4	工学部	教授	赤田 倫治
5	工学部	准教授	岡本 浩明
6	工学部	教授	諸橋 信一
7	工学部	教授	石川 昌明
8	工学部	准教授	松藤 信哉
9	工学部	講師	後藤 伴延
10	工学部	教授	中倉 英雄
11	工学部	准教授	佐伯 隆
12	工学部	副事務長	林 章司

「教育改善FD研修会」

日時：平成22年9月13日

場所：常盤地区

	所属部局	職名	氏名
1	工学部	教務委員長・教授	内藤 裕志
2	工学部	学生委員長・教授	今井 剛
3	工学部	教授	三上 真人
4	工学部	准教授	亀田 孝嗣
5	工学部	准教授	山本 浩一

6	工学部	教授	諸橋 信一
7	工学部	准教授	松藤 信哉
8	工学部	教授	中倉 英雄
9	工学部	准教授	萩原 千聡
10	工学部	点検評価委員長・教授	進士 正人
11	工学部	副事務長	林 章司
12	工学部	教務係長	桂 仁

「平成 22 年度工学教育研究講演会及び意見交流会」

日時：平成 22 年 12 月 1 日

場所：工学部 D11 教室

	所属部局	職 名	氏 名
1	工学部	教授	望月 信介
2	工学部	評議員・教授	齊藤 俊
3	工学部	准教授	森 浩二
4	工学部	副学部長・教授	清水 則一
5	工学部	点検評価委員長・教授	進士 正人
6	工学部	教授	羽田野 袈裟義
7	工学部	教授	小松 隆一
8	工学部	助教	倉井 聡
9	工学部	教授	浜本 義彦
10	工学部	教授	中村 秀明
11	工学部	准教授	河村 圭
12	工学部	准教授	平林 晃
13	工学部	助教	内村 俊二
14	工学部	助教	藤田 悠介
15	工学部	教授	中園 真人
16	工学部	教授	三浦 房紀
17	工学部	学部長・教授	堀 憲次
18	工学部	教授	川崎 秀明
19	工学部サロン	特命教授	溝田 忠人
20	工学部サロン	特命教授	福永 公寿
21	工学部サロン	特命教授	久井 守
22	工学部	副事務長	新徳 法正
23	工学部	副事務長	林 章司
24	工学部	企画・広報・国際係長	末武 光裕
25	工学部	総務係員	石田 暁寛
26	工学部	総務係員	塩手 康之
27	工学部	総務係員	安本 千恵子
28	工学部	経理係員	廣瀬 裕子

29	工学部	業務支援室員	深津 幸逸
----	-----	--------	-------

「全学 FD 研修会（学生の心を探る～バズセッションを通して～）」

日時：平成 23 年 3 月 29 日

場所：常盤地区

	所属部局	職 名	氏 名
1	工学部サロン	特命教授	福永 公寿
2	工学部サロン	特命教授	和田 憲造
3	工学部	准教授	高海 克彦
4	工学部	准教授	森 浩二

「英語で授業をするための講習会」

日時：平成 23 年 3 月 10,11 日

場所：常盤工業会館 E 会議室

	所属部局	職 名	氏 名
1	工学部	教授	望月 信介
2	工学部	教授	上村 明男
3	工学部	教授	関根 雅彦
4	工学部	准教授	渡邊 学歩
5	工学部	准教授	若佐 裕治
6	工学部	助教	岡本 昌幸
7	工学部	助教	鈴木 祐麻

第 3 節 教育改善に関する活動

工学部では、教育改善に関する活動の一環としてすべての専門授業は、学生による授業評価を受けている。そして、授業改善のため平成 15 年度より「学生授業評価アンケート」中の「総合評価」にもとづき、前期・後期の優れた授業に表彰を行って来た。しかし、平成 17 年度から評価項目が変更され、「総合評価」がなくなったので、選考基準を以下のように変更している。すなわち、

評価項目の内、次の 3 項目

項目 2・・・理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

項目 9・・・あなたは授業の内容を理解しましたか(実験演習の場合は、内容理解や技能のレベルは向上しましたか?)

項目 10・・・この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

を選び、各平均点の和(15 点満点)に受講者数の重みを加算した点数が、全開講科目の上位 10%に入っている科目を「優秀授業」として表彰する。表彰されるのは、その科目を担当した全教員、及び全職員である。また、各学科の最高得点獲得授業を「最優秀授業」として表彰する。ただし、原則として

受講生 10 名以上の授業を対象とする。

本年度優秀授業表彰を受けた科目とその担当教職員を以下の表にまとめた。

平成 21 年度優秀授業一覧表					
番号	開設科目名	担当教員名	学科	学年	工学部 表彰種類
1	流体工学 I	望月 信介	機械工学科	1	最優秀授業
2	機械工学演習 B	佐伯 壮一	機械工学科	3	優秀授業
3	機械航空工学演習	田之上 健一郎	機械工学科	3	優秀授業
4	機械基礎製図 II	大木 順司	機械工学科	2	優秀授業
5	建設情報基礎工学	鈴木 素之	社会建設工学科	1	最優秀授業
6	無機化学	中山 雅晴	応用化学科	2	最優秀授業
7	基礎有機・高分子化学	鬼村 謙二郎	応用化学科	1	優秀授業
8	応用化学工学演習 I	酒多 喜久	応用化学科	1	優秀授業
9	電気回路 II	山田 陽一	電気電子工学科	2	最優秀授業
10	アナログ回路	浅田 裕法	電気電子工学科	2	優秀授業
11	半導体工学 I	山田 陽一	電気電子工学科	3	優秀授業
12	コンピュータハードウェア	西藤 聖二	電気電子工学科	3	優秀授業
13	ものづくり創成実習 I	岸本 堅剛	電気電子工学科	2	優秀授業
14	プログラミング演習 I(実習を含む。)	瀧本 浩一	知能情報工学科	1	最優秀授業
15	デザイン心理学	松田 憲	感性デザイン工学科	2	最優秀授業
16	環境エネルギー工学	小金井 真	感性デザイン工学科	3	優秀授業
17	設計製図 I	山本 幸子	感性デザイン工学科	2	優秀授業
18	空間設計演習 IV	内田 文雄	感性デザイン工学科	4	優秀授業
19	建築設備工学	小金井 真	感性デザイン工学科	3	優秀授業
20	デザイン概論	内田 文雄	感性デザイン工学科	1	優秀授業
21	空間デザイン論	内田 文雄	感性デザイン工学科	2	優秀授業
22	基礎デザイン実習 I	木下 武志	感性デザイン工学科	1	優秀授業
23	設計工学概論	後藤 伴延	感性デザイン工学科	1	優秀授業
24	移動現象論	佐伯 隆	循環環境工学科	2	最優秀授業
25	循環環境工学実験 II	今井 剛	循環環境工学科	2	優秀授業
26	環境特別講義	新苗 正和	循環環境工学科	2	優秀授業
27	環境プロセス論及び演習	佐伯 隆	循環環境工学科	3	優秀授業
28	単位操作 I	中倉 英雄	循環環境工学科	2	優秀授業
29	国際コミュニケーション	三浦 房紀	循環環境工学科	2	優秀授業
30	東アジア文化論	今井 剛	循環環境工学科	1	優秀授業
31	循環型社会システム論	樋口 隆哉	循環環境工学科	2	優秀授業
32	循環環境工学実験 I	小渕 茂寿	循環環境工学科	2	優秀授業
33	応用物理学 I	真田 篤志	工学基礎	2	最優秀授業
34	応用物理学 I	真田 篤志	工学基礎	2	優秀授業
35	応用物理学 II	真田 篤志	工学基礎	2	優秀授業

36	常微分方程式及び演習	柳 研二郎	工学基礎	2	優秀授業
37	常微分方程式及び演習	西山 高弘	工学基礎	2	優秀授業

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

前節でも述べたように、工学部では、教育改善に関する活動の一環としてすべての専門授業は、学生による授業評価を受けている。そして、授業改善のため平成15年度より「学生授業評価アンケート」中の「総合評価」にもとづき、前期・後期の優れた授業に表彰を行っている。来た。しかし、平成17年度から評価項目が変更され、「総合評価」がなくなったので、選考基準を以下のように変更している。すなわち、

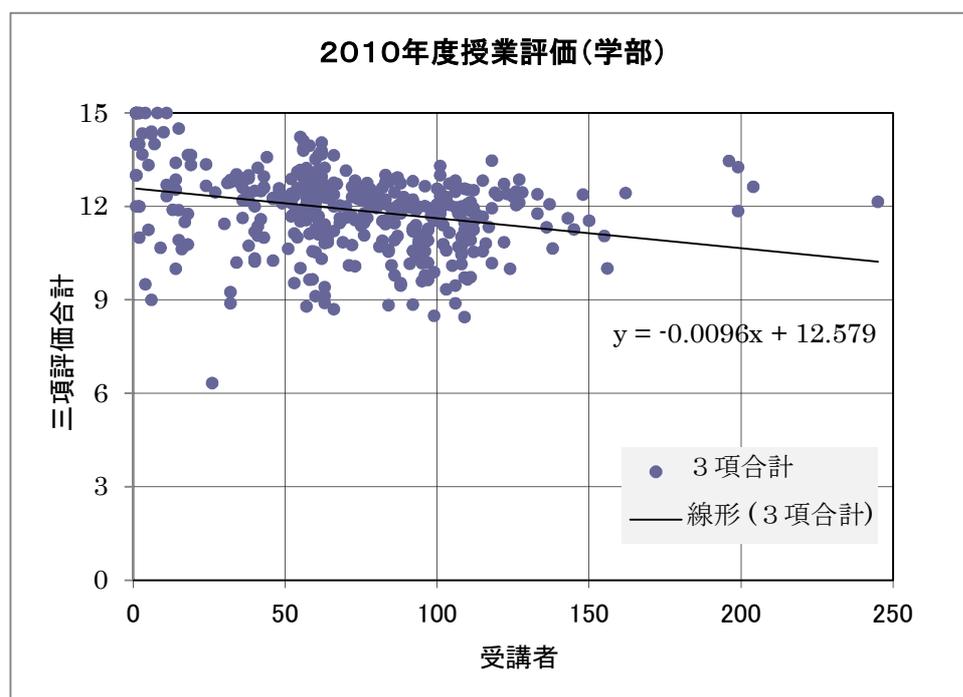
評価項目の内、次の3項目

項目 2・・・理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

項目 9・・・あなたは授業の内容を理解しましたか(実験演習の場合は、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？)

項目 10・・・この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

を選び、各平均点の和(15点満点)に受講者数の重みを加算した点数が、全開講科目の上位10%に入っている科目を「優秀授業」として表彰する。受講者と3項目の評価合計点の分布を次ページに示す。



図からわかるように、評価の多くは12点以上を獲得しており、学生の評価はかなり高くなってきていると思われる。この結果に満足せず、今後もFD活動を進めていきたい。

第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
工学部・ 理工学研究科	平成22年度工学教育研究講演会及び意見交流会	旅費謝金等	96,939	科学教育における授業改善について知ることができた。
計			96,939	

第6節 来年度の課題

工学部は、FD活動の中核に、授業参観を考えているが。工学部の目標である教員には年1度の授業参観にはいま一步の改善と普及が望まれる。そのため、多忙な教員のニーズに合わせた工夫・改善が必要と考えられる。

以上

第10章 農学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 生物資源環境科学科の授業公開（ピアレビュー）

1) 概要

- ①日時：平成22年11月4日（木）、3・4時限
- ②対象授業：共通教育主題科目「環境と人間」～食料生産と環境問題～
- ③対象学生：全学部
- ④授業担当教員：田中秀平（山口大学農学部教授）
- ⑤授業の概要：、10時19分：プリント配布・レポート課題の説明、10時26分：授業開始、11時41分：授業終了・質問票記入時間、以後、学生は質問票を記入・提出した順に退室
- ⑥授業担当教員・レビュアー：高橋肇（山口大学農学部教授）
- ⑦レビューの方法：評価員が入室し、レビュー後に評価を行う。

2) レビュー結果

- ・タイ、韓国など、ご自身で撮影されたと思われる多彩な写真を楽しませていただいた。とくに、病気を発症した作物や健全な作物との比較など、専門の研究者ならではの写真を授業で見ることができるのは、学生にとっても意義深いことと感じた。
- ・授業開始前から準備が整えられていた。受講生を受け入れる姿勢には、見習うべきものを感じた。
- ・大規模農業の特徴として、利点と欠点を挙げ、欠点の1つに植物の病気があること、この対策と環境問題の解決策として小規模農業を見直そうとする視点に共感するものを感じた。このような観点は、評価者（私）も同じ主題科目の「人間と植物」でも受講生に伝えており、農学部の個々の教員が他学部の学生に対してこのようなメッセージを送り続けることも、広く農学の必要性をより多くの人々に認識してもらうために必要なことと思う。

2. 生物資源環境科学科の授業公開（学術セミナーの開催）

講師：荊木康臣（山口大学農学部准教授）

演題：Micropropagationにおける培養植物体の非破壊評価

日時：平成22年7月6日（火）15:00～16:00

場所：農学部連獣棟4階7番教室

講師：荒木英樹（山口大学農学部附属農場助教）

演題：水欠乏、過湿土壌、高温によって生じる作物の障害とその対処策に関する研究

日時：平成22年3月25日（金）14:00～15:00

場所：農学部連獣棟4階大講義室

3. 生物機能科学科の授業公開（学術セミナーの開催）

講師：小崎紳一（山口大学農学部准教授）

演題：ヘムタンパク質の機能と構造

日時：平成22年7月16日（金）17:00～18:00

場所：農学部連獣棟4階大講義室

講師：松井健二（山口大学農学部教授）

演題：Ecological Volatiles の視点とそこからみた植物みどりの香り研究

日時：平成 22 年 12 月 21 日（金）17:00～18:00

場所：農学部連獣棟 4 階大講義室

4. 獣医学科の授業公開（学術セミナーの開催）

講師：音井威重先生（山口大学大学院連合獣医学研究科）

演題：イヌ・ネコ科動物領域における生殖工学 詳細

日時：2010 年 4 月 14 日（水）11:00～12:00

場所：農学部連獣棟 1 階会議室

講師：平岡博子先生（山口大学動物医療センター）

演題：腫瘍抑制遺伝子 FHIT の変異と犬の腫瘍発生 詳細 要旨

日時：2011 年 3 月 2 日（水）16:15～17:15

場所：農学部連獣棟 4 階大講義室

講師：森本将宏先生（山口大学農学部獣医学科獣医病理学研究室）

演題：Th2 免疫反応の解析— 寄生虫を用いたアプローチ

日時：2011 年 3 月 23 日（水）13:00～14:00

場所：農学部連獣棟 4 階大講義室

第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

日時：平成 22 年 9 月 1 日（水） 13:30～15:30

場所：農学部会議室

参加者：18 名（内訳）：副学部長、学務委員長、学科長、学務委員（教学委員を含む）など合計 12 名、岩部大学教育センター長、兼石教育コーディネーター、大学教育センター専任教員（小川勤、吉田加奈、木下真、岡田耕一）合計 6 名

研修内容：

本年度 1 回目の教育改善研修会を農学部の教学委員、FD 委員長、FD 委員、学務委員等を対象に実施した。最初に、岩部大学教育センター長より本研修会の開催趣旨が説明された。平成 23 年 4 月の大学設置基準改定に伴い、第 42 条には新しい項目として「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が付加されている。また、日本学術会議による「大学教育の分野別質保証の在り方について」では、専



門教育の在り方について今後対応すべき内容が記されており、3年後に主要30分野で掲げられる予定である「教育課程編成上の参照基準」を作成するための手引きも添付されている。これらから今後大学に求められるカリキュラム改善の方向性を予測できることが説明された。そして、大学設置基準改定に合わせて、これまで整備してきた学部・学科・コースのGPに「社会的及び職業的自立を図るための必要な能力」をどのように取り入れるかをカリキュラムマップ（以下、CUM）を用いて確認・検討するとともに、個別学生のGP達成度を確認する学習ポートフォリオの検討、学生や外部の人にもカリキュラムを分かりやすく示すためのカリキュラム・フローチャート（以下、CFC）の作成の依頼がなされた。

次に、兼石教育コーディネーターより、山口大学における出口管理のグランドデザインの必要性が説明された。ここでは、大学のGPは学部のGPを包含し、学部のGPは学科のGPを包含し、更には学科のGPはコース等のGPを包含する関係にあるべきであり、カリキュラムマップはコース等の最小単位のGPと授業科目との対応関係を示すべきであるとの説明がなされた。これに続いて、期待されるGPの機能およびGPが機能するまでの過程が示され、作業によって生じる問題点が指摘された。また、昨年度に改定された農学部のCUMについて、GPの記述に関する問題点（主語が学生になっていない等）について指摘がなされた。

次に、大学教育センター・小川教授からCFCについての説明と作成依頼がなされた。CFCの説明では、学科・課程、コース等の特性によっては資料に示した手順による作成が困難な場合も考えられるため、その際は学問的な特性に応じてCFCの作成・表示方法を適宜変更してもかまわないと説明された。また、CFCの例として、本学工学部機械工学科、愛媛大学環境工学コース、愛媛大学地域環境工学の例が示された。CFCの提出期限については、今後行われる他学部の教育改善FD研修会で出される意見も参考に後日通知したいと説明された。

次に、農学部の教員との質疑応答が行われた。農学部の教員からは、「農学部には工学部ほど必修科目は多くない。したがって、工学部のようなCFCとしては描けないと思われる。また、これと関連して、分野によっては専門の内容が細分化され互いに異なるため、学科によっては工学部ほど具体的なGPを設定できていない。まずGPから設定しなおさなければならないのか。」との質問があった。これに対して、大学教育センターは「理系であればある程度の履修の順序性はあるだろうが、工学部のようなCFCとして描くのは困難な場合も想定される。もし困難であれば、愛媛大学の例のように専門グループと学年といった書き方でも良い。GPについては全面的な改定を待って足踏みせずに、GPの改定も検討しながら、それと対応してCUMとCFCの改定も随時進めてほしい。このような継続的な改善の過程を通じてGP、CUM、CFCについての議論を深め、本質的な教育改善に繋げていただきたい。」と回答した。

今回の研修会では、「大学設置基準の改定」および「大学教育の分野別質保証の在り方について」からみえてくる今後の大学に求められるカリキュラム改善の方向性を確認し、これらに対応するためにGP、CUM、CFCをどのように整備すれば良いのかについて議論を行った。今回の研修会は、農学部における組織的なFD活動を継続する上で大変有意義であったと考えられる（大学教育センターFD研修会報告書から転記）。

第3節 教育改善に関する活動

2008年4月1日に、農学部のグラデュエーションポリシー（GP：Graduation Policy）を以下に定めている。

- 1) 人々が自然と共存して幸せに生きていけるよう、生命と環境、およびそれらの相互関係を把握するとともに、それらの将来あるべき姿を考える能力を身につけている。
- 2) 農学の基礎知識、研究技術に加え、さらに理解力、創造力、解決力、総括力を身につけている。
- 3) 学問・研究の他に、人間性および社会性を身につけている。

農学部の Graduation Policy を基礎として、各学科（生物資源環境科学科、生物機能科学科、獣医学科）での GP は、2008 年 4 月 1 日に以下に定めており、2010 年度も本 GP に基づいて活動を実施している。

1) 生物資源環境科学科

1. 修学計画能力：生物資源環境科学科において何を学ぶか、生物資源環境科学とは何かの概念を得る。また、生物資源環境科学科教育プログラムの学習・教育プログラムを把握し、自ら修学プランを立案できる。
2. 一般的基礎能力：語学、人文、社会系科目を含む幅広い教養科目および生命倫理を学び、社会に対する責任感を養う。
3. 農学基礎能力：自然科学的および社会科学的農学系基礎に関する知識と応用力を身につける。
4. 専門応用能力：生物資源環境科学に関する総合的専門知識及び技術の取得とそれらを用いて諸問題の解決方法を自ら考え実践する能力を身につける。
5. コンピュータ応用能力：生物統計等に関するソフトウェアの理論と使用法を理解し、生物生産、環境計測、農業経営などの様々な過程で現実的な複雑さを持つ農学的諸問題を迅速に解決できる。
6. 農学研究能力：農学的諸問題に対して、農学的かつ論理的な考察を行い、自ら解決方法を発想し成果を得ることができる。また、発想から成果に至る研究経過を明解にレポートにまとめ、わかりやすくプレゼンテーションするとともに、討議できる能力を身につける。さらに、得られた成果を客観的に評価し、改善することができる。
7. 農業・農村地域の環境の課題における指導能力：生物多様性をはじめ、農業・農村地域の環境課題を解決するための能力を発揮し、指導者となる素養を涵養する。
8. 自己研鑽能力：多様化・複雑化する生物生産システム、生命、環境、自然に関する諸問題に関心を持ち、それらの問題を理解あるいは解決するために自己の能力を継続して向上させることができる。
9. 進路計画能力：農業ならびに関連産業界の動向、求められる人材、就職環境などを把握して、将来の進路を展望し、自ら進むべき方向を決定できる

2) 生物機能科学科

1. 生化学の基本的な知識とバイオテクノロジー等の技法を修得し、生物科学分野で社会貢献できる。
2. 生物と環境の相互作用の科学的な理解に基づき、環境問題に対処できる。
3. 科学技術の発展に関連した社会全体の問題について、自ら課題を見出し解決しようとする姿勢を持つ。

3) 獣医学科

1. 人と動物との関係を理解し、知識を得る方法と考え方を習得する。
2. 食資源とその安全性の確保に関して理解し、知識を得る方法と考え方を習得する。
3. 高度獣医療ならびに最新の生命科学を理解し、知識を得る方法と考え方を習得する。
4. 英語をはじめとする外国語に通じる能力を養う。
5. 正確に理解し、それを明解に発表できる能力を養う。
6. 明晰かつ批判的に思考する能力を養う。

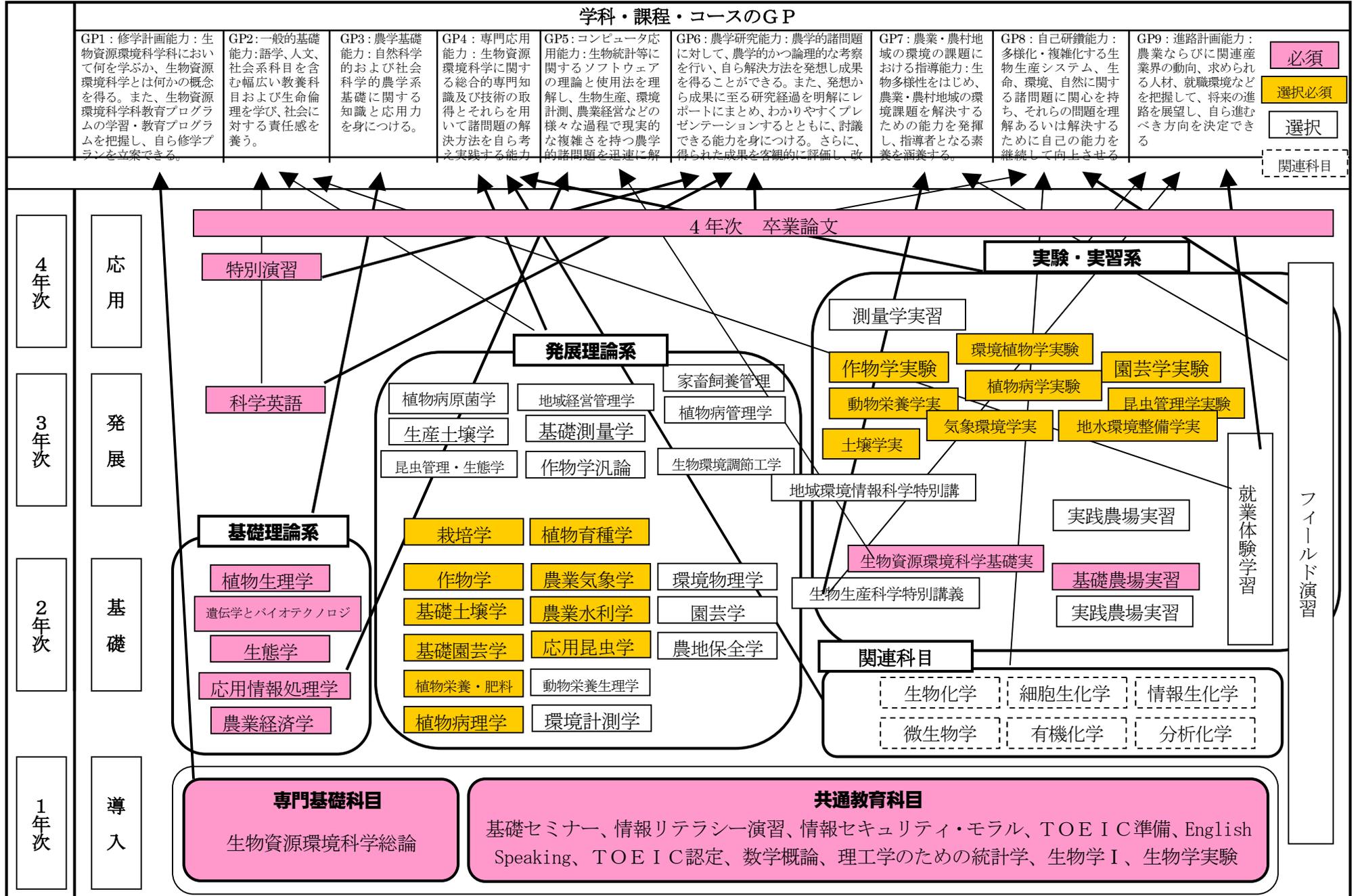
カリキュラムフローチャート（CFC : Curriculum Flow Chart）の作成への取り組み状況は、全学組織の教学委員会より、農学部内の各学科（生物資源環境科学科、生物機能科学科、獣医学科）への作成の依頼があり、学務委員会において CFC の主旨を説明し、学科毎に約 2 ヶ月間をかけて CFC 作成の作業を行った。学務委員会での数回の協議を経て、平成 22 年 2 月に完成版を教学委員会に提出した。なお、獣医学科については、平成 24 年 4 月に鹿児島大学と「共同獣医学部」の設置を予定しており、遠隔講義システムを両大学に導入し、6 年間のカリキュラムは 1 年次の共通教育の一部を除いて統一することから、暫定的な CFC となっている。以下には、生物資源環境科学科のカリキュラムフローチャートを示す。

農学部 生物資源環境科学科 カリキュラム・フローチャート

2011年3月3日版

学科・課程・コースのGP

GP1: 修学計画能力: 生物資源環境科学科において何を学ぶか、生物資源環境科学とは何かの概念を得る。また、生物資源環境科学科教育プログラムの学習・教育プログラムを把握し、自ら修学プランを立案できる。	GP2: 一般的基础能力: 語学、人文、社会系科目を含む幅広い教養科目および生命倫理を学び、社会に対する責任感を養う。	GP3: 農学基礎能力: 自然科学的および社会的農学系基礎に関する知識と応用力を身につける。	GP4: 専門応用能力: 生物資源環境科学に関する総合的専門知識及び技術の取得とそれらを用いて諸問題の解決方法を自ら考え実践する能力	GP5: コンピュータ応用能力: 生物統計等に関するソフトウェアの理論と使用法を理解し、生物生産、環境計測、農業経営などの様々な過程で現実的な複雑さを持つ農学的諸問題を迅速に解	GP6: 農学研究能力: 農学的諸問題に対して、農学的かつ論理的な考察を行い、自ら解決方法を発想し成果を得ることができる。また、発想から成果に至る研究経過を明解にレポートにまとめ、わかりやすくプレゼンテーションするとともに、討議できる能力を身につける。さらに、得られた成果を客観的に評価し、改	GP7: 農業・農村地域の環境の課題における指導能力: 生物多様性をはじめ、農業・農村地域の環境課題を解決するための能力を発揮し、指導者となる素養を涵養する。	GP8: 自己研鑽能力: 多様化・複雑化する生物生産システム、生命、環境、自然に関する諸問題に関心をもち、それらの問題を理解あるいは解決するために自己の能力を継続して向上させる	GP9: 進路計画能力: 農業ならびに関連産業界の動向、求められる人材、就職環境などを把握して、将来の進路を展望し、自ら進むべき方向を決定できる
								必須
								選択必須
								選択
								関連科目



評価

①学生授業評価の状況（農学部全体）

1) 講義

質問 1

あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）

1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12回～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
4062	80.9	15.9	3.0	0.1	0.1	4.8

質問 2

あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
4047	12.9	12.8	23.4	22.1	28.8	2.6

質問 3

教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
4038	43.1	35.8	14.4	5.1	1.7	4.1

質問 4

専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
4055	44.8	39.2	12.9	2.4	0.7	4.3

質問5

テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
- 2.

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
4075	49.7	33.4	12.2	3.3	1.0	4.3

質問6

板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
4066	48.8	33.5	12.4	3.7	1.2	4.2

質問7

学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
4067	41.1	33.5	21.9	2.7	0.7	4.1

質問8

あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
4061	27.6	40.7	24.6	3.6	0.8	3.8

質問9

あなたは、この授業の内容を理解できましたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
4068	27.9	46.5	18.4	5.3	1.2	3.9

質問 10

この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
3922	39.6	39.5	15.3	3.3	1.4	4.1

2) 演習・実習・実験 (農学部全体)

質問 1

あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？ (括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です)

1. 90%以上 (14回以上) 2. 80~90% (12回~13回) 3. 60~80% (9~11回) 4. 40~6 (6~8回) 5. 40%未満 (6回未満)

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
1142	96.7	2.7	0.5	0.1	0.0	5.0

質問 2

あなたはこの授業において、時間外学習 (予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強) をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
1135	22.8	18.5	23.0	14.8	20.9	3.1

質問 3

教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
1130	53.3	33.5	9.2	2.5	1.6	4.3

質問 4

学生：演習・実習・実験の方法に関する指示は、わかりやすく説明されましたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
1146	56.0	32.5	8.3	2.3	0.9	4.4

質問 5

学生：教材または器材が使用された場合、それらは適切に活用されましたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
1131	58.2	3.25	7.7	0.8	0.4	4.5

質問 6

学生：学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
1137	58.5	31.3	8.7	0.9	0.5	4.5

質問 7

学生：教員から手本・示範が示された場合、それらは適切でしたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
1141	63.2	27.5	7.3	1.0	0.6	4.5

質問 8

学生：授業中は、演習や実習に集中できる雰囲気でしたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
1141	53.2	36.3	8.8	1.1	0.4	4.4

質問 9

学生：動物を扱う実験・実習は、安全性に重点が置かれていましたか

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
1123	35.4	16.4	9.2	0.4	0.6	2.7

質問 10

学生：動物を扱う実験・実習は、動物愛護精神をもって行われましたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
1101	29.4	13.2	11.6	0.9	0.6	2.4

質問 11

学生：あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
1094	34.2	42.5	18.1	1.1	0.5	4.0

質問 12

学生：知識や技能のレベルは向上しましたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
1088	43.4	45.9	8.9	1.4	0.3	4.3

質問 13

学生：あなたは、この授業の内容を理解できましたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
1086	34.4	52.4	10.9	1.7	0.5	4.2

質問 14

学生：この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

総回答数	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
1059	52.8	37.4	8.0	1.0	0.8	4.4

②経年変化について分析・記載

農学部全体を対象に、講義（質問 1～10）、

【データソース】 秦由美子代表 平成 16-18 年度科学研究費補助金研究基盤(B)(一般)『大学における学生の質に関する国際比較研究－教育の質保証・向上の観点から－』（課題番号 17330165）. 最終報告書. Pp. 2-11. (2008 年 3 月 31 日).

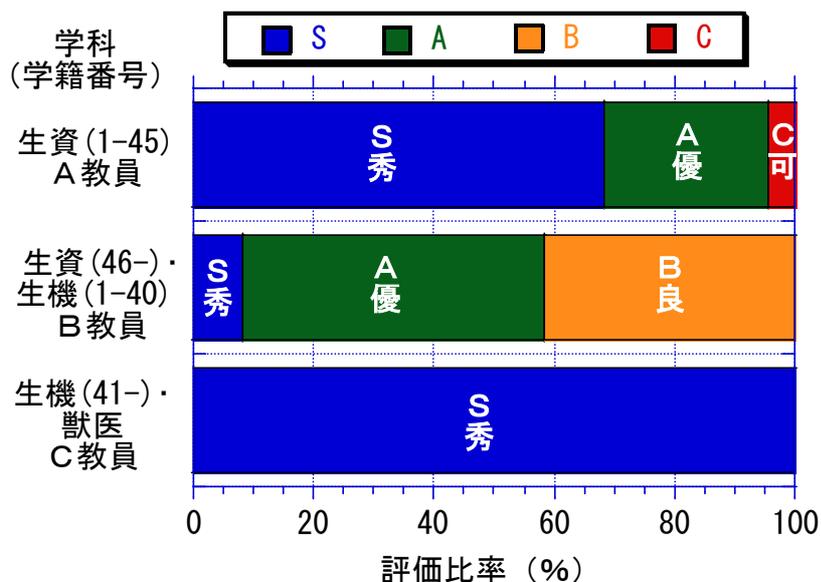
上記の報告、さらに山口大学での学生への調査等を踏まえて、大学設置基準で定められている単位制度の趣旨に沿って、大学の教室内での学習と教室外での学習を合わせた 1 単位 45 時間の学習時間を実質化することを早急に進める必要がある。現在、教学委員会で検討中の「学生生活ノート（仮称）」も有効な手段の一つであると考えられる。

・適正な成績評価

大学教育センターでは、組織的FDの推進及び各教員の授業改善に資するため、「成績分布共有システム」を公開している。たとえば、2010 年度の前期前半 月 7～8 に開講された「11 英語 TOEIC 準備」を抽出すると、獣医学科は 1 クラス授業（C 教員）であるが、生物資源環境科学科と生物機能科学科は 2 クラス授業（生資(1-45)、生資(46-)、A 教員）、（生機(1-40)、生機(41-)、B 教員）として開講されている。C 教員のクラス（生機(41-)・獣医）は全員が「S」評価であるのに対して、生物機能科学科の生機(1-40)が受講する B 教員のクラスは「S」評価は 8.3%であることから、生物機能科学科の学生が B・C 教員のクラスで評価が大きく異なっている。各生徒の詳細な成績は把握していないが、C 教員のクラスの学生 10 名が B 教員の 40 名よりきわめて優秀な成績を収めているとは考えられないことから、B 教員と C 教員で評価が大きく異なることが推察される。生物資源環境科学科については、A 教員のクラスは「S」評価は 68.2%であり、B 教員のクラスより高評価の学生が著しく多いことがわかる。

このように、授業「2010 年度 前期前半 月 7～8 TOEIC 準備」だけを抽出・比較しても、担当教員（A・B・C 教員）間で評価が大きく異なることから、適正な成績評価の検討が望まれる。

図 1 授業「2010 年度 前期前半 月 7～8 TOEIC 準備」におけるクラス別（担当教員別）の S（秀）、A（優）、B（良）、C（可）の比率（%）



文責 平成 22 年度 FD 担当教員（農学部、農学研究科、医学系研究科（農学））
教授 山本 晴彦、内線 5833、E-メールアドレス : yamaharu@yamaguchi-u.ac.jp

第 11 章 人文科学研究科の FD 活動

今年度の大学院人文科学研究科の FD 活動としては、当研究科の所属教員が人文学部のそれと重なることから、人文科学研究科の FD 研修会、大学教育機構主催の FD 研修会・講演会への参加、教員間授業公開（ピア・レビュー）については、人文学部のそれと合同の実施となる。ただし、学生による授業評価アンケートについては、人文学部で実施しているようなマークシート方式のものを採用せず、研究科独自の記述方式のものによって実施した。教員授業自己評価入力については、全学的に実施している方式に準拠して実施した。

具体的活動内容に関しては、第 4 章「人文学部の FD 活動」を参照されたい。

第12章 教育学研究科のFD活動

第1節 授業公開

実施していない。

第2節 研究科主催FD研修会

実施していない。

第3節 教育改善に関する活動

特に実施していない。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

学生授業評価及び教員授業自己評価の実施状況を確認する。表1に示した学生授業評価においては、2009年度が64.5%であったのに対して、2010年度は75.6%に上昇した。さらに、表2に示した教員授業自己評価においても、2009年度が41.9%であったのに対して、2010年度は50.9%に上昇した。両者共に10%程度上昇しており、学生授業評価及び教員授業自己評価が教育学研究科においても定着しつつあることを確認できる。

学生授業評価の結果について、教育学研究科全体としての年度変化を確認する。表3は、教育学研究科全体の授業科目について、アンケート回収数と評価値の平均を示す。学生授業評価アンケートは7項目からなるが、その中の「6. ゼミナールの運営は適切でしたか?」の質問項目については、4.18から4.50へ向上している。約420件のアンケートシートが回収されているので、そのうちの126件が1ポイント向上したことになる。これは大きな改善であると考えられる。しかしながら、「4. あなたの研究テーマにとって、参考になる知識が得られましたか?」の質問項目については、4.58から4.48へ0.1ポイント減少、「5. この授業は、あなたの期待した内容を含んでいましたか?」の質問項目については、4.64から4.57へ0.7ポイント減少した。

学生授業評価のシステムにおいては、アンケート回収数が5未満の場合、授業担当者にその結果を提示しないように設定してある。これは、アンケートの匿名性を担保するためである。大学院研究科の授業科目においては、1科目あたりの受講者数が少ない傾向にある。2010年度で、アンケートを回収した授業科目のうちの8割が、アンケート回収数が5枚未満であった。従って、8割の授業科目で、

学生授業評価を教員が閲覧できない状況にある。学生授業評価の結果を教員へフィードバックするため、各専修での学生授業評価の結果を表4に示す。

学生授業評価における各専修の結果：表4について、12専修×7質問項目=84項目のうち、1項目を除いて、全て4点以上の結果を得ている。学校臨床心理学専修の授業科目に対する質問番号6の回答が唯一4点に満たない。質問番号6の質問文は「ゼミナールの運営は適切でしたか？」であり、その回答選択肢は「1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらともいえない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)」となっている。しかしながら、学校臨床心理学専修では所属学生が多く、講義形式の授業も少なくないと考えられる。従って、質問項目6の質問文が必ずしも適切ではない、あるいは、回答選択肢が不十分であると考えられる。そこで、次年度への課題として回答選択肢に「この授業は当てはまらない」のようなものを追加する必要がある。

表1 学生授業評価実施率(%)の年変化。2011年5月21日のデータによる。

年度	全数(A)		開設科目(B)			対象科目(C)			履修登録者ありの科目(D)			実施率最大
	CABOS登録科目数	実施数	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	
2010	224	138	224	138	61.6	215	138	64.2	165	124	75.2	75.6
2009	232	121	232	121	52.2	231	121	52.4	31	20	64.5	64.5

年度	B&C			B&D			C&D			B&C&D		
	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
2010	215	138	64.2	165	124	75.2	164	124	75.6	164	124	75.6
2009	231	121	52.4	31	20	64.5	31	20	64.5	31	20	64.5

表2 教員授業自己評価実施率(%)の年変化。2011年5月21日のデータによる。

年度	全数(A)		開設科目(B)			対象科目(C)			履修登録者ありの科目(D)			実施率最大
	CABOS登録科目数	実施数	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	
2010	224	98	224	98	43.8	224	98	43.8	165	84	50.9	50.9
2009	232	70	232	70	30.2	232	70	30.2	31	13	41.9	41.9

年度	B&C			B&D			C&D			B&C&D		
	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
2010	224	98	43.8	165	84	50.9	165	84	50.9	165	84	50.9
2009	232	70	30.2	31	13	41.9	31	13	41.9	31	13	41.9

表3 教育学研究科全体における学生授業評価の結果。「N」は全回答数を表し、「平均」は評価値(回答選択肢の括弧内の数値)を学部全体で平均した値を示す。アンケート質問用紙には評価値は記載されていない。2011年5月22日のデータに基づく。

質問 番号	質問文 回答選択肢	2010年度		2009年度	
		N	平均	N	平均
1	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか? 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらともいえない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)	423	4.74	423	4.75
2	参考資料や文献の提示・紹介は適切に行われましたか? 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらともいえない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)	426	4.63	423	4.68
3	学生の疑問・質問への対応や議論は、充分でしたか? 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらともいえない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)	426	4.75	424	4.71
4	あなたの研究テーマにとって、参考になる知識が得られましたか? 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらともいえない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)	426	4.48	423	4.58
5	この授業は、あなたの期待した内容を含んでいましたか? 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらともいえない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)	427	4.57	423	4.64
6	ゼミナールの運営は適切でしたか? 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらともいえない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)	426	4.50	422	4.18
7	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか? 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらともいえない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)	421	4.68	418	4.68

表4 各専修における2010年度学生授業評価の結果。質問文と回答選択肢・評価値は表3を参照。上段に評価値の平均値を、下段の括弧内にアンケート回答数を示す。

質問 番号	学校 教育	学校 臨床 心理 学	国語 教育	社会 科教 育	数学 教育	理科 教育	音楽 教育	美術 教育	保健 体育	技術 教育	家政 教育	英語 教育
1	4.89 (27)	4.32 (121)	4.97 (36)	4.90 (30)	4.95 (21)	5.00 (14)	4.88 (8)	4.93 (58)	5.00 (13)	4.78 (46)	4.62 (13)	4.96 (26)
2	4.86 (28)	4.25 (123)	5.00 (36)	4.70 (30)	4.81 (21)	4.93 (14)	4.88 (8)	4.81 (58)	4.92 (13)	4.58 (45)	4.46 (13)	5.00 (26)
3	4.96 (27)	4.28 (124)	4.94 (36)	5.00 (29)	5.00 (21)	5.00 (14)	4.88 (8)	4.92 (59)	5.00 (13)	4.87 (45)	5.00 (13)	4.96 (26)
4	4.70 (27)	4.04 (124)	4.61 (36)	4.87 (30)	4.86 (21)	5.00 (14)	5.00 (7)	4.72 (58)	4.77 (13)	4.26 (46)	4.38 (13)	4.85 (26)
5	5.00 (28)	4.00 (124)	4.92 (36)	4.87 (30)	4.67 (21)	5.00 (14)	4.88 (8)	4.84 (58)	5.00 (13)	4.61 (46)	4.15 (13)	4.96 (26)
6	4.89 (28)	3.89 (123)	4.94 (36)	5.00 (29)	4.86 (21)	5.00 (14)	4.88 (8)	4.82 (57)	5.00 (13)	4.52 (44)	4.23 (13)	5.00 (26)
7	4.96 (28)	4.17 (121)	4.92 (36)	4.83 (30)	4.95 (21)	5.00 (13)	4.88 (8)	4.89 (57)	5.00 (13)	4.70 (46)	4.92 (13)	4.96 (26)

学内に公開されている教員授業自己評価の「30. 授業実施上の問題点・改善点（自由記述）」で挙げられている項目から、教育学研究科における課題について考える。なお、図1に教員授業自己評価の質問項目の一部を示した。

1つ目の課題として、教育学研究科では、専門分野が広く多様性がある半面、各授業の受講生数は少なく人の多様性に欠けるという面がある。教育学研究科では、幅広い専門分野の学生（現職教員や留学生も含まれる）が一つの授業を履修するため、予備知識の違い、経験の違いが大きい。それに加えて、受講者数が少ないため、ゼミナール形式の授業になりがちである。専門分野の大きく異なる少数の学生が一つの話題について議論する。このことが非常に困難な状況になるということは容易に想像できる。この点について、苦慮する教員、工夫を試みる教員が多いように感じ取れる。修士課程1年生向けの授業に修士課程2年生や学部生（卒業研究生）を参加させる等して、学生数を増やす試みが提案されている。専門分野の異なる学生への対応については、授業の内容を可能な範囲で柔軟に修正することの試みがなされつつある。

2つ目の課題として、教材の問題が挙げられる。大学院の授業内容としてふさわしい教材を選択しようとするならば、英語の文献等を取り上げることになる。しかしながら、それでは授業が進まないという現実的な問題点もある。この問題に対しては、地道な努力しかないようである。

なお、1つめの課題に対しては、一方で、少人数のメリットも指摘されている。すなわち、少人数であるが故に、難解な授業であっても、理解を促すような様々な工夫が可能であることを挙げる教員もあった。

図1 教員授業自己評価の質問項目（28、29、30の質問項目を抜粋）

【28. 授業実施上の工夫】	
1.	専門用語や理論的な話をわかりやすく説明しましたか？
2.	参考資料や文献の提示・紹介を適切に行いましたか？
3.	学生の疑問・質問への対応や議論は、充分であったと思いますか？
4.	授業者の研究テーマにとって、参考となる知識を与えたと思いますか？
5.	受講生の期待した内容を含んでいたと思いますか？
6.	ゼミナールの運営は適切であったと思いますか？
7.	この授業は、受講生にとって満足のいくものであったと思いますか？
回答選択肢：全ての質問項目に対して、「1. そう思う」、「2. ややそう思う」、「3. どちらともいえない」、「4. あまりそう思わない」、「5. そう思わない」の中から一つを選択する。	
【29. 授業実施上の工夫(自由記述)】	
【30. 授業実施上の問題点・改善点(自由記述)】	

第5節 FD実施経費報告書

年度当初に配分された予算は、学生授業評価のためのアンケート用紙等の配布のための事務的経費（印刷・封筒）であった。しかしながら、これらについては、再利用によって経費を節減した。従って、本年度のFD活動に要した経費はなく、年度当初に教育学部及び教育学研究科に配分された予算の全額を大学教育センターに返納した。

第6節 来年度の課題

本年度の教育学研究科のFD活動より明らかとなった課題として、まず、学生授業評価の質問用紙の修正がある。すなわち、第4節で指摘したように、質問項目に対する回答選択肢の中で不十分なものがある。次年度の学生授業評価においては、この点を修正したい。また、教員授業自己評価の自由記述欄においてみられた、教員が授業実施上の問題点・改善点として捉えていることについて、教育学部と合同で実施するFD研修会の中で取り上げることが考えられる。

第 13 章 経済学研究科の FD 活動

第 1 節 授業公開

経済学研究科の授業公開は経済学科においてのみ実施された。以下、それについて記述する。

経済学科 ピア・レビュー

角田由佳(経済学科准教授)

1. 担当 : 経済学科 柏木芳美先生
2. 科目 : 経済応用数学 A (大学院)
3. テーマ : テイラー展開について
4. 日時 : 2010 年 6 月 21 日 (月) 5・6 時限
5. 場所 : C102 教室
6. 参加者 : 馬田哲次先生、兵藤隆先生、角田由佳 (FD 委員)

ピア・レビュー実施日に至る講義の中で、大学院生より「テイラー展開」についての講義希望が出されていたことを踏まえ、当日の講義内容となった。講義は大変分かりやすく行われ、適宜設けられた質問の時間では、大学院生だけでなく、参加者からも質問が出る程であった。

担当教員が準備作成した講義資料に基づき、随所で黒板を使用しながら講義が進められた後、以下のような質疑応答や意見交換が参加者との間で行われた(講義内容は、別途添付する講義資料の通り)。

- ・ 大学院生(さらに学部生)に教える経済数学のレベルをどのように設定し、講義を行っているか。
→大学院授業を受講する学生の間には、それまでの数学履修水準にかなり差がある。したがって、受講する大学院生の履修水準を踏まえながら、そのつど講義内容を組み立てている。
- ・ とても分かりやすい講義資料である。数学に慣れていない者が戸惑う専門用語についても、そのつど簡潔な解説が記載されており、スムーズな理解を助けている。
- ・ ほかに、講義資料について、留学生にも分かりやすいようにルビがふられたり、講義内容が実際にどのような場に応用されているかということに記載、説明されたりと、さまざまな工夫がなされている。

第 2 節 研究科主催の FD 研修会

研究科・大学教育機構主催の FD 研修会は平成 22 年 11 月 17 日(水)、16 時より行われた。この項目については第 6 章第 2 節を参照のこと。

第3節 教育改善に関する活動

学部レベルでは「教育改善に関する活動」ではCFCを紹介した。研究科ではCFC作成をおこなっていない。それ以外の3点について記述する。

最初の点は平成22年度入学生から正式に修士論文の「予備審査制度」を実施したことである(試行期間として平成20・21年度入学生に対して実施している)。この制度は正式の修士論文を提出する前(2～3ヶ月前)に修士論文草稿を仮提出し、それを審査委員が読み、不十分な箇所があればそれを指摘することによって、修士論文の品質を向上させようというものである。

次に、ここ数年留学生の日本語能力が低下し、その結果授業に支障が生じてきていた。これに対して修士課程の受験資格として日本語能力試験2級を義務づけている(平成21年度入学生より適用)。これが第2の改善点である。ただし、この改革によって受験者が減少したという影響も生じている。

第3番目に平成22年度入学者より留学生の授業科目の中に「日本語研究A」・「日本語研究B」を設置し、留学生の必須科目としている。留学生の日本語能力の向上以外に、修士論文の書き方全般、及び生活指導を含めて授業をおこなっている。

以上のほかに、ここ数年、大学院の定員を満たすことが難しくなっており、「教育改善に関する活動」という観点でなく、定員をいかに確保するかという観点からの議論が関連委員会等でおこなわれている。

第4節 学生授業評価・教員自己評価

学生授業評価について経済学研究科の実施率は39.1%である。経済学研究科のデータは2008年度から54.3%、48.7%そして39.1%へと推移している。本年の学生授業評価の実施率はここ3年間(平均47.4%)で最も低い状況である。

次に、教員による授業評価についてである。今年度の経済学研究科の入力率は42.1%である。経済学研究科の入力率は、2007年度から36.5%、58.1%、49.2%そして42.1%へと推移している。今年度の入力率は昨年度のそれよりも低く、3年間の平均(47.9%)よりも低い状況である。

第5節 FD 実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
経済学研究科	ピア・レビューの実施(経済学科)	ソフトウェア	22	Power Point を購入し、実際に用いて授業方法を改善した。
計			22	

第6節 来年度の課題

第3節でも記述したように、研究科においては教育改善よりも「定員確保」の方に重点が置かれている。ここ数年間で企業経営専攻の中に「医療・福祉コース」や経済学専攻の中に「公共管理コース」を設置してきたが、これらのコースの定員増加を通じて経済学研究科の定員確保を図るかべきかどうかということが当面の課題であろう。

第 14 章 医学系研究科の FD 活動

平成 21 年度より、医学部と医学系研究科の合同 FD 委員会において、「学部と研究科の FD 企画をできるだけ相乗りの形で実施する」という方針が定められた。

この方針に基づき、医学系研究科所属教員は、それぞれが関連深い（実際に兼担で教育を担当している）各学部（あるいはその上部の研究科）の FD 活動に参加する形で FD 活動を行った。具体的には医学部の学部教育を兼担している教員は医学部（第 8 章）の FD 活動に、理学部・工学部の学部教育を兼担している教員は理学部（第 7 章）・工学部（第 9 章）ないしは理工学系研究科（第 15 章）の FD 活動に、農学部の学部教育を兼担している教員は農学部（第 10 章）ないしは農学系研究科（第 16 章）の FD 活動に参加した。

具体的活動内容に関しては、それぞれの該当の章を参照されたい。

第 15 章 理工学研究科の FD 活動

理学系

第 1 節 授業公開

今年度は、理工学研究科（理学系）として単独ではピアレビューを実施してはいない。理学系教員は、理学部の各学科で実施されたピアレビューにそれぞれ参加している。その詳細は第 7 章の理学部の FD 活動を参照されたい。

第 2 節 学部・研究科主催 FD 研修会

今年度は、理工学研究科（理学系）として単独では FD 研修会を実施してはいない。理学系教員は、理学部の各学科で実施された次の 3 回の FD 研修会に参加している。

平成 22 年 7 月 21 日（水）第 1 回 理学部 FD 研修会「平成 21 年度の理学部学生授業アンケート結果から汲み取れること」

平成 22 年 10 月 20 日（水）第 2 回 理学部 FD 研修会「授業技術スキルアップのためのワークショップ」

平成 22 年 10 月 20 日（水）第 3 回 理学部 FD 研修会「大学教育センターとの共催による教育改善 FD 研修会」

これらの詳細は第 7 章の理学部の FD 活動を参照されたい。

第 3 節 教育改善に関する活動

理工学研究科（理学系）と理学部との共通の FD 研修会として、平成 22 年 9 月 11 日に「山口湾～カブトガニ生息地における生物観察」を行った。その詳細は第 7 章の理学部の FD 活動を参照されたい。

第 4 節 学生授業評価・教員授業自己評価

平成 22 年度に開講された理工学研究科（理学系）の授業科目のうち、アンケート回答数が 5 を超える授業について集計し、平成 21 年度の集計結果と比較した。この集計対象となった科目数は 44 および 42 で、それらの平均値を表に示す。専攻ごとの比較は科目数・受講者数が少ないこともあり、行っていない。開講科目と担当者は、この 2 年で異なる場合が多いため、単純に比較することはできない。隔年開講の科目が多いので、この 2 年の平均を基準として次年度以降の授業評価結果とその経年変化を検討することは可能と思われる。表に示したスコアは、回答 1 を 5 ポイント、2 を 4 ポイント、,, , として平均値を示したものである。受講者の大半は、理学部卒業生で占められるので、理学部における同様の集計結果を参考として示してある。

表 1 理工学研究科（理学系）の学生授業評価集計結果

		理工学研究科（理学系）		理学部	
		2009年度	2010年度	2009年度	2010年度
Q1	出席	4.33	4.35	4.70	4.70
Q2	授業外学習時間	3.61	3.83	2.91	3.07
Q3	学習目標達成	4.01	4.14	3.59	3.66
Q4	理解	4.02	4.07	3.69	3.78
Q5	教員の話し方	4.10	4.09	3.91	4.05
Q6	わかりやすく説明	4.13	4.20	3.93	4.04
Q7	テキストやプリントなどの教材	3.45	3.42	3.86	3.96
Q8	コンピュータ、ビデオ、OHP の使用や板書	3.71	3.81	3.69	3.86
Q9	学生の疑問や質問への対応	3.81	3.89	3.96	4.08
Q10	満足	4.04	4.06	3.91	4.01
Q11	総合評価	4.46	4.51	3.96	4.06

平成 21 年度の集計結果と比較すると、授業外学習時間や目標達成などの点において向上が認められる。しかし、上記のとおり科目と担当者が年度によって異なっているため、この結果だけから判断することはできないだろう。一方で、学部の授業評価に比べると、明らかに全体的な評価の高いことがわかる。これは専門分野への意欲をもった学生が進学した結果とみることができよう。教員の FD 活動の成果を検討するには次年度以降の結果を待つことになる。

第 5 節 FD 実施経費報告

「理学部・研究科 FD 実施経費実績報告票」

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
理学部	教育改善に関する講演会開催 「授業技術などスキルアップのためのワークショップ」	講師謝金・交通費1名分	54,900	10月20日に標記ワークショップを実施し、学生参加の授業技術を体験した。
	教育改善のための高等学校の理科教育の研究	理科2教科(化学・地学)、各5出版社の教科書	57,280	生物および地学分野の学部教育改善資料とした。
理工学研究科・学部共通	「第3回野外生物観察研修—山口湾の干潟および沿岸の生物」	講師に対する謝金・交通費 参加教員に対する交通費1回分	37,820	生物分野における学部学生のフィールド教育の方法を学んだ。
計			150,000	

第6節 来年度の課題

学生授業評価については、2年目を迎え経年変化を検討することになっていたが、上記のとおり開講科目と担当者が年度によって異なるため、次年度以降に検討する必要がある。

工学系

第2節FD研修会、第4節以降については、工学部の部分と重複するので、ここでは、第1節授業公開および第3節教育改善に関する活動について述べる。

第1節 授業公開

理工学研究科も、昨年後期から参加率の向上を期待して、一定期間を定め、学部全開講科目を対象として授業科目を実施した。

平成22年度(前期)公開授業一覧

後期公開授業実施期間 7月1日(木)～7月22日(木)

学科	授業科目名	授業実施者		実施日時	備考
		職	氏名	月 日	
全専攻	全開講科目	全職	全教員	7月1日～ 7月24日	非常勤講師 担当の科目 は除く。

平成22年度(後期)公開授業一覧

後期公開授業実施期間 12月1日(水)～12月24日(金)

学科	授業科目名	授業実施者		実施日時	備考
		職	氏名	月 日	
全専攻	全開講科目	全職	全教員	12月1日～1 2月24日	非常勤講師 担当の科目 は除く。

詳細に関しては、第9章を参照されたい。

第2節 教育改善に関する活動

理工学研究科工学系、医学系研究科工学系の優秀授業表彰一覧を示す。

平成21年度優秀授業表彰一覧表				
理工学研究科（工学系）、医学系研究科（工学系）				
番号	開設科目名	担当教員名	専攻名	表彰種類
1	圧縮性流体力学特論	望月 信介	機械工学専攻	最優秀授業
2	材料強度学特論	合田 公一	機械工学専攻	優秀授業
3	粘性流体力学特論	亀田 孝嗣	機械工学専攻	優秀授業
4	機能性高分子材料特論	比嘉 充	物質化学専攻	最優秀授業
5	高分子設計特論	鬼村 謙二郎	物質化学専攻	優秀授業
6	物質構造科学特論	藤森 宏高	物質化学専攻	優秀授業
7	材料分析学特論	中塚 晃彦	物質化学専攻	優秀授業
8	高分子化学特論	大石 勉	物質化学専攻	優秀授業
9	テクノロジーマーケティング論	原田 直幸	電子デバイス工学専攻	最優秀授業
10	半導体物性特論Ⅱ	山田 陽一	電子デバイス工学専攻	優秀授業
11	制御情報特論Ⅰ	若佐 裕治	電子情報システム工学専攻	最優秀授業
12	制御情報特論Ⅱ	石川 昌明	電子情報システム工学専攻	優秀授業
13	電力変換工学特論Ⅰ	田中 俊彦	電子情報システム工学専攻	優秀授業
14	感性心理工学特論	松田 憲	感性デザイン工学専攻	最優秀授業
15	空間造形学特論Ⅰ	内田 文雄	感性デザイン工学専攻	優秀授業
16	基礎デザイン特論	木下 武志	感性デザイン工学専攻	優秀授業
17	デジタル映像処理特論	三池 秀敏	感性デザイン工学専攻	優秀授業
18	都市防災システム特論	瀧本 浩一	環境共生系専攻	最優秀授業
19	環境共生学原論Ⅰ	兵動 正幸	環境共生系専攻	優秀授業
20	リサイクル工学特論	今井 剛	環境共生系専攻	優秀授業
21	都市環境工学特論	今井 剛	環境共生系専攻	優秀授業
22	環境共生化学・生物科学ゼミナールⅠ	小淵 茂寿	環境共生系専攻	優秀授業
23	環境共生化学・生物科学特別講究Ⅰ	小淵 茂寿	環境共生系専攻	優秀授業
24	情報環境システム特論	中村 秀明	環境共生系専攻	優秀授業
25	精密分離プロセス工学特論	中倉 英雄	環境共生系専攻	優秀授業
26	地盤防災工学特論	兵動 正幸	環境共生系専攻	優秀授業
27	先端情報工学演習Ⅱ	内村 俊二 松元 隆博	応用分子生命科学系専攻	最優秀授業

表彰の方法は第9章の工学部と同じであるが、対象が全開講科目の上位20%となっている。

第 16 章 農学研究科の F D 活動

第 1 節 はじめに

1. 平成 22 年度 農学研究科・医学系研究科（農学） F D 計画

（1）セミナー（農学部公開講演会）の実施

内容：農学研究科および医学系研究科（農学）の各教員が、農学部全教員と学生および農学研究科と医学系研究科の大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により各教育研究分野の活性化と分野間の相互理解の促進を図った。

（2）教員による授業自己評価の実施

内容：農学研究科および医学系研究科（農学）の授業を担当する教員に対して、実施した講義、実験等についての自己評価アンケートを実施し、教員が良い授業を実施するための自己啓発に役立てた。

（3）学生による授業評価の実施

内容：農学研究科および医学系研究科（農学）の授業を受講した学生に対して、年度末に講義、実験等についての評価アンケートを自由記述形式にて実施した。集計結果は、授業全般に対する学生の意見・要望として、今後の授業改善の参考とした。

（4）学部・学科等の F D 活動に大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会への参加

内容：農学部拡大教授会前に実施される標記研修会に参加した。

（5）大学教育センターと農学部・農学研究科・連合獣医研究科・医学系研究科（農学系）との教育改善 F D 研修会への参加

内容：グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Web シラバスの改善を目的とした研修会に、学務関連の教員が参加した。

（6）全学 F D 研修会への参加

内容：全学で実施される研修会に参加した。

2. 活動および報告内容について

平成 22 年度の農学研究科・医学系研究科（農学）の F D 活動は、上記のような計画に基づき、「セミナー」、「授業評価」、「学部で実施する F D 研修会」、「全学 F D 研修会」について平成 21 年度と同様の取組みが実施された。

第2節 セミナー（農学部公開講演会と共催）

	開催日	演題	講師	学科
1	平成22年7月6日	Micropropagation における培養植物体の非破壊評価	荊木康臣	生物資源環境科学科
2	平成22年7月16日	ヘムタンパク質の機能と構造	小崎紳一	生物機能科学科
3	平成22年12月21日	Ecological Volatiles の視点とそこからみた植物みどりの香り研究	松井健二	生物機能科学科
4	平成22年3月25日	水欠乏、過湿土壌、高温によって生じる作物の障害とその対処策に関する研究	荒木英樹	生物資源環境科学科

第3節 教員授業自己評価

1. 教員授業自己評価の総括

農学研究科の教員授業自己評価については、平成22年6月20日の時点での入力率が46.5%で、平成21年度の42.2%より高くなっており、山口大学大学院の全研究科の平均値（43.3%）よりも約3%高かった。入力締め切りも延長され、教員への入力依頼も繰り返し行っていることから、最終的な入力率は改善されるものと推定される。

第4節 学生授業評価

1. 農学研究科の学生授業評価

農学研究科では、授業実施後に自由記述式の授業評価アンケートを実施した。アンケートでは、「このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする資料の作成を目的に行います。それ以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して本年度受講した講義（非常勤講師による授業は除く）に関する感想や要望等を率直に記述してください。」の説明とともに、「授業科目名」「授業教員名」とあわせて学生の「感想・要望」を自由に記述させた。実施率は平成22年度が54.6%であったのに対し平成21年度は41.2%と、実施率が大きく減少した。これは、学生授業評価を6～7月に依頼するが、不定期的な授業開講形態のため、すでに終了していたなどのケースもあり、周知期間等の要因が影響しているものと推察される。これらの評価は授業実施教員にとって授業改善に大いに役立つものと

期待される。

医学系研究科（農学）の学生授業評価については、全学共通のアンケートの様式を用いて実施された。農学部で教育・研究を行っている医学系研究科の教員が少ないため、授業評価の対象となる講義数も少なく、統計的に有為な集計結果が得られないことから評価結果の取りまとめは行わなかったが、アンケート結果は学部学生の学生授業評価の場合と同様、概ね良好であった。

第5節 全学FD研修会

1. 参加教員一覧

開催日	研修会種別	農学部教員の参加人数
5月10日	FD 推進者のための研修会	8名
7月21日	農学部派遣型FD研修会	45名
8月10日	目標達成型大学教育改善プログラムと山口大学の教育改革	3名
8月27日	多人数授業における学生とのコミュニケーション技術の工夫	2名
9月24日	DocuWorksの使い方	1名

第6節 まとめ

平成21年度の農学研究科および医学系研究科（農学）のFD活動は、平成20年度と同様、授業自己評価以外は、全て学部と重複した項目であり、大学院独自の取り組みはほとんどない。大学院教育に対する外部評価が強化される傾向にあることから、今後、両研究科独自のFD活動の充実が求められるものと予想される。農学研究科独自の学生による授業評価アンケート（自由記述のみ）については、平成21年度と比較し実施率が13.4ポイントも低下した。少人数で実施する授業に対しては学部で実施されるような授業評価アンケートを実施することは難しいと考えられるが、農学研究科独自の学生による授業評価が、実効性のあるものであるか否かについては今後検討を加える必要があると考えられる。

本年度の大学院FD活動は平成19年度、平成20年度、平成21年度に続き4回目のFD活動であり、今後も農学研究科および医学系研究科（農学）FD活動が継続的に改善され続けてゆくことが期待される。

平成22年度（2010）農学研究科・医学系研究科（農学）FD担当教員

生物資源環境科学分野 山本晴彦

生物機能科学分野 右田たい子

医学系研究科（農学） 内海俊彦（FD担当教学委員、全学FD委員）

第17章 東アジア研究科のFD活動

第1節 平成22年度東アジア研究科FD計画

東アジア研究科FD委員会は、大学院設置基準の一部改正によって大学院におけるFD研修が義務化されたことをうけ、平成19年度より発足したものである。東アジア研究科は、博士課程のみの独立した大学院であり、主たる教育活動は学生に対する研究指導となっている。こういった現状を鑑み、FD委員会としては昨年度に引き続き「研究指導法についての検討会」を企画するに至った。

東アジア研究科の教員組織は、「比較文化講座」「社会動態講座」「社会システム分析講座」の3講座に分かれており、FD研修会もこの講座単位で行うこととした。但し、事前の開催告知は研究科に所属する全教員に対して行い、また、いずれのFD研修会に参加することも可能とした。平成22年度の東アジア研究科FD研修会として計画したのは以下の3回となる。

- 1) 「第1回山口大学大学院東アジア研究科FD研修会～研究指導法の検討～」
日時：平成22年10月15日（金）学位準備論文報告会（経済・経営・法律）終了後
- 2) 「第2回山口大学大学院東アジア研究科FD研修会～研究指導法の検討～」
日時：平成22年10月18日（月）学位準備論文報告会（比較文化）終了後
- 3) 「第3回山口大学大学院東アジア研究科FD研修会～研究指導法の検討～」
日時：平成22年10月22日（金）学位準備論文報告会（教育開発）終了後

第2節 東アジア研究科FD研修会

平成22年度の東アジア研究科FD研修会は、計画に則って3回実施した。いずれも、東アジア研究科が毎年10月に行っている「博士学位準備論文報告会」を参加契機として利用し、当該の報告会終了後に開催することとした。この研修会は、博士学位準備論文報告会で発表を予定している学生の主旨指導教員に、研究指導法についての実践報告をしてもらうという形式をとっている。

事前の準備として、主旨指導教員には「FD研修会資料」をFD委員会に提出してもらった。FD委員会は、その「FD研修会資料」を東アジア研究科全教員に対して開示。研修会当日、参加者は「FD研修会資料」を念頭に置きつつ、学生の博士学位準備論文報告を聴くことになる。そして、博士学位準備論文報告会の終了後、FD研修会を開催。主旨指導教員があらためて「FD研修会資料」について補足説明を施し、博士学位準備論文報告会での学生の報告を実践事例として参照しつつ、意見交換を行なうこととした。

なお、「FD研修会資料」については以下のような観点を想定している。

1. 学生指導の経過

学生の研究課題遂行に対して主旨指導教員が1年次、2年次、3年次にどのようなサポート体制を敷いてきたかを報告する。報告内容は、「ロードマップ」「研究課題に対するカウンセリングの履歴」「研究遂行のための指導状況」「調査研究の実施状況」「学会活動状況」「論文作成の指導状況」「研究成果の公表状況」などである。

2. 指導上の留意点

学生の研究課題遂行のために主指導教員が1年次、2年次、3年次にどのような環境の整備を心がけてきたかを報告する。報告内容は、「整備したハード、及びソフト」、「調査のための海外渡航の機会をどのように与えたか」、「東アジアプロジェクト研究への参加をどのように促したか」などである。

3. 指導上の感想

学生の研究課題遂行に向けて主指導教員が1年次、2年次、3年次にどのような困難を感じてきたかを報告する。報告内容は、「本学生は、□□□□であり、△△△△という点で、より細かい指導が必要である」「××××に関して、より良い方法がないか、検討中である」「○○○○については、現在までのところ、問題なく経過している」などである。

1. 第1回東アジア研究科FD研修会

第1回東アジア研究科FD研修会は以下の通りに実施された。

題目：「第1回東アジア研究科FD研修会～社会動態講座・研究指導法の検討～」

日時：平成22年10月15日（金）東アジア研究科（経済・経営・法律コース）博士学位準備論文報告会終了後

場所：東アジア研究科・経済学研究科棟307演習室

参加者：福田隆眞、塚田広人、植村高久、成富敬、横田伸子、野村淳一、中田範夫、有村貞則、朝水宗彦、森野正弘（以上10名）

（1）研修会の概要

本FD研修会は、これに先立って開催された東アジア研究科（経済・経営・法律コース）博士学位準備論文報告会での学生の発表を踏まえ、当該学生の主指導教員がこれまでに行ってきた研究指導の方法や方針、あるいは抱えている問題点などを個別に実践事例として報告。その報告に対する様々な意見を参加者から募り、検討を加えるという形式で催された。

研修会の手順は、まず、博士学位準備論文報告会開始前にアンケート用紙を配布。次いで、各報告を聞いた後、報告者の指導教員に対する「指導上のアドバイス・コメント」を記入するように参加教員へ依頼した。その際、以下の三つの観点を参考例として掲げた。

- ① 既存研究渉猟が確実に行われているか？
- ② 既存研究の成果を正確に整理分類し、総括できているか？
- ③ その上でオリジナル性が明確であるか？

報告会終了後、ディスカッション形式で教員相互に意見を交換。具体的には、まず報告者の指導教員が、「FD研修会資料」に基づきつつ、現在指導している際の工夫、直面している問題について実践報告をした。続いて他の参加教員が、それに関する質問や問題解決につながるアドバイスを行った。また、同時に参加教員から、先に記入したアンケート等をもとに、指導教員に対して指導に関するコメント・アドバイス（改善点など）を行った。

（2）提起された問題とその解決法について

研修会では教員による実践事例報告があり、それに対する様々な意見が交わされた。当日は、研究指導に対する具体的なところまでかなり詳細に報告があり、また、それに対する質疑応答が交わされたが、それをそのままここに掲載すると、指導を受けている学生が特定されるおそれがあるので、以

下の文中では抽象化したり、任意の記号に置き換えたりの実行を行っている。

【実践事例報告】

1. 学生指導の経過

指導学生は国費留学生であり、博士課程進学を前提にして、研究生→修士課程学生として受け入れた経緯があり、実質5年間を視野に入れた指導を心がけた。

① 研究課題の選定

当初は東アジアの金融に関する問題をテーマにしたいとのことだったが、学会の研究動向や当該学生の社会勤務経験を鑑み、貿易と経済連携に関する問題をテーマとすることにした。

② 念頭にあったアイデアに基づき、予定通りの形で修士論文を執筆。研究の過程でいくつか重要な問題点が発見された。それらの問題点は、博士課程の研究課題として整理することになる。

1年次

- ・ 指導学生の発想はユニークで、それに類する既存研究はないため、学位論文のテーマに十分になりうるものとして研究計画を策定した。なお、〇〇の展開についてはまったく手つかずだったので、この分野についての基礎からの学習を進めるよう指導した。同時に、△△に関わる部分について研究を進めるように指示し、実際の△△の状況などについても理解を進めさせる。その成果は、国際学会（2009年12月）で「XXX」として報告。また、同報告を元にした同名の論文が論文集として刊行予定である。内容は研究の骨格を示すものとなっている。
- ・ 以上に加え、〇〇の発展史と現状について文献を収集し、内容を取りまとめたサーベイを作成するように指示。

2年次

- ・ さしあたり□□の問題よりも、〇〇の実効性の方が重要な問題だと判断し、△△の問題について詳細に調査するよう指導した。成果は国際学会(2010年10月)で、「YYY」として報告する(フル・ペーパーをプロシーディングズに掲載。後に図書として出版の見込みあり)。
- ・ 〇〇に関しては、英語の基本文献はほぼ渉猟を終了し、日本語の主要文献を当たっているところで、英文サーベイ「ZZZ」を作成中。査読機関紙に投稿するかどうか検討中である。
- ・ さしあたり残った課題は、△△について実地調査を行い、□□の位置づけや、〇〇の意義と論点を精査する必要がある。

2. 指導上の留意点

- ① 自発的に研究を進める姿勢が身につけているので、一定の基本文献を指示しておけばチェーン・リーディングで主要文献を探し出せるだけの能力は身に付けられた。したがって、学生の要求に応じて図書等を購入するという形で研究が進められる状況にあり、要求にはいつでも応じている。
- ② サーベイ論文を執筆中であるが、文献の内容を要約し、比較することはできるものの、内容の評価・意義の確認というところまではできていない。こうした点に留意しつつ、論文にコメントを付けている。
- ③ 学位論文のラフスケッチは出来ているが、問題はどの部分にどれだけ時間を割くかという資源配分である。細かなところが面白いので、つい集中しがちになるが、そうすると骨格部分が薄くなる。このため、なるべくはやく現地調査を進めるよう指示している。

3. 指導上の感想

まじめでよく勉強する良質の学生である。加えて、研究テーマも着眼点がよく、学位論文が予定

通り完成すれば先駆的業績となりうる可能性がある。ただし、目先の利益よりも、研究者としての十分な能力を身につけて先駆的研究者として大成できるだけの基礎・基本の能力を優先させたいと考えている。

【実践事例報告に対するコメント】

- ・大変熱心に指導されていると思いました。
- ・長期間指導を行ってきたので、研究テーマを選ぶのに十分な時間をかけることができている。
- ・詳細な指導状況の報告がなされており、とても参考になった。
- ・指導が行き届いていると思います。
- ・指導内容は、よい結果に結びついている印象である。
- ・よく指導されていると思いました。

2. 第2回東アジア研究科FD研修会

第2回東アジア研究科FD研修会は以下の通りに実施された。

題目：「第2回東アジア研究科FD研修会～比較文化講座・研究指導法の検討～」

日時：平成22年10月18日（月）東アジア研究科（比較文化コース）博士学位準備論文報告会終了後

場所：東アジア研究科・経済学研究科棟307演習室

参加者：湯川洋司、坪郷英彦、瀨瀬厚、根ヶ山徹、平野芳信、高木智見、田中誠二、辻正二、横田尚俊、朝水宗彦（以上10名）

（1）研修会の概要

本FD研修会は、これに先立って開催された東アジア研究科（比較文化コース）博士学位準備論文報告会での学生の発表を踏まえ、当該学生の主指導教員がこれまでに行ってきた研究指導の方法や方針、あるいは抱えている問題点などを個別に実践事例として報告。その報告に対する様々な意見を参加者から募り、検討を加えるという形式で催された。

研修会の手順は、まず、博士学位準備論文報告会開始前にアンケート用紙を配布。次いで、各報告を聞いた後、報告者の指導教員に対する「指導上のアドバイス・コメント」を記入するように参加教員へ依頼した。その際、以下の三つの観点を参考例として掲げた。

- ①既存研究涉猟が確実に行われているか？
- ②既存研究の成果を正確に整理分類し、総括できているか？
- ③その上でオリジナル性が明確であるか？

報告会終了後、ディスカッション形式で教員相互に意見を交換。具体的には、まず報告者の指導教員が、「FD研修会資料」に基づきつつ、現在指導している際の工夫、直面している問題について実践報告をした。続いて他の参加教員が、それに関する質問や問題解決につながるアドバイスを行った。また、同時に参加教員から、先に記入したアンケート等をもとに、指導教員に対して指導に関するコメント・アドバイス（改善点など）を行った。

（2）提起された問題とその解決法について

研修会では2名の教員から実践事例の報告があり、それぞれに対する様々な意見が交わされた。当

日は、研究指導に対する具体的なところまでかなり詳細に報告があり、また、それに対する質疑応答が交わされたが、それをそのままここに掲載すると、指導を受けている学生が特定されるおそれがあるので、以下の文中では抽象化したり、任意の記号に置き換えたりの操作を行っている。

【実践事例報告A】

1. 学生指導の経過

- 1年次
- ・研究課題は「〇〇」である。
 - ・研究を遂行するために計画立案を指導する。
 - ・研究課題に即した調査研究は以下の通りである。
9月 海外の現地図書館、公文書館での資料収集
12月 学会報告 △△学会第一回大会
2月 海外の現地図書館、公文書館を再訪し、資料収集
- 2年次
- ・資料収集作業を踏まえて中間的報告と投稿論文の作成
 - ・学会報告（9月）△△学会第二回大会
 - ・第1回目の準備論文報告会（10月）
 - ・学会誌への論文投稿（12月）
- 3年次
- ・追加調査を実施する。
 - ・第2回準備論文報告会
 - ・学位論文執筆予定

2. 指導上の留意点

① 研究環境の整備

- ・海外における資料収集
- ・資料調査のための海外渡航に随伴(2009年9月、2010年9月)

3. 指導上の感想

- ①本学生は、研究意欲が旺盛であり、大胆な発想と理論構成には見るべきものがあるが、実証力の点において依然として粗雑さが目立つ。このバランスを取ることが今後の重要な指導上の課題である。
- ②既に海外の学術雑誌に2本投稿し、査読を経て掲載された。日本の学術雑誌への投稿が次の大きな課題となっている。

【実践事例報告B】

1. 学生指導の経過

- 1年次
- ・研究課題は、「〇〇」といったやや漠然としたものであった。
 - ・研究課題を明確にするために、〇〇に関する先行研究について調査するように指導した。その結果、『〇〇』（調査報告集成）の点検、既刊図書の点検、資料収集を行った。この後、研究課題のキーワードとして「△△」「△△観」を発想し、6～7月は「□□の△△」のもとに特別研究を行った。
 - ・9月に国内現地調査の結果を整理したが、それ以後、具体的な展開を図る方向性が見えなくなって停滞した。このため、11月以降は実地調査に加えて「〇〇」の検討に着

手した。

- ・2月に、以上の内容や調査結果を踏まえて、21年度のまとめのレポートを作成した。
- ・研究課題に即した調査研究は以下の通り実施した。

9月…国内A地において、〇〇に関する調査。

10月～翌年2月…国内B地、C地、D地で調査票を用い「△△」についての調査を実施した。

11月～2月…上記と併行して「〇〇」についての文献資料調査。

- 2年次
- ・4月に学位論文作成計画書を提出。
 - ・5月にプロジェクト演習で、これまでの研究内容と今後の課題等を発表し、これに対するコメントを踏まえて、論文の扱う内容・対象等を含め論文構成を具体的に絞るよう指導した。
 - ・その後、〇〇についての先行研究にあたり、資料を整理した。とくに△△に着目し、その様相の把握と分析にあたった。
 - ・第1回目の準備論文報告会（10月）
 - ・学会報告、学会誌への投稿予定
- 11月：〇〇学会報告予定
- 1月：学会誌「〇〇」に投稿予定
- 3月：学会誌「△△」に投稿予定

- 3年次
- ・□□の調査を実施する。
 - ・第2回準備論文報告会
 - ・学位論文執筆予定

2. 指導上の留意点

① 研究環境の整備

- ・研究に必要な文献、調査に必要な機器等を用意した。
- ・現地調査を学部授業の調査実習と兼ねて実施した。

② 東アジアプロジェクト研究への参加

RAとして参加し、「〇〇資料」収集の一環として〇〇の事例収集を行った。

③ 関連学会への入会

〇〇学会、△△学会

3. 指導上の感想

- ①資料収集や、その分析に深く入り込みすぎてしまうと、論文に仕上げるために必要な論理的構築や分析が後手に回りやすい。調査したことを論文という結果にまとめていくために、常に学位論文全体の構想を意識させて、優先順位を考えて課題に取り組むように指導をしている。
- ②現在投稿論文を執筆中であるが、文章作成のうえでの表現方法など、添削も含めた指導が必要だと感じている。
- ③就労学生のため、研究時間の確保が課題の一つである。

3. 第3回東アジア研究科FD研修会

第3回東アジア研究科FD研修会は以下の通りに実施された。

題目：「第3回東アジア研究科FD研修会～社会システム分析講座・研究指導法の検討～」

日時：平成22年10月22日（金）東アジア研究科（教育開発コース）博士学位準備論文報告会終了後

場所：東アジア研究科・経済学研究科棟307演習室

参加者：福田隆眞、西村正登、葛崎偉、村上林造、藤原マリ子、石井由理、松岡勝彦（以上7名）

（1）研修会の概要

本FD研修会は、これに先立って開催された東アジア研究科（教育開発コース）博士学位準備論文報告会での学生の発表を踏まえ、当該学生の主指導教員がこれまでに行ってきた研究指導の方法や方針、あるいは抱えている問題点などを個別に実践事例として報告。その報告に対する様々な意見を参加者から募り、検討を加えるという形式で催された。

研修会の手順は、まず、博士学位準備論文報告会開始前にアンケート用紙を配布。次いで、各報告を聞いた後、報告者の指導教員に対する「指導上のアドバイス・コメント」を記入するように参加教員へ依頼した。その際、以下の三つの観点を参考例として掲げた。

- ①既存研究渉猟が確実に行われているか？
- ②既存研究の成果を正確に整理分類し、総括できているか？
- ③その上でオリジナル性が明確であるか？

報告会終了後、ディスカッション形式で教員相互に意見を交換。具体的には、まず報告者の指導教員が、「FD研修会資料」に基づきつつ、現在指導している際の工夫、直面している問題について実践報告をした。続いて他の参加教員が、それに関する質問や問題解決につながるアドバイスを行った。また、同時に参加教員から、先に記入したアンケート等をもとに、指導教員に対して指導に関するコメント・アドバイス（改善点など）を行った。

（2）提起された問題とその解決法について

研修会では教員による実践事例報告があり、それに対する様々な意見が交わされた。当日は、研究指導に対する具体的などころまでかなり詳細に報告があり、また、それに対する質疑応答が交わされたが、それをそのままここに掲載すると、指導を受けている学生が特定されるおそれがあるので、以下の文中では抽象化したり、任意の記号に置き換えたりしている。

【実践事例報告】

1. 学生指導の経過

- 1年次
- ・研究課題は「〇〇に関する研究」であった。
 - ・研究を遂行するために、上記の研究課題に関する先行研究を調査させ、論文にまとめさせる。
 - ・△△学会で「XXX」を口頭発表する。（平成21年6月）
 - ・学術機関誌「□□」に査読付き論文として掲載される。

- 2年次 ・研究課題を「△△に関する研究」に変更する。
・△△学会で「YYY」を口頭発表する。(平成22年6月)
・第1回目の準備論文報告会(10月)

2. 指導上の留意点

- ① 関連学会への入会
○○学会
△△学会
□□学会

3. 指導上の感想

- ① 本学生は研究熱心であり、研究に対して非常に意欲的である。
② 2年次の後期から山口県内で就労しており、研究と仕事をうまく両立させていくことが課題である。
③ 2年次になって研究課題を軌道修正したため、1年次までの研究を基盤にして変更後の研究に接続していくことが必要である。

【実践事例報告に対するコメント】

- ・テーマが途中で変更したケースでは、指導が大変かと思う。
- ・研究テーマの変更により、既発表論文をどのように取り込むかが重要かと思われる。
- ・研究テーマが変更したことの影響が、先行研究のサーベイにおいて現れるのではないかと思われた。
- ・難しい概念を扱う論文の指導は大変だと感じた。
- ・研究テーマの変更は、思考の深まりとして捉えることができた。これも指導の成果であろう。

4. 参考資料

(1) 第1回東アジア研究科FD研修会のアンケート用紙

平成22年度 第1回 東アジア研究科FD研修会 アンケート

社会動態講座

お名前_____

※本コメント票は、FD研修会終了時に回収いたします。なお、こちらのコメント票により出欠を確認いたしますので、必ずご提出してください。

①報告者名 _____ (指導学生名) _____

コメント

②報告者名 _____ (指導学生名) _____

コメント

(2) 第2回東アジア研究科FD研修会のアンケート用紙

平成22年度 第2回 東アジア研究科FD研修会 アンケート
比較文化講座

お名前 _____

※本コメント票は、FD 研修会終了時に回収いたします。なお、こちらのコメント票により出欠を確認いたしますので、必ずご提出してください。

①報告者名 _____ (指導学生名) _____

コメント

②報告者名 _____ (指導学生名) _____

コメント

(3) 第3回東アジア研究科FD研修会のアンケート用紙

平成22年度 第3回 東アジア研究科FD研修会 アンケート

社会システム分析講座

お名前 _____

※本コメント票は、FD 研修会終了時に回収いたします。なお、こちらのコメント票により出欠を確認いたしますので、必ずご提出してください。

①報告者名 _____ (指導学生名)

コメント

FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
東アジア研究科	第1回東アジア研究科FD研修会	書籍及び消耗品	60	研究指導法の実践事例報告会を開き、学生を指導するうえで生じる問題について共有することができた。
	第2回東アジア研究科FD研修会	書籍及び消耗品	40	研究指導法の実践事例報告会を開き、学生を指導するうえで生じる問題について共有することができた。
	第3回東アジア研究科FD研修会	書籍及び消耗品	10	研究指導法の実践事例報告会を開き、学生を指導するうえで生じる問題について共有することができた。
計			110	

* * * * *

平成22年度 山口大学大学院東アジア研究科FD委員会

森野 正弘

朝水 宗彦

藤原 マリ子

第 18 章 大学院技術経営研究科の F D 活動

第 1 節 授業公開

技術経営研究科は社会人大学院生を対象とした大学院であるので、平日は勤務しながら大学院課程を修学できるように授業を週末の二日間に開講している。そして、宇部・福岡・広島の 3 教室体制で授業を行っていることにより、全教員が週末に授業を担当している。本研究科の授業の基本方針として、宇部教室（常盤地区）、福岡教室ならびに広島教室の 3 カ所の教室において、全カリキュラムを対面式授業で行うことを基本としている。そのため、講義日である土曜日は全教員が授業を担当しているため、公開授業によるピアレビューを行うことが非常に難しい。そこで、公開授業に代わって、授業を録画した動画映像を自ら閲覧して振り返りを行うセルフレビューを行った。以下に、セルフレビューにおけるチェック項目を挙げる。

また、授業の録画を受講者が閲覧できるようにもアクセス権を設定することにより、授業の復習など自宅学習の効率化に寄与できた。

◆ 優れていると感じた点についてメモを作りましょう。

【説明】

- ・ 声ははっきりとして聞き取りやすいですか。
- ・ 丁寧に講義内容を説明していますか。
- ・ 学生の職務内容を念頭に置いた説明をしていますか。
- ・ 学生が各自の業種に応じて演習課題を展開できるように意図されていますか。
- ・ 専門分野が違う受講者にも理解し易いように説明が工夫されていますか。
- ・ パワーポイントの使い方は適切ですか（文字の大きさ、スライドの送り方など）。
- ・ 動画を使った説明など、学生の興味を引き出す工夫がされていますか。
- ・ 学生が授業内容を理解するペースを考慮して、説明のテンポを調整していますか。

【資料】

- ・ パワーポイント スライドのフォントサイズは適切ですか。
- ・ パワーポイント スライド 1 枚当たりの時間を十分に設定しますか。
- ・ 講義説明を書き込むのに必要な時間が十分確保されていますか。
- ・ 講義で専用ソフトウェアを利用する際には、操作マニュアルが用意されていますか。
- ・ ニュース・報道・Web 情報を引用している場合、引用元を明記していますか。

【教授法】

- ・ スクール形式による説明と、グループ学習や討議などの実践形式による学習がバランス良く取り入れられていますか。
 - ・ 事前課題を用意していますか。
 - ・ 個々に授業の工夫を取り入れていますか。
- (事例 授業の最後の 10 分間を利用して、「その授業における振り返り」の時間を設定する。)
- ・ 学生のモチベーションを引き出すような工夫をしていますか。
 - ・ 講義の進行と、グループワークによる討議が結びついていますか。

- ・ 学生の発言は適度に行われていますか。
 - ・ 特定の学生の回数が多いなどの偏りはありませんか。
- ◆ 改善を要すると感じた点についてメモを作りましょう。

【事例】

- ・ 授業時間内で説明時間が足りない。
(対策例 eラーニングや課題レポートなどを利用して授業の一部を個人学習に割り当てるなどの対策を検討して下さい。)
- ・ テキストだけのパワーポイント資料
(対策例 図表や写真などを活用する)
- ・ 教材資料が多い
(対策例 授業における講義内容に合わせて、資料を調整してください。)

第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成22年度のFD研修活動として、下記の2つを実施した。

(1) MOT教育シンポジウム2011

日時：平成22年3月16日(水) 14:00～17:35

会場：キャンパスイノベーションセンター 1F国際会議室

(東京都港区芝浦3-3-6：JR田町駅東口下車1分)

2003年度にMOT(技術経営)の専門職大学院がスタートしてから8年が経過し、ここで学んだ多数の修了生が社会の様々な分野で活躍するようになりました。またMOT協議会では2008～09年度にMOT専門職大学院において共通に修得すべき内容を定めた「コア・カリキュラム」を策定しています。MOT専門職大学院で学ぶ事柄は社会の中でどのように役に立つのか、修了生の方々は在学中に学んだどのような内容がその後の仕事の中で役に立っていると感じているのか、などMOT専門職大学院で学ぶことの価値を幅広く検討する。

<プログラム>

13:30 受付

14:00～14:10 開会挨拶 上西研：技術経営系専門職大学院協議会長

14:10～15:00 基調講演「現場発のMOTとは」

藤本隆宏：東京大学大学院経済学研究科教授・ものづくり経営研究センター長

15:00～15:20 「MOT教育コア・カリキュラムの導入事例」

向山尚志：山口大学大学院技術経営研究科教授(MOT協議会幹事)

15:20～15:35 休憩

15:35～15:55 「MOT専門職大学院における教育の質保証」

中野理美：文部科学省高等教育局専門教育課専門職大学院室長

15:55～16:15 「最近の経済産業省の施策とMOT人材への期待」

進藤秀夫：経済産業省産業技術環境局大学連携推進課長

16:15～17:20 「修了生が語るMOT教育の価値」

東京工業大学、
東京農工大学

東京理科大学

山口大学 各大学修了生

モデレーター：亀山秀雄・東京農工大学大学院技術経営研究科長

17：20～17：25 閉会挨拶 田辺孝二・東京工業大学大学院イノベーション研究科長

<基調講演者> 藤本隆宏氏 略歴

東京大学大学院経済学研究科教授（専攻：技術・オペレーション管理、経営管理）
東京大学ものづくり経営研究センター長

- 1955年 東京生まれ
- 1979年 東京大学経済学部卒業、三菱総合研究所入社
- 1989年 ハーバード大学ビジネススクール経営学博士号取得、同大学研究員
- 1990年 東京大学経済学部助教授
- 1996年 リヨン大学客員教授、INSEAD 客員研究員
- 1996年 ハーバード大学ビジネススクール客員教授（～1997）
- 1997年 ハーバード同大学上級研究員（～現在）
- 1998年 東京大学大学院経済学研究科教授
- 2004年 東京大学 21世紀COEものづくり経営研究センター長
- 2009年 東京大学 グローバルCOEものづくり経営研究センター長

主著に、『製品開発力』（キム・クラークと共著，ダイヤモンド社，1993）、『生産システムの進化論』（有斐閣，1997）、『サプライヤーシステム』（西口敏宏、伊藤秀史と共編著，有斐閣，1997）、『成功する製品開発』（安本雅典と共編著，有斐閣，2000）、『トヨタシステムの原点』（下川 浩一と共著，文眞堂，2001）、『ビジネス・アーキテクチャ』（武石彰・青島矢一と共編著，有斐閣，2001）、『生産マネジメント入門（I）（II）』（日本経済新聞社，2001）、『能力構築競争』（中央公論新社，2003）、『日本のもの造り哲学』（日本経済新聞社，2004）、『中国製造業のアーキテクチャ分析』（新宅純二郎と共編著，東洋経済新報社，2005）、『ものづくり経営学—製造業を超える生産思想』（東京大学 21世紀COEものづくり経営研究センターとの共著，光文社，2007）、『日本型プロセス産業』（桑嶋健一との共編著，有斐閣，2009）など。



平成 22 年 3 月 16 日 MOT 教育シンポジウム 2011
キャンパスイノベーションセンター 1F 国際会議室

MOT教育シンポジウム 2011

日時

2011年3月16日(水)
14:00~17:25

会場

キャンパスイノベーションセンター
1F国際会議室 (東京都港区芝浦3-3-6: JR田町駅東口下車1分)

2003年度に MOT (技術経営) の専門職大学院がスタートしてから8年が経過し、ここで学んだ多数の修了生が社会の様々な分野で活躍するようになりました。また MOT 協議会では2008~09年度に MOT 専門職大学院において共通に修得すべき内容を定めた「コア・カリキュラム」を策定しています。MOT 専門職大学院で学ぶ事柄は社会の中でどのように役に立つのか、修了生の方々は在学中に学んだどのような内容がその後の仕事の中で役に立っていると感じているのか、など MOT 専門職大学院で学ぶことの価値を幅広く検討します。

プログラム

- 13:30 受付
14:00~14:10 開会挨拶 上西研:技術経営系専門職大学院協議会長
14:10~15:00 基調講演 「現場発のMOTとは」
藤本隆宏:東京大学大学院経済学研究科教授・ものづくり経営研究センター長
15:00~15:20 「MOT教育コア・カリキュラムの導入事例」
向山尚志:山口大学大学院技術経営研究科教授 (MOT協議会幹事)
15:20~15:35 休憩
15:35~15:55 「MOT専門職大学院における教育の質保証」
中野理美:文部科学省高等教育局専門教育課専門職大学院室長
15:55~16:15 「最近の経済産業省の施策とMOT人材への期待」
進藤秀夫:経済産業省産業技術環境局大学連携推進課長
16:15~17:20 「修了生が語るMOT教育の価値」
東京工業大学
東京農工大学
東京理科大学
山口大学 各大学修了生
モデレーター:亀山秀雄・東京農工大学大学院技術経営研究科長
17:20~17:25 閉会挨拶 田辺孝二・東京工業大学大学院イノベーション研究科長

主催

技術経営系専門職大学院協議会 (MOT協議会)

参加費

無料

定員

100名 (事前申込制)

詳細、参加申込みは

<http://www.motjapan.org/sympo/index.html>



**MOT教育コア・カリキュラム
～山口大学での導入と活用～**

MOT教育シンポジウム2011
2011年3月16日
山口大学大学院技術経営研究科
向山尚志

YUMOT
YAMAGUCHI UNIVERSITY OF MOT

スライド1

MOT教育コア・カリキュラムの位置づけ

☆ **コア・カリキュラム**：2008～09年度に協議会メンバーで検討し作成

- ・日本におけるMOT教育展開の基盤
- ・MOT教育の質向上を目的に教育内容を整備
- ・全てのMOT専門職大学院の学生が習得すべき内容
- ・各MOT専門職大学院の現状追認や最大公約数的内容ではない
- ・今後、各大学はこれをベースにカリキュラムを編成
- ・今後目指していく「MOT専門職大学院修了生の到達度の保証」の基盤
- ・各MOT専門職大学院の独自性、多様性との両立(画一性の排除)

スライド4

専門職大学院とMOT

高度な専門的職業人の養成に特化した大学院として2003年度に制度化
・法科大学院:74、MBA・MOT:28、会計:14、公共政策:7、その他:17

◇ 全国のMOT専門職大学院

開設年次	大学	研究科
2003年度	芝浦工業大学	大学院工学マネジメント研究科
	早稲田大学	大学院アジア太平洋研究科
2004年度	東京理科大学	大学院総合科学技術経営研究科
	東京工業大学	大学院イノベーションマネジメント研究科
2005年度	東京農工大学	大学院技術経営研究科
	山口大学	大学院技術経営研究科
	日本工業大学	専門職大学院
2006年度	新潟大学	大学院技術経営研究科
	長岡技術科学大学	大学院技術経営研究科

MOT協議会メンバーとしては、このほかに九州大学ビジネススクール、関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科があり、11大学で構成。

スライド2

コア・カリキュラムの構成

MOT教育コア・カリキュラム

総合領域 (特定課題研究などの創造的活動)		各大学の裁量 による独自の 教育内容
MOT 中核知識 大項目	イノベーション・ マネジメント 知的財産 オペレーションズ・ マネジメント	
基礎知識 項目	＜技術経営の基礎＞ MOTの概念的理解、技術と社会、 企業戦略、組織・人材、企業倫理、 ビジネス・エコノミクス、マーケティ ング、会計・財務	

スライド5

MOT専門職大学院において育成を目指す人材像

- ・技術と経営の複眼的な視点から社会や企業・組織における様々な問題に対して**創造的な成果創出**を目指して取組む力を有する人材
- ・国際的視野や社会性の点も含めた**全体性**(技術と経営の複眼的視点から全局面を俯瞰する)、**先見性、論理性、実効性**を有した**総合的な施策を企画、立案、実行する**人材
- ・経営的あるいは指導的立場に就いて**企業や組織を牽引**していく人材

↓

国内外で活躍し、産業の国際競争力向上に資する人材

スライド3

基礎知識項目—大項目『技術経営の基礎』

MOT人材の素養に関わる内容

「MOTの概念的理解に関連する事項」
・中項目：(1) MOTとは、(2) MOTの経緯、(3) MOTの扱う領域

「技術と社会」
・技術固有の諸問題と経営の関係を洞察し、これを経営に応用するための知識
・中項目：(4) 技術者倫理、(5) 科学・技術と社会、(6) 技術とリスク・など

「企業戦略」
・経営理念、ドメインなど企業・組織の外部、内部の環境分析の枠組み
「組織・人材、企業倫理」
・組織、リーダーシップ、企業倫理、CSR、リスク・マネジメントなど

「ビジネス・エコノミクス」
・消費者の行動、企業の行動原理などのミクロ経済学、統計など

「マーケティング」
・ポジショニング、マーケティング・ミックスなど戦略の立案と実践のための事項

「会計・財務」
・財務諸表、企業価値、投資採算性などの理解

スライド6

MOT中核知識大項目

『イノベーション・マネジメント』

- 日本の産業の競争力強化、企業・組織の持続的発展に必要不可欠であるイノベーションについて実現の確率を高める観点から学ぶ。

『知的財産マネジメント』

- 事業推進に必要な知的財産権の取得および活用を、知財に関する職能的専門担当者(家)と連携して展開するために必要な事項を学ぶ。

『技術戦略と研究・開発マネジメント』

- 技術の特徴(科学との違いなど)を知り、企業戦略や事業戦略と連動、統合した技術戦略の立案に必要な事項を習得する。

『オペレーションズ・マネジメント』

- 企業活動のオペレーション全般について製品開発、生産計画、資材調達、作業管理、物流管理およびプロジェクトマネジメントの観点から理解する。

スライド7

選択科目一覧

経営戦略特論	ベンチャー	研究開発型ベンチャー特論
経営組織特論	ベンチャー	ベンチャー資金戦略特論
戦略思考特論	技術戦略	技術戦略特論
国際経営戦略特論	技術戦略	技術評価特論
マーケティング戦略特論	生産管理	生産管理特論
知的財産戦略特論	生産管理	リスク管理特論
コンテンツビジネス法務特論	企業倫理	エンタープライズPM特論
創造的問題解決特論	企業倫理	企業倫理
財務戦略特論	先端技術	情報化製造技術特論
経済分析特論	先端技術	環境・エネルギー技術特論
地域経済論	先端技術	科学技術政策
地域イノベーション論		

スライド10

総合領域

『狙いと定義』

総合領域は、それに取り組むことによって学生が将来に直面する可能性のある様々な実務課題に対する創造的な解決策を導くためのアプローチ方法を体得するに至ったことを、成果物によって担保する。

技術と経営に関わる領域において自ら設定した課題に対し、講義、演習、事例を用いた討議などを通じて習得した知識、スキルなどを総合して技術と経営の複眼的視点から解決を目指した創造的な取組みを教員の指導の下に行なう。

修士論文に代替するものとして、プロジェクト研究、特定課題研究などの名称で呼ばれることもある

スライド8

山口大学のコア・カリキュラム対応(2012年度変更後)

現行	変更後
基礎科目(必修) 新産業創出論 知的財産権論 プロジェクトマネジメント特論 企業経営特論 会計・財務特論 組織と人材マネジメント特論	基礎科目(必修) イノベーション・マネジメント 知的財産権論 オペレーションズ・マネジメント特論 企業経営特論 会計・財務特論 組織と人材マネジメント特論
応用・演習系科目(3科目選択) プロジェクトマネジメント演習 商品開発演習 知的財産戦略演習 ビジネスプラン演習	応用・演習系科目(全て必修) プロジェクトマネジメント演習 商品開発・ビジネスプラン演習 知的財産戦略演習

スライド11

山口大学のMOT教育カリキュラム

現行(2010年度)		
基礎科目(必修) 新産業創出論 知的財産権論 プロジェクトマネジメント特論 企業経営特論 会計・財務特論 組織と人材マネジメント特論	応用・演習系科目(3科目以上選択) プロジェクトマネジメント演習 商品開発演習 知的財産戦略演習 ビジネスプラン演習	展開科目群(選択) 経営戦略(5科目) 知的財産(3科目) 財務・経済(2科目) 地域(2科目) ベンチャー(2科目) 技術戦略(2科目) 技術管理(4科目) 先端技術(3科目)
特定課題研究(必修)		

スライド9

コア・カリキュラムに基づく到達度評価システム

<目的>

- MOT教育コア・カリキュラムで示されるMOT修了者に必須の能力について自己評価・自分の能力を数値化することにより、弱点を認識し自己成長する

(1)課題発見 (2)学習 (3)再確認

入学時にMOT教育コア・カリキュラムにしたがって知識項目ごとに自己評価する

自己評価の集計から、それぞれの中項目の能力がどの程度かをリーダーチャートで表示

結果はデータベースに保存され、学生はいつでも閲覧できる

授業終了後に再度実施し、学習した結果、それぞれの力がどの程度ついたかを再確認

1年課程終了時 測定
1年後課程終了時 測定
2年課程終了時 測定
2年後課程終了時 測定

スライド12

「会計・財務」での中項目と設問項目

<会計・財務の狙い>

- ・財務諸表の意味と仕組みを理解する
- ・財務分析による他社比較ができる
- ・企業価値評価の方法を理解する
- ・投資採算性に評価方法を理解する

中項目

- (31) 複式簿記
- (32) 財務諸表
- (33) 原価計算
- (34) 直接原価計算と全部原価計算
- (35) 損益分岐点分析
- (36) 企業価値評価
- (37) 投資採算分析
- (38) 資金調達と資本コスト
- (39) 税務上の利益

<財務諸表>

- ・損益計算書の形式と各段階に示される利益について説明できる
- ・収益、費用の計上基準について説明できる
- ・減価償却の意味と計算方法(定額法、定率法)を説明できる
- ・貸借対照表の形式と主な項目について説明できる
- ・棚卸資産の主要な評価方法を説明できる
- ・キャッシュフロー計算書の3つの分類を説明できる
- ・損益計算書とキャッシュフロー計算書の違いを説明できる
- ・フリー・キャッシュフローの意味を説明できる

スライド13

到達度履歴表示による変化の確認

回答結果の履歴はシステムに保存される。回答履歴を比較することにより、学習による変化を確認できる

MOTの概念に関する事項

大項目	得点
MOTの概念的理解に関する事項	3.7 2.3
企業戦略	3.8 2.6
経営・人材、企業価値	3.9 1.9
ビジネスエコノミクス	3.0 2.5
マーケティング	3.7 1.7
会計・財務	3.7 2.0
技術と社会	3.7 1.7

2010.4.5 (紫)
2010.7.25 (白)

学習による変化を確認！

スライド16

コア・カリキュラムに対する自己診断

具体的な設問に対して、5段階評価で学生は回答する。

会計・財務 中項目：(31) 複式簿記

【設問1】勘定科目の主要な3つの要素について、どのように把握されているかを説明できる

- 5: 事例を交えて説明できる
- 4:
- 3: 概念を理解している
- 2:
- 1: 説明できない

【設問2】企業の会計システムであるにも関わらず、現金取引を記録することの意味を理解し、簡単な仕訳が記述できる

- 5: 事例を交えて説明できる
- 4:
- 3: 概念を理解している
- 2:
- 1: 説明できない

スライド14

項目別回答結果イメージ

回答結果は、項目別に集計され、レーダーチャート形式で表示される。

<大項目別>

MOTの概念に関する事項

技術と社会 企業戦略 経営・人材、企業価値

会計・財務

マーケティング ビジネスエコノミクス

中項目別結果

<会計・財務の中項目別結果>

(31) 複式簿記 (32) 財務諸表 (33) 原価計算 (34) 直接原価計算と全部原価計算 (35) 損益分岐点分析 (36) 企業価値評価 (37) 投資採算分析 (38) 資金調達と資本コスト (39) 税務上の利益

2010.4.5 (紫)
2010.7.25 (白)

スライド15

(2) FD 特別講演

社団法人 日本アルゼンチン協会常務理事の白鹿 敦己氏を講師として迎え、アルゼンチンとブラジルを中心とした南米と日本の関係について解説して頂いた。

日時 平成 23 年 3 月 22 日

場所 山口グランドホテル

講師 白鹿 敦己氏 (社団法人 日本アルゼンチン協会常務理事)

題目 「今、南米が面白い：アルゼンチン、ブラジルを中心として」

概要

世界的な金融危機が起こった後、南米ブラジル経済は大きな影響を受けることなく好調に成長している。人口は1億9千万を超え、海外からの投資と鉄鋼などの資源高で急成長をしている。自動車市場も拡大しており、2010年の新車販売台数は前年比で11・9%増の351万5120台におよび、4年連続で販売台数の記録を更新している。今では、ブラジルはドイツを抜き、中国、米国、日本に次ぐ世界4位の自動車市場となっている。

また、通貨レアルも上昇している。金融危機後は我が国日本の円に対してほとんどの国の通貨が下がっている一方で、ブラジル・レアルは上昇を続けている。リーマン・ショック後の2008年10月中旬には、1レアル41円であった為替相場は、平成23年1月現在で50円近くまで上昇した。去年ブラジルのGDPは、初めて2兆ドルを突破した。

文化面でもブラジルは日本の影響を受けている。ブラジルでは、日系移民による海外で最大の日系人社会が構築されてきたことが大きな要因となり、日本のアニメや特撮にファンが多く、ブラジル国民は日本のヒーローを子供の時からお茶の間で受け入れてきた。

このように日本と南米の間には密接な関係があるにも関わらず、そのことが広く知られていない。南米の状況を知ることは、技術経営を学ぶ上で大変大きな意義がある。

第3節 教育改善に関する活動

(1) コア・カリキュラムに基づく平成24年度カリキュラムの編成

本研究科では平成20年度および平成21年度の取り組みとして、MOT教育コア／カリキュラムを策定した。

平成20、21年度文部科学省

「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム」事業
MOT教育コア・カリキュラム開発

本事業は、文部科学省の「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム」の1つとして採択されたものであり、平成20年度から21年度において技術経営系専門職大学院協議会(MOT協議会)を構成する全国の10大学でMOT教育のコアとなる内容を定めることを目的とし、MOT協議会・会長校である山口大学大学院擬宇術経営研究科が中心となって取りまとめを行った。

MOT教育コア・カリキュラム

総合領域 (特定課題研究などの創造的活動)			各大学の裁量 による独自の 教育内容
MOT 中核知識 大項目	イノベーション・ マネジメント	技術戦略とR&D マネジメント	
	知的財産 マネジメント	オペレーションズ・ マネジメント	
基礎知識 項目	<技術経営の基礎> MOTの概念的理解、技術と社会、 企業戦略、組織・人材、企業倫理、 ビジネス・エコノミクス、マーケティ ング、会計・財務		

図1 MOT教育コア・カリキュラムの構成

MOT教育コア・カリキュラムは、日本におけるMOT教育展開の基盤であり、MOT教育の質向上を図るために技術経営教育の内容を整備する。全てのMOT専門職大学院の学生が習得すべき内容を体系化したものであり、今後、大学における技術経営教育はMOT教育コア・カリキュラムをベースにして大学院教育カリキュラムを編成し、「MOT専門職大学院修了生の到達度の保証」の基盤となることを目指す。図1に、教育コア・カリキュラムの構成を示す。

本研究科では、MOT教育コア・カリキュラムに基づいた当研究科の教育カリキュラムの見直しを平成22年度におけるFD活動として取り組み、技術経営研究科の全教員による討議を行った。図2にMOT教育コア・カリキュラムの基礎知識項目ならびに中核知識項目に対応する本研究科のカリキュラムの該当科目を示す。

平成22年度 カリキュラム構成		
基盤科目(必修)	応用・演習系科目 (3科目以上選択)	展開科目群(選択)
新産業創出論	プロジェクトマネジメント演習	経営戦略(5科目)
知的財産権論	商品開発演習	知的財産(3科目)
プロジェクトマネジメント特論	知的財産戦略演習	財務・経済(2科目)
企業経営特論	ビジネスプラン演習	地域(2科目)
会計・財務特論		ベンチャー(2科目)
組織と人材マネジメント特論		技術戦略(2科目)
		技術管理(4科目)
		先端技術(3科目)
特定課題研究(必修)		

図2 本研究科のカリキュラム構成とMOT教育コア・カリキュラムの基礎知識項目ならびに中核知識項目に対応する範囲(朱書きの枠)

基盤科目においては、平成22年度における『新産業創出論』と『プロジェクトマネジメント特論』の2科目を廃し、平成24年度から新たに『イノベーション・マネジメント』と『オペレーションズ・マネジメント特論』を開講する。応用・演習系科目では、『商品開発演習』と『ビジネスプラン演習』を統合し、新たに『商品開発・ビジネスプラン演習』を開講する。

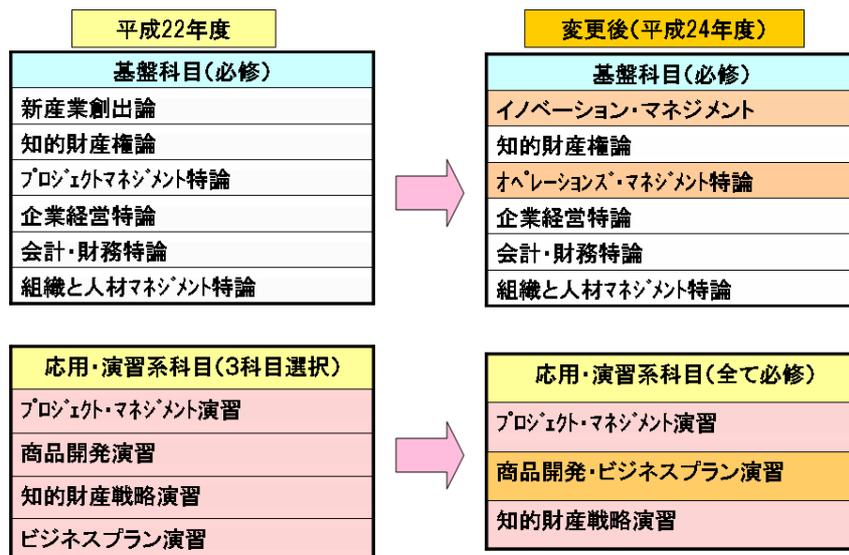


図3 平成22年度のカリキュラムと平成24年度カリキュラム(予定)の比較

(2) 技術経営教育コア/カリキュラムに基づく到達度評価システムの検討

MOT教育コア・カリキュラムで示されるMOT修了者に必須の能力について自己評価し、自分の能力を数値化することにより弱点を認識し自己成長することを目指し、到達度評価システムの構築を検討した。評価結果は項目別に集計され、レーダーチャート形式で表示される。



図4 到達度評価システムの概要

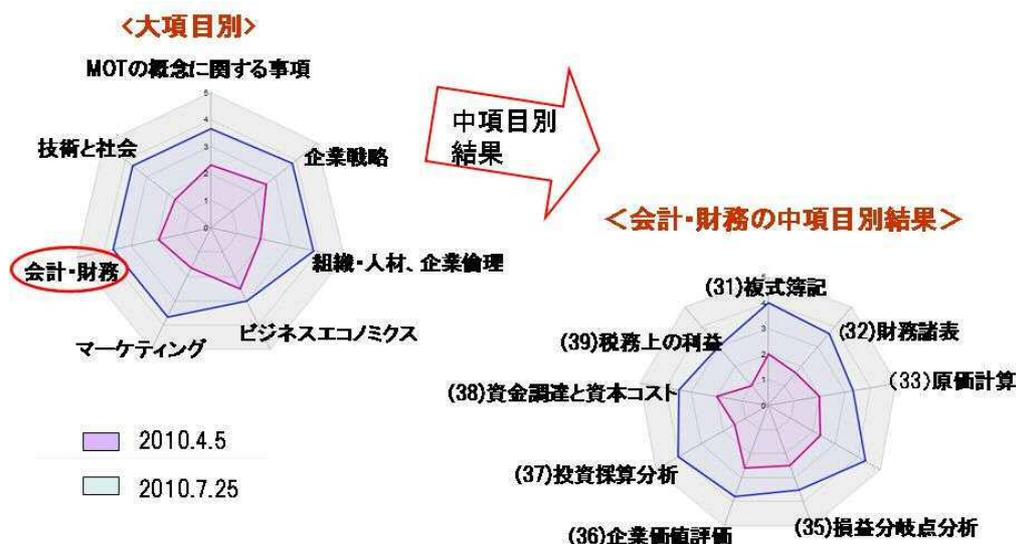


図5 到達度評価結果（レーダーチャート）

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

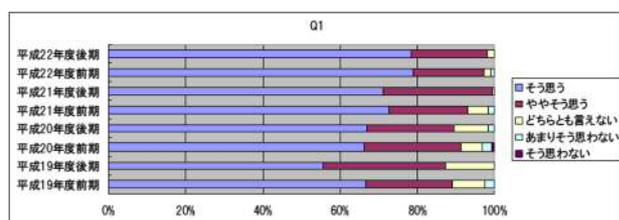
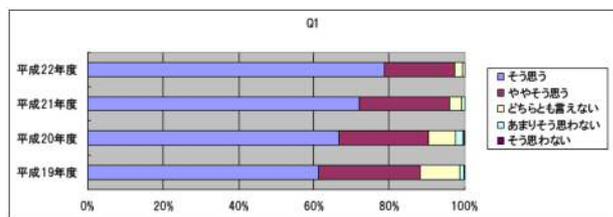
教育改善を目的とした評価活動

(1) 学生授業評価

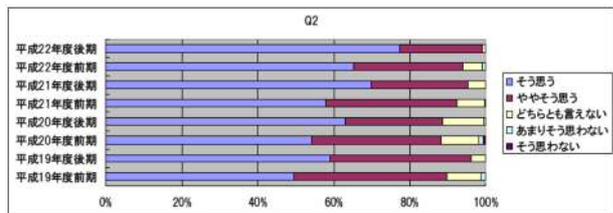
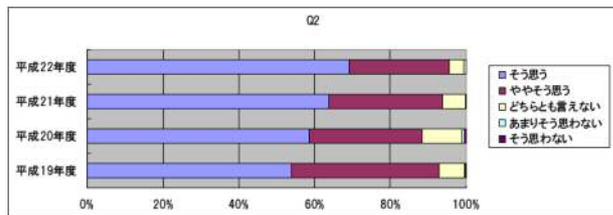
[学習指導法に対する学生授業評価]

学習指導法に対する学生による5段階の授業評価の結果では、「そう思う」から「どちらとも言えない」までを含めた肯定的な意見が、6項目とも80～90%を締めている。同時に、年度ごとに指標が良くなっていることが見出せる。

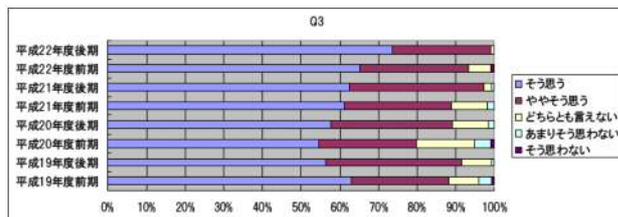
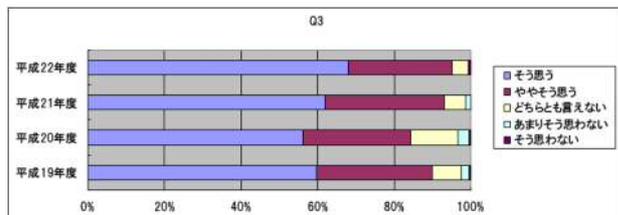
質問（Q1）：教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったですか？



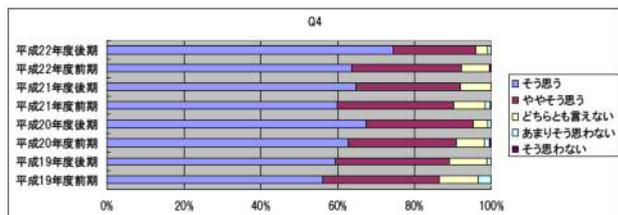
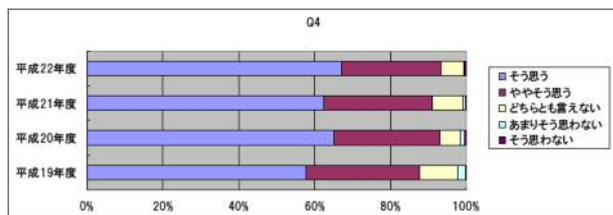
質問 (Q2) : 理論や考え方、専門用語などが、わかりやすく説明されたと思いますか?



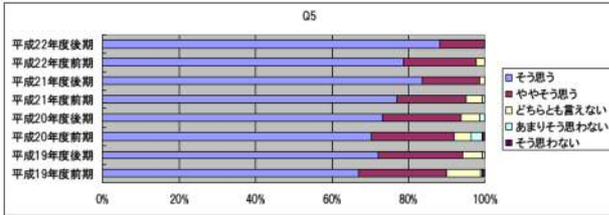
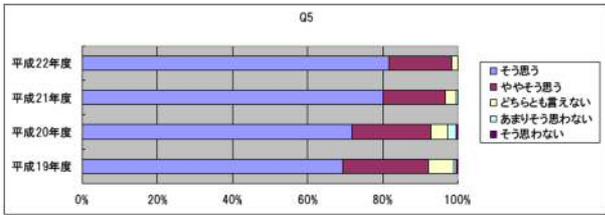
質問 (Q3) : 教材、板書、プロジェクターなどに授業の理解を促す工夫がなされていたと思いますか?



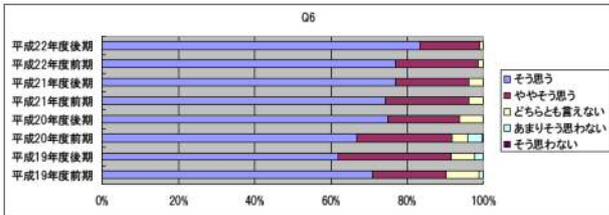
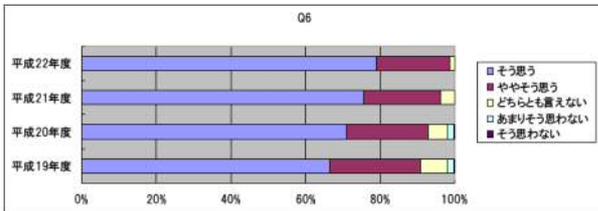
質問 (Q4) : 練習問題、課題・宿題、参考文献の例示など授業外での学習を促す工夫がなされていたと思いますか?



質問 (Q5) : 学生の疑問・質問への対応が十分であったと思いますか?



質問 (Q6) : 担当教員の熱意を感じましたか？

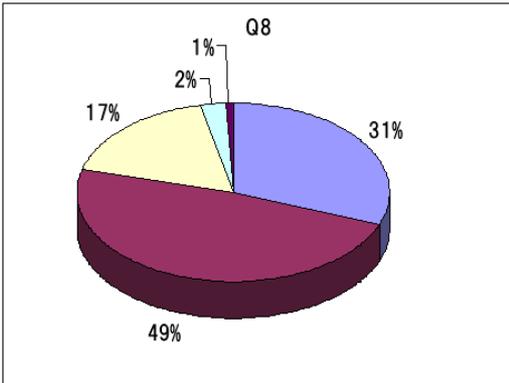


回答選択肢					
	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	余りそう思わない	そう思わない

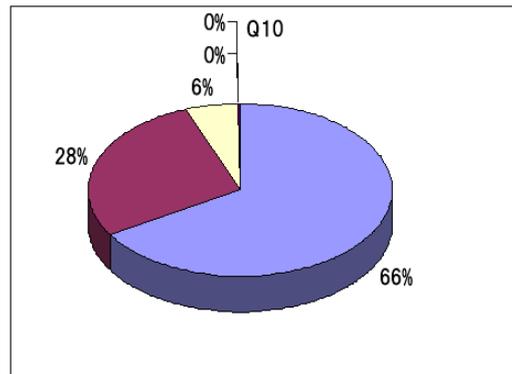
[授業の成果に対する学生授業評価]

授業の成果に対する5段階による選択式の学生による授業評価の結果では、「そう思う」から「ややそう思う」の肯定的な意見の占める割合は、質問（Q8）学習目標の達成については80%、質問（Q9）授業の理解については89%、質問（Q10）授業に対する満足度は96%であり、これら3項目はいずれも高い評価を得た。

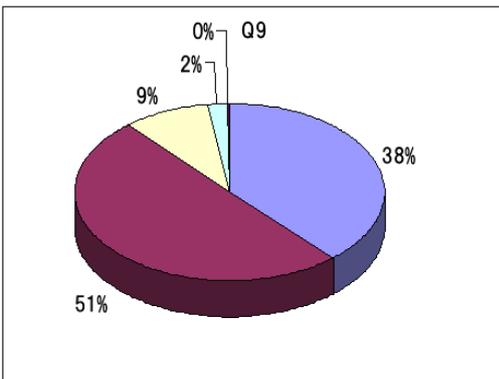
質問（Q8）：あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？



質問（Q10）：この授業は、あなたにとって満足のものでしたか？

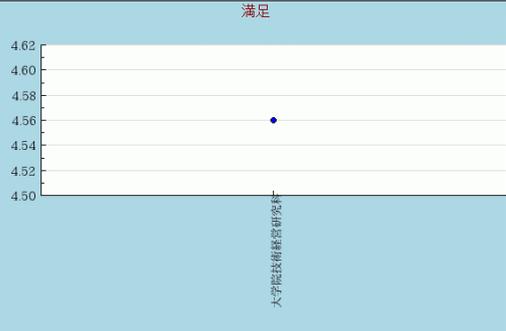


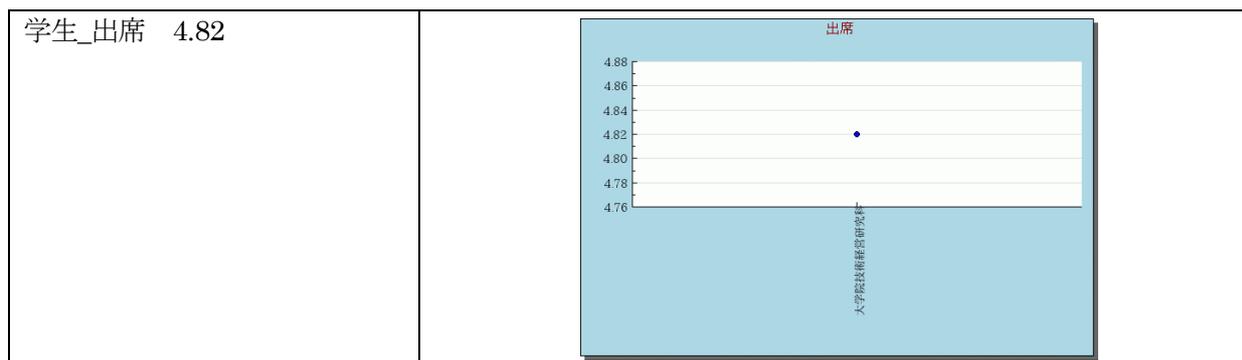
質問（Q9）：あなたは、授業の内容を理解できましたか？



回答選択肢					
	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	余りそう思わない	そう思わない

学生_授業外学習時間等集計データ

<p>学生_授業外学習時間 4.29</p>	 <p>授業外学習時間</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平均値</td> <td>4.29</td> </tr> </tbody> </table>	項目	値	平均値	4.29
項目	値				
平均値	4.29				
<p>学生_学習目標達成 4.01</p>	 <p>学習目標達成</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平均値</td> <td>4.01</td> </tr> </tbody> </table>	項目	値	平均値	4.01
項目	値				
平均値	4.01				
<p>学生_理解 4.25</p>	 <p>理解</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平均値</td> <td>4.25</td> </tr> </tbody> </table>	項目	値	平均値	4.25
項目	値				
平均値	4.25				
<p>学生_満足 4.56</p>	 <p>満足</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平均値</td> <td>4.56</td> </tr> </tbody> </table>	項目	値	平均値	4.56
項目	値				
平均値	4.56				



第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費 謝金等)	執行額 (千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
技術経営研究科	FD特別講演	講演謝金・旅費 1名	80	技術経営教育においてグローバルな視点をもつことが重要であることの認識を深めた。
計			80	

第6節 来年度の課題

技術経営研究科では、平成22年度のFD活動として取り組んだ下記の二つの成果を継続的に実施する。

平成23年度の課題

- (1) コア・カリキュラムに基づく平成24年度カリキュラムの編成

平成24年度から新しいカリキュラムに移行するのにあたって、新規に開講する授業科目の教材開発ならびに既存科目の教材の見直しを図る。

- (2) 技術経営教育コア／カリキュラムに基づく到達度評価システムの検討

平成23年度には到達度評価システムを稼働させて、MOT教育コア・カリキュラムに準拠した到達度評価を実施する。

第19章 連合獣医学研究科のFD活動

第1節

山口大学大学院連合獣医学研究科は山口大学、鳥取大学および鹿児島大学の農学部獣医学科の教員組織並びに研究設備、施設を連合した基本的に修業年数4年の大学院博士課程である。大学院博士課程の学生は主指導教員の属する大学に配属されて研究指導を受ける。

教育活動

- 1、共通ゼミナール
- 2、各大学における特別講義
- 3、Eラーニング

第2節 共通ゼミナール

期 日	平成22年8月25日（水）～8月28日（土）		
場 所	山口大学		
参加学生	66名	アンケート回収	59名分

アンケート

1年生	20
2年生	22
3年生	13
4年生	3
無回答	1

<学生区分>

一般学生	21
留学生	14
社会人	21
無回答	3

<質問I>

そう思わない	2
余りそう思わない	7
どちらとも言えない	13
ややそう思う	24
そう思う	10
無回答	3

2) 理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

そう思わない	4
余りそう思わない	7
どちらとも言えない	20
ややそう思う	18
そう思う	8
無回答	2

3) テキストやプリントなどの教材が効果的に使われましたか？

そう思わない	4
余りそう思わない	11
どちらとも言えない	13
ややそう思う	17
そう思う	12
無回答	2

4) コンピュータなどの視聴覚メディアが効果的に使われましたか？

そう思わない	1
余りそう思わない	2
どちらとも言えない	7
ややそう思う	27
そう思う	21
無回答	1

5) 学生の疑問・質問などに対して適切な回答が得られましたか？

そう思わない	2
余りそう思わない	6
どちらとも言えない	11
ややそう思う	32
そう思う	7
無回答	1

6) 教員の身振りや手振り、目を見て話すなどの態度は適切でしたか？

そう思わない	2
余りそう思わない	5
どちらとも言えない	12
ややそう思う	24
そう思う	13
無回答	3

7) 教員のセミナーに対する熱意を感じましたか？

そう思わない	1
余りそう思わない	5
どちらとも言えない	9

ややそう思う	17
そう思う	25
無回答	2
8) あなたはセミナーの内容を理解しましたか?	
そう思わない	2
余りそう思わない	9
どちらとも言えない	16
ややそう思う	21
そう思う	9
無回答	2
9) このセミナーはあなたにとって満足のいくものでしたか?	
そう思わない	2
余りそう思わない	4
どちらとも言えない	8
ややそう思う	33
そう思う	10
無回答	2

平成22年度山口大学大学院連合獣医学研究科 獣医学共通ゼミナールに関するアンケート結果 (抜粋)

期 日 平成22年8月25日(水)～8月28日(土)
場 所 山口大学
参加学生 66名 アンケート回収 59名分

1) 統計学について

1. どのようなときにどの方法を使えば良いか具体的な例を交えて説明されて分かりやすかった。
2. コンピュータを設置又は、自分たちが用意して実践できるとなおいと思います。
3. 短時間での説明は難しいと思うので資料を充実させて欲しい。
4. This topic was very interesting but it should have more time.

2) 英語論文の書き方について

1. 論文作成を指導する立場から、また、受け取る側の立場からの視点でとてもわかりやすく、すぐに実践できるような内容でした。ちょうど論文作成にとりかかろうとしているところで、何から始めていいのかわからない状態だったので大変参考になりました。
2. 論文作成の為に必要な文章力の必要性がわかった。特にReferenceの管理の仕方や活用の仕方が非常に役に立った。
3. 今回のゼミナールで一番収穫が大きかった授業である。実際の英語論文を書き慣れていない人の立場に立って、実践的なテクニックを紹介していただき、今後の役に立つことは間違いない。
4. Very advantage and useful but this action also have short time. Perhaps, the DVD of the presentation could be prepared for further studying.

3) 実践プレゼンテーション論について

1. 英語論文の書き方と共に、ぜひこれからも続けて欲しいです。

2. スライド作成等からどのようなプレゼンテーションにするか考えながら作る必要性がわかった。
 3. 総論的な内容だったので、上の学年の授業で次は具体的な話を聴けるような授業を作って欲しい。
 4. It's the most important presentation for me because the presenter was very punctual and His explanation was very clear and nice.
- 4) セミナー 1, 2, 3, 4について 2年生以上
1. 様々な分野の話題が興味深かった。今後の診療に生かしたいと思う。
 2. 先生方のご講演が、専門的で難しすぎるものの中にはあり、理解できないものがありました。「説明」のような一方通行のものではなく、問いかけのある方が良いように思いました。
 3. スライドに英語、日本語両方ともかかかれている方が理解しやすいので、来年もそうして欲しいです。また、専門用語は解説がついていないと分かりにくいので、今回は専門用語を使用する際にその語を説明して欲しいです。
 4. 統計学・英語論文の書き方・実践プレゼンテーション論のような、直接的に研究に役立つものに変えて欲しいです。
- 5) ポスター研究紹介について
1. 研究について自由に討論できる雰囲気良かったと思います。よく分からない分野でも話をききやすかった。
 2. 発表者は他の発表者に質問する機会がなく非常に残念だった。2年生のポスター発表は今年から始まりましたが、他の方の研究について知ることができ非常に良かったです。これからも続けて欲しいです。
 3. 2年次で、その時点での結果や計画についていろんな人から遠慮無く意見をもらえて良いと思う。もう少し時間が欲しい。
 4. 新しい企画で良いと思った。ですが、できればホールの出入り口など広くて見やすいところでもっと長い時間掲示した方がよいと思う。その方が学生の自発的な交流も増えると思います。ポスター賞もやったらよい。
 5. Poster size should be specified. In case of large size poster, better to use landscape format with more than three columns to avoid lowering or curve the body to read the loser part of the poster.
 6. Few posters were in Japanese. The organizer should make it compulsory to present posters in English.
Size of the posters need to be of uniform size.
- 6) 研究交流会について
1. 気兼ねのない雰囲気の中で、色々な人とお話ができ、大変良かったです。
 2. 互いの声が聞きづらく、討論らしい討論はできませんでした。机の幅が広がったかもしれません。
 3. 時間が長いと思う。2日にわけてやらずに、1日にするか、昼食の時間を使うなどして欲しい。
- 7) 学生研究紹介について
1. 分野が全く違うと、理解が難しいテーマもあり、分野ごとの聴講にして欲しい。
 2. 無理して英語で発表させるべきではないのでは。内容をうまく伝えにくいだろうし、聴いている方も理解しにくい。
 3. 一人一人の発表時間を決め、しっかりと区切るべきだったと思います。
 4. 2日目に終わったのですごく気が抜けた。3日目にすべきだ。
 5. 発表要旨をもっと詳細に書いて欲しい。
 6. 大変有意義で論文作成へのモチベーションにもつながる。
- 8) 特別講演について
1. 小動物臨床に通ずる部分が多く、とても興味深く聴かせて頂きました。「臨床」と「科学・学術」とのつながりを示して頂いて、衝撃を受けました。本当に素晴らしい講演でした。英語も

スライドも理解しやすかったです。

2. 研究は基本を大切に、また楽しんで行っていきたいと感じた。
3. いつも獣医師の先生の講義ばかりだったので獣医学でなく医学の講演が聴けて良かった。

9) その他全体に関する意見、要望など

1. 交通費の支給に車での移動も含めて欲しい。(来年は鳥取なので電車などでの移動はしづらいので)
2. 夕方までの予定にして欲しい。(夕方以降のセッションは希望者のみにするなど)
3. 全体的に英語中心としたセミナーや討論で良かったです。ラマダンと被ったのが、料理や飲み物を手にできない方がいて、時期の問題があるかと思います。
4. 宮崎大学の時みたいに駅と大学を繋ぐバスを出して欲しかった。
5. ここ2~3年非常に良い物になってきていると思います。
6. ホールで、セミナー中、手元が真っ暗だったので、分からない単語を調べたり、メモをとるのが困難だった。
7. 各大学が遠くて、さらに毎年4日間も開催するのは時間的、金銭的にも社会人、一般学生共に非常に負担が多い。今後は開催回数を減らす、サテライトを利用して近隣の大学で受講できるようにするなど、時代に合わせた工夫をして頂きたい。
9. 今年で最後で、しかも所属大学での開催だったので楽しく過ごせました。エクスカージョンがしたい。
10. 交流会で大学の各先生の自己紹介と研究テーマについて教えていただきたい。自分の担当教員でない先生もいろいろ話して教えていただきたいので。
11. 自分の専門以外の分野の英語が理解できなかったので、follow する何かがあると良いです。
12. Even the chance of a short-time travel together, in the University on the town.
13. I think 4 days long seminar is little bit boring. It can be easily cut into two days. Better to provide accommodation for the students other than host university. The schedule is packed, I think it is better to have one recreation tour for sight seeing.
14. As a whole this year seminar is out of vest in my total three year seminar attended.

第3節 各大学における特別講義

第1回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義

〈授業科目名〉 平成22年度第1回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

〈実施日〉 平成22年6月11日(金) 10時30分~12時00分

〈実施大学〉 鳥取大学

〈担当教員名〉 山口大学 田浦 保穂 教授

『黒毛和牛種の手根関節軟骨潰瘍性病変のMRI及び病理組織学的所見

MRI and histopathological findings on ulcerative lesions of carpal joints in Japanese black cattle』

山口大学 山本 芳実 教授

『proteases and protease inhibitors』

〈受講者〉

1. 連合獣医学研究科1年	4名
2. 連合獣医学研究科2年	1名
3. 連合獣医学研究科3年	2名
3. 連合獣医学研究科4年	1名
4. 農学部獣医学科4年	1名
5. 農学部獣医学科6年	30名
	計39名

〈特別講義はあなたにとって有意義でしたか?〉

1. はい	30名 (76.9%)
2. いいえ	9名 (23.1%)
3. 無回答等	0名 (0.0%)

〈講義についての意見・感想 (抜粋)〉

- ・黒毛和牛のほうがホルスタインより関節炎が多いことを初めて知った。
- ・牛の関節の障害の話は、運動量や牛床にもかかわっているということで、興味深かった。
- ・新しいプロテインの発見はとても興味深かった。
- ・基礎的な講義と臨床的な講義の両方が聞けて良かった。
- ・他大学の先生の研究を知る良い機会になった。
- ・英語の授業であることを事前に知らせてほしかった。
- ・日本語の訳を用意してほしかった。
- ・スライドの量が多く聞きづらかった。
- ・自分の研究分野以外でかつ英語での講義は理解できなかった。
- ・パワーポイントの字が小さく読みづらかった。

第2回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義

〈授業科目名〉 平成22年度第2回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

〈実施日〉 平成22年10月8日(金) 10時20分～11時50分

〈実施大学〉 鳥取大学

〈担当教員名〉 鳥取大学 山口剛士 教授

『Molecular basis of attenuation and reversion of infectious bursal disease virus 伝染性ファブリキウス囊病ウイルスの弱毒化と病原性復帰の分子基盤』

鹿児島大学 大和 修 教授

『An Example of Veterinary Clinical Genetic -GM1 gangliosidosis- 獣医臨床遺伝学の実例 -GM1 ガングリオシドーシス-』

〈受講者〉

1. 連合獣医学研究科2年生	1名
2. 連合獣医学研究科3年生	2名
3. 農学部獣医学科1年生	28名
4. 農学部獣医学科2年生	26名

5. 農学部獣医学科4年生	30名
6. その他	1名
	合計88名

〈特別講義はあなたにとって有意義でしたか?〉

1. はい	67名 (76.1%)
2. いいえ	11名 (12.5%)
3. 無回答	10名 (11.4%)

〈講義についての意見・感想〉

- ・ 弱毒株ウイルスが鶏中でもみついているということを知って興味深いと思いました。
- ・ GM、ガングリオーシスについては、まだ病理の授業で少し勉強しただけだったので、原因や病気の経過についても詳しく話を聞けておもしろかった。
- ・ 為になる内容だったので休憩をはさんでじっくり聞いた方が良かったと思います。
- ・ 英語で詳しいところがわからなかったので日本語でも聞きたいと思いました。
- ・ 英語が難しくて内容がよく理解できませんでした。

第3回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義

〈授業科目名〉 平成22年度第3回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

〈実施日〉 平成22年11月12日(金) 10時30分～12時00分

〈実施大学〉 鹿児島大学

〈担当教員名〉 山口大学 度会雅久 教授

『Invasion mechanism of intracellular bacteria 細胞内寄生菌の細胞侵入機構』
鳥取大学 南 三郎 教授

『Biology of D-glucosamine and its related materials グルコサミンと関連物質の生物学』

〈受講者〉

1. 連合獣医学研究科1年生	3名
2. 連合獣医学研究科2年生	3名
3. 連合獣医学研究科3年生	1名
4. 連合獣医学研究科4年生	1名
5. 農学部獣医学科4年生	3名
6. 農学部獣医学科5年生	2名
7. 農学部獣医学科6年生	2名
8. その他	1名
	合計16名

〈特別講義はあなたにとって有意義でしたか?〉

1. はい	14名 (87.5%)
2. いいえ	1名 (6.25%)
3. 無回答	1名 (6.25%)

〈講義についての意見・感想〉

- ・ 英語と日本語の両方を使っていたため非常にわかりやすく、また細胞内寄生菌の細胞侵入機構がファゴソームとライソゾームの融合阻止に関する研究過程がわかり非常に興味深かった。
- ・ グルコサミン、コンドロイチンのサプリメントの有効性の有無がよく解りました。今度の診療に活用したいと思います。
- ・ ついていくのが精一杯だったが、非常に興味深くおもしろかった。
- ・ 他大学で行われている研究内容を知ることができ、大変勉強になった。先生方の話はとても興味深く、楽しかった。

山口大学大学院連合獣医学研究科主催 学術交流セミナー

〈実施日〉 平成22年6月21日 16時～17時

〈実施大学〉 山口大学

〈担当教員名〉 Dr. Mahmoud A. El-Seify (Professor and Chairman of Parasitology Department, Former Dean, Faculty of Veterinary Medicine, Kafrelsheikh University, EGYPT)
『Evaluation of Mastitis Related Measures & their Application to Buffalo Milk Quality Control in Nepal』
『Veterinary Education in Nepal: Considerations for Improvement』

山口大学大学院連合獣医学研究科主催 学術交流セミナー

〈実施日〉 平成22年10月12日(火) 15時～16時

〈実施大学〉 鳥取大学

〈担当教員名〉 Dr. Mahmoud A. El-Seify (Professor and Chairman of Parasitology Department, Former Dean, Faculty of Veterinary Medicine, Kafrelsheikh University, EGYPT)
『Ticks and blood parasites of ruminants 』

第4節

E-ラーニング

前年度に続き各教員のE-ラーニング録画と特別講義の記録が行われ、運用されている。

第5節 FD実施経費報告

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金 等)	執行額(千 円)	FD活動の効果 (簡潔 に)
連合獣医学研 究科	FD活動に経費を必要としな かった。		0	
計			0	

平成 22 年度 山口大学 教学委員会 名簿

部局名	職 名	氏 名	任 期	備 考
大学教育機構	機構長	吉 田 一 成		副学長
大学教育センター	センター長	岩 部 浩 三		副機構長
学生支援センター	センター長	吉 村 誠		
保健管理センター	所 長	平 野 均		
留学生センター	センター長	服 部 幸 夫		
人文学部	教 授	本 田 義 昭	H21.4.1~H23.3.31	
人文学部	教 授	池 園 宏	H22.4.1~H24.3.31	
教育学部	教 授	葛 崎 偉	H21.4.1~H23.3.31	
教育学部	教 授	五 島 淑 子	H22.4.1~H24.3.31	
経済学部	教 授	内 田 恭 彦	H21.4.1~H23.3.31	
経済学部	教 授	有 村 貞 則	H22.4.1~H24.3.31	
理学部	教 授	吉 川 学	H21.4.1~H23.3.31	
理学部	教 授	内 野 英 治	H22.4.1~H24.3.31	
医学部	教 授	中 村 和 行	H21.4.1~H23.3.31	医学科
医学部	教 授	渡 部 省 二	H22.4.1~H24.3.31	保健学科
工学部	教 授	内 藤 裕 志	H21.4.1~H23.3.31	
工学部	教 授	今 井 剛	H22.4.1~H24.3.31	
農学部	教 授	内 海 俊 彦	H21.4.1~H23.3.31	
農学部	教 授	山 本 晴 彦	H22.4.1~H24.3.31	
学生支援部	学生支援部長	藤 井 純 朗		
学生支援部	教育支援課長	佐 藤 晃 一		
学生支援部	学生支援課長	杉 山 宏		

平成 22 年度 山口大学 学部・研究科 FD 担当者 名簿

部 局 等	職 名	氏 名	備 考
人文学部 人文科学研究科	教 授	アラム ジュマリ	
教育学部 教育学研究科	准教授	野村 厚志	
経済学部 経済学研究科	教 授	中田 範夫	
理学部 医学系研究科(理学) 理工学研究科(理学)	教 授	宮田 雄一郎	
医学部(医学科) 医学系研究科(医学)	准教授	川崎 勝	
医学部(保健学科)	教 授	石川 敏三	
工学部 理工学研究科(工学) 医学系研究科(工学)	教 授	進士 正人	2名
	教 授	内藤 裕志	
農学部 農学研究科 医学系研究科(農学)	教 授	山本 晴彦	
東アジア研究科	准教授	森野 正弘	
技術経営研究科	准教授	大島 直樹	
連合獣医学研究科	教 授	前田 健	

平成 22 年度 山口大学 大学教育センター 名簿

部 局 等	職 名	氏 名	備 考
大学教育センター	センター長	岩部 浩三	
"	主事	山本 隆	
"	主事	マルク レール	
"	主事	中田 充	
"	主事	和泉 研二	
"	教授	小川 勤	
"	准教授	吉田 香奈	
"	准教授	木下 真	
"	講師	岡田 耕一	
"	教育コーディネータ	兼石 俊明	
"	事務補佐員	野原 志帆	

平成 22 年度 山口大学 FD 報告書「山口大学の FD 活動」
平成 23 年 9 月発行

編集・発行 山口大学大学教育機構、山口大学教学委員会
山口市吉田 1677-1
TEL (083) 933-5150 (学生支援部教育支援課)